

仙台市文化財調査報告書第22集

経ヶ峯

昭和55年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第22集

経ヶ峯

—総合調査報告書—



米ヶ袋側から見た経ヶ峯全景

昭和55年3月

仙台市教育委員会

あ い さ つ

仙台市教育委員会は、かねてから仙台市文化財保護委員会に委嘱して「経ヶ峯に関する総合調査」を進めてまいりましたが、このほどその調査結果がまとまり、発刊の運びとなりました。

経ヶ峯は仙台城の東南、広瀬川の清流にとり囲まれた地域で、藩祖伊達政宗公の遺命により、公の水罫の地となっており、靈城として守り続けられた地域であります。一方、地域開発のすすむ中で、青葉山の自然と共に市街地でみられる豊かな自然の残った数少ない地域でもあります。

経ヶ峯に関する文献としては、「瑞鳳殿などの靈廟に関する報告書」などはありますが、今回のように、歴史・建築などの人文科学系だけでなく、地質・動植物などの自然科学系まで網羅した総合的な調査研究がまとめられて一冊の本として出版されるのははじめてのことであり、研究者のみならず郷土を愛する市民にとっても大いに意義のあるものと思われます。

本書の出版にあたり、本務のいそがしさをも頗りみず熱心にご調査ご研究いただきました仙台市文化財保護委員会委員の諸先生はじめ、貴重な資料を提供して下さった方々に対し、深く感謝するとともに、本書が広く活用されることを願うものであります。

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

はじめに

仙台市文化財保護委員会は昭和42年3月31日に『仙台城』を発表したことがあった。仙台城跡を文化財に指定するために必要な調査を、城の歴史、建築、美術、年中行事、地形、地質、鳥相、植物に亘って行い、巻末に年表を備えたもので、仙台城に関することは何事も本書にあることを目標とした大著であった。

今回、昭和20年8月に戦災焼失した経ヶ峯伊達靈廟のうち旧園宮端鳳殿が各方面的出資と協力により、5ヶ月の星霜を費して漸く再建を見たのみならず、「伊達政宗の墓とその遺品」が出版を見たことで、わが文化財保護委員会においても、仙台市教育委員会の要請に応えて、一つにはこのことを記念し、また他日経ヶ峯靈廟を中心にあの経ヶ峯一帯を史跡に指定する資料を整えておくために、この度も本委員会の委員諸氏がそれぞれの専門分野を分担し、同じくその歴史、発掘の成果、建築、遺物、遺構、美術、地質、動物、植物の各事項を網羅し、いわば、「経ヶ峯百科」とも称しうるような本書を編んだ次第である。

なお本書は多人数の筆者の合著である関係上、同一事実に対し異った見解が示されている場合があるのはやむを得ないことであった。かかる場合、早急に見解を統一することを避け、読者の拾拾に委ね、将来の研究を待つことにした。また厳密な学問的追求の結果を多くの写真を交えた読み易い文体の文章にと努めたが、この点も古文書を扱う関係上充分とはいえないかも知れない。今後、識者の批評を聞いて、再版の際に補正していただきたい。

とまれ、本書の成るに当たり、各担当委員の御苦労に感謝すると共に、仙台市社会教育課の若き課員たちにも感謝したい。諸君の努力と推進力がなければ、本書はこの様に早く世に出ることはなかったであろう。記して謝意を表する。

仙台市文化財保護委員会

委員長 佐藤 明

例　　言

1. この報告書は、仙台市教育委員会・仙台市文化財保護委員会により、昭和52年度より3ヶ月の歳月にわたって行なわれて来た絆ヶ峯の総合調査の成果をまとめたものである。
2. この報告書の執筆にあたっては、仙台市文化財保護委員の諸先生方にお願いし、仙台市教育委員会社会教育課文化財係が編集し（主任編集：同先事朝倉秀之（旧）、渡辺洋一（現））仙台市文化財保護委員長佐藤明が監修したものである。
3. なお、この報告書の刊行にあたっては、仙台市博物館・瑞鳳殿再建期成会・瑞鳳寺・松島町立博物館・慈雲寺・宮城県立図書館・長徳寺・東北大大学の協力を得た。
4. 題字は、仙台市長鳥野武の筆による。

執筆者略歴（執筆順）

三原良吉 宮城県文化財保護審議会委員 仙台市文化財保護委員会委員 仙台市博物館協議会副会長
加藤陸奥雄 東北大学名誉教授 文部省大学入試センター所長 宮城県文化財保護審議会委員
仙台市文化財保護委員会委員
木村有香 東北大学名誉教授 仙台市文化財保護委員会委員
與津春生 東北大学名誉教授 東北学院大学工学部講師 宮城県文化財保護審議会副委員長
仙台市文化財保護委員会副委員長 仙台市博物館協議会委員
佐藤　巧 東北大学工学部教授 宮城県文化財保護審議会委員 仙台市文化財保護委員会委員
佐藤　明 東北学院大学教養部教授 仙台市文化財保護委員会委員長 仙台市博物館協議会委員
伊東信雄 東北大学名誉教授 東北学院大学文学部教授 宮城県文化財保護審議会委員長 仙台市文化財保護委員会委員 仙台市博物館協議会委員

目 次

あいさつ

はじめに

例 言

目 次

報告書刊行までの経過.....	1
経ヶ峯の位置と環境	2
経ヶ峯と伊達家廟の歴史.....	三 原 良 吉 5
第1章 瑞鳳殿創建以前の経ヶ峯.....	5
第2章 伊達家廟城としての経ヶ峯.....	6
瑞鳳殿.....	6
香華院端鳳寺.....	7
感仙殿.....	7
善応殿.....	9
妙雲界廟.....	10
公子公女廟（御子様御廟）.....	11
第3章 瑞鳳寺と経ヶ峯の天然記念物	13
瑞鳳寺の塔頭及び傍院.....	13
瑞鳳寺の焼失.....	13
経ヶ峯の天然記念物と石造文化財.....	13
写 真.....	15
経ヶ峯の植物と動物.....	加 藤 伸 奥 雄 23
はしがき.....	23
第1部 経ヶ峯の植物群落.....	24
第1章 経ヶ峯の植物型とその地域的分布.....	24
第2章 各植物群落の組成.....	26
1. シラカシ-シロダモ群落 2. スギ-シロダモ群落 3. スギ-シロダモ-オカ カメザサ群落 4. スギ-シロダモ-アオキ群落 5. スギ-シロダモ-アズマザ サ群落 6. スギ-クサギ群落 7. ヒノキ-シロダモ群落 8. クリーアズマ	

ザサ群落 9. ミゾソバ群落 10. 多年生草木群落	
第3章 植物群落の階層構造	32
第4章 植物群落の生活型組成	34
第5章 植物群落の散布器管型組成	35
第6章 各植物群落構成の相互類似点	37
第7章 植物群落の遷移度	38
第2部 綾ヶ峯の動物	43
第1章 綾ヶ峯の哺乳類	43
(1)-1 ムササビ (<i>Petaurista leucocephalus</i>)	43
(1)-2 リス (<i>Sciurus lis</i>)	45
第2章 綾ヶ峯の鳥類	45
調査およびコース	45
(2)-1 虚空藏洞の鳥	45
(2)-2 綾ヶ峯の鳥類	49
(2)-3 考察	53
第3章 綾ヶ峯の昆虫類	58
(3)-1 蝶類	58
(3)-2 甲虫類	61
(3)-3 その他の昆虫類	63
(3)-4 まとめ	65
あとがき	65
写真	67
綾ヶ峯の植物	木村有香 75
まえがき	75
暖地性の植物	75
陰地植物	78
タケ・ササ類	78
着生植物	79
綾ヶ峯産植物目録	80
写真	96
写真説明	105
綾ヶ峯の地盤・地質	奥津春生 109

まえがき	109
第1章 地形と地質のあらまし	110
第2章 瑞鳳殿鉱害対策の経過	110
第3章 地表に見られた変状	112
第4章 地表構造物の変状	113
第5章 地表調査結果	114
第6章 地盤の強度と支持力	115
(6)-1 標準貫入試験結果	115
(6)-2 岩石試験結果	116
第7章 発掘の結果	116
(7)-1 石室発掘の結果	116
(7)-2 石室の地形上の位置	117
(7)-3 本殿基礎発掘	117
第8章 当時の敷地造成の方法	117
第9章 2代、3代墓所付近の調査	117
第10章 調査結果の総括	118
おわりに	119
図 表	120
経ヶ峯の御靈廟建築	佐藤 力 127
まえがき	127
第1章 瑞鳳殿	128
(1)-1 造修理の概要	128
(1)-2 配置・構成	133
(1)-3 建築・装飾	144 涅槃門 拝殿 店門・橋廊下(塗橋) 本殿 玉垣・迴廊 御供所(竹楼)
第2章 感仙殿・善応殿	151
(2)-1 造営の概要	151
(2)-2 配置・構成	152
(2)-3 建築	154 本殿 店門・橋廊下 拝殿 廊門
第3章 妙雲界・周宗(紹山)、齊義(正山)、同夫人廟	161
付 図	167

写 真	171
経ヶ峯電廟の遺構・遺物—金工・石工を中心として—	佐 藤 明 193
第1章 経ヶ峯の金工	193
(1)-1 墓鳳殿の鏡	193
(1)-2 瑞鳳殿の手水盤	194
(1)-3 瑞鳳殿本殿屋根隅棟の青銅竜首	195
(1)-4 瑞鳳殿・感仙殿の金具類	195
第2章 経ヶ峯の石工	196
(2)-1 石段	196
瑞鳳殿の石段 感仙殿・善応殿の石段	
(2)-2 石 養	197
(2)-3 廟周辺の石垣	197
(2)-4 磨 石	198
(2)-5 石灯籠	199
付) 経ヶ峯伊達(家)廟の石灯籠	199
(1) 瑞鳳殿前の石灯籠	199
(2) 2代、3代および妙雲界廟の石灯籠	201
(3) 御子様御廟前の石灯籠	211
第3章 経ヶ峯の美術 瑞鳳殿の絵画について—	221
付) 経ヶ峯周辺の寺社	223
資 料	225
写 真	229
瑞鳳殿発掘調査概報	伊 東 信 雄 239
まえがき	239
発掘調査の成果	240
写 真	254
再建された瑞鳳殿	268
写 真	270
編集後記	272

報告書刊行までの経過

昭和48年7月、瑞鳳殿再建期成会が結成され、それまで待望久しかった経ヶ峯の伊達政宗廟瑞鳳殿が実現することになった。経ヶ峯は政宗廟のほかに2代忠宗・3代綱宗廟等伊達家歴代藩主等の廟として藩政時代よりあまり人の足を踏み入れることがなかったこともあり、自然環境がそのままの形で残っている市街地では数少ない地域である。ところが、瑞鳳殿の再建が成されることにより、経ヶ峯一帯が観光化され、これまでの自然環境が変貌する懸念が出てきた。

また、昭和51年の7月定例仙台市文化財保護委員会で、経ヶ峯の環境を含めての文化財指定についての意見が提出され、このことについて同委員会及び翌8月定例仙台市文化財保護委員会では前述の観光地化による経ヶ峯の環境の変貌への対応策をも含めての協議が行なられ、8月の委員会の席上で、指定に先立ち、動植物生態調査、地質調査等を含む経ヶ峯一帯の総合調査を実施し、指定時の資料とすることになった。そこで仙台市教育委員会ではその意向に基づき仙台市文化財保護委員会の各専門の委員に委嘱し、昭和52年度より3ヶ月計画で経ヶ峯の総合調査を実施することになった。調査内容と実施内容については次に示したとおりである。

昭和52年度 植物調査（木村有香委員）、植物相・動物相調査（加藤勝典雄委員、当時副委員長）

昭和53年度 地質・地盤調査（奥津春生委員、現副委員長）、建築関係調査（佐藤巧委員）、美術関係調査（佐藤明委員長）、歴史関係調査（三原良吉委員）

昭和54年度 金石文調査（仙台市教育委員会社会教育課主事 渡辺洋一・山口宏）

以上の調査の成果は、昭和49年10月に伊東信雄委員を中心に行なわれた瑞鳳殿再建に先立つ幕率の発掘調査の成果とともに昭和54年度末をもって「経ヶ峯総合調査報告」という名称で報告書にまとめ、刊行することになった。この報告書は経ヶ峯一帯の文化財指定のための重要な資料となろう。

経ヶ峯の位置と環境

仙台市西部、広瀬川西岸の竜の口渓谷を境に青葉山と向いあつた越路山の一部が半島状に北北東に突き出した丘陵部分を経ヶ峯という。ここは海岸より10km強、海拔が25~75mの地点にあり、茂ヶ崎の大年寺山とともに、藩政時代より伊達氏の廟域となっているところである。

藩祖伊達政宗廟瑞鳳殿・2代忠宗廟感仙殿・3代綱宗廟善応殿、および、9代周宗、11代齊義、同夫人芝姫廟の妙雲界廟、そして5代吉村以下の公子・公女廟である御子様御廟がおかれて、特に瑞鳳殿と感仙殿は昭和6年に国宝に指定されていた。しかしながら瑞鳳殿は三殿の靈屋の諸建築は、昭和20年7月10日夜半の仙台空襲により悉く焼失し、基壇等を残すのみとなり、戦後は靈屋のあった当時の面影すらない状態となった。しかし瑞鳳殿は、戦後この地を伊達家より譲られた仙台市を中心として、昭和49年より5ヶ月の歳月を費して再建され、今日に至っている。

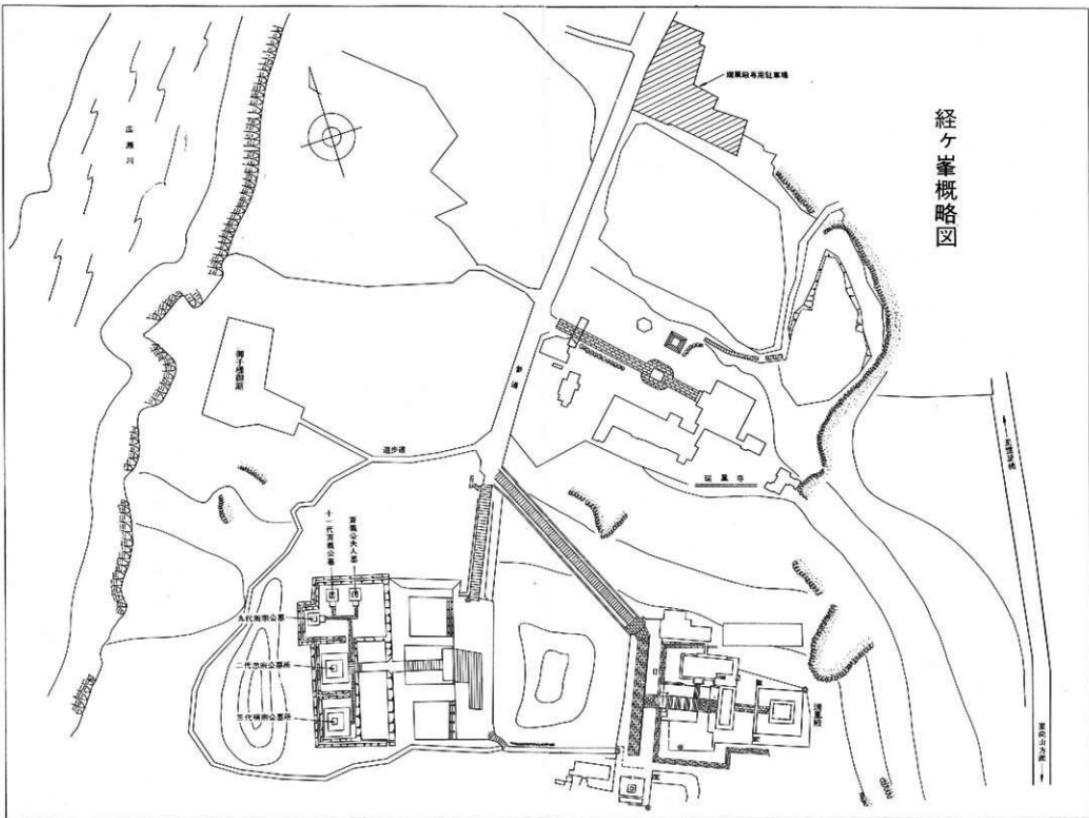
この地は古くは名取郡根岸村黒沼の萩ヶ崎と称されていた所であり、中世に満海上人という行人がこの地の東峯に経文を納めたということから「経ヶ峯」と称されるようになったとも、また政宗の仙台開府により青葉山からこの地へ移された虚空蔵尊へ経典が奉じられたことからこう称されたともいわれている。

ところで、ここ経ヶ峯は、戦後の一時期、燃料不足のため地下に埋蔵する亜炭の採掘が行なわれた他は、藩政時代より廟域となっていたこともあり、人がむやみに足を踏み入れることを避け得たので、市街地近郊では珍しく自然がそのままの形で残されている地域でもあり、青葉山同様、仙台市の誇る自然の宝庫となっている。



経ヶ峯の位置

経ヶ峯概略図



経ヶ峯概略図

経ヶ峯と伊達家廟の歴史

三 原 良 吉

第Ⅰ章 瑞鳳殿創建以前の経ヶ峯

経ヶ峯は、昔、名取郡根岸村に属し、東は広瀬川、北は辰の口の谷を以って宮城郡国分荘に接していた。山名を経ヶ峯と称するのは、仙台開府以前、中世末期に湯殿山修験の万海上人が開いたからと云い伝える。「満海」とも書き、真山古正兵衛の忠宗公の間に對する書上には「マシカイ」と假名で書いてある。その仮は全く不明で、同書上に出羽國最上の谷地（西村山郡河北町）の人とあり、政宗母公保春院夫人が政宗公山廬の際、湯殿山に祈願したとあるから永禄時代（1558～1570）の人と想像される。後、出羽を去って奥羽に移り、辰の口の開口部右岸の崖上にある小盆地の黒沼のはとりに庵をかまえて住み、旁らに観音堂を創建した。これが後の仙台巡礼三十三番の札所となった鹿落観音の起源といい伝える。黒沼の地名は現存し、沼も大正初めまでは残っていた。万海は隻眼であったといいつたえ、黒沼の鱗は片目であったと伝説にある。万海は、此所で万部絆を誦し、後に現在政宗公の瑞鳳殿靈屋のある萩ヶ崎の小丘に絆巻を埋め、観音堂も同所に移し、ここで死去し埋められたという。この事は真山記（伊達家文書）に記されて居り、以来ここを万海上人経ヶ峯と称し、後に単に経ヶ峯と称したとある。

慶長6年（1601年）政宗公が青葉ヶ崎に仙台城築城の際、同所に虚空蔵堂と千体仏堂並びに別当大護守があった。これは享徳元年（1432年）国分氏の創建にかかり、城名を虚空蔵城と称したが、中古荒廃無住に廻し、「センダイ」の地名の起源の千体仏も亦散失したと『封内風土記』に記されている。これを天正元年（1573年）當時、後の仙台城大手門前北角にあった賤洞宗亮院院三世量山か虚空蔵堂並びに大満寺を再興したものであった。政宗公はこれを経ヶ峯北端、広瀬川を脚下にする崖上に移して再建し、大満寺を今の瑞鳳寺の地に移し、本堂・拝殿・鐘楼と寺を再興、なお36石の地を寄付した。以来経ヶ峯を虚空蔵峯と称した。後に堂も寺も向山に移されたが、往昔の堂の所在地に元虚空蔵の地名を今に伝え、堂の跡も寺からの通路の跡も明かに指摘することが出来る。（写真1）。

その他、現在の経ヶ峯靈屋の表参道入り口、昔、下馬前と称した北角に評定橋に通ずる道路に面し、寛永元年（1624年）開山の良徳寺（賤洞宗）があった。

以上が瑞鳳殿靈屋創建以前の経ヶ峯であった。

第2章 伊達家廟域としての経ヶ峯

瑞鳳殿

寛永13年（1636年）この丘に大きな変化が起った。藩祖政宗公墓瑞鳳殿の造営である。

この年、公70才、死期近きにありと覚って、4月20日若林を發して不帰の参勤に上る前々日、国老奥山大学常良を従え、時鳥の初音を聴くべく万海が黒沼から移した観音堂の立つ萩ヶ崎に登ったが、時鳥は鳴かず、常良に死後ここを廟所とせよと命じた。いわば公自ら選び且つ指命した廟地である。

偉人によく語り伝えられる誕生異説は政宗にもあって、当時公は万海上人の生れ替りであるという説が行なわれ、政宗公の隻眼は万海が片目であったからだと称し、公の遺体を萩ヶ崎に掩籠の時、墓室の穴を掘ったところ言い伝えの如く万海の遺体を入れた石の道具等が現われ石垣積みになっていて、錫杖や珠数、法衣等も出土したので、万海上人は政宗公に生れ替り、今再び自分の墓に入るのであろうといった。その証拠として万海の墓石と称する無銘の板碑が瑞鳳殿本殿背後に立っていたが、空襲の時破壊され、それも市で焼跡始末に取り捨てられてしまった。

坪殿正面入口の大扁額は「瑞鳳殿」の文字が佐文山の書で、白い密陀僧で塗り、額面の地は珊瑚の粉末を塗り固めたものであった。（写真8）向って左側の竹樓と称する純素木の入母屋造書院は政宗公の若林城にあった重層の書院で、いわば公の書斎であったのを靈屋に移し、単層に直して御供所にあてたもの、これも国宝であった。

瑞鳳殿の瓶燈はあらかた空襲で失ったが、筆者が戦前ノートした記録から抄出しておく。

○右石段向って右側上より

国老 石母田大膳宗頼

一家 口理伯青宗根

国老 茂庭馬防良綱

国老 津田近江頼康

国老 古内主膳重広

○同向って左側上より

一門 白石刑部宗貞

国老 中島監物宗成

国老 片倉小十郎重長

国老 奥山大学常良

国老 佐々木扶元綱

○渡り廊下向って右側奥より

一門 伊達武藏宗利 九月二四日

○渡り廊下向って左側の内右

一門 伊達安房成実 九月二四日

一門 石川民部宗昭 七月二四日

○同内左側奥より

一門 伊達安芸定宗 五月二四日

一門 伊達左衛門宗実 同

以上十五基、何れも春日灯籠型で寄進の紀年は寛永14年、日付は無いものは全部5月24日で

ある。

香華院瑞鳳寺

瑞鳳殿の落慶は寛永14年（1637年）10月24日であった、奉行は国老奥山大学常良で、工事は1年4ヶ月とある。参道の石階は感仙殿への分岐点から62段で、（写真5・6）これは伊達家の株高62万石になぞらえたものといい伝える。造営に当たって萩ヶ崎にあった万海開基の観音堂は後の感仙殿の所に移され、今の瑞鳳寺の所にあった大満寺は参道をへだてた向側に移された。その跡に香華院として正宗山瑞鳳寺が造営された。（写真9）落慶は寛永14年6月であった。開山は当時若林の政宗公母公保春院牌守春院開山の清岳宗拂である。かって伊庭惣八郎と称し政宗の小姓であった。没後仏恵道光の勅号を承受している。寺は臨済宗妙心寺派で、惠宗は一門格寺院とし、寺領390石をあてがった。当時、下馬前から今の評定橋の方に折れる道の北角にあった長徳寺も現在の越路路地町に移された。（写真10）また御塗屋下と称する門前町は広瀬川にかこまれているので、木沢から伊達家について来た諸代の染師の一団が置かれていたが、瑞鳳殿の落慶と同時に替地を与えられて他に転出した。その一組が移ったのが上染師町、他の一組が移ったのが南染師町で、その跡に塗屋警備のため新たに小人（こびと）組一組を移し、これを御塗屋下小人と称した。川が近い所から今度は染め物の代りに水練を鍛えさせ、藩主の川狩に役出し、年一回7月に賛酒で日頃鍛えた水練の検査が行なわれた。それでこれら的小人組のことをお川衆とも称した。

感仙殿

二代藩主義山公忠宗の靈廟感仙殿造営を機として廟の敷地となった所に萩ヶ崎から移した万海の観音堂があったが万治2年（1659年）これを経ヶ峯の南側に接する梅ヶ森の大藏寺境内に移した。仙台巡礼33番札所の魔落観音がこれである。（写真11）また経ヶ峯の最高所、広瀬川に面する崖上にあった虚空蔵堂は向山の山上に移され、瑞鳳寺と参道を中にして北向にあった別当大満寺も同時に向山西のふもとに移された。（写真12・13）双方とも城下の展望台で參詣と遊山を兼ね、永く庶民に喜ばれた。これによって経ヶ峯から靈廟以外の建物は全部無くなり、廟は一層森嚴を加えたのであった。

この年、瑞鳳殿前広場から南に下る表坂（写真4）から越路の通りに突き当る道を開き廟の掃除その他雜役に從事する扶持人六人に両側三軒ずつ向合って屋敷を給し、瑞鳳寺に管理させ、これを六供（ろくく）と称した。後の越路六軒丁の起源である。又六供と裏坂の境から廟の西側に沿って北に通する道路もこの年出来たもので、沿道に瑞鳳寺の塔頭（たっちゅう）三ヶ所が置かれていたので三庵通りを称したが今では知る人もない。

忠宗は万治元年（1658年）7月12日仙台城二之丸で死去した。年60、遺体は即夜瑞鳳寺に移された。これを取り置きという。北山東昌寺において蓮日中陰の法要を執り行い、8月6日経ヶ峯西廟に墓室成り石棺に納めて葬る。これを擴括と称する。葬礼は翌7日北山の原野、現在の三条中学校校庭の地で行われ、空棺を焼却して灰を銅器に納め、円墳を築き土に松の木を植え、四方を高い土塁で囲み、灰塚と称して近年まで残っていたが、三条中学が出来た時、跡方もなく崩してしまった。経ヶ峯の墓屋は万治2年起工、5ヶ年を要して寛文4年（1664年）成り、感仙殿と称する。入り口に四脚門があり、ゆるやかな石階を登って拝殿並びに御供所があり、短い石階を登って唐門に達し奥に宝形造の本殿があった。内部に衣冠を着した木像を安置、その結構は瑞鳳殿に劣らず國家に指定され、他は明治初年廢仏毀釈の時悉く撤去されたが、四脚門のみ多賀城市山上の慈雲寺に移築されて残っている。殉死者は古内重広以下12名、陪臣4名で、本殿両側に向合って宝篋印塔が立てられ、向って右列先頭の古内重広以下奥へ右・左と千鳥掛けに立てられていたが、空襲の際本殿とともに破壊されたが基礎は残り、(写真14)筆者が戦前ノートに記したものより一人一人の姓名は分明である。感仙殿の造営奉行は茂庭園防定元と原田甲斐守輔であった。この年参道下馬前南側に下馬の碑が建てられ、今は瑞鳳寺山門前に移され保存されている。(写真16・17)

○本殿に向って右側先頭より後方へ

仁岩能得 古内主膳重広(年70) 国考 7月12日自宅

穂波道全 木名瀬小右衛門 古内家臣

文沒玄章 中山藤右衛門 同

松岳企長 鈴木文右衛門 同

豊雲招威 遠藤九郎兵衛高太(年60) 名掛頭 7月12日自宅

無憂玄功 平田長右衛門茂承(年46) 物貢番 8月5日自宅

実恵玄知 江野又左衛門重成(年65) 露 座 8月5日輪王寺

方外円阿 花見門阿弥兼吉(年42) 同 溝 8月5日輪王寺

森晴平清 小野清右衛門重信(年53) 小人頭 8月5日金刀院

○左 列

天然会通 田中勘左衛門良長(年47) 小姓頭 8月5日輪王寺

誠忠上丹 芝原覺左衛門(年25) 田中家臣

雄岩堀英 油井茂兵衛直元(年58) 小人頭 8月5日自宅

一鷹常角 鈴木 角重周(年25) 小 姓 7月12日自宅

真柄玄正 後藤十兵衛当基(年45) 露 座 8月5日瑞鳳寺

楳外紹青 笠原鹿之助古定(年71) 11 取 7月13日昌黎寺

喜雲守悦 工藤与喜右衛門清定(年61) 植 持 8月5日正樂寺

墓は何れも安山岩の宝篋印塔である。忠宗死後5年後の寛文3年(1663年)4代將軍家綱は

殉死の禁止令を発したので伊達家としてはこれが殉死の最後となった。感仙殿蓋屋の完成と同時に両廊参道石階の分岐点に巨大な本瓦葺きの櫻門を建て、坂下門と称したが、明治10年伊達家で廢仏棄軸の際、撤去し、その雄大な安山岩の基礎が門跡から公子廟に通ずる参道入口東側の草むらの中に現存する。(写真15)

感仙殿が完成した寛文4年は寛永14年瑞鳳殿落成以来30年近く経過し、少なからず破損個所を生じたので、感仙殿の造営が成るとともに修造に着手した。奉行は国老柴田外記朝意で、寛文6年(1666年)5月24日完成した。その時、記念に奉納した青銅製水盤一個は岸榮門北側の隅に保存されていたが、終戦後伊達家で松島町に寄付し、現在同町博物館に保存されているが銘文に朝意はかって政宗公の小姓を勤めたことがあり、その報恩のため寄進する旨刻まれている。

善応殿

三代綱宗は、吉原遊廓通いを理由に21才で隠居を命ぜられ、幕命によって品川下屋敷から52年間一步も世間へ出ることなく正徳元年(1711年)6月4日他界した。年72、遺体は14日後の6月18日夜品川邸を発し、途中10日、28日仙台到着、直ちに瑞鳳寺に取り置き、3日後の7月1日経ヶ峯西廟感仙殿の南に接して拡張され、北山覚範寺で中陰の法要9日間、7月9日伊勢堂山のふもとの原野で葬礼を執行、前例に従って空棺を火焚し、灰燼が築かれた。中央円丘に松が栽えられ、戦前まで存在したが、北山から伊勢堂下に道路を開設した時崩されて今は無い。法号は見性院殿雄山全成大居士、正徳5年(1715年)3月10日靈屋善応殿の起工式あり、戸名刑部盛連造営奉行となり、享保元年(1716年)3月20日成る。靈屋は高さ2尺5寸ばかり素木に法号を墨書きしたもので、香木伽羅の位牌と称され有名であった。明治10年廢仏棄軸に際し、孝勝寺の綱宗側室淨眼院三沢初子靈屋の本殿を撤去し、初子の木像は善応殿本殿に移されたが悉く戦災で焼失した。

綱宗死去の正徳元年は殉死の禁令が出て以来48年を経過したが、同年7月1日遺体が靈屋に拡張の時、泉田大隅以下14名の近臣が藩主の許しを得て刺殺した。これは殉死に代る習俗で擬殉と称するが、俗に百日坊主とも称された。それら14名の家臣は廟のはとりに庵室を設け百日間、朝夕廟に奉仕して亡者の菩提を弔らい百ヶ日の法要後帰宅する習わしだったからである。この時、近習頭で1000石を領した熊谷庸(いっき)直清のみは出家して曹溪と号した。5代藩主吉村は瑞鳳寺の北向いに思敬庵を建てて与え、瑞鳳寺の傍院とした。直清は享保18年(1732年)年71で没し、墓は善応殿靈屋の前方南側にある無縫塔がそれである。(写真18)当初の靈屋は感仙殿とならんで石段があり、入り口に四脚門・拝殿・御供所・唐門と続き、宝形造の本殿に達したが、感仙殿に比べて、簡素な建築であった。この本殿以外は全部明治10年に取りこわ

された。

妙雲界廟

感仙殿の北側上階をへだて、同形式の裏が三基立っている。(写真19・20・21) 妙雲界と称する廟で、

○西側東西

青龍院殿紹山隆公大居士 9代周宗 文化9年(1812年)4月24日 17才

○北側南面、向って左

曹源院殿正山榮因大居士 11代齊義 従四位下少将陸奥守 文政10年(1827年)11月27日 30才

○向向って右

真明院殿心月珠泉大姫 夫人芝姫 10代齐宗公女 安政5年(1858年)4月22日 43才

何れも二重基壇の板石型塔婆で、正面に法号、裏面に略歴を刻む。以前は墓毎に屋根本瓦葺四柱吹き放しの圭堂を建ててあったが、明治10年取に払われた。このように妙雲界には三代の廟の如き蓋屋建築は最初から無かった。これには政宗公以来の伊達家の葬制の変遷を知る必要がある。

蓋屋建築の造営を廃し、墓石と圭堂のみにしたのは4代綱村が生前5代吉村に口授遺命したことによる(伊達家文書卷5)、伊達家には政宗以来遺体の掩括を先にし、中陰の法要後空棺を以って葬礼を行ない、棺に下火して灰塚を存置する家例に就き、5代吉村は儒者と僧に研究調査せしめた結果、輝宗以来戦國の遺風であることを答申した結果、泰平の世に無用なりとして廃止し、從来の葬法は綱村を最後として廃された。同時に綱村の代まで夫妻の墓所を遠く別々に葬るを意味なしとし、夫妻の墓を併立して建つべしと遺命した。さらに明治に入ると伊達氏は畿内地方の陵墓か円墳式であるに準じて13代慶邦以下歴代人年寺の墓は基部を石で包み頂部を芝草で包んで土鏡頭型として今日に及んでいる。

綱村は寅葉宗に帰依し自ら造営した茂ヶ崎大年寺を墓地とした。以後歷代、無尽灯及び法華林の向墓域を廟としたが、その間9代周宗と11代齊義夫妻は前記の如く経ヶ峯妙雲界を廟としている。

周宗は文化9年4月、17才で卒すとあるが、実説によれば、文化6年(1809年)14才で死亡したという。大名は17才で將軍に初見得する以前に没すれば改易または禄を減じて国替えと武家諸法度に規定されていたので、仙台藩は上下をあげて色を失ったという。この時、一代の名国老中村口向義景が周宗の死を極秘とし、満三年後、生存して居れば17才の年に危篤の届出と同時に弟齊宗の家督相続を認められ事無きを得たという。周宗は當時14才の少年で、廟の

選定に当たり経ヶ峯は仙台城から指顧の間にある事と、高祖政宗公の旗下という意味からここが選ばれた理由と思われる。11代齊義は一ノ関田村氏から周宗の弟貞宗の長女真明院芝姫の聲に迎えられた人で、5代吉村の孫に当たる。医学館を開設し、蘭学を盛んにした名君であった。当時瑞鳳殿の本殿背後が広瀬川に面した急斜面で、年々崩壊しつつあった。齊義はこれを憂え、本殿背後から広瀬川の岸まで切込みハギの石壁を築き、なおその上を鉄線を以て押えるという大工事を完成、中国五岳の一、泰山の神名を石碑に刻んで加護を祈り、文政8年(1825年)成った。これを鎮所と称し今も完全に保存されている。その二年後、文政10年12月、30才の壯年で他界したが、周宗は別として齊義のみ一人経ヶ峯を廟とした理由は、死してもなお瑞鳳殿を守ろうとする遺命からではなかったかと想像される。

公子公子廟（御子様御廟）

昔の絵図を見ると妙雲界の東側に感仙殿の参道石階と並行して石段が認められるが、これも明治になって廃された。ここから瑞鳳殿の方へ下って瑞鳳殿への石階の登り口、昔の坂下門跡から北に進むと広瀬川の岸上に出る所に老杉に開まれた公子公子廟（御子様御廟）がある。（写真22）5代吉村以下歴代藩主の幼くして死んだ公子女の墓場である。昔から「お子さん御廟」と称する。その墓碑銘を記録した文献は從来ないので、詳細を記して置く。

○入口土居外側西面向って右より

長寧院華林詔榮彈丸 岸氏盛子 真明夫人老女 安政6年(1859年)2月23日 73才

寂照院本庵慈心禪尼 天保4年(1833年)4月21日

○入口上居外西側東面

實善妙珠法尼

○入口通路東側西面向って右より

常照院顯殊妙采尼大師 砂沢氏安子 齊義御室 明治2年12月晦日 66才

普照院蘭台玄秀大童子 植丸 麗邦長男 弘化4年(1847年)正月19日 1才

○入口通路西側東面向って左より

竜華院分流智禪尼 無縫塔

土樹院般幻宗淨華大童女 伯姫 桑村二女 元禄2年(1689年)3月12日 3才

大正15年7月20日東京牛島弘福寺より移す。

○南側北面向って右より

心鏡院殿永照月大姉 芹姫 吉村養女・伊達村龍室 明和6年(1769年)5月11日 57才

英良院殿薰山惟仲大童子 植丸 齊義長男 文政9年(1826年)5月14日 3才

薰心院殿芳巣慈性大童女 依姫 齊義二女 文政12年(1829年)11月19日 3才

葵心院殿宝池維馨大童女 実姫 麗邦長男 弘化元年(1844年)5月2日 2才

円照院殿心月貞性尼火姑	阿今	伊達村胤宗	明和2年(1765年)5月5日	66才
総心院殿真源慈証大童女	桃姫	慶邦二女	弘化3年(1846年)5月6日	2才
地蔵石仏(損傷)		慶邦三女	文久元年(1861年)12月8日	即日夭
真珠院殿梅香智咲大童女	寿姫	重村九女	寛政元年(1789年)正月24日	3才
金剛院殿台樹慈蔵大童子	仙三郎	重村三男	天明4年(1784年)8月12日	10才

○北側南面向って右より

泰涼院殿陽山智恵大童子	總三郎	重村長男	明和8年(1771年)6月11日	7才
理堀院殿月心智円大童女	御姫	宗村十二女	宝曆12年(1762年)7月7日	8才
秀池院殿清荷智源大童女	房姫	宗村十一女	宝曆9年(1759年)4月14日	7才
寒梅院殿儒草智香大童子	藤七郎	宗村六男	宝曆3年(1753年)10月27日	1才
犬吠院殿圓山融公大居士	村風	吉村三男	享保20年(1735年)5月20日	21才
希菊院殿透英智白大童女	才姫	宗村十女	宝曆3年(1753年)9月21日	2才
玉庭院殿涼智清大童子	武三郎	吉村二男	正徳3年(1713年)5月18日	3才
月杵院殿透葉智芳大童女	從姫	宗村七女	宝曆3年(1753年)8月15日	3才
尊心院殿俊山英公大居士	村臣	吉村長男	享保7年(1722年)12月26日	14才
眞華院殿大童子	某	吉村十五男	元文4年(1739年)6月8日	1才
天杆院殿通山月公大童子	久米之丞	宗村長男	延享2年(1745年)7月22日	8才

○西側東面

香雲院殿南台慈薰大童子	定丸	重村四男	文化12年(1815年)4月12日	1才
-------------	----	------	-------------------	----

この地を公子女の廟としたのは5代吉村であった。廟の北側は広瀬川を脚下に仙台城二之丸を真近に展望出来る。いわば幼い者の廟を見守ることが出来るという条件が理由であったと思われる。墓群の中には藩主の連枝にあたる成年の女性二人、(写真23・24)21才の青年の墓が(写真25)一基あり、また廟の入口通路に並立する墓は全部が落飾した尼号の女性で11代齊義の側室真明夫人の老女等で何れも山上の齊義夫婦の墓の背面に向けて立っている。これにより当時の米世觀の信仰をみることが出来る。公子廟の墓は全部笠塔婆の形式で、各個に疊き放しの圭堂が建ててあったが明治10年に除去された。民間では幼児の墓として石地蔵を建てる風習があつたが、ここにも慶邦の子の墓として一基建てられている。(写真26)公子廟は落飾した側室や侍女が展幕に訪れたため、廟地をいつとはなしに尼ヶ崎というようになった。

第3章 瑞鳳寺と経ヶ峯の天然記念物

瑞鳳寺塔頭及び傍院

瑞鳳寺の塔頭（たっちゅう）は明治3年「寺院山緒調」によれば妙音庵、慈眼院、泰淳院、定光院、般若院、竜興院の六倉で、何れも寛永13年6月の創建で御勅勅番を命じ、一ヶ院各16石を付すとあり、この外に5代吉村が綱宗の擬殉者として出家した熊谷直消改め曹溪のために開基した思敬庵が傍院として瑞鳳寺山門の向側にあった。右の内、妙音庵は吉村の世子村田の佛寺として雄心院と改め、慈眼庵は宗村の世子久米之丞の牌寺となり天桂院と改め、泰淳院は重村の世子總三郎の牌寺となった。幕末安政の城下絵図には参道入口の下馬前の北側、下から竜興院、般若院、定光院が見え、公子廟の東に泰淳院、善應殿の南ふもとと三庵通りに面して雄心院と天桂院が見える。その近くに南山古樂晩年の落葉庵があったという。それらの塔頭は悉く明治の初め廃寺となつた。

瑞鳳寺の焼失

瑞鳳寺は安政5年（1858年）9月13日焼失、この時の代藩主慶邦は騎馬でかけ着け消防を指揮した。その後復興成ったか明治29年4月1日夜再び焼失、以後無住同様に荒廃したが、本山妙心寺で鎌田智勝をして復興し、寺觀を復した。

経ヶ峯の天然記念物と石造文化財

西廟のコウヤマキの大木の下に「新修先廟記」の碑がある。（写真27）伊達家で廟の祭祀を神式に切り替え、瑞鳳殿靈屋のみを残し、西廟の両本殿以外の唐門、拝殿、四脚門の一切を撤去し、経ヶ峯の永久保存施設を完成した時の記念碑で、文並びに書は国分章、造立は山路謙隆で、明治12年12月とある。

国分章、名は豊章、平蔵と称し、号は松岐、藩の需貝で養賢堂指南役から維新後知学局学頭となつた。その文によれば、明治10年9月起工、同12年12月完成、木石上工に7,605人、工費3000余円とあり、從来瑞鳳山内に水の涌く所がなかったが、参道石段中ほど西側に清泉を発見し、これを祭肥用としたとあるが、現在石の囲いのみ残り泉は涸れている。（写真28）

昔、瑞鳳殿の鐘楼があった所に戊辰役の戦没者千名の忠魂碑が立っている。（写真29）石積墓壇

の上に青銅の方尖塔を立てたもので、地上總高約4.5m、銘文は大槻文彦「明治10年10月、從五位伊達宗基建之」とある。他に西南の役旧仙台藩藩士の戦没者弔魂碑が感仙殿参道石段北側に立っている。粘板岩の巨碑である。(写真30)

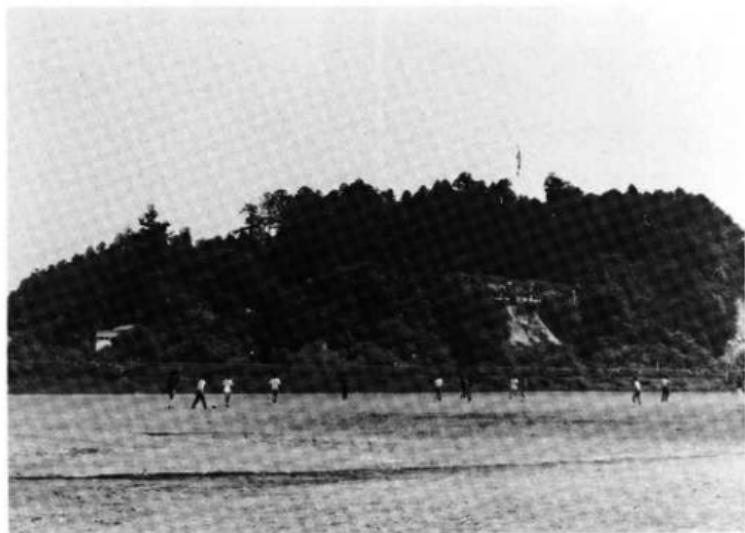


写真1 経ヶ峯全景



写真2 同上（花壇側から）俗に元虚空蔵と称する



写真3 表 坂、下馬前という



写真4 瑞鳳殿への石段



写真5 左瑞鳳殿・右感仙殿石段分歧点

写真 6 元虚空藏堂跡



写真 7 瑞鳳寺



写真 8 長徳寺



写真9 鹿落観音堂



写真10 大満寺



写真11 虚空藏堂





写真12 感仙駁殉死者宝籠印塔



写真13 坂下門礎石



写真14 下馬碑



写真15 同 裏 面



写真16 善応殿前、熊谷斎無縫塔



写真17 青龍院墓標



写真18 薬源院墓標



写真19 真明院墓標



写真20 御子様御廟全景



写真21 地蔵石仏



写真22 新修先廟記の碑



写真23 御手水所



写真24 戊辰役戦没者弔魂碑



写真25 西南役戦役者弔魂碑

経ヶ峯の植物群落と動物

加 藤 陸 奥 雄

はしがき

仙台市の西部、広瀬川に接した標高73.6mの経ヶ峯には、仙台藩祖伊達政宗、2代忠宗、3代綱宗公等の廟所がある。また、瑞鳳寺、穴藏神社等もあり、仙台市の史跡として著名な地である。

経ヶ峯の頂上附近は青葉山丘陵に属し、その周囲を仙台上町段丘、中町段丘および下町段丘が取囲むように発達しているが、北西側と南東側は広瀬川の開析が激しく、崖地を形成している。谷密度の低い、傾斜20~30度の急斜地である。

地質的には浮石質凝灰岩、砂岩、ローム、礫からなっている。土壤は褐色森林土（砂質型）と黄褐色土から成っている。

経ヶ峯の自然は江戸時代以来、仙台藩主の廟所として利用されてきたため、人為作用の影響を受けており、またスギの植林が行われている。

ともあれ、経ヶ峯は史跡としてだけでなく、市街地に接し景観的にもまた生物相の上からも貴重な地域である。しかし、この地域については従来その生物相についての充分な記録がない。この地域は将来ともその環境を維持していくかなければならないことからすれば、この際この地域の生物相についての調査を行い、記録にとどめておくことは重要なことである。

このような趣旨のもとに、1977年から1978年にかけて、経ヶ峯地域の植物と動物についての調査を行った。

この調査においては植物調査班と動物調査班とに分かれて調査を行ったが、両調査班は連絡を密にしながら、この調査についての一体性をもつよう努めた。

なお、この調査とは別に植物相ということに関連して木村有香博士によって植物分類学的調査が行われたが、これについては別に報告がなされている。

この調査はつぎの調査員によって行われた。

調査代表者	加 藤 陸 奥 雄
植物調査班	飯 泉 茂
	内 藤 俊 彦
	石 川 憲 吾
動物調査班	(昆虫他) 小 野 泰 正

動物調査班 (昆虫他) 田 島 幸 次 郎
(昆虫他) 高 橋 雄 一
(鳥類他) 竹 丸 勝 朗

植物調査においては経ヶ峯地域の植物群落学的調査に重点がおかれた。動物調査においては鳥類および昆蟲類の分布とその季節的消長等の調査が行われた。哺乳類については一部観察を行ったが、その他の動物についてはこの調査では欠けている。今後調査の必要があると思われる。

第1部 経ヶ峯の植物群落

第1章 経ヶ峯の植生型とその地域的分布

経ヶ峯の植生は、1). シラカシ・シロダモ群落、2). スギ・シロダモー オカメザサ群落、4). スギ・シロダモーアオキ群落、5). スギ・シロダモーアズマザサ群落、6). スギークサギ群落、7). ヒノキ・シロダモ群落、8). クリ・アズマネザサ群落、9). ミゾソバ群落、10). 多年生草本群落の10型に分けることができる。

これら10型に区分された植物群落は経ヶ峯においては、図1-1に現存植生図として示してあるように分布している。

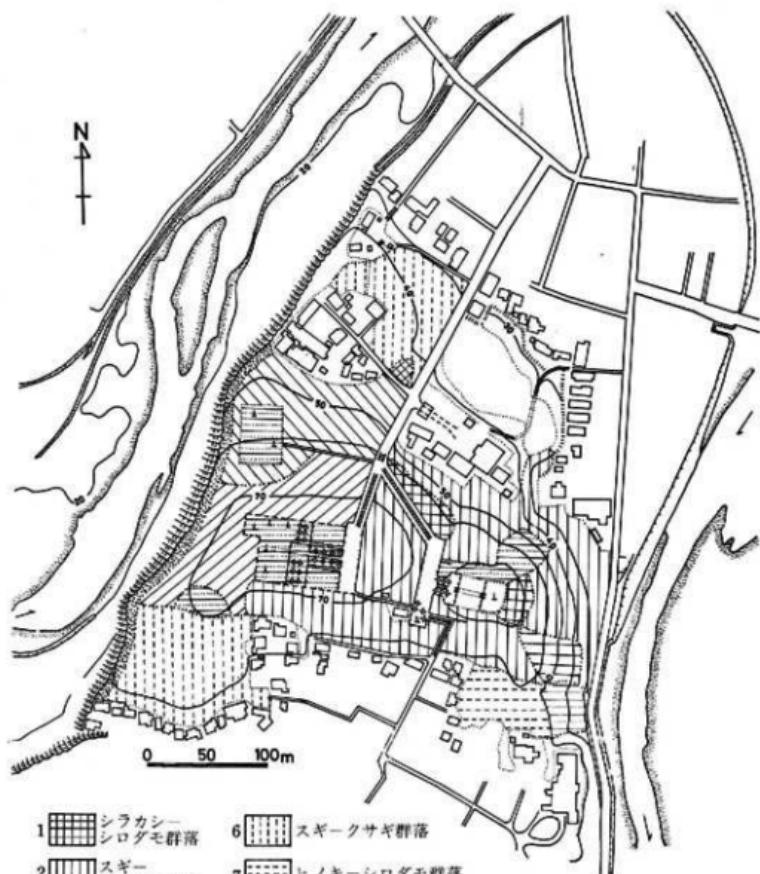
シラカシ・シロダモ群落は瑞鳳殿に登る石段の北東側の斜面の一部と瑞鳳殿の東側斜面の上部に、ごく小面積にみられる。

スギ・シロダモ群落は、経ヶ峯では最も広くみられ、2代、3代廟の南側およびこれらの廟と瑞鳳殿の間、瑞鳳殿の周囲とその東側の地域一帯の大部分を占めている。

スギ・シロダモーオカメザサ群落は瑞鳳殿の南東部の斜面に小面積に分布している。

スギ・シロダモーアオキ群落は2代3代の廟所の北から西側への斜面にわたる地域に分布し、その面積は後に述べるスギークサギ群落につぐものである。

スギ・シロダモーアズマザサ群落は、御子様御廟の周辺およびそれへの通路の北側斜面の約2分の1を占めている。この群落より北および北東側はスギークサギ群落となっており、この2つの群落によって、瑞鳳殿への登り道から西側の地域で、御子様御廟までの間の地域がほぼ2等分されている。



- | | | | |
|---|---------------------|----|-------------|
| 1 | シラカシ
シロダモ群落 | 6 | スギークサギ群落 |
| 2 | スギー
シロダモ群落 | 7 | ヒノキーシロダモ群落 |
| 3 | スギ-シロダモ-
オカメザサ群落 | 8 | クリーアズマネザサ群落 |
| 4 | スギ-シロダモ
アオアオキ群落 | 9 | 多年生植物群落 |
| 5 | スギ-シロダモ
アズマザサ群落 | 10 | ミゾソバ群落 |

図1-1 猿ヶ峯の現存植生図

スギ・クサギ群落は、上に述べたように瑞鳳殿への登り道の西側斜面とさらに前欠沢の西端地域に分布する。

ヒノキ・シロダモ群落は瑞鳳殿の南側、前欠沢の東端に位置する平坦面に分布するもので、面積は少ない。この群落の南側は民家に接している。

クリーアズマネザサ群落は経ヶ峯の西北側広瀬川に面した崖上の肩の部分に、北北東から南南西に向かって細長く狭い面積で分布している。経ヶ峯では唯一の落葉広葉樹林である。

ミゾソバ群落は瑞鳳殿への登り道のわきのわずかな凹地で、溼潤な地にごくわずかに分布する小さな草木群落である。

多年生草本群落は瑞鳳殿の北側の崩壊地と経ヶ峯の南東端の市道に面した崩壊地と2代および3代廻所付近およびその南西の地、さらに御子様御廟付近の5ヶ所に点在するように分布している。

第2章 各植物群落の組成

経ヶ峯に発達する植物群落の組成を表1-1に示したが、これに基づいて各群落についての特徴を述べることとする。

I. シラカシ・シロダモ群落

この群落では、高木層にシラカシ、シロダモなど常緑広葉樹の被度が高く、イヌアナ、ウツミズザクラなどの落葉広葉樹を混生している。

亜高木層以下の層には、シロダモ、ヤブツバキ、アラカシ、アオキなどの常緑広葉樹が比較的多く生育する。

低木層にはクマザサおよびアズマネザサの被度が高いために、草本層の発達がわるく、シロダモ以外の種の被度は極めて低い。

関東平野の常緑広葉樹植物群落としては、シラカシ群集が内陸の高植に育んだ関東ローム層の厚い所に発達するとされ、シロダモ群集、ヒイラギ群集に区別されている。シロダモ群集の識別種としては、シロロ、ケヤキ、ヤブラン、シロダモ、ナキリスゲ、アカガシがあり、ヒイラギ群集の識別種としては、ウラジロガシ、アセビ、ヒイラギ、タブ、コウヤボウキ、ツルグミ、イタヤカエデ、キッコウハグマ、ヤマツツジ、カヤ、ミヤマシキミ、ティカカズラがある（宮脇：1967）。

経ヶ峯のシラカシ・シロダモ群落には、これらの識別種のうちでは、シロダモのみを含み、他の識別種は存在しないことから、これとの類似性は認められない。

表 I-1 経ヶ峯の植物群落の組成

- 1: シラカシシロダモ群落 2: スギーシロダモ群落
 3: スギーシロダモーオカメザサ群落 4: スギーシロダモーオキ群落
 5: スギーシロダモーアズマザサ群落 6・7: スギークサギ群落
 8: ヒノキシロダモ群落 9: クリーーアズマネザサ群落 10: ミゾソバ群落
 11: 多年生草木群落

調査地番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
高さ 樹高 cm	葉 種 別 別 度 度 度	225 EE 35	400 EE 33	400 EE 33	400 N25E 16	400 N25E 8	225 N25E —	900 N25E 21	100 N50W 6	50 N50W —	25 N50E —	25 N50E 32
高 木 (T1)	木	20-	30-	30-	35-	14~8	17~10	25~	-	-	-	-
中 木 (T2)	木	8-	12-	8-	10-	-	-	6-	10-	-	-	-
低 木 (S)	木	3-	4-	3-	4-	1.5-	2.5-	1.5-	3~	1.5~	-	-
高 木 (H)	木	0.5~	1~	1~	0.3~	0.7~	0.7~	0.5~	0.7~	0.5~	0.5~	1.2~
高 木 (T1)	木	70	60	60	85	65	80	70	90	-	-	-
高 木 (T2)	木	20	80	85	30	50	-	95	80	-	-	-
中 木 (S)	木	55	20	30	85	70	20	40	70	50	5	5
高 木 (H)	木	10	25	70	10	80	100	40	50	100	100	100
高 木 (T1)	木	6	1	1	2	2	3	1	3	-	-	-
高 木 (T2)	木	5	3	3	8	8	-	9	7	-	-	-
中 木 (S)	木	7	4	4	4	4	7	15	5	17	2	2
高 木 (H)	木	18	19	8	11	26	54	28	16	35	21	33
中 木 (T1)	木	26	24	13	22	36	62	42	29	50	21	33
アオイ科 (S)	P-h	2~2	1~2	1~2	5~4	2~2	·	·	2~2	1~1	·	·
シロタモ科 (T1)	P-h	Dr	2~3	4~4	4~4	2~2	1~2	+	1~2	·	·	+
(T2)	P-h	2~2	5~5	4~4	2~2	2~2	·	·	2~2	·	·	·
(S)	P-h	2~2	1~2	1~2	2~2	2~2	·	+	2~2	1~2	·	·
スギギ科 (T1)	P-h	Dr	1~2	1~2	1~2	1~2	1~2	·	1~2	·	·	·
(T2)	P-h	1~2	4~4	4~4	5~4	4~4	5~4	4~4	·	·	1~1	+
(S)	P-h	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·
サンショウウコギ科 (T1)	P-h	Dr	·	·	·	·	·	·	+	·	·	·
(T2)	P-h	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·
ヤブツバキ科 (T1)	C-s	Dr	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·
(T2)	C-s	1~1	1~2	·	·	1~2	3~3	2~3	2~3	2~3	2~3	2~3
ナマクサ科 (T1)	H-h	Dr	1~2	1~1	1~1	1~1	1~1	·	2~2	·	·	·
(T2)	H-h	1~2	1~2	1~2	1~2	1~2	1~2	1~2	1~2	1~2	1~2	1~2
ナマクサ科 (S)	H-h	Dr	1~2	1~2	1~2	2~2	1~2	1~2	·	+	1~2	1~2
ナマクサ科 (H)	H-h	Dr	1~2	1~2	1~2	1~2	1~2	1~2	1~2	1~2	1~2	1~2
イヌワニラヒコ科 (T1)	H-h	G-h	·	·	·	·	·	·	6~2	·	4~2	·
(T2)	H-h	G-h	·	·	·	·	·	+	2~2	1~2	+	2~2
(S)	H-h	G-h	·	·	·	·	·	+	2~2	1~2	·	·
イヌオバジオノヒコ科 (T1)	H-h	G-h	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·
(T2)	H-h	G-h	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·
(H)	H-h	G-h	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·
ウツメヅゼクラ科 (T1)	P-h	Dr	1~1	·	·	1~1	·	·	·	·	1~1	1~1
(T2)	P-h	Dr	1~1	·	·	1~1	·	·	+	·	·	·
(S)	P-h	Dr	·	·	·	·	·	·	3~3	·	·	·
コロワイチナンシメウコ科 (T1)	G-h	Dr	·	·	·	·	·	+	3~3	·	2~2	·
(T2)	G-h	Dr	·	·	·	·	·	3~3	+	·	·	·
(H)	G-h	Dr	·	·	·	·	·	+	3~3	·	2~2	·
クツワラヒビ科 (T1)	H-h	Dr	·	·	·	·	·	·	·	·	4~4	·
(T2)	H-h	Dr	·	·	·	·	·	·	·	·	4~4	·
(S)	H-h	Dr	·	·	·	·	·	·	·	·	4~4	·
アツチャヅギ科 (T1)	C-h	Dr	·	·	·	·	·	1~2	+	·	·	3~2
(T2)	C-h	Dr	·	·	·	·	·	1~2	+	·	·	3~2
(H)	C-h	Dr	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·
シラカシ科 (T1)	P-h	Dr	3~3	3~3	3~3	3~3	3~3	3~3	3~3	3~3	3~3	3~3
(T2)	P-h	Dr	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·
(H)	P-h	Dr	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·
ヤブツバキ科 (T1)	P-h	Dr	1~1	·	·	1~1	·	·	·	·	·	·
(T2)	P-h	Dr	1~1	·	·	1~1	·	·	·	·	·	·
(S)	P-h	Dr	·	·	·	·	·	1~2	1~2	1~2	3~3	3~3
クスマザサ科 (T1)	C-h	Dr	3~3	3~3	1~2	·	·	·	·	·	·	·
(T2)	C-h	Dr	3~3	3~3	1~2	·	·	·	·	·	·	·
(S)	C-h	Dr	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·
イヌツゲ科 (T1)	P-h	Dr	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·
(T2)	P-h	Dr	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·
(H)	P-h	Dr	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·
キロタケレゲ科 (T1)	H-h	Dr	·	·	·	2~2	·	·	1~2	1~2	1~2	1~2
(T2)	H-h	Dr	·	·	·	2~2	·	·	1~2	1~2	1~2	1~2
(H)	H-h	Dr	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·

※ 生物形、散布型の付サについては第4章、第5章を参照

漢語	地名	番号	半形	散形	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
ジ キ コ ウ	ヒ ダ タ ゾ (S)	(II)	G P h	Dz Dz	+	+	+	-	-	+	+	2 + 2	+	+	+
タ ラ ノ キ	(T)	P h	Dz	+	+	+	-	-	+	1 + 1	+	+	+	+	+
カラスザンシ	ウ	(B)	P h	Dz	+	+	+	-	-	1 + 2	1 + 3	+	+	+	2
ツ リ ウ シ ュ エ マ フ ゲ	ル ザ ヴ デ	(S)	G H H H	Dz Dz Dz Dz	+	+	+	-	-	1 + 2	1 + 3	+	+	+	2
イ カ ニ ポ チ タ ピ ラ	フ ク (H)	(II)	H	Dz	+	+	+	-	-	1 + 1	+	+	+	+	1
ケ モ ク	チ ジ イ ポ チ	(H)	C s P h	Dz	+	+	+	-	-	1 + 1	+	+	+	+	1
ク ア カ メ ガ ノ オ シ	ウ (B)	(T)	G P h	Dz Dz	1 + 1	+	+	-	-	1 + 1	+	+	+	+	2
ヤ ブ ム ム ラ サ キ	(B)	(S)	P h	Dz	1 + 1	+	+	-	-	1 + 1	+	+	+	+	+
エ ノ レ イ ベ ル	シ ウ (H)	(II)	P b	Dz	+	+	+	-	-	1 + 1	+	+	+	+	+
ノ ャ マ イ カ	バ ル シ (H)	(H)	P b	Dz	+	+	+	-	-	1 + 1	+	+	+	+	+
ツ リ リ バ パ	ル ナ (B)	(H)	P h	Dz	+	+	+	-	-	1 + 1	+	+	+	+	+
ヘ ヒ シ ラ	カ ズ ラ (B)	(S)	P b	Dz	+	+	+	-	-	1 + 2	5 + 5	+	+	+	+
タ ベ ヤ サ ウ	ニ ツ フ テ ゴ	(H)	P h	Dz	+	+	+	-	-	1 + 2	+	+	+	+	+
ウ イ ド	バ ミ ツ リ (H)	(S)	H	Dz	+	+	+	-	-	1 + 2	+	+	+	+	2
オ ミ ツ ル	モ ジ ハ グ マ キ (H)	(H)	G P h	Dz Dz	+	+	+	-	-	1 + 2	+	+	+	+	+
ツ タ	マ シ ゴ	(H)	P h	Dz	+	+	+	-	-	1 + 2	+	+	+	+	+
ナ ン ブ	ブ ア ザ ミ	(H)	G	Dz	+	+	+	-	-	1 + 2	+	+	+	+	+
ア ボ プ	オ ル ル フ	ス ニ ズ	G P h	Dz Dz	+	+	+	-	-	1 + 2	+	+	+	+	+
カ コ ウ	ハ ナ ビ ド	ム	G H P h	Dz Dz Dz	+	+	+	-	-	1 + 2	+	+	+	+	2
レ キ ヤ タ イ	メ シ エ ナ	シ ナ	G H P h	Dz Dz Dz	+	+	+	-	-	1 + 2	+	+	+	+	+
テ イ ハ	シ ナ	ニ ズ カ	G H P h	Dz Dz Dz	+	+	+	-	-	1 + 2	+	+	+	+	+
ベ ミ ア	カ オ ワ イ	シ ア	G H P h	Dz Dz Dz	+	+	+	-	-	1 + 2	+	+	+	+	+
オ オ イ	ト コ リ	シ ゴ マ ザ ナ	G H P h	Dz Dz Dz	+	+	+	-	-	1 + 2	+	+	+	+	+
ム ミ エ サ ル	カ ジ バ	ナ カ	G H P h	Dz Dz Dz	+	+	+	-	-	1 + 2	+	+	+	+	+

吉岡（1956）はシラカシ-ヤブツバキ群落が東北地方の太平洋岸の内陸部に分布するが、アカガシ-ヒサカキ群落との相異は高木層にシラカシが優勢な点だけであるとしている。シラカシ-ヤブツバキ群落の構成種としては、シラカシ、ケヤキ、モミ、アカガシ、ウラジロガシ、ヤマザクラ、ヤブツバキ、アセビ、オアキ、ヤブコウジ、ティカカズラ、カンスゲ、ヒサカキ、オオバノイノモトソウなど25種をあげている。この構成種を経ヶ峯のシラカシ-シロダモ群落の構成種と比較すると、シラカシ、シロダモ、ヤブツバキ、アオキの4種の共通種がある。しかし、群落の類似性をJaccardの共通係数で求めてみると、2つの群落の間には16%の共通性しかない。

また、吉岡（1954）は仙台附近はモミ-イヌブナ林地帯であるとし、アカガシ-ウラジロガシ林地帯は亘理町までであるとしている。

経ヶ峯のシラカシ-シロダモ群落は、上述のことから考えると、モミ-イヌブナ林地帯にごく稀に小面積で点在するため、アカガシ-ウラジロガシ群落とはちがった特色ある構成となつたのか、あるいは伊達家廟所として利用されてきたこともある、植栽木からの逸出によって成立したために、種類組成が亘理町以南のものとは異なるものとなつたのかということに関しては明らかではないが、今後の検討課題であろう。

2. ジギ-シロダモ群落

この群落は高木層はスギのみによって覆われ、亜高木層はシロダモが優占している。出現種数は24種であり、シロダモ、アオキ、イヌツゲ、ヤブコウジ、シラカシなどの5種の常緑広葉樹がド生えとして生育している。経ヶ峯のうちで、シロダモの生育がもっとも良い群落である。

3. ジギ-シロダモ-オカメザサ群落

スギが高木層で優占し、亜高木層以下でアカガシ、ヤブツバキの常緑広葉樹がみられることと、ジギ-シロダモ群落と異なる点であり、さらに、オカメザサが低木層で優占することが大きな違いである。また、オカメザサの被度が高いために種類数も少ない。

4. ジギ-シロダモ-アオキ群落

高木層はスギが優占し、ヒノキもわずかに混生する。

亜高木層ではシロダモが優勢であり、低木層はアオキが優占し、他の種の被度は極めて低い。草木層の被度は低く、ここにはヤブコウジ、シロダモ、オオバジャノヒゲ、ジャノヒゲ、アオキ、キヅタ、ヤツデなどの常緑植物が多くみられる。

この群落は前2者にくらべてアオキの被度が高いことが特徴的である。

5. ジギ-シロダモ-アズマザサ群落

高木層はスギが優占し、シロダモをわずかに混生する。

亜高木層はシロダモ、ムラサキシキブ、コシアブラ、ミズキなどを混生し、タラノキ、カラ

スザンショウなどの陽樹の混生もみられる。

低木層はアズマザサが優占し、アオキ、シロダモ、サワフタギなどから成る。

草本層の種数は26種であり、前4者より多く、スギー・シロダモー・オカメザサ群落の3倍にも達する。

6. スギー・サギ群落

この群落では高木層はスギが優占し、亜高木層が欠如している。

低木層はクサギ、タラノキ、ヨウシュヤマゴボウ、アカメガシワなど、陽性の植物がみられ、草木層ではその種類数はきわめて多く、フジ、ドクダミ、アカネ、ツユクサ、ツボスミレ、ミズヒキ、アキタブキなどの好湿性の植物が多くみられる。

この群落には、亜高木層が欠如しているが、スギの年令が若いことからみて、下刈りが行われているためと思われる。

7. ヒノキー・シロダモ群落

高木層はヒノキが優占し、シロダモを含み、蔓植物であるツタがわずかに生育している。

亜高木層にはシロダモが優占し、ヤマウルシ、クリ、サンショウ、ヤブムラサキ、ツリバナ、ウメモドキ、ムラサキシキブ、ミズキがみられる。

低木層ではアオキ、シロダモがほぼ同程度の被度を示し、ヒサカキ、ネズミモチなどの常緑広葉樹がみられ、アズマネザサも少し生育している。

草本層にはヤブコウジ、ジャノヒゲ、アオキ、シロダモ、オオバジャノヒゲ、チャ、オモト、ツルマサキなどの常緑性のものが多くみられる。

8. クリーアズマネザサ群落

この群落は崖の上端部に巾狭く分布するものであって、風の影響を受けて樹高は低く、亜高木層はクリ、アカシデ、タカノツメ、コバノトネリコ、コナラなどの落葉広葉樹から成っている。

低木層にはアズマネザサ、アズマザサの被度が高く、コゴメウツギ、ヤマツツジ、バイカツツジ、ウリハダカエデなどの落葉広葉樹が多くみられるが、アオキ、シロダモ、イヌツゲなどの常緑広葉樹やモミなどの常緑針葉樹の生育もみられる。

草本層にはヤブコウジ、チゴユリ、タガネソウ、ヒメカンスゲ、ヒメシャガなど27種がみられる。

この群落は仙古周辺の丘陵地にみられる代表的な2次林としてのコナラークリ林と同様のものと考えられる。

9. ミゾソバ群落

この群落には、1年生草本のミゾソバ、ツリフネソウ、キツリフネが優占し、カナムグラ、

ヤエムグラ、ツルニンジン、カラハナソウ、クズなどの蔓植物が多くみられる。

低木層にはスギ、イタドリがわずかに生育している。

10. 多年生草本群落

この群落ではヘビイチゴ、ヨモギ、ヒメジョオン、ヤエムグラなどの被度が高く、ナワシロイチゴ、ニワトコ、モミジイチゴ、ヤマブキ、ハリエンジュ、ツルウメモドキ、サンショウ、アオキなどの木本植物も混生しているが、その被度は低い。

以上述べてきたように経ヶ峯における植物群落は10型の群落に分けることができるが、相観的にはスギ林が優占している。このスギは昔うまでなく自生のものではなく植栽したものであることからすれば、経ヶ峯は植栽林によって成立しているといえる。

このことに関連して、この地域で広瀬川の崖に沿う地帯、すなわちスギの植栽を免かれたところに、仙台周辺にみられる代表的二次林の1つとしてのクリーアズマネザサ群落が発達していることは注目に値する。

スギ林の亜高木層以下にシロダモ、アオキ、ヤブコウジ、オオバノジャノヒゲ、シラカシ、ヤブツバキ、ジャノヒゲ、キヅタ、ツルマサキ、ネズミモチ、アラカシ、アカガシなどの常緑植物を多く含むことは注意をひくことで、この群落構成に鳥類の影響の多いことを思わせるものがある。

また、シラカシーシロダモ群落も局所的ながら発達していることは注目すべきであるが、その成立の由来については検討すべき課題が残されている。

第3章 植物群落の階層構造

上に述べた各植物群落の階層構造を図1-2に示した。多年生草本群落を除いて、他の9つの植物群落は多層構造をもつている。

1. ミゾソバ群落は低木層がわずかに発達している点が、多年生草本群落と異なっている。ミゾソバ群落と多年生草本群落の2つを除いた、他の8群落では階層構造の発達が顕著である。

2. 高木層の発達の程度は、ヒノキシロダモ群落>スギシロダモアオキ群落>スギクサギ群落>シラカシーシロダモ群落>スギシロダモ群落=スギシロダモオカメザサ群落=スギシロダモアズマザサ群落の順になっている。

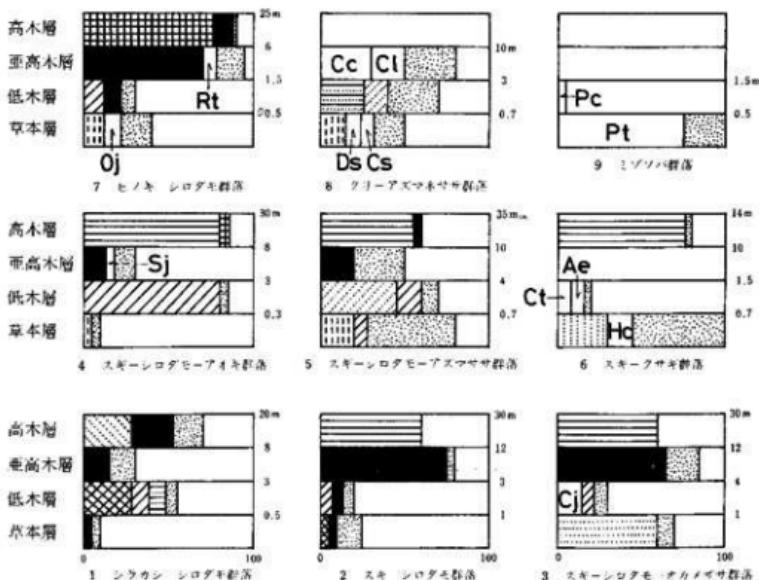
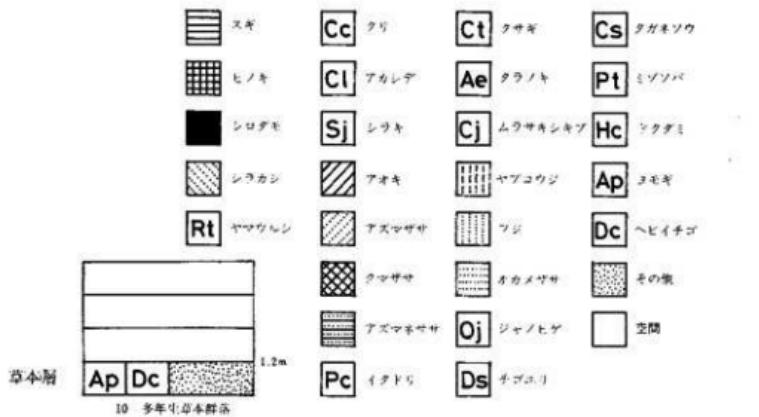


図1-2 経ヶ峯における各種植物群落の階層構造

並高木層の発達の程度はヒノキ-シロダモ群落>スギ-シロダモ-オカメザサ群落>スギ-シロダモ群落=クリーアズマネザサ群落>スギ-シロダモ-アズマザサ群落>スギ-シロダモ-アオキ群落=シラカシ-シロダモ群落の順になる。

3. 低木層の発達は、スギ-シロダモ-アオキ群落>クリーアズマネザサ群落=スギ-シロダモ-アズマザサ群落>シラカシ-シロダモ群落>スギ-シロダモ-オカメザサ群落-ヒノキ-シロダモ群落>スギ-シロダモ群落=スギ-クサギ群落>ミゾソバ群落の順になっている。

4. 草本層の発達は、スギ-クサギ群落>スギ-シロダモ-アズマザサ群落>スギ-シロダモ-オカメザサ群落>クリーアズマネザサ群落>ヒノキ-シロダモ群落>スギ-シロダモ群落>スギ-シロダモ-アオキ群落=シラカシ-シロダモ群落の順である。

5. 経ヶ峯の植物群落の階層構造の発達についてみると、ヒノキ-シロダモ群落、シラカシ-シロダモ群落、スギ-シロダモ群落がもっとも発達した階層構造をもち、ついで、スギ-シロダモ-オカメザサ群落、スギ-シロダモ-アオキ群落、スギ-シロダモ-アズマザサ群落、スギ-クサギ群落の順に発達は悪くなっているものと考えられる。

また、シロダモに代表される暖温帶性の常緑植物はスギ林、ヒノキ林およびシラカシ-シロダモ群落に多く生育している。スギ、ヒノキは植林されたものであり、これらの森林の下に鳥類などによって運ばれた常緑植物が生育するようになったものといえるが、これらは上層木のスギ、ヒノキによって寒冷から保護されているのであろうと、吉岡（1947）は説明している。

第4章 植物群落の生活形組成

植物の生活において、不利な季節における植物の休眠芽の状態、すなわち、条件が良くなると伸長を始める再生芽の位置やその保護の状態について、Raunkiaer (1907) は生活形体系を示した。このRaunkiaerの生活形について、沼田（1957）は休眠型と呼んだ。この休眠型について経ヶ峯の植物群落についてみると、表1-2のようになる。

表1-2に明らかなように2つの草本群落は他の群落とは著しく異なる生活形組成をもっている。しかし、この2つの草本群落についていえば、ミゾソバ群落は湿润な環境に、また多年生植物群落は主として崩壊地にみられるものであるので、それぞれ特異的組成をもっていることが認められる。いずれも他の8群落と違って半地中植物が優占するが、前者は後者にくらべ

表 I-2 生活形組成

生活形	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
地上植物 (P h)	16 (61.5)	14 (58.3)	10 (76.9)	14 (63.6)	13 (36.1)	28 (45.2)	18 (42.9)	19 (65.5)	30 (60.0)	2 (9.5)	7 (21.2)
地表植物 (C h)	1 (3.8)	4 (16.7)	2 (15.4)	2 (9.1)	4 (11.1)	4 (6.5)	3 (7.1)	2 (6.9)	4 (8.0)	1 (4.8)	5 (15.2)
半地中植物 (H)	4 (15.4)	6 (25.0)	1 (7.7)	3 (13.6)	10 (27.8)	15 (24.2)	15 (35.7)	4 (13.8)	11 (22.0)	8 (38.1)	15 (43.5)
地中植物 (G)	5 (19.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (13.6)	9 (25.0)	13 (21.0)	5 (11.9)	4 (13.8)	5 (10.0)	5 (23.8)	3 (9.1)
一年生植物 (T h)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (3.2)	1 (2.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (23.8)	3 (9.1)	

1: シラカシ・シロダモ群落 2: スギ・シロダモ群落 3: スギ・シロダモ・オカメザサ群落

4: スギ・シロダモ・アオキ群落 5: スギ・シロダモ・アズマツサ群落 6・7: スギ・クサギ群落

8: ヒノキ・シロダモ群落 9: クリーアズマツサ群落 10: ミゾソバ群落 11: 多年生植物群落

て地上植物と地表植物が少なく、逆に地中植物と一年生植物が多い。

草本群落を除くと、すべての群落で地上植物がもっとも高い割合を示している。しかし、この中で、スギ・シロダモ・オカメザサ群落は地表植物の割合が半地中植物よりも高いのが特異的である。これはオカメザサが地表面を覆っているため、草木層の種類数が少ないのであろう。スギ・シロダモ群落の組成もこれに類するが、地表植物よりも半地中植物がより多い傾向がある。

スギ・シロダモ・アオキ群落、ヒノキ・シロダモ群落、クリーアズマツサ群落、シラカシ・シロダモ群落は種構成からみると相互に異なるが、生活形組成の点では類似し、地上植物が圧倒的に多い。

スギ・シロダモ・アズマツサ群落、スギ・クサギ群落は生活形組成の点で互いに似ているが、後者は他の森林群落とは異なり、一年生植物がみられる。これは下刈りなどの人為作用が加わっているため、亜高木層を欠き、低木層の植被率が低いため、ヤクシソウなどの風散布型植物（後述）が森林外から侵入するためと考えられる。

第5章 植物群落の散布器官型組成

植物群落あるいは植物種の維持のためには、常に新しい個体の供給が必要である。新しい個体の発生には、種子や胞子のような散布体が重要な存在となる。この散布体に備わっている装

置や機構によって、散布体の分類がされているが、この散布器官型には、風水散布型、動物散布型、自動散布型、重力散布型、非散布型が区別されている。

この散布器官型がそれぞれの植物群落で占める割合を表1-3に示した。

シカラシ-シロダモ群落、ミゾソバ群落を除く、8つの植物群落では、動物散布型の占める割合が1位を占めている。とくに、スギ-シロダモ-オカメザサ群落、スギ-シロダモ-アオキ群落、ヒノキ-シロダモ群落ではその占める割合は50%を越えている。

風水散布型の占める割合が2位の群落は、スギ-シロダモ群落、スギ-シロダモ-アオキ群落、スギ-シロダモ-アズマザサ群落、スギ-クサギ群落、クリーアズマネザサ群落、多年生草本群落である。

重力散布型の占める割合が2位となっている群落は、スギ-シロダモ-オカメザサ群落、スギ-クサギ群落、ヒノキ-シロダモ群落、ミゾソバ群落である。

シラカシ-シロダモ群落では、重力散布型(D₄)の占める割合が第1位で、動物散布型(D₂)の占める割合が、2位であり、風水散布型(D₁)が3位で非散布型(D₅)が4位、自動散布型(D₃)が5位となっている。

ミゾソバ群落においては、風水散布型(D₁)>自動散布型(D₃)・重力散布型(D₄)>動物散布型(D₂)・非散布型(D₅)の順となっている。

Molinier & Muller (1938) はヤマカモジグサ群落から極枯林に向うにつれて、風水散布型(D₁)は減少し、動物散布型(D₂)が増加するとしているが、これは森林内で鳥類やリスなどの生息が多くなることと平衡関係にあるとしている。中越(1976)も遷移の進行につれて、風

表1-3 散 布 器 官 型

散 布 型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
風水散布型 (D ₁)	5 (19.2)	7 (29.2)	2 (15.4)	6 (27.3)	11 (30.6)	9 (14.5)	9 (21.4)	2 (6.9)	14 (28.0)	7 (33.3)	8 (24.2)
動物散布型 (D ₂)	7 (26.9)	11 (45.8)	7 (53.8)	11 (50.0)	14 (38.9)	30 (48.1)	19 (45.2)	16 (55.2)	18 (36.0)	3 (44.3)	14 (42.4)
自動散布型 (D ₃)	2 (7.7)	1 (4.2)	0 (0.0)	1 (4.5)	1 (2.8)	4 (6.5)	3 (7.1)	2 (6.9)	4 (8.0)	4 (19.0)	4 (12.1)
重力散布型 (D ₄)	8 (30.8)	3 (12.5)	3 (23.1)	3 (13.6)	7 (19.4)	14 (22.6)	9 (21.4)	7 (24.1)	12 (24.0)	4 (19.0)	5 (15.2)
非散布型 (D ₅)	4 (15.4)	2 (8.3)	1 (7.7)	1 (4.5)	3 (8.3)	5 (8.1)	2 (4.8)	2 (6.9)	2 (4.0)	3 (14.3)	2 (6.1)

1:シカラシ-シロダモ群落 2:スギ-シロダモ群落 3:スギ-シロダモ-オカメザサ群落

4:スギ-シロダモ-アオキ群落 5:スギ-シロダモ-アズマザサ群落 6-7:スギ-クサギ群落

8:ヒノキ-シロダモ群落 9:クリーアズマネザサ群落 10:ミゾソバ群落 11:多年生草本群落

散布型 (D_1) から動物散布型 (D_2) が優占するようになるという。

経ヶ峯における植物群落について動物散布型植物の動向をみると、2つの草本群落を除いて、3つの群にわけることができる。すなわち、シラカシーシロダモ群落、スギーシロダモーアズマザサ群とクリーアズマネザサ群落およびスギーシロダモ群落、スギーシロダモーオカメザサ群落、スギーオキ群落、スギークサギ群落、ヒノキーシロダモ群落の群である。この順に動物散布型の割合が高くなっている。第1群は20~30%、第2群は30~40%で、第3群は50%内外の値を示している。これらのことから、経ヶ峯においては、シラカシーシロダモ群落を除いて、かなりに安定した群落を形成しているとみるとことができ、第3群はとくにその性質が著しい。

第6章 各植物群落構成の相互類似性

Jaccard (1901) の共通係数は群落構成の類似度を判断するのに便利である。

$$G = c/n \times 100\%$$

n: 両群落にあらわれる種総数

c: 両群落に共通な種の数

この係数を利用して経ヶ峯の植物群落相互の構成上の類似性を検討した。表1-4にその結果を示した。

これによると経ヶ峯の植物群落相互の共通係数は 0.0~30.8% の間を示しており、その値の小さいことからみて、それぞれの群落は互いに異質性がつよいものといえよう。

しかし、小さい値ながらも、スギ林相互の間の係数は他に比して高い値をもつ傾向がみられる。とくに、スギーシロダモ群落、スギーシロダモーオカメザサ群落、スギーシロダモーオキ群落相互の類似度は他に比して高く、スギーシロダモ群落とシラカシーシロダモ群落も類似の点で他とことなり、また、上に述べた3つの群落からスギーシロダモーアズマザサ群落→スギークサギ群落→ヒノキーシロダモ群落→クリーアズマネザサ群落へと順次類似度を低めながら移行していくことがうかがわれる。この傾向は階層構造の発達のありさまにおける傾向と似ているように思われる。

表 I - 4 Jaccardの共通係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1	22.0	18.2	13.3	19.2	14.7	13.3	19.6	7.1	4.5	7.2	
2		26.7	24.3	20.4	13.2	20.0	17.8	9.0	2.3	14.0	
3			20.7	16.3	4.2	12.0	10.5	6.6	2.9	4.4	
4				20.8	9.3	10.3	18.6	14.5	2.3	5.8	
5					18.3	21.9	20.4	8.8	7.4	11.3	
6						30.8	13.8	10.8	9.1	18.8	
7							10.9	4.5	8.6	21.0	
8								9.7	0.0	6.9	
9									0.0	2.5	
10										12.5	
11											

- 1 : シラカシ シロダモ群落 2 : スギーシロダモ群落 3 : スギーシロダモーオカメザサ群落
 4 : スギ シロダモーアオキ群落 5 : スギーシロダモーアズマザサ群落
 6・7 : スギークサギ群落 8 : ヒノキーシロダモ群落 9 : クリ アズマネザサ群落
 10 : ミゾソバ群落 11 : 多年生草本群落

第7章 植物群落の遷移度

植物群落の遷移の度合を示すものとして、遷移度がある(沼田, 1971)。これは次式で示される。

$$DS = [\sum(d \times l \times c) / n] \times v$$

d : それぞれの種の優先度

l : 種の生存年限で、一年生植物に 1、地中植物・半地中植物・地表植物に 5、小型地上植物に 50、大型地上植物に 100 の値を与える。

c : 極相適応度で、好陽性草本に 1、林床性草本に 2、先駆性木本に 3、極相木本に 5、3 と 5 の中間的な木本に 4 を与える。

n : 種数

v : 植被率で、植被率100%を1とする。

上述のD S式を用いて、絶対率の遷移度を算出すると、シラカシ-シロダモ群落(168)、スギ-シロダモ群落(161)、スギ-シロダモ-オカメザサ群落(407)、スギ-シロダモ-アオキ群落(221)、スギ-シロダモ-アズマザサ群落(116)、スギ-クサギ群落(73および69)、ヒノキ-シロダモ群落(174)、クリーアズマネザサ群落(95)、ミゾソバ(26)、および多年生草本群落(35)となる。なお、仙台地方の丘陵地の気候的極限林であるモミ林の遷移度は345である。

この遷移度の数値がかららずしも遷移の度合を適確に示すものとはいえないが、数値だけからみると、スギ-シロダモ-オカメザサ群落がもっとも遷移の進んだものであり、スギ-シロダモ-アオキ群落がこれにつぎ、つづいてヒノキ-シロダモ群落、シラカシ-シロダモ群落、スギ-シロダモ群落の3群落につづく。スギ-シロダモ-アズマネザサ群落からクリーアズマネザサ群落、スギ-クサギ群落へと遷移の進みは低くなっていく。当然のことながら多年生草本群落とミゾソバ群落は遷移の上ではその進みはいちじるしく低い。

1. 仙台附近丘陵地の気候的極限林であるモミ-イヌブナ群落は遷移度は345と高い値を示しているが、この群落においては高木層は20~30mに達するモミが優占して、亜高木層にはイヌブナ、ヤマウルシ、クリ、コナラ、カスミザクラなどの落葉広葉樹が多い。

低木層にはスズタケが優占し、アオキ、イヌツゲなどの常緑広葉樹やヤブムラサキ、ツクバネ、シラキ、オハダ、コシアブラ、バイカツツジなどがみられる。また、モミやアカガシ、ウラジロガシ、シロダモなどの常緑広葉樹をはじえることがある。

草木層にはアオキ、イヌツゲ、ヤブコウジなどの常緑広葉樹が多く、モミ、バイカツツジ、ヤマツツジ、ヒメカンスゲ、チゴユリ、タガネソウ、アキノキリンソウ、キッコウハグマなど多くの種類が生育している。

以上、モミ-イヌブナ群落の構成の特長を述べたが、この群落の構成要素となっているモミ、イヌブナ、キッコウハグマなど30種について、絶対率の各植物群落に出現するこれらの植物の百分率をモミ林要素率として図1-3に示した。

図に明らかなように、ミゾソバ群落が0であること、多年生草本群落も著しく低いことは当然といえる。シラカシ-シロダモ群落とスギ-シロダモ-オカメザサ群落は15~20%と低く、スギ-シロダモ群落、スギ-シロダモ-アオキ群落、スギ-クサギ群落はやや高く20~25%を示している。ヒノキ-シロダモ群落とスギ-シロダモ-アズマザサ群落は30~40%とやや高い値をもっている。しかし、これら絶対率における代表的群落がその構成において、モミ-イヌ

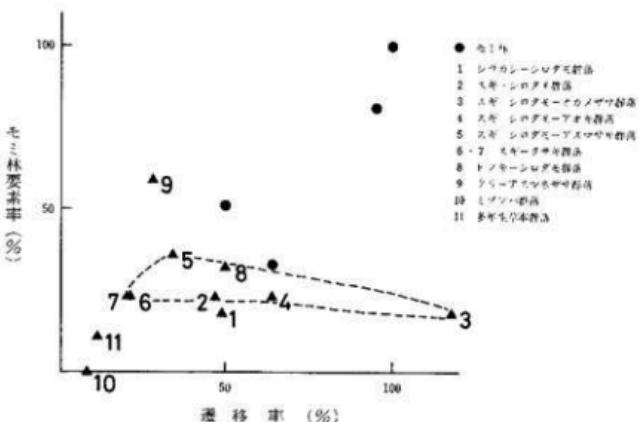


図1-3 経ヶ峯の植物群落の遷移率とモミ林要素率

ブナ群落とは異質な性質をもっていることは注意をひくことで、スギ植林を基本として成立してきた群落であることによると考えられる。これと関連して、この地域に狭い面積ながら、仙台地域に代表的二次林とみられるクリーアズマネザサ群落のあることはすでに述べてが、この群落のモミ林要素率が50%と比較的高い値をもつことは注意をひくことであり、モミ・イヌブナ群落へのつながりを思わせる。

2. 図1-3には同時に遷移率を示した。これは仙台地域の丘陵地の気候的極相林の代表とされている青葉山のモミーイヌブナ林の遷移度を100として経ヶ峯の植物群落の遷移率を示したものである。この図からも、経ヶ峯においては、2つの草本群落とクリーアズマネザサ群落を除き、スギ林とみられる群落はモミ林要素の低い値をもちらながらスギークサギ群落から遷移を進めているありさまをとらえることができる。

3. さて、経ヶ峯の植生は植栽によるスギに由来して、相観的にはスギ林をなしていることはすでに述べたが、よく管理された造林によるスギ林とはいちじるしくことなっている。仙台地域においては生育のよいスギ植林地では高木層はスギ以外の植物はみとめられない。亞高木層は欠如するが、わずかにアワブキ、ヤマグワ、ムラサキシキブを見るにすぎない。

低木層は比較的に発達し、アズマネザサ、ヤマグワ、ニワトコ、モミジイチゴ、ウワミズサクラ、アオキ、ガマズミなどが生育し、草木層にはヤブコウジ、ツルマサキ、キヅタ、ミツバ

アケビ、ツタウルシ、ミゾシダ、イヌガンソク、オオバジャノヒゲ、アマチャヅルなどがみられる。当然ながら自然林にくらべその種類は少ない。

これらスギ植林地の構成要素と経ヶ峯の植物群落とを比較すると、スギ群落についていえば、スギークサギ群落の要素率がもっとも高く、ついでスギーシロダモーアズマザサ群落となり、スギーシロダモ群落、スギーシロダモーオオキ群落からスギーシロダモーオカメザサと低くなっている。しかし、概していえばモミ林要素率にくらべて高い傾向を示していることは、この経ヶ峯の植物群落の形成について示唆するところが多いように思われる。

4.さて、経ヶ峯の植生においてはシロダモの存在が大きな役割をもっていることについてはしばしば述べた。このシロダモの生育について、スギーシロダモ群落、ヒノキーシロダモ群

表 I-5 スギークサギ群落(A)の
樹木の樹高と胸高直径

	種名	樹高(cm)	胸高直径(cm)
1	カブレミノ	95	-
2	シロダモ	31	-
3	スギ	1600	17.1
4	シロダモ	28	-
5	スギ	1600	17.6
6	スギ	1600	26.2
7	シロダモ	18	-
8	シロダモ	30	-
9	シロダモ	16	-
10	シロダモ	35	-
11	シロダモ	20	-
12	シロダモ	37	-
13	シロダモ	38	-
14	シロダモ	27	-
15	シロダモ	26	-
16	スギ	1600	24.7
17	スギ	1200	13.8
18	シロダモ	75	-
19	シロダモ	35	-
20	シロタモ	15	-
21	スギ	1200	18.0
22	シロダモ	11	-
23	シロダモ	26	-
24	シロダモ	11	-
25	シロダモ	17	-
26	シロダモ	29	-
27	シロダモ	63	-
28	シロダモ	17	-
29	シロダモ	60	-
30	シロタモ	42	-

表 I-6 ヒノキーシロダモ群落(B)の
樹木の樹高と胸高直径

	種名	樹高(m)	胸高直径(cm)
1	シロダモ	5.0	4.1
2	ウメモドキ	2.0	0.6
3	ウメモドキ	3.0	2.3
4	シロダモ	2.0	1.5
5	シロダモ	4.0	1.7
6	シロダモ	4.0	3.0
7	シロダモ	4.5	3.6
8	シラカシ	2.5	1.8
9	シロダモ	2.0	0.8
10	シロダモ	2.0	0.9
11	シロダモ	1.6	0.6
12	ヤブツバキ	0.45	-
13	シロダモ	5.0	2.7
14	シロダモ	4.5	1.5
15	シロダモ	4.0	2.5
16	シロダモ	4.0	3.0
17	シロダモ	2.0	1.0
18	シロダモ	5.0	4.4
19	シロダモ	1.8	0.8
20	シロダモ	5.0	2.9; 2.6
21	シロダモ	5.0	1.9
22	シロダモ	6.0	5.2
23	シロダモ	6.0	5.3
24	シロダモ(枯)	0.23	-
25	シロダモ	2.3	1.0
26	シロダモ	0.94	-
27	シロダモ	4.0	2.0
28	シロダモ	0.85	-
29	シロダモ	1.9	0.8
30	シロダモ	0.1	-
31	シロダモ	0.22	-
32	シロダモ	5.0	3.5
33	シロダモ	0.32	-
34	ヤブツバキ	3.0	1.4
35	シロダモ	1.1	-
36	シロダモ	0.55	-
37	シロダモ	0.63	-
38	シロダモ	5.0	3.0

落、スギーシロダモーオキ群落、スギーシロダモ群落について、その個体数、樹高、胸高直径について調査を行った。表1-5、1-6、1-7、1-8にそれを示した。

スギークサギ群落においてはシロダモは1mを超すものはみとめられなかった。これはその林相からも推測できるように下刈りが行われたことが考えられる。上に述べたモミ林要素率の高いことはこれと関連のあるものと思われる。

ヒノキーシロダモ群落ではシロダモは樹高6mをこすまでのものが生育し、スギーシロダモーオキ群落は7mをこすようになり、12mに達するものがわずかにある。更にスギーシロダモ群落においては16mをこす高木までのシロダモを生育させている。このことは、上に述べた順序に遷移が進んできたことを推測させることであって、すでに遷移度について述べたことと同じ傾向にあるように思われる。

表1-7 スギーシロダモーオキ群落(C)の
樹木の樹高と胸高直径

種名	樹高(m)	胸高直径(cm)
1 シロダモ	5	3.0
2 シロダモ	6	4.5
3 シロダモ	6	4.5
4 シロダモ(枯)	2	1.0
5 シロダモ	2	1.2
6 シロダモ	5	2.6
7 シロダモ	7	4.4
8 シロダモ	5	3.5
9 スギ	25	44.7
10 シロダモ	4	1.9
11 シロダモ	4	3.4
12 シロダモ	3	1.8
13 シロダモ	2.5	1.5
14 シロダモ	1.3	—
15 シロダモ	2	1.1
16 シロダモ	4	2.4
17 スギ	28	63.2
18 シロダモ	4	2.3
19 シロダモ	4	2.7
20 シロダモ	1.1	—
21 シロダモ	1.6	0.5
22 シロダモ	1.6	0.6
23 カラスザンショウ	9	6.5
24 ガマズミ	3	2.0
25 シロダモ	2	0.9
26 シロダモ	6	4.6
27 スギ	29	77.4
28 シロダモ	12	12.1
29 シロダモ	2	1.2
30 シロダモ	2	1.1
31 シロダモ	4	4.2
32 サンショウ	3	2.2
33 シロダモ	3	2.2
34 シロダモ	3	1.9
35 シラカシ	6	3.6
36 シロダモ	6	3.5
37 ムラサキシキブ	4	2.5
38 シロダモ	4	4.0
39 シロダモ	3	1.7

表1-8 スギーシロダモ群落(D)の
樹木の樹高と胸高直径

種名	樹高(m)	胸高直径(cm)
1 シラカシ	1.5	0.4
2 シロダモ	13	16.6
3 スギ	30	45.4
4 ベニイタヤ	5	5.0
5 シロダモ	3	2.2
6 シロダモ	16	17.5
7 シロダモ	13	16.2
8 シロダモ	4	2.4
9 シロダモ	3	2.1
10 アカガシ	14	11.1
11 シロダモ	2.5	1.6
12 スギ	30	40.5
13 シロダモ	1.7	0.6
14 シロダモ	3	2.3
15 シロダモ(枯)	1.5	0.4
16 シロダモ	7	11.5
17 シロダモ	15	12.3
18 コウゾ	8	4.9
19 コウゾ	5	4.7
20 シラカシ	2	1.4
21 ヤブムクサキ	3	1.7
22 スギ	30	59.9
23 シロダモ	10	10.7
24 ヤブツバキ	3	1.5
25 シロダモ	5	3.8
26 シロダモ	3.5	3.2
27 シロダモ	3	1.8
28 シロダモ	2	0.9
29 シロダモ	16	26.8
30 シロダモ	2.5	0.9
31 シロダモ	1.2	—

第2部 経ヶ峯の動物

経ヶ峯における動物については半として鳥類と昆虫類について調査を行った。

哺乳類についての調査は充分には行われなかつたが、ムササビとリスについての観察結果を述べるに止めた。

第1章 経ヶ峯の哺乳類

経ヶ峯は広瀬川に面する崖を除いては背後地が、おおむね住居地域になっており、自然環境としては孤立した状況にあるため、大型哺乳類はもちろん、中型の哺乳類にとってもその生活環境としては好適であるとはいえない。

しかし、ムササビやリスが現在でも生息していることが認められることは注目すべきことであろう。今回はネズミ類等の調査は行われなかつた。

1-1 ムササビ *Petaurista leucogenys*

1. 経ヶ峯における哺乳類を代表するものとしてムササビを挙げることができる。

ムササビは齧歯目リス科に属するものであるが、前肢と後肢の間の体側に特徴的な飛膜が発達し、これをひろげて滑空する行動のあることでよく知られている。四肢の指にある鉤爪を用いて木の幹をかけ上り、他の木に滑空するという特異的な活動をする。滑空距離は時に百数十メートルに及ぶといわれる。

夜行性のもので地方によっては「ばんどり」ともいわれる。

日本では本州、四国、九州に分布し、東北地方のものは亜種として取扱われ、ニッコウムササビと名づけられている。

2. 経ヶ峯におけるムササビについての調査は必ずしも充分ではない。附近の民家の庭で日撃されたことがあり、また、スギの幹にムササビ特有の爪跡が観察されている。なお、瑞鳳殿前広場のスギーシロダモ群落および北西部のスギーシロダモ・アズマザサ群落地域でムササビが利用したと思われる樹洞を少くとも3ヶ認めることができた(図2-1)。

最近、経ヶ峯で斃死個体3ヶが発見されている。伊達篤郎氏によれば、1978年11月には大型の成獣の斃死があり、剥製として保存されたという。この剥製は現在、瑞鳳殿管理事務所に保

管されている。

3. ムササビは年に1度、2~3仔を産むといわれるが、東北大学青葉山植物園でもその生息が確認されていることからみて、従前は青葉山から八木山、経ヶ峯に亘る地帯は連続した自然環境として、ムササビ等の生息にはきわめて好適な環境であったことが考えられる。

近年に至って、この広大な自然環境は開発の進むに従って寸断され、孤立化がおこってきた。経ヶ峯もその一つであり、ムササビの生息を維持していくものかどうかには危険性も考えられる。最近発見された鳴死個体に幼鳥のみられたことは生息環境としての不適さを示すものであるかもしれない。

市街地に近い経ヶ峯のような環境に現在でもムササビの生息がみとめられてることは極めて

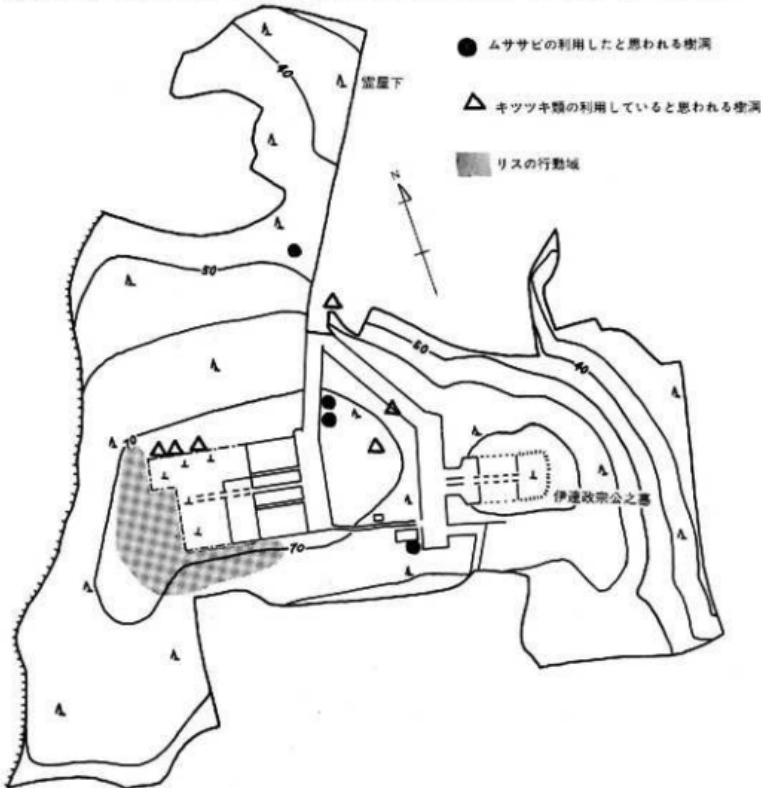


図2-1 ムササビの利用した樹洞及びリスの行動域
(キツツキの利用した樹洞も示した)

重なものといえよう。しかし、ここムササビについての調査は不充分であるので、今後その生態的な調査が行われ、生息環境の保全維持をはかることが必要であろう。

1-2 リス *Sciurus lis*

ムササビと同じヒリス科のニホンリスもこの経ヶ峯地域に生息している。

ニホンリスもムササビと同様、古くは八木山、青葉山にかけて広く生息していたものと考えられる。

経ヶ峯においては2代・3代の廻所周辺の樹上でしばしば観察することができる。この地域から南西地域にかけ行動するのを追跡することができる(図2-1)。

ムササビにおけると同様にこれら哺乳類の生息に好適な環境を維持していくような方策がたてられることが望ましい。

第2章 経ヶ峯の鳥類

経ヶ峯地域の鳥類について、主として1977年5月から1978年4月までに調査した結果にもとづいて述べることとする。

航生調査の場合には経ヶ峯の広瀬川に面する崖面は調査対象たり得なかったが、鳥類の場合には営巣等に関連して重要な場所をなしているので、この地域を虚空藏渕とし、他を経ヶ峯とし、2つの環境に区分して調査を行った。

調査方法およびコース

経ヶ峯地域の調査には、コース(図3-1)を設定し、毎時2km以内で徒歩によるロードサイド・カウントを行った。

虚空藏渕の崖面については、広瀬川左岸の花壇自動車学校と虚空藏渕崖上部斜面から双眼鏡および望遠鏡によって調査した。使用器具は6×30、25×60の双眼鏡で望遠鏡を併用し、地域住民からも一部聞き込みによる調査も行った。

2-1 虚空藏渕の鳥

虚空藏渕に面する崖面を利用する鳥類にはチョウケンボウ、ヤマセミ、カワセミ、キセキレイ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ムクドリ、アマツバメ、イワツバメ、ツバメ等が挙げられる。

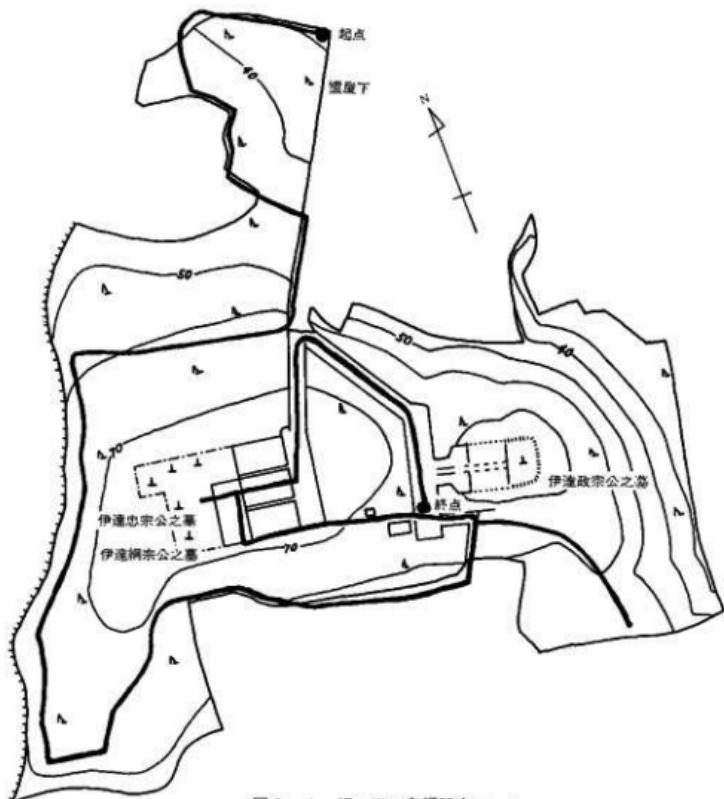


図3-1 経ヶ峯の鳥類調査コース

1. アマツバメとツバメ、イワツバメは崖面中段から崖の上空約20m位の空間において盛んに飛翔し、採餌をしているのが見られた(1977年5月18日)。この時観察されたのは、アマツバメ30羽内外とイワツバメ20羽内外であった。

これまでの観察では仙台市内におけるアマツバメは、春秋の移動期に見ることが多く、その数も多くはない。

当地域についても春期に時に確認されてはいるが、いずれも一時的なもので、この地域を生活の場としているものではない。30羽に達するアマツバメが観察されたことは珍らしいことで、これはたまたま採餌の条件がよかつたためにおこったと考えられる。

もともと、アマツバメやツバメ類は空中採餌を行うもので風の状態と深い関係があるものと

思われる。この崖面に対して北あるいは北西の風が吹きこむと風は上昇するが、この吹きあげがあるときに崖の基部を流れる広瀬川に、多数生息しているカゲロウ類、カワゲラ類、ドビケラ類の羽化があると、それらの成虫は高空高く飛ぶのが観察される。上にのべた現象はこのような状態がおこったためにあらわれたものと思われる。

5月22、23、28、29日に調査を行った時には、崖面は無風状態であり、アマツバメは認められず、イワツバメと少數のツバメが崖の上空の杉木立上を旋回飛翔しながら採餌しているのが観察されたにとどまっている。以上のことから、この地域でのアマツバメの採餌行動は、カワゲラやトビケラなどの羽化と風向によっておこる一時的な現象であると思われる。

2.これまでに崖面を営巣の場として利用した鳥類には、チョウゲンボウ、ヤマセミ、カワセミ、キセキレイ、ハシボソガラス、ムクドリ等が挙げられる。調査期間中にはムクドリおよびハシボソガラスの営巣が確認されたが、他の鳥類については確認されなかった。

過去において、崖面で営巣した鳥類の内、ハシボソガラスを除いては、自から穴を掘って営巣するヤマセミ、カワセミ、これらの穴のうち放置されたものや、自然にできた穴や亀裂・窪地を利用している鳥類としてはムクドリ、キセキレイ、チョウゲンボウ等がある。

今調査中にムクドリは、ほとんどの穴や亀裂を用いて営巣しており、その数は40巣に達した(図3-2)。このように自然状態において集団営巣することは珍らしい。

1970年頃には、ムクドリを含めた他の種類の営巣も認められたが、1977年以降においてはムクドリだけの営巣がみられるようになった。

一般にムクドリの繁殖期は4月から6月中旬頃までである。当地域でムクドリが孵化すると、周辺に生息しているハシブトガラスが雛をねらって飛来し、一時的にそれを餌として襲うのが観察された。

例えば、5月28日には3羽のハシブトガラスが巣穴を掘ってムクドリの雛を食べていた。

この地域ではハシブトガラスが、他の鳥類に与える影響は大きいものと思われる。

毎年崖中段の自然の穴に営巣していたチョウゲンボウは、1961年4月に竜ノ口渓谷の古い巣も含めて8~9巣が確認(小笠原による調査)されていたが、著者は同年6月10日、この崖に3つの巣を確認している。その後減少し、1970年頃には2巣となつた。また、1976年には1巣だけになり、1977年3月12日には崖面に突き出た松の枝で交尾する個体が観察(札沢の観察)されている。しかし、1977年にはここでの繁殖はみられなかつたが、竜ノ口渓谷では営巣したものと思われる。

しかし、ここでの営巣地は完全に放棄されたものではないことは、営巣期の3月頃になると早朝に営巣地を求めて飛来するのが観察されることからも推測できるが、ハシブトガラスの猛製

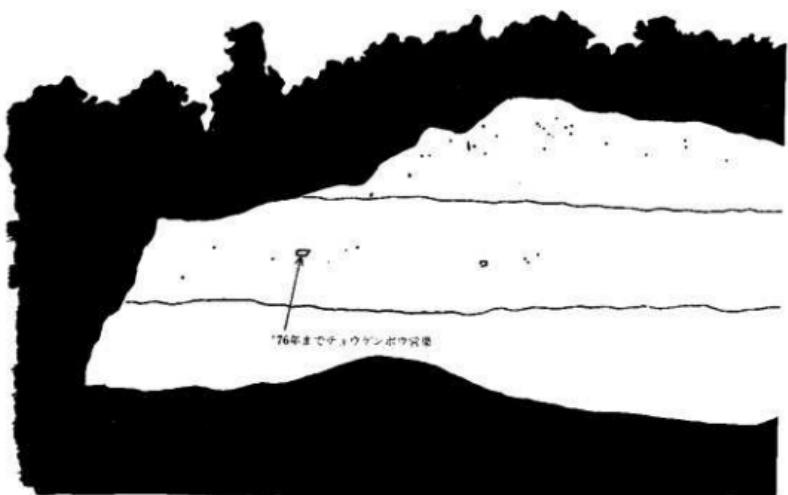


図3-2 虚空藏湖崖面における鳥類巣穴の分布図

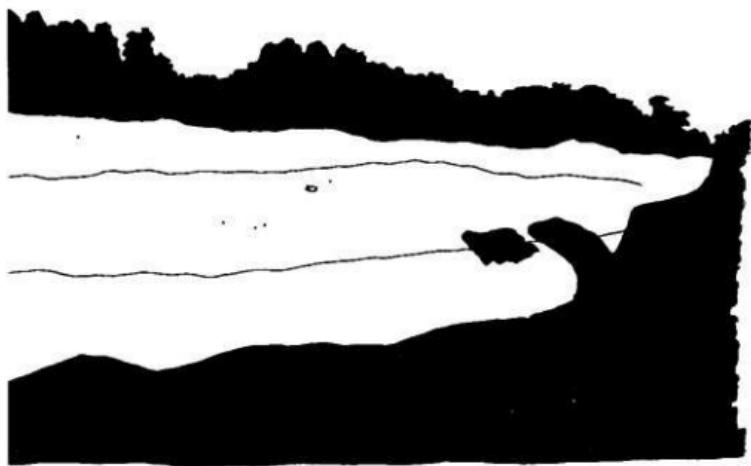
な攻撃に会い(1978年3月5日)追い返されている。チョウゲンボウも前年まで使用した巣穴に執着するためか、容易に飛び去ることなく、数回にわたって巣穴付近に着地するが、そのたびにハシブトガラスの攻撃に会っていた。

ハシブトガラスは絆ヶ峯には周年生息し、追廻住宅無番地や仙台市の苗圃場、竜ノ口渓谷入口付近を縄としている。

ハシブトガラスやハシボソガラスが多数生息していることと、1965年10月に市営八木山動物公園が開設されたこととは関連するものがあるようと思われる。カラス類とくにハシブトガラスが動物公園で動物に餌を求めて集まり、その繁殖力を高め、個体数を増したことが考えられる。

このように、カラス類は、口中動物公園を中心に広く採餌しているものと思われ、日没後毎日数百羽のカラスが動物公園の松林から絆ヶ峯方向に餌を求めて群飛するのが認められる。したがって虚空藏湖でのカラスは、休息の場として利用しているものと思われるが、ムクドリなどの繁殖期には一時的にそこを餌場とするようになったのではないかと考えられる。

以上述べたように、カラスが他の鳥に与える影響は大きく、ヤマセミ、カワセミ、セキレイ類の繁殖をも妨げているものと考えられる。



2-2 経ヶ峯の鳥類

経ヶ峯地域の鳥類は既存の資料等を含めると11目27科59種（表3-1）となる。虚空藏洞崖面を主たる繁殖の場としている鳥は、チョウゲンボウ、ヤマセミ、カワセミ、セキレイ類にすぎないので経ヶ峯地域の鳥類が調査全体に占める割合は高い。

経ヶ峯の鳥類中、最も多いのは、スズメ目で、全体の66%を占めており（図3-4）、次にキツツキ目、ホトトギス目となっている。これらを合計すると72%を占めることになり、森林性の鳥類が大部分を占めるが、これは経ヶ峯の植性からみて当然のことといえる。

この森林性の鳥類の中ではヒタキ科のものが、18.4%ともっとも多く、シジュウカラ科、アトリ科、カラス科はそれぞれ6.8%である。

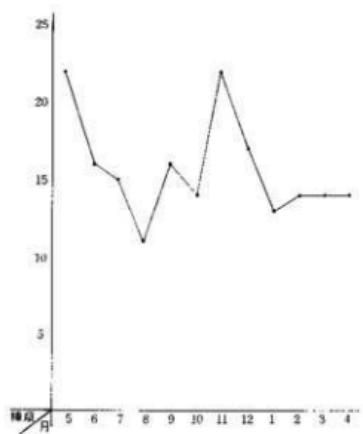


図3-3 鳥類の月別出現種類数

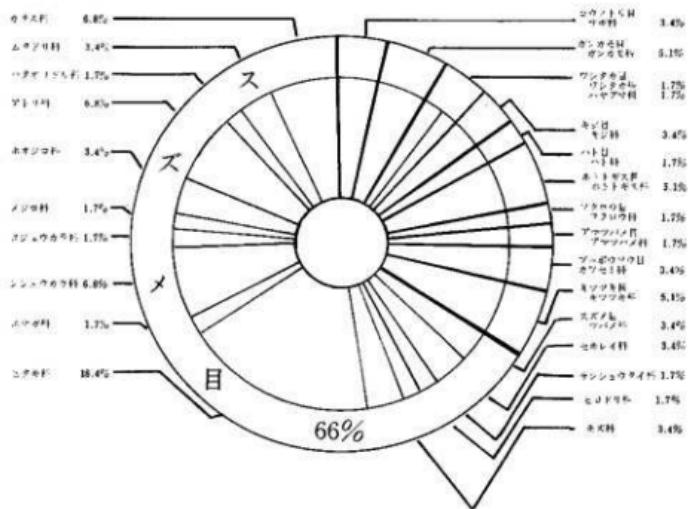


図3-4 経ヶ峯産鳥類分類図

表3-1 経ヶ峯産鳥類目録

	サギ科 Ardeidae		
1	ゴイサギ Nycticorax nycticorax	11	カッコウ Cuculus canorus
2	ササゴイ Butorides striatus	12	ツツドリ Cuculus saturatus
	ガシカモ科 Anatidae	13	ホトトギス Cuculus poliocephalus
3	マガモ Anas platyrhynchos		フクロウ科 Strigidae
4	カルガモ Anas poecilorhyncha	14	アオバスク Ninox scutulata
5	コガモ Anas crecca		アマツバメ科 Apodidae
	ワシタカ科 Accipitridae	15	アマツバメ Apus pacificus
6	トビ Milvus migrans		カラセミ科 Alcedinidae
	ハヤブサ科 Falconidae	16	ヤマセミ Ceryle lugubris
7	チョウエンボウ Falco tinnunculus	17	カワセミ Alcedo atthis
	キジ科 Phasianidae		キツツキ科 Picidae
8	コジケイ Bambusicola thoracica	18	アオゲラ picus awokere
9	キジ Phasianus colchicus	19	アカゲラ Dendrocopos major
	ハト科 Columbidae	20	コゲラ Dendrocopos kizuki
10	キジバト Streptopelia orientalis		ツバメ科 Hirundinidae
	ホトトギス科 Cuculidae	21	ツバメ Hirundo rustica
		22	イワツバメ Delichon urbica

	セキレイ科	Motaciliidae		ホオシロ科	Emberizidae
23	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	47	カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>
	サンショウクイ科	Catmephagidae	48	アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>
24	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>		アトリ科	Fringillidae
	ヒヨドリ科	Pycnonotidae	49	カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>
25	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amurensis</i>	50	マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>
	モズ科	Laniidae	51	ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>
26	チゴモズ	<i>Lanius tigrinus</i>	52	シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>
27	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>		ハタオリドリ科	Ploceidae
	ミソサザイ科	Troglodytidae	53	スズメ	<i>Passer montanus</i>
28	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>		ムクドリ科	Sturnidae
	ヒタキ科	Muscicapidae	54	コムクドリ	<i>Sturnus philippensis</i>
	ツグミ亜科	Turdinac	55	ムクドリ	<i>Sturnus cineraceus</i>
29	ショウビタキ	<i>Phoenicurus auoreus</i>		カラス科	Corvidae
30	トラツグミ	<i>Turdus dauma</i>	56	カケス	<i>Garrulus glandarius</i>
31	クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>	57	オナガ	<i>Cyanopica cyana</i>
32	アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	58	ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>
33	ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	59	ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>
	ウグイス亜科	Sylviinae			
34	ヤブサメ	<i>Cettha squameiceps</i>			
35	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>			
36	エゾムシクイ	<i>Phylloscopus tenellipes</i>			
37	センダイムシクイ	<i>Phylloscopus occipitalis</i>			
38	キクイタダキ	<i>Regulus regulus</i>			
	カササギヒタキ亜科	Monarchinae			
39	サンコウチヨウ	Terpsiphone atrocaudata			
	エナガ科	Aegithalidae			
40	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>			
	シジュウカラ科	Paridae			
41	コガラ	<i>Parus montanus</i>			
42	ヒガラ	<i>Parus ater</i>			
43	ヤマガラ	<i>Parus varius</i>			
44	シジュウカラ	<i>Parus major</i>			
	ゴジュウカラ科	Sittidae			
45	ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>			
	メジロ科	Zosteropidae			
46	メジロ	<i>Zosterops japonica</i>			

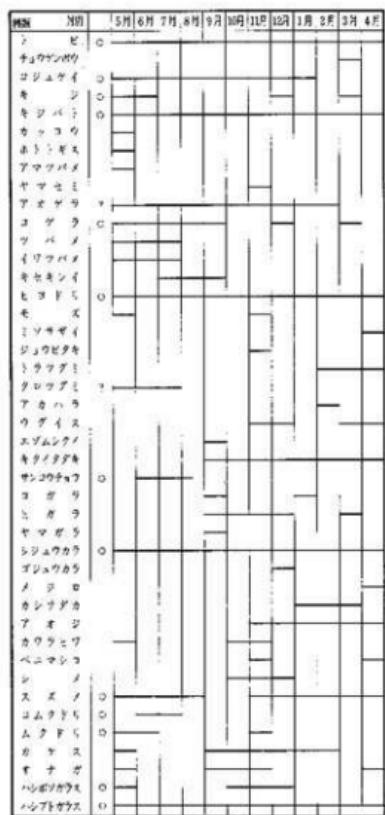


図3-5 鳥類の月別生息状況
(○印繁殖)

1. 周年を通しての出現種類の季節変化については、図3-3に示す通り、5月と11月に最も多く、最も少ない月は8月であった。

春、秋に種類が多くなるのは渡りや季節移動の途中に一時的にこの地域に出現することにあるのであって、通過型の種類によるものである。夏に少いのは、当地域内やその周辺で繁殖する種類がたとえばキジバト、ヒヨドリ、シジュウカラなどのように少ない種類に限られているからである。

周年を通しての月平均出現種類数は15種であって、全出現種類の25%にすぎない。

このように出現種数が少いのは、相観的にスギ林であるという環境によるのであろう。

2. 図3-5に季節的な鳥相の変化を、調査期間中に確認した43種について示した。

周年を通して出現している種、即ち留鳥はトビ、キジバト、ヒヨドリ、シジュウカラ、ハシブトガラス、コジュケイ、アオゲラ、スズメの8種である。また、これに準ずるものとしてコゲラ、カワラヒワ、ムクドリ、カケス、オナガ、ハシボソガラスがある。

メ、クロツグミ、サンコウチョウ、コムクドリの6種は夏鳥といえる。しかし、キジは雌が孵化すると他所に移動するため、7月から12月ごろまでは観察されなくなる。

秋から早春にかけて確認されたウグイス、キクイタダキ、ヒガラ、カシラダカ、アオジ、シメの6種は冬鳥といえる。その他の種類の多くは一時的出現のものであり、渡りや移動の途中に観察されるものであると思われる。

チョウケンボウは虚空藏洞の巣で繁殖している時でも、3月から8月頃までに観察されるが、それ以外の季節にはあまり観察されなくなるのは繁殖期と非繁殖期の生活の場をそれぞれに異にするためである。

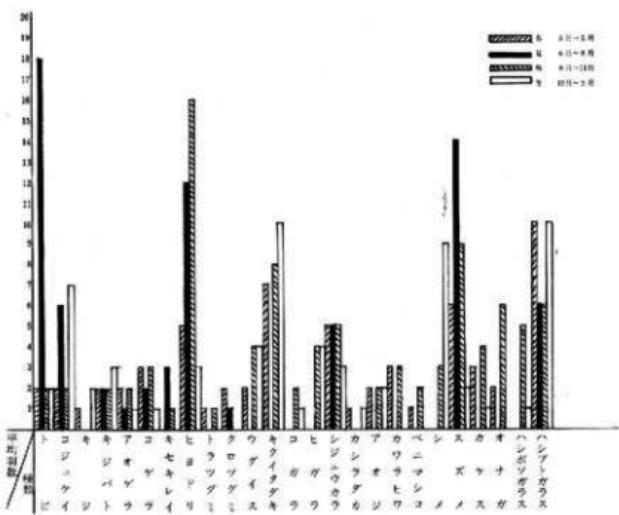


図3-6 季節別平均出現個体と種数

4. 季節別に見た個体数変化について、調査期間中に2季節以上で平均的に出現した25種について図3-6に示した。これによると、夏に個体数が最も多く増えるものにトビ、ヒヨドリ、スズメがある。これは繁殖によって若鳥が増えたためと思われる。

秋にヒヨドリがふえるのはシロダモ、アオキ、イヌツケ、サンショウウ、クサギなどの漿果を求めて集まつてくるためと思われる。

冬に増える種類として、コジュケイ、キクイタダキ、シメ、ハシブトガラスがあげられるが、これらは越冬の場としてこの地域に飛来するのであろう。

2-3 考察

1. これまでの調査によって蘆空藏湖の鳥類について明らかとなったことは、巣穴を自から掘って営巣するヤマセミ、カワセミは近年は営巣していないように思われること、また、自然の穴を利用して営業していたチョウゲンボウについても1977年には営巣しなかったと思われる事、注目すべきことは、それにいかがわるようにして、ムクドリが40巣にも達する集団をなして営巣したことである。

ヤマセミやカワセミは巣穴を決定するまでに複数の穴を掘る習性を持っているが、これらの中で不要になった穴にムクドリが営巣して集団営巣の現象をおこしたものと思われる。

ヤマセミやカワセミが自から掘った巣穴が多数化したことにより、ムクドリの集団営巣となり、ヤマセミ、カワセミはムクドリの営巣圧によって追い出されたことになる。

ムクドリは集団営巣によってハシブトガラスの一時的な餌場となり、結果的にはムクドリの営巣も不能となった。ハシブトガラスの侵入によりチョウゲンボウの営巣もできなくなったことは鳥類にみられる連鎖的な相互関係として注意をひくことである。

1978年6月12日の宮城県沖地震により、崖面がかなりに崩れ落ち、ムクドリが営巣していた巣穴等は、多数が消失した。それによって、1979年の繁殖期にはムクドリの営巣が殆んど認められなかった。しかし、チョウゲンボウは一巣を営巣し、繁殖に成功し幼鳥が巣立した（1979年6月18日巣立った幼鳥2羽を確認）。

以上述べてきたように、チョウゲンボウやヤマセミ、カワセミの繁殖に対してハシブトガラス、ムクドリの影響が大きいと思われるが、今後その動向について継続観察を要するものと考える。

2. 経ヶ峯の鳥については、この地域を生活の場として生息している種類に、シジュウカラ、キジバト、アオゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、スズメ、ハシブトガラスなどが挙げられる。これらの鳥は経ヶ峯地域の留鳥といえる。

キジは冬期から繁殖期までを生活の場としているが、雛が孵化すると他所に移動して行くものと思われる。

アオゲラも周年観察されたが、繁殖については明らかでない。コゲラについては偶運びする個体を観察した。ウグイスは古くは生息繁殖していたと言われていたが、今調査において、ウグイスの繁殖期間中は確認できなかった。11月になって初めて確認したが、その後4月中旬まで観察されており、3月上旬には初音を聞くことであった。ウグイスが多く観察された場所がスキ林地域ではなく、虚空藏洞の崖付近や南側の人家付近であることから、経ヶ峰地域の環境は繁殖環境としては適さないものと思われる。

以上、経ヶ峯に生息する鳥類は、繁殖のため生息する13種（表2-2）と、春秋の移動期に一時的に利用するもの、あるいは越冬期の採餌場等として利用しているものとがあることが明らかとなった。

個体数、種類数についても豊かな鳥相とはいえないが、周年を通して見た場合でもそれぞれの鳥類は一時的、あるいは短期間の生息場として利用しているのに止まっている。今後経ヶ峯の自然環境に著しい変化が起こらない限り、上に述べた生息状況については特別な変化は起こらないものと考える。

3. すでに植物相において述べたように、経ヶ峯の植生は相観的にはスギ林といえるが、一部の植物群落を除いては、亜高木層以下を構成する植物についていえば、動物散布器官型に属する植物が多いことが指摘された。

これは、果実や種子が動物の食餌として利用されたり、動物体に付着して散布されたりする植物の多いことを示している。食餌として利用されたものは、その種子は鳥類の糞に混入して散布されることによく知られている。

以上のことからみると、経ヶ峯の植物群落の形成には鳥類等の影響が大きな役割をもつていることが考えられる。

経ヶ峯の植物で、動物散布型 (D_a) のものとして、漿果をもつものとして、アオキ、シロダモ、ヤブコウジ、ミズキ、オオバジャノヒゲ、ニワトコ、ウワミズザクラ、ミツバアケビ、アマチャヅル、アワブキ、イヌツゲ、ノブドウ、ジャノヒゲ、キヅタ、コウゾ、タラノキ、ヨウシュヤマブポウ、モミジイチゴ、ヤブムラサキ、ノイバラ、ヘクソカズラ、タカノツメ、ヤツデ、サワフタギ、ツルマサキ、ツタ、クサギ、アカネ、ツルウメモドキ、サルナシ、ネズミモチ、ウド、ヒメヘビイチゴ、コシアブラ、アオツヅラフジ、スイカズラ、ヒヨドリショウウゴ、ミヤマニガウリ、カキノキ、ウメモドキ、ヒサカキ、オモト、アケビ、ミヤマウグイスカグラ、アオハダ、ミヤマガマスミ、マルバカクミノスノキ、カヤ、ヘビイチゴ、ナワシロイチゴなどを挙げることができる。

これら漿果をもつ植物は現状においてはその漿果の熟期にこれらをこのむ鳥類を誘うと考えられると同時に、このような群落の形成に鳥類の影響の大きかったことを物語るものといえよう。

これら漿果をもつ植物のうち、経ヶ峯の植物群落に多く出現するものをみると、草本群落を除いた8つの群落の半数以上にみられるものは7種を数えることができる。

当然のことながらシロダモ、アオキはすべてに出現し、ヤブコウジはシラカシーシロダモ群落をのぞく7群落に、ミズキはクリーアズマネザサ群落、スギクサギ群落以外にみられる。オオバジャノヒゲとムラサキシキブは5つの群落に、ウワミズザクラは4つの群落で生育している。これらはいずれも鳥類がこのんでついばむことはよく知られており、鳥類の採餌行動が経ヶ峯植物群落の形成に大きな役割をもっていることを示している。

なお、経ヶ峯において秋から冬にかけてみられる鳥としてはすでに述べたように、ヒヨドリ、コジュケイ、キクイタダキ、シジュウカラ、オナガなどを挙げることができる。

表3-2には別項木村博士の植物目録にしたがい、経ヶ峯に出現する鳥が採餌すると思われる植物名を列挙した。

鳥名	植物名
コジュケイ	アキノウナギツカミ、アシボジ、アカマツ、アカガレ、アラカレ、アワブキ、アオノツヅラフジ、イイギリ、イノコヅチ、ウワズミサクラ、エノキ、エゴノキ、オオイヌクデ、オニドコロ、カキ、ガマズミ、クロマツ、コナラ、レラカシ、スズメノヒエ、スギ、スミン、ツユクサ、ヌルデ、ノイバラ、ノブドウ、ハナタデ、ヒサカキ、ヘクソカズラ、ホオノキ、マサキ、ミミナガサ、ミズナラ、ミズキ、ミョウガ、ムラサキシキブ、メドハギ、ヤブコウジ、ヤマウルシ、ヤマノイモ、ヤマユリ (41種)
キジ	アオツヅラフジ、アキノウナギツカミ、アカネ、アケビ、アカマツ、アワブキ、イヌシタ、イヌタデ、イヌツヅ、イチョウ、ウツギ、ウスバヤブマメ、エノクログサ、オオイヌクデ、オニバコ、オニツルウメモドキ、ガマズミ、カヤ、カヤツリグサ、クロマツ、ケヤキ、コクサギ、コナラ、サルトリイバラ、サワフタギ、サンショウ、レラカシ、シロダモ、シキミ、シユラン、ススキ、スズメノヒエ、スイカズラ、スミレ、スギ、スゼ、タチツボスミレ、タラノキ、チヂグサ、チドメグサ、ツタ、ツユクサ、ナツハゼ、ニシキギ、ニワトコ、ニガナ、ヌルデ、ノイバラ、ノブドウ、ハナタデ、ハコベ、ヒノキ、ヒサカキ、ヒイラギ、ヘクソカズラ、マサキ、ミヤマガマズミ、ミズキ、ミツバアケビ、ムラサキシキブ、メドハギ、モミ、ヤマウルシ、ヤマブドウ、ヤマユリ、ヤマノイモ、ヤブコウジ、ヤマツツジ、ヤブツバキ (71種)
キジバト	アカマツ、アカネ、アリブキ、アカメガシワ、イイギリ、ウスバヤブマメ、エノクログサ、エゴノキ、オニツルウメモドキ、ガマズミ、キクシ、クロマツ、クサキ、クズ、サンショウ、サルトリイバラ、シキミ、スミン、スズメノヒエ、タラノキ、ツユクサ、ニシキギ、ヌルデ、ネズミモチ、ノイバラ、ノブドウ、ヒサカキ、ヘクソカズラ、ミズヒキ、ミヅソバ、ミズキ、ムラサキシキブ、ヤツバキ、ヤマツバキ、ヤマウルシ (34種)
アオゲラ	アケビ、イチイ、ウメモドキ、ガスズミ、ノイバラ、ヒサカキ、ムラサキシキブ、ヤマウルシ (8種)
アカゲラ	アカマツ、ヌルデ、ノイバラ、ホオノキ、ヤマウルシ、ヤマブドウ (6種)
コゲラ	アケビ、ツタウルシ、ヌルデ、ミズキ、ヤマウルシ (5種)
ヒヨドリ	アオキ、アカマツ、アケビ、イイギリ、イヌツヅ、イチイ、ウメモドキ、ウド、エゴノキ、エノキ、オニツルウメモドキ、オモト、ガマズミ、カキ、キヅタ、クサギ、サンショウ、カラクヅル、サルトリイバラ、シロダモ、スイカズラ、ツメヨシノ、タラノキ、ツタ、ツユクサ、ニワトコ、ニシキギ、ヌルデ、ネズミモチ、ノブドウ、ハナイカダ、ヒサカキ、ヒヨドリジョウゴ、ヘクソカズラ、マサキ、ミズキ、ヤツチ、ヤマブドウ、ヤマグワ、ヨウシェヤマブドウ (39種)
モズ	クサギ、ツルマサキ (2種)
ジョウビタキ	アカメガシワ、アオツヅラフジ、ウメモドキ、オニツルウメモドキ、カラスザンショウ、クサギ、サンショウ、ニシキギ、ヌルデ、ヒサカキ、ヘクソカズラ、マサキ、ヤブコウジ、ヤマウルシ (14種)
トラツグミ	アオツヅラフジ、ノブドウ、ヒサカキ (3種)
クロツグミ	ノブドウ、ヒサカキ (2種)
アカハラ	イチイ、エノキ、ガマズミ、カキ、クサギ、ナツハゼ、ヌルデ、ネズミモチ、ノイバラ、ヒサカキ、ヘクソカズラ、マサキ、ミヤマガマズミ (13種)
ツグミ	アオキ、アオハダ、アカマツ、アオツヅラフジ、イイギリ、イヌツヅ、イチイ、ウメモドキ、ウツギ、ウスバヤブマメ、エノキ、オニフルウメモドキ、オオバクロモジ、ガマズミ、カキ、キヅタ、クサギ、コウライテンナンショウ、サルトリイバラ、タラノキ、ツルマサキ、ツリバナ、ナツハゼ、ニシキギ、ヌルデ、ネズミモチ、ノブドウ、ノイバラ、ハナタデ、ヒサカキ、ヘクソカズラ、マサキ、ミズキ、ミョウガ、ムラサキシキブ、ヤツチ、ヤマウルシ、ヤバガラン、ヤブコウジ、ユズリハ (40種)
ウグイス	カキ、ヒサカキ (2種)

表3-2 経ヶ峯の鳥類と餌となる植物

鳥名	植 物 名	
キクイクダギ	アカマツ、スギ、ヒノキ	(3種)
エナガ	カキ	(1種)
コガラ	アカマツ、オオバコ、クロマツ、ミゾソバ、ヤマウルシ	(5種)
ヒガラ	アカマツ、アカガシ、アラガシ、オニグルミ、コナラ、シラカシ	(6種)
ヤマガラ	アラガシ、アカガシ、アカマツ、イチイ、エゴノキ、オニグルミ、クロマツ、コナラ、シキミ、シラカシ、スギ、ヤブソバキ	(12種)
シジュウカラ	アカマツ、イイギリ、クサギ、クロマツ、フルマサキ、ミヤマガマズミ	(6種)
ゴジュウカラ	アカマツ、イチイ、クロマツ、コナラ	(4種)
メジロ	アベビ、イイギリ、ウスバヤブマメ、ウワズミザクラ、エノキ、オニツルウメモドキ、ガマズミ、カキ、サンショウウ、ニシキギ、ヌルデ、ノブドウ、ヒサカキ、ヘクソカズラ、ムラサキシキブ、ヤマウルシ	(16種)
カシラダカ	アシボソ、アカマツ、イヌタデ、エノコログサ、オオイヌタデ、カタバミ、カヤツリグサ、クロマツ、スズメノヒエ、ツユクサ、ニワトコ、メカキビ、ハナタデ、ウスバヤブマメ	(14種)
アオジ	アキノウナギツカミ、アシボソ、イヌタデ、エノコログサ、オオイヌタデ、カタバミ、シソ、スキ、タツチボスミル、ツユクサ、ハナタデ、ハコベ、ミゾソバ、ミズヒキ、メドハギ、モミ	(15種)
カワラヒワ	アキノウナギツカミ、アカマツ、イチイ、イヌタデ、エノコログサ、オオイヌタデ、オオバコ、カタバミ、コウライテンナンショウ、クロマツ、スズメノヒエ、ツユクサ、ニワトコ、ノイバラ、ハコベ、ヒサカキ、マサキ、ミズタデ、ミズヒキ、ムラサキシキブ、メドハギ、モミ	(22種)
マヒリ	アカマツ、クロマツ、スギ、スズメノヒエ、クラノキ、モミ	(6種)
ベニマシコ	イスタデ、オオイヌタデ、エノコログサ、カラノキ、ハナタデ、ポンクトタテ、ミゾソバ、ミズヒキ、ムラサキシキブ、モモギ	(10種)
シメ	イチイ、エノキ、エゴノキ、カラスサンショウ、コナラ	(5種)
スズメ	アシボソ、イヌタデ、エノコログサ、オオイヌタデ、オオバコ、オニツルウメモドキ、ガマズミ、スズメノヒエ、ニシキギ、ヒサカキ	(10種)
コムクドリ	アカメガシ、エノキ、カキ、サンショウ、サトザクラ、シグレザクラ、ソメイヨシノ、ツタ、ノイバラ、ノブドウ、ヘクソカズラ、ミズキ、モミ、ヤマブキ、ヤマウルシ、イヌツゲ	(16種)
ムクドリ	アカメガシ、イイギリ、エノキ、カキ、キカラスウリ、サトザクラ、シダレザクラ、ソメイヨシノ、ウツミズタグラ、スズメノヒエ、ナツハゼ、ヌルデ、ノイバラ、ノブドウ、ハナタデ、ヘグヘソカズラ、ホオノキ、ミズキ	(18種)
カケス	アカマツ、アベビ、アカガシ、アラカシ、イチイ、エノキ、ガマズミ、カタバミ、クリ、コナラ、サトザクラ、サルトリイバラ、シグレザクラ、シラカシ、ソメイヨシノ、クラノキ、ツタ、ツユクサ、ナツハゼ、ニワトコ、ヌルデ、ヒヨドリジョウゴ、ホオノキ、ミズキ、ミゾソバ、ヤブコウジ、ヤマウルシ	(27種)
オナガ	アカメガシ、アカガシ、アラカシ、イイギリ、イスツゲ、ウツミズタグラ、ウメモドキ、エノキ、オオバコ、ロモジ、オニツルウメモドキ、ガマズミ、カキ、サンショウ、ニワトコ、ヌルデ、ネズミモチ、ノブドウ、ノイバラ、ヒサカキ、ムラサキシキブ	(20種)
ハシボソガラス	イイギリ、イヌタデ、エゴノキ、ツタウルシ、ニシキギ、ヒサカキ、ミゾソバ、ヤマウルシ	(8種)
ハシゴトガラス	イイギリ、ツタ、ヌルデ、ヤマウルシ	(4種)

第3章 経ヶ峯の昆虫類

仙台市街地は東側は水田地域に接続するが、南から西をめぐり北に至る3方面は大年寺山八木山、経ヶ峯、青葉山、国見峠、台ノ原という一連の丘陵地によってめぐらされていた。この丘陵地は昆虫類が豊富に生息し、大都市としてはめずらしい程の昆虫相をもつものとされていた。

戦後、これらの地域は急速に開発され、住宅地等に変わってきたため、以前にみられた豊富な昆虫は急激にその姿を消してしまった。しかし、経ヶ峯は伊達家の廟所であることもあって、今日に至るまでその環境が維持されてきたことは極めて意義深いことと思われる。この一角に古い仙台の昆虫類を温存していることは貴重なものといえる。

一般的にいって、森林環境についていえばコナラ、クリ林など、いわゆる雜木林においては昆虫相は豊富である。

経ヶ峯の植生は、すでに述べたように、虚空蔵洞に面する崖の上に細長くクリ・アズマネザサ群落のある以外は、一部を除き相観的にはスキ林ということができる。このことと関連するが、経ヶ峯の昆虫相は豊富であるとはいえない。しかし、植生の特徴を反映した昆虫相をみることができる。

3-1 蝶類

主として1977~1978年にわたって調査した結果、つぎに示す6科25種の蝶類を確認することができた。

アバハチョウ科 Papilionidae 4種

1. アオスジアゲハ *Graphium sarpedon nipponum* Frühstorfer
2. アゲハ *Papilio xuthus* Linnaeus
3. クロアゲハ *Papilio protenor demetrius* Cramer
4. カラスアゲハ *Papilio bianor dehaanii* C. et R. Felder

シロチョウ科 Pieridae 3種

5. キチョウ *Eurema hecabe mandarina* De l'Orza
6. モンシロチョウ *Pieris rapae crucivora* Boisduval
7. スジグロシロチョウ *Pieris melete* Ménétriès

シジミチョウ科 Lycaenidae 5種

- | | |
|------------|---|
| 8. ゴイシジミ | Taraka hamada Druse |
| 9. ベニシジミ | Lycaena phlaeas daimio Seitz |
| 10. ヤマトシジミ | Zizeera maha argia Ménétriès |
| 11. ルリシジミ | Celastrina argiolus ladonides De L'Orza |
| 12. ツバメシジミ | Everes argiades hellotis Ménétriès |

タテハチョウ科 Nymphalidae 2種

- | | |
|--------------|-----------------------------------|
| 13. イチモンジチョウ | Ladoga camilla japonica Ménétriès |
| 14. コミスジ | Neptis acers intermedia W.B.Pryer |

ジャノメチョウ科 Satyridae 6種

- | | |
|----------------|--|
| 15. ヒメウラナミジャノメ | Ypthima argus Butler |
| 16. ヒカゲチョウ | Letha sicula Hewitson |
| 17. クロヒトデ | Letha diana Butler |
| 18. キマダラヒカゲ | Neope goschkevitschi Ménétriès |
| 19. ヒメジャノメ | Mycalesis gotama fulginia Fruhstorfer |
| 20. コジャノメ | Mycalesis francisca perdiccas Hewitson |

セセリチョウ科 Hesperiidae 5種

- | | |
|---------------|-------------------------------------|
| 21. グイミョウセセリ | Daimis tethys Ménétriès |
| 22. コチャバネセセリ | Thoressa varia Murray |
| 23. ヒメキマダラセセリ | Ochloides ochracea rikuchina Butler |
| 24. オオチャバネセセリ | Polytremis pelucida Murray |
| 25. イチモンヂセセリ | Parnara guttata Bremer et Grey |

これらの中、11回の調査回数を通して採集および目撃された個体数は、次のとおりである。

スジグロシロチョウ	25	16.5%
カラスアゲハ	16	10 %
クロヒカゲ	15	10 %
キマダラヒカゲ	11	7 %
コミスジ	9	6 %
ルリシジミ	8	5.5%
ヒカゲチョウ	8	5.5%
オオチャバネセセリ	8	5.5%
イチモンジセセリ	8	5.5%
アゲハ	6	4 %
ヒメウラナミジャノメ	6	4 %

以上述べたような蝶相がみとめられたが、全般的には仙台附近に普通にみられるものであって、珍奇種というものは認められない。しかし、一般的にスギ林という環境からすれば蝶相はかなりに豊富であるといえる。

これは、この経ヶ峯が相観的にはスギの植栽によって成立したスギ林といえるが、スギ造林地とはことなり、その群落形成には多分に自然的要素をもっていることによるのであろう。すなわち、すでに述べた植物群落の構造を反映しているものといえよう。

1. 経ヶ峯の蝶類の中で注目すべきものにアオスジアゲハを挙げることができる。

アオスジアゲハは暖地性のものであり、岩手県南部以北では発見されていない。従って宮城県における分布も比較的に限られている。

すなわち、沿岸部に生息し、内陸にはあまり分布していない。これは幼虫がクス科植物を食べるに關係している。松島湾沿岸地帯から牡鹿半島、三陸沿岸にはタブ、シロダモが分布していることはよく知られている。

仙台地域におけるアオスジアゲハの発生は主としてシロダモの生育に依存している。

すでに述べたように、経ヶ峯においては草本群落を除いては、すべての群落においてシロダモをその構成種としており、これとの関連でアオスジアゲハの発生がみとめられるといえる。

この地域の群落構成の上で、特にシロダモの生育について鳥類の生活が重要な關係をもっていることはすでに述べたが、そのことがアオスジアゲハの発生にかかわりをもつという連鎖關係のあることは注目すべきことであろう。

アオスジアゲハはこの経ヶ峯では特に8月中に他のアゲハと共にクサギの花に飛来しているのがよく観察される。

2. アオスジアゲハを含めて、アゲハチョウ科の蝶が4種認められており、宮城県内に分布する各科毎の蝶の種類数に対する比率が、つぎに述べるジャノメチョウ科について高いことは注目に値する。

これは、スギ林とはいえ、すでに述べたような自然林の要素をもち、サンショウ、カラスザンショウなどの食草となるものが生育していることに依存していると考えられる。

3. ジャノメチョウ科は6種の生息が認められたが、これらは仙台地方における普通種とみられるものである。この中でクロヒカゲはやや暗い林に多く、一般的には山地性とされている

ものである。

一般にこれらのジャノメチョウ科の蝶は相観的にはいわゆる雜木林に多いとされているものであるが、経ヶ峯において、アオスジアゲハと共に生息しているということは、経ヶ峯の植生の特徴に関連することで、蝶相として一つの特徴といえよう。

ジャノメチョウ科の幼虫は、ササ類やタケ類等を食草とするのが常であるが、経ヶ峯においては、すでに群落の特徴について述べたように低木層にアズマザサ、アズマネザサ、クマザサ、オカメザサなどが多くみられ、またススキ、チヂミザサ、スズメノカタビラ等多くのイネ科植物が生育していることの反映といえる。

セセリチョウ科では5種が確認されたが、ダイミョウセセリを除く4種はその食草からみて、ここで述べた経ヶ峯の植生と密接に関係しているとみるとみることができる。ダイミョウセセリはオニドコロなどヤマノイモ科の植物に依存している。

ササ類の群落の発達にともなう蝶については上に述べたもののほかに、ゴイシシジミがある。このゴイシシジミの幼虫はササの葉をたべる植食性のものではないか、ササ類、タケ類に寄生するアブラムシを捕食するので知られている。経ヶ峯にもこのゴイシシジミの発生がみられるのはこのためである。

4. 以上述べた蝶以外についてはシロチョウ科3種、シジミチョウ科4種、タテハチョウ科2種を数えるが、経ヶ峯における植物との関係を示せば次のようになる。

キチョウ一ハギ類等、スジシログロチョウータネツケバナ、イヌガラシ等十字花科植物、ベニシシジミ一ギシギシ等、ヤマトシジミーカタバミ等、ルリツツジーフジ・クズ・ミズキ等、ツバメシジミ一ハギ類・コマツナギ・ミヤコグサ・ツメクサ類、イチモンジチョウ・スイカヅラ類、コミスジークズ・フジ・ハギ類等。

5. 1940年代後半までは参道沿いに植栽されたモミジ類にミスジチョウの幼虫が確認されていたが、現在その姿を消してしまったのは惜しいことである。

3-2 甲虫類

経ヶ峯において、カブトムシやクワガタムシ類が確認できなかったことは、これらが雜木林に多いものであること、経ヶ峯が概観的にはスギ林であることと関連するのであろう。

経ヶ峯のような植生にあっては林床を生息環境とする甲虫類を調査することが重要であるが、1977年の6月から9月にかけて、落し穴トラップによる調査を行った。この調査では豚肉とマグロを誘引餌として用いた。

調査の結果、次の示すような鞘翅目昆虫が生息することが認められた。

オサムシ科 Carabidae

アオオサムシ *Aptomopterus insulicola* Chaudoir

マイマイカブリ *Damaster blaptoides* Kollar

ゴミムシ科 Harpalidae

アオゴミムシ *Chlaenius palipes* Gébler

オオアトボシゴミムシ *Chlaenius micans* Fabricius

クロツヤヒラタゴミムシ *Synuchus cyclodenus* Bates

コヒラタゴミムシ *Platynus protensus* Bates

オオヒラタゴミムシ *Platynus magnus* Bates

ナガゴミムシ Sp

ヒラタゴミムシ Sp

シデムシ科 Silphidae

クロシデムシ *Nicrophorus concolor* Kraatz

コクロシデムシ *Ptomascopus morio* Kraatz

ヨツボシモンシデムシ *Nicrophorus quadripunctatus* Kraatz

ベッコウヒラタシデムシ *Calosilpha brunnicollis* Kraatz

オオヒラタシデムシ *Eusilpha japonica* Motschulsky

ハネカクシ科 Staphylinidae

サビハネカクシ *Ontholestes gracilis* Sharp

アカバハネカクシ *Platydracus paganus* Sharp

カクコガラシハネカクシ *Pnthonthus rectangulus* Sharp

ナカアカヒゲブトハネカクシ *Aleochara curtula* Goeze

ウスアカヒゲブトハネカクシ *Aleochara puberula* Kling

(ほかに微小種が2~3種得られている。)

エンマムシ科 Histeridae

ヒメエンマムシ *Margarinotus weymanni* Wenzel

コエンマムシ *Margarinotus niponicus* L. Lewis

(エンマムシと思われる2個体が得られたが、前脛節の鋸歯が浅い。田島)

コガネムシ科 Scarabaeidae

クロマルエンマコガネ *Onthophagus ater* Waterhouse

コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* Waterhouse

ツヤエンマコガネ *Onthophagus nitidus* Waterhouse
フトカドエンマコガネ *Onthophagus fodiens* Waterhouse
カドマルエンマコガネ *Onthophagus lenti* Harold

コブスジコガネムシ科 *Trogidae*

Trox sp. (ヒメコブスジコガネ?)
(本科の生態にま未知の点が多い—田島)

1. これらの甲虫類は、主として地表で活動し、肉食性で捕食者の立場にある種と、動物質の腐質などを処理する腐食者の立場にあるものとからなっている。経ヶ峯の森の生態系ということからすれば、第二次消費者の地位にあるとみられるものと、分解者のグループの地位になるとみられるものとなる。しかし、調査結果からはこれらをかねるものもあることが示唆される。

2. アオオサムシは金属光沢をもった金緑色の、美しい甲虫である。マイマイカブリは細長い体をもつ印象的な甲虫で、マイマイ、すなわちカツムリ類を食べる所以この名がある。細長い体はこれに適応した体形ということができる。アオオサムシはこの地域に普通であるが、マイマイカブリは多くはない。

仙台地方各地の二次林でみられるヒメオサムシ、クロナガオサムシ、コクロナガオサムシが採集されなかったが、これはこの地域の林相に関係するのかもしれない。

3. シデムシ類ではコクロシデムシが最も多い。これは地表性甲虫グループでの、代表的な種の1つである。クロシデムシは大型の種であるが、経ヶ峯には多くはない。ヨツボシモンシデムシは普通にみられる種で、経ヶ峯でもコクロシデムシに次いで多い。仙台の他の人為的環境によくみられるオオヒタラシデムシはここでは少数しかみられなかった。

クロマルエンマコガネ・コブマルエンマコガネなどのエンマコガネ類は、動物の排出物を処理する、いわゆる糞虫であるが、ペイトトラップにもよく誘引されるので、腐肉選好性も強いと考えられる。ここでは、特にクロマルエンマコガネの個体数が多く、代表種の1つとなっている。コブマルエンマコガネも少なくない。

3-3 その他の昆虫類

1. トンボ類(蜻蛉目)では、つぎに示す種類が認められた。

アオイトトンボ科 Lestidae

オオアオイトトンボ *Lestes temporalis* Selys

カワイトンボ科 Calopterygidae

ハグロトンボ *Calopteryx atrata* selys

トンボ科 Libellulidae

ミヤマアカネ *Sympetrum pedemontanum elatum* Selys

マイコアカネ *Sympetrrum Kunckei* Selys

ノシメトンボ *Sympetrum infuscatum* Selys

ナツアカネ *Sympetrum darwinianum* Selys

アキアカネ *Sympetrum frequens* Selys

これらの中では個体数が多いのはマイコアカネである。普通のアキアカネよりやや小さいトンボである。ついでノシメトンボが多かった。しかし、これらの種類のすべてが経ヶ峯地域で発生しているとは考えにくく、その生活史のある時期を、この地域で過しているとみるのが妥当であろう。

2. セミ類 Cicadidae では、ヒグラシ *Tauna japonensis* Distant の活動が目立っているほか、ツクツクボウシ *Meimune opalifera* Walker などが認められる。

3. ハチ類（膜翅目）で目立ったのは、下記の種である。

キオベッコウ *Batozenellus annutatus* Fabricius (ベッコウバチ科 Pompilidae) は南方系の狩人蜂であるが、2代・3代の巣所周辺でみられたので、この附近の土中に巣穴をつくっているのであろうと思われる。

クロスズメバチ *Vespula lewisi* Cameron (スズメバチ科 Vespidae) も土中に営巣するジバチであるが、これもこの附近にあるものと思われる。ほかにスズメバチ科では、キイロスズメバチ *Vespa xanthoptera* Cameron とフタモンアシナガバチ *Polistes chinensis* Fabricius が認められた。

大型種としては、オオハキリバチ *Megachile sculpturalis* Smith (ハキリバチ科 Megachilidae) が認められた。このハチは日本で最大のハキリバチである。

トラマルハナバチ *Bombus diversus* Smith が、ツリフネソウやキバナアキギリ、ミズヒキなど林床に多い草本の花を訪れているのが観察された。

4. カ類では、コスカシバ *Synanthedon hector* Butler やユウマグラエグシヤク *Calospilos mironda* Butler などが認められた。

3-4 まとめ

以上、今回調査した結果について述べたが、蝶類以外の昆虫についてはなおこまかに調査をする必要がある。特に林床性の昆虫については植物群落のそれぞれについてその特性があるかどうかなど生態学的な調査が行われることが望ましい。

ともあれ、以上述べたことからみても、経ヶ峯の植生に対応した昆虫相のあることが認められる。市街地に近接したこの地域にこのような昆虫類が温存されているのは、この地域が靈域としてよく維持されてきたことによるのであると思われる。

あとがき

経ヶ峯の自然環境は相観的にスギ林ということができる。これはもちろん植栽によるものであるが、そのスギの植栽後に自然的要素が加わって形成された森林である。

一部にヒノキ林が存在し、またシラカシーシロダモ群落という特異的な群落もみられるし、更にスギ植栽の行われなかつた崖空蔵測に面する崖の上・一帯に、この地域代表的な二次林であるクリーアズマネザサが存在する。これはこの地域の本来の植生に関連する自然状態を思わせるものである。

スギ林のうち、スギ・シロダモ群落、スギ・シロダモ・オカメザサ群落、スギ・シロダモ・アオキ群落の地域に生育しているスギは胸高直径70~80cmに達するものが多く、参道のスギ並木と共にみごとなものとなっている。

重高木層以下にはシロダモを中心とした常緑広葉樹がよく繁茂しており、上にものべたようにシラカシーシロダモ群落も一部に成立している。このことは仙台地方が温暖帶と冷温帶の移行帶であることを物語るものとして、経ヶ峯の植生の価値を高めている。

なお、このような森林形成の上に鳥類の生活が密接に関連していることも注意すべきである。鳥類だけに止まらず、経ヶ峯の動物相がこの地域の植生の特性をよく反映したものとして認められることは注意すべきことといえる。

すなわち、経ヶ峯の自然は特異的な構造を保ちながら、安定した生物相をもっているとみるとができる。

仙台のような大都市において、大牛寺山地域から経ヶ峯、八木山、青葉山とつづく自然的環境を残すことは旧市街の北方丘陵地域と共に貴重な環境といえる。経ヶ峯地域はの中でも重要な存在といふことができる。

経ヶ峯地域の今後について特に注意すべきことは、すでに触れるところがあったが、安定した自然的環境としてはむしろ狭く、最少のひろがりをようやく保っているにすぎないと考えられることである。

経ヶ峯地域としては史跡として重要なことであり将来長く保存せねばならないが、史跡としての価値にはここで述べた自然的環境のもつ役割がきわめて大きいことは言うまでもないであろう。

しかし、その面積的ひろがりからみてもこの自然環境を維持していくにはむしろ狭いと思われることを考えると、将来の維持管理には充分意を用いる必要があろう。現在のひろがりを狭くするような開発は厳につつしむべきであり、今後更に生態学的調査研究を進め、それにもとづいた維持管理の方策をたてる必要があると考える。

写真1
スギー・シロダモー
オカメザサ群落



写真2
スギー・サギ群落



写真3
スギー・サギ群落
(林床にヨウシュ
ヤマゴボウが
多く生育する)



写真4
クリーアズマネザサ群落



写真5
ミゾソバ群落



写真6
多年生草木群落



写真1

経ヶ峯に生息するムササビ
(はく製)



写真8

経ヶ峯に生息する
ニホンリス



写真9

かつてのムササビの巣
(現在はムクドリが営巣)





写真11
ハシブトガラス



写真12
巣材を運ぶキジバト



写真13
枯れたイタドリに止まる
シジュウカラ



富城県沖地震前（1977年5月22日撮影）崖面に巣穴がみられる



同地震後（1979年10月25日撮影）地震により、崩壊がおこった



写真14 キジ (オス)



写真15 キジ (テリトリーを宣言している)



写真16 アオスジアゲハ



写真17 アオオサムシ



写真18 マイマイカドリ

経ヶ峯の植物

木村有香

まえがき

経ヶ峯は越路山の一部が半島状に北々東に突出した丘陵地で、海岸から直線距離で約11km、海拔凡そ20mから75mにおよぶ。ここは三方に広瀬川の流れをめぐらし、背後は南にやや急な下り斜面となって直接前沢（前川沢とも）の向山住宅地に接している。北もはじめはやや急な斜面であるが次第に緩かになり巣屋（の巣屋）の住宅地となる。東は急斜面で広瀬川を隔てて米ヶ袋に相対し、西は断崖となって眼下の花壇・道廻を越えて青葉ヶ崎の仙台城趾を望む。

筆者が経ヶ峯に初めて関心を持ったのは昭和13年（1928）である。市街地に近接した地域としては自然がよく保たれ、植物の種類が多く、特に陸地植物やシダ類の繁茂が印象的であった。それ以来東北大学理学部生物学教室の学生の植物分類学実習のためしばしばこの地を利用させてもらった。その間忘れられないのは、終戦後の昭和25年の春、久々で御子様御廟を経て、その南の感仙殿、善應殿跡の裏にあたる高所を訪れた時の事である。かつて見たシダ類や、歩行を妨げた低木類は殆ど姿を消し、地表は掃いたようにきれいになり、腐植土が露になっていた。これは戦中戦後薪に窮した人々の足に踏み荒らされた結果と思われるが、今日では五十年前には及ばぬ迄も、苔類等を除き人体横生が恢復してきたのは嬉しい限りである。

今回仙台市教育委員会の経ヶ峯総合調査で、筆者は高等植物の種類調査を担当した。調査は経ヶ峯のうち、瑞鳳寺境内と墓地および戦後穴藏神社の南に造られた住宅地とを除いた凡そ77,300m²の地域で、昭和52年3月31日に着手し現在に及ぶ。その結果下記の目録に示した通り、シダ類以上の高等植物の野生・逸出・帰化・栽培を含めて489種類（ただし変種・品種を含む）を確認した。このうち特に注目すべき植物や関係事項について説明を加えたい。

暖地性の植物

宮城県は太平洋側の温帯林と暖帯林との接觸地帯である。そのため暖地性の植物の種類がかなり多数見られることを、筆者は菅谷貞男博士との共著「松島産植物目録」（1970）*で明らかにしておいたが、わが経ヶ峯は海を隔てること11kmもあるため、海岸地帯ほど暖地性植物の種類は多くない。それでもシラカシ、アラカシ、アカガシ、シロダモ、ユズリハ等の常緑樹のはか、イイギリ、カラスザンショウ、アカメガシワ、サイフリボク、ネジキ、ヤブムラサキ、ナ

ガバノコウヤボウキ等の落葉樹木や落葉低木が見られる。アカメガシワとザイフリポクとネジキは岩手県南部まで分布するが、他はいずれも仙台地方或いは宮城県が太平洋側内陸での生育北限地と見なしうるので、分布上貴重な存在である。上記のうちユズリハの野生状態は仙台市では稀で、経ヶ峯でもただ一本を見出しだけであるが、恐らく庭園等に栽培されているものから種子を鳥が運んできた結果であろう。しかし昭和54年経ヶ峰に仙台市観光課が今迄明らかな踏み跡のなかった所にも新しく「散策路」を開削したので、行ってみたら根元から伐られてしまっていた(写真13)。地際の幹団は凡そ30cmあったのにまことに惜しいことである。ユズリハの野生が普通に見られるのは福島県南部海岸地帯以南であるが、それから北は散発的に現われ、国指定の「天然記念物青葉山」に二本、松島の富山に数本、桃生郡雄勝町の八景山(国指定「天然記念物八景山暖地性植物群落」)には地上1.5mの幹団1.0~1.6mの大木が多数あり、ここが太平洋側の分布北限となっている。こんな次第で宮城県はユズリハの分布北限地帯ゆえ、散発的に野生状態となって現われるものは学術上貴重で大切に保護すべきである。

このような鳥によって運ばれてきたと考えられるものには、この他ヤツデとヒイラギナンテンとカクレミノがあった。ヤツデは多數見られるが、いずれも若木でその個体数は国指定「天然記念物青葉山」におけるよりも多い。ヤツデの天然の群生が見られるのは福島県南部の久之浜に近い海岸地帯(福島県指定天然記念物)であるが、経ヶ峯のは仙台市内の栽培品の種子に由来したものと思う。またヒイラギナンテンはただ一株だけで、まだ小さく高さ50cm位の低木にすぎないが、東北地方でこの庭木の自然林中への逸出野生化は筆者の初めて経験する所である。カクレミノは二本あるが、一本は1mほどの小木。他は高さ凡そ6.5m、幹団は地際で38cmある(写真16)。戦後に生えたものと思うが、仙台市内で野生状態を見るのはきわめて珍らしい。これの野生がやや普通に見られるのは福島県南部の海岸地帯以南である。また1~2m位のネズミモチの小木をあちこちで見かける。これの野生は関東以南ということになっているが、茨城県以北の海岸地帯での分布状態の調査不充分な現状では、経ヶ峰のは廻りや附近の人家の庭木からの逸出と考えて置くのが自然であろう。ネズミモチは国指定「天然記念物青葉山」にも見られるが、仙台以北の内陸での野生状態を筆者は知らない。経ヶ峯のものは大切にしたい。

杉の杜と老樹大木

経ヶ峯あるいは笠屋の杜といえば誰でもあの黒々と茂った杉の杜を思い浮べる。郷土史家三原良吉氏の談話によると、この地は藩祖伊達政宗の靈廟ができる迄はススキ原のある椎木林であったらしい。今日ではやや珍らしくなったが戦前までは旧仙台市近郊にはモミをmajiedaたコナラやシデ類、カエデ類などからなる椎木林があちこちにあり、四季それぞれの風光が我等を

楽しませてくれた。経ヶ峯もそんな所であったろうという。所がここに藩祖の廟ができた時、その遺命により紀州から杉の苗を取り寄せて植えたのが現在の杉の社の起源であると伝えられる。昭和41年8月12日仙台城二の丸跡の老杉に落雷があり、幹に割れ目ができるので伐り倒して測定したら、地上1.5mの幹囲は2.65mで、年輪数約330を数え得た。経ヶ峯は二の丸跡と距離も近く、環境も昔から大差なかったものと推定し、この測定結果を目安にすると、経ヶ峯で地上1.5mの幹囲2.6m以上の杉は樹齢少くとも320年以上と考えうる。調査の結果そのような老杉は経ヶ峯全体（但し瑞鳳殿墓地沿いを除く）で47本あり、おもに瑞鳳殿参道と西参道に沿った地域、感仙殿・善応殿跡地の西側と北側に沿うた場所、および御子様御廟の周辺にある。47本のうち幹囲3.0~3.5mのものは20本、それ以上4.0m迄のものは10本、4.0m以上が2本ある。最大のものは西参道登り口の西北角にあり、地際の幹囲5.07m、地上1.5mの幹囲4.41mある（写真3）。参考のために記すが、昭和54年早春瑞鳳殿で境内の老杉を伐ったところ、地上1.5mの幹囲は3.56m、年輪数約342あった。経ヶ峯の老杉を全体として見れば、その配置は建築物や墓地を冬の西北の季節風や雪からまもるようになっていて、いわゆる「いぐね林」（鬼敷林）の趣のあるのは興味深い。これらの老杉とその後植えられた杉が主体となり、これにもともと此処にあったモミや種々の広葉樹が参加して今日見るような社ができたものと考えられる。

この社にはしかしながら、老杉と二本のコウヤマキを除くと案外目につく老樹大木は少ない。これは参道沿いと靈廟を直接取り囲む樹木以外は時々間伐あるいはやや広く伐採され、その跡に土として杉が植えられてきたためではないかと思われる。瑞鳳殿の東北斜面や、御子様御廟への道の北には幹囲1.6m（樹齢約150年）あるいはそれ以下の杉がかなり沢山見られる。上記のコウヤマキ（写真4）は感仙殿・善応殿の前に東西に並び立ち、東株は高さ凡そ25.5m、幹囲は地上1.5mで2.8m。西株は高さ約24mで、地上1.5mの幹囲は3.4mある。美事な大木で仙台市内にこれより大きいコウヤマキはない。三原良吉氏の説話によれば、この二本は高野山金剛峰寺関係者からの寄進であろうという。その他めぼしい木としては瑞鳳殿裏の東北斜面上端近くに立つ一本のシラカシがある。樹高約24m、幹囲は地際で3.07m、地上1.5mで2.41mあり、實に堂々たるもので、シラカシとしては福岡大満宮のものと共に仙台市内ではまれに見る大木である。また御子様御廟の少し下、コンセイザサの群落中にある一本のアオハダはこの辺では珍らしい大木で、高さ約13m、地際の幹囲は1.88mある（写真14の説明参照）。この附近広瀬川に臨む斜面近くには幹囲1.4m~1.6m前後のクリやミズキ（写真17）、コシアブラ等が見られるが、経ヶ峯では大きい方である。またシテ類は地上1.5mの幹囲1.3~1.4mのものを往々見かけるが、これも経ヶ峯としては大きい方といえよう。その他特に取り上げねばならぬ程の大木は見ないが、しかしこれらの樹木と上記の杉とが…緒になって長年に亘り樹齢とし

た杜を形成してきたために、林床に陰地植物の繁茂を来たしたのはいうまでもない。

陰地植物

低木草本合わせて相当の種類数にのぼり、絆ヶ峯の林床を飾る重要な要素である。まず目につくのは御子様御廟附近を中心に多いシダ類である。中でもベニシダ（写真1）・イタチシダ・ナライシダ・リョウメンシダ（写真2）等は大形且つ装飾的で美しい。しかしこれらは皆個体数少くまだ戦前の繁茂を取り戻していない。シダ植物の専門家伊藤洋博士によれば、オオサトメシダは東北地方で時々見出されるがやや珍らしく、ミドリヒメワラビは從来福島県が北限産地とされてきたものという。低木類ではアオキ・ハナイカダ・コクサギ・テンニンソウ・ヤブコウシ等がすぐ目につくが、特にアオキは個体数も多く、ことに葉の形に変化の多いのに誰でも気がつく。草本類は春はカタクリ（写真7）・ショウジョウバカマ（写真8）・エンレイソウ・ヒカゲスケ等からはじまり、やがて新緑の頃のチゴユリ（写真6）・ホウチャクソウ・ヒメシャガ（写真9）の美化へとつなぐ。また秋にはオヤリハグマ（写真18）・キッコウハグマ・オクモミジハグマ・タマブキ・ノブキ、あまり人目を引かないチヂミザサ・コチヂミザサ等が杜陰を飾る。陰濕の斜面を好むウツバミソウ（写真11）も稀でない。陰地植物についての詳述は紙面の都合で残念ながら割愛するほかないが、これらは仙台市近郊で杜があれば普通に見られるもので、決して珍らしいものではない。ただ人家稠密の市街地から至近の絆ヶ峯にあることは貴重と言うべきである。

タケ・ササ類

この類は7属10種類を検出した。アズマネザサやスズタケ、アズマザサ類が一番目につきやすいが、今回の調査でオクヤマザサの葉の無毛品と考えられているコンセイザサが見つかった。筆者はこのササを旧仙台市内の数ヶ所で確認しているが、絆ヶ峯では瑞鳳殿の北斜面と、御子様御廟の下に群落が見られる。著しく人目を引くのは何といってもクマザサ（写真5）であろう。瑞鳳殿の東斜面の杉林の中には鹿沼坂に達する郡落がある。秋から冬にかけ葉縁に白い美しい隈ができる。隈のできるササは他にもあるが、クマザサの隈は特に鮮かである。絆ヶ峯の南斜面にもこのササの群落がある。戦後植林した前久沢西部の若い杉林の中には今新しい群落が発展しつつある。なおタケ・ササ類の同定は専門家鈴木貞雄博士の手を煩したが、学名和名の選択は私見によったものもある。

着生植物

経ヶ峯では着生植物の発育はまことに貧弱である。僅にノキシノブ・ヒメノキシノブ・カヤラン（写真10）の三種を見出したに過ぎない。ノキシノブとヒメノキシノブは豊富ではないが、あちこちの樹木に附着している。カヤランは昔の記憶を辿りながら散々がしてやっと見出した。しかし個体数は少く絶滅に瀕しているといっても過言ではない。筆者はカヤランの海岸地帯での分布北限について確実な資料を持たないが、内陸では仙台市より北では見たことがない。戦前大年寺山の伊達家墓地やその附近のモミにはカヤランもベニカヤランもよく見かけたが、戦中戦後モミが伐られ環境は一変し全滅した。

最後に一言。はじめに述べたように今回の調査で判明した経ヶ峯の高等植物の種類数は489である。これから栽培・逸出・帰化したものと416となる。同様のことを国指定の「天然記念物青葉山」の植物について試みると649となる。即ち本州野生の植物に関して両者を比べれば、経ヶ峯には、その面積は青葉山の約1%に過ぎないが、416という可なり多數の種類があることになる。この狭い所にこれだけの種類が生育し、また分布上北限あるいは北限地帯を示す暖地性植物が数々あるということは、何度も人工が加えられたとしても、ここが寒帯のある聖域であったために歩道以外に路をつくらず、みだりに荒されることができなかったため、植生がよく保護されてきた事を物語るものと言えよう。植物の種類の豊富な日本中南部ならともかく、関東より北でわが経ヶ峯のような植生のよく保護された社を街の中に持つ大都市が他にあるであろうか。経ヶ峯は国指定の「天然記念物青葉山」と共に仙台市にとり最も大切なまた誇るべき自然であり文化財である。

今回の調査にあたり菅谷貞男博士（東北大学理学部教授）と石川慎悟氏（同学大学院理学研究科博士課程学生）は終始植物採集に従事して筆者を援助され、特に菅谷博士は標本の大部分の整理と植物目録製作の労をとられた。シダ植物の多くは伊藤洋博士（東京教育大学名誉教授）に、またタケ・ササ類は専門家鈴木貞雄博士に同定をお願いした。遠田宏博士（東北大学理学部助手）と東北大学理学部附属植物園の技官齊藤清・佐藤良雄・森弘の諸氏は経ヶ峯の老杉の調査に協力し筆者を支援された。郷土史家三原良吉氏からは経ヶ峯の歴史や近接地の本來の称呼につき詳しい御教示をいただきいた。また写真は6葉は筆者自身のものであるが、他は遠田博士（7葉）と写真家占山嘉一氏（5葉）の撮影によるものである。これら諸賢の御厚情と御後援に対し深く感謝の意を表したい。

*特別名勝松島、90-124頁。宮城県教育委員会編。昭和45年3月31日発行。

経ヶ峯産植物目録

Enumeratio Plantarum Vascularium In Loco Kiogamine Sendaiensi
Sponte Crescentium Et Cultarum Inquilinarumque

PTERIDOPHYTA シダ植物

EQUISETACEAE トクサ科

1. *Equisetum arvense* Linnaeus スギナ

LYCOPODIACEAE ヒカゲノカズラ科

2. *Lycopodium serratum* Thunberg var. *serratum* ホソバトウケシバ

OPHIOGLOSSACEAE ハナヤスリ科

3. *Botrychium japonicum* (Prantl) Underwood オカハナワラビ

OSMUNDACEAE ゼンマイ科

4. *Osmunda japonica* Thunberg ゼンマイ

POLYPODIACEAE ウラボシ科

5. *Arachniodes Miquelianae* (Maximowicz) Ohwi ナライシダ

6. *A. Standishii* (Moore) Ohwi リョウメンシダ

7. *Asplenium incisum* Thunberg トランオシダ

8. *A. varians* Wallich イワトロノオ

9. *Athyrium clivicola* Tagawa カラクサイヌワラビ

10. *A. Coniliifera* (Franchet et Savatier) Tagawa ホソバシケシダ

11. *A. japonicum* (Thunberg) Copeland シケシダ

12. *A. multifidum* Rosenstock オオサトメシダ

13. *A. niponicum* (Mettenius) Hancock イヌワラビ

14. *A. pycnosorum* Christ ミヤマシケシダ

15. *A. squamigerum* (Mettenius) Ohwi キヨタキシダ

16. *A. Vidalii* (Franchet et Savatier) Nakai ヤマイヌワラビ

17. *A. yokoscense* (Franchet et Savatier) Christ ヘビノネコザ

18. *Cyrtomium Fortunei* J. Smith ヤブソテツ

19. *Dennstaedtia hirsuta* (Swartz) Mettenius イヌシダ

20. *Dryopteris Bissetiana* (Baker) C. Christensen イタチシダ

21. *D. erythrosora* (Eaton) O. Kuntze ベニシダ

22. *D. uniformis* (Makino) Makino オクマツワラビ

23. *Hypolepis punctata* (Thunberg) Mettenius イワヒメワラビ

24. *Lastrea japonica* (Baker) Copeland ハリガネワラビ

25. *L. var. musashicensis* (Hiyama) Honda イワハリガネワラビ

26. *L. laxa* (Franchet et Savatier) Copeland ヤワラシダ

27. *L. viridifrons* (Tagawa) Tagawa ミドリヒメワラビ
 28. *Lepisorus Onoei* (Franchet et Savatier) Ching ヒメノキシノア
 29. *L. Thunbergianus* (Kaulfuss) Ching ノキシノア
 30. *Leptogramma mollissima* (Fischer) Ching ミゾシダ
 31. *Matteuccia orientalis* (Lövek) Trevisan イヌガシソク
 32. *M. Struthiopteris* (Linnaeus) Todaro クサソテツ
 33. *Polystichum retroso-paleaceum* (Kodama) Tagawa サカゲイノダ
 34. var. *coraiense* (Christ) Tagawa イワシロイノダ
 35. *P. tripteroides* (Kunze) Presl ジュウモンジシダ
 36. *Pteridium aquilinum* (Linnaeus) Kuhn var. *latiusculum* (Desvaux) Underwood ワラビ
 37. *Struthiopteris niponica* (Kunze) Nakai シンガシラ

SPERMATOPHYTA 種子植物

GYMNOSPERMACEAE 裸子植物

GINKGOACEAE イチョウ科

38. *Ginkgo biloba* Linnaeus イチョウ (栽培)

TAXACEAE イチイ科

39. *Taxus cuspidata* Siebold et Zuccarini イチイ (栽培)

40. *Torreya nucifera* (Linnaeus) Siebold et Zuccarini カヤ

CUPRESSACEAE ヒノキ科

41. *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zuccarini) Endlicher ヒノキ (栽培)

42. *C. pisifera* (Siebold et Zuccarini) Endlicher var. *squarrosa* (Siebold et Zuccarini) Beissner et Hochstetter モムロ (栽培)

TAXODIACEAE スギ科

43. *Cryptomeria japonica* (Linnaeus L.) D. Don スギ (栽培)

44. *Sciadopitys verticillata* (Thunberg) Siebold et Zuccarini コウヤマキ (栽培)

PINACEAE マツ科

45. *Abies firma* Siebold et Zuccarini モミ

46. *Pinus densiflora* Siebold et Zuccarini アカマツ

47. *P. Thunbergii* Parlatoe クロマツ (栽培)

ANGIOSPERMACEAE 被子植物

MONOCOTYLEDONEAE 単子葉類

GRAMINEAE イネ科

48. *Agropyron ciliare* (Trinibus) Franchet var. *minus* (Miquel) Ohwi アオカモシグサ

49. *A. tsukushense* (Honda) Ohwi var. *transiens* (Hackel) Ohwi カモシグサ

50. *Agrostis alba* Linnaeus コヌカグサ
 51. *A. clavata* Trinius ヤマヌカボ
 52. subsp. *Matsumurae* (Hackel ex Honda) Tateoka ヌカボ
 53. *Alpecurus aequalis* Sobolewski var. *amurensis* (Komarov) Ohwi スズメノテッポウ
 54. *Arthraxon hispidus* (Thunberg) Makino forma *japonicus* (Sprengel) Ohwi コブナグサ
 55. *Brachyelytrum japonicum* Hackel コウヤザサ
 56. *Bromus catharticus* Vahl イヌムギ (帰化)
 57. *B. pauciflorus* (Thunberg) Hackel キツネガヤ
 58. *Dactylis glomerata* Linnaeus カモガヤ (帰化)
 59. *Deyeuxia hakoneensis* (Franchet et Savatier) Kong ヒメノガリヤス
 60. *D. sylvatica* (A. P. de Candolle) Kunth var. *brachytricha* (Steudel) Renzille サイトウガヤ
 61. *Diarrhena japonica* Franchet et Savatier タツノヒケ
 62. *Digitaria adscendens* (F. A. v. Humboldt, A. Bonpland et C. S. Kunth) Henrard ヒメジワ
 63. *D. violascens* Link アキメヒジワ
 64. *Echinochloa crus-galli* (Linnaeus) Beauvois var. *caudata* (Reichenb.) Kitagawa イヌビエ
 65. *Eragrostis ferruginea* (Thunberg) Beauvois カゼクサ
 66. *Festuca ovina* Linnaeus var. *coreana* (St. Yves) St. Yves アオウシノケグサ
 67. *F. parviflora* Steudel トボシカラ
 68. *Glyceria ischyronera* Steudel ドジラツツナギ
 69. *Imperata cylindrica* (Linnaeus) Beauvois var. *Koenigii* (Reinw.) Durand et Schinz チガヤ
 70. *Lolium multiflorum* Lamark ホズミムギ (帰化)
 71. *Microstegium japonicum* (Miquel) Koidzumi var. *boreale* (Ohwi) Ohwi キタササガヤ
 72. *M. vimineum* (Trinius) A. Camus var. *glabrum* (Hiyama) Hiyama アシボソ
 73. *Misanthus sinensis* Andersson スヌキ
 74. *Oplismenus japonicus* (Steudel) Honda コチニザサ
 75. *O. undulatifolius* (Arduino) Rommer et Schultes チヂミザサ
 76. *Panicum bisulcatum* Thunberg メカキゴ
 77. *P. dichotomiflorum* Michaux オオクサキビ (帰化)
 78. *Paspalum Thunbergii* Kunth スズメノヒエ
 79. *Pennisetum alopecuroides* (Linnaeus) Sprengel テカラシバ
 80. *Phleum pratense* Linnaeus オオアシガエリ (帰化)
 81. *Phyllostachys pubescens* Mazel ex Houzeau de Lehaie モウソウチク (栽培)
 82. *Pleioblastus Chino* (Franchet et Savatier) Makino アズマキザサ
 83. *Poa annua* Linnaeus スズメノカタビラ
 84. *P. pratensis* Linnaeus ナガハグサ
 85. *P. sphondylioides* Trinius イチゴツナギ
 86. *P. trivialis* Linnaeus オオスズメノカタビラ
 87. *Pseudosasa japonica* (Siebold et Zuccarini) Makino ヤタケ
 88. *Sasa cernua* Makino var. *nikkoensis* (Nakai) S. Suzuki コンセイザサ
 89. *S. Veitchii* (Carrère) Rehder クマザサ (栽培、野生)
 90. *Sasaella Ikegamii* (Nakai) S. Suzuki カリワシノ

91. *S. Okadana* (Makino) Makino ヒロハアズマザサ
 93. *S. Suwekoana* (Makino) Makino スエコザサ
 93. *Sasamorpha borealis* (Hackel) Nakai スズタケ
 94. *Setaria Faberi* Herrmann アキノエロコログサ
 95. *S. glauca* (Linnaeus) Beauvois キンエノコロ
 96. *S. viridis* (Linnaeus) Beauvois エノコログサ
 97. *Shibataea Kumasaca* (Zollinger) Makino オカメザサ (栽培、野化)
 98. *Trisetum bifidum* (Thunberg) Ohwi カニフリグサ
 99. *Zoysia japonica* Steudel シバ

CYPERACEAE カヤツリグサ科

100. *Carex aphanolepis* Franchet et Savatier エナンヒゴクサ
 101. *C. blepharicarpa* Franchet ショウジュウスゲ
 102. *C. conica* Boott ヒメカンスゲ
 103. *C. incisa* Boott タニスゲ
 104. *C. ischnostachya* Steudel ジュズスゲ
 105. *C. japonica* Thunberg ヒゴクサ
 106. *C. lanceolata* Boott ヒカゲスゲ
 107. *C. leucochloa* Runge アオスゲ
 108. *C. macroglossa* Franchet et Savatier コジュズスゲ
 109. *C. mollisula* Boott ヒメシラスゲ
 110. *C. multifolia* Ohwi ミヤマカンスゲ
 111. *C. nubigena* D. Don subsp. *albata* (Boott) T. Koyama ミノホロスゲ
 112. *C. olivacea* Boott subsp. *confertiflora* (Boott) T. Koyama ミヤマシラス
 113. *C. shimadensis* Franchet アズマナルコ
 114. *C. siderosticta* Ilance タガネソウ
 115. *Cyperus microtis* Steudel カヤツリグサ

PALMAE ヤシ科

116. *Trachycarpus Fortunei* (Hooker) IL Wendland シュロ (虚出)

ARACEAE サトイモ科

117. *Arisaema peninsulae* Nakai コワライテンナンショウ
 118. *A. Urashima* Hara ウラシマソウ

COMMELINACEAE ツユクサ科

119. *Commelinia communis* Linnaeus ツユクサ

JUNCACEAE イグサ科

120. *Juncus tenuis* Willdenow クサイ (虚出)
 121. *Luzula capitata* (Miquel) Miquel スズメノヤリ
 122. *L. pallescens* (Wahlenberg) Hesser オカスズメノヒエ
 123. *L. plumosa* E. Meyer メカボレソウ
 124. *L. rostrata* Buchenau ミヤマスクボレソウ

LILIACEAE リリ科

125. *Allium Grayi* Regel ノビル
126. *Cardiocrinum cordatum* (Thunberg) Makino var. *Glehni* (Fr. Schmidt) Hara オオウバユリ
127. *Disporum sessile* D. Don ホウチャクソウ
128. *D. smilacinum* A. Gray チゴユリ
129. *Erythronium japonicum* Decaisne カタクリ
130. *Helonias orientalis* (Thunberg) C. Tanaka シャウジョウバカマ
131. *Hemerocallis fulva* (Linnaeus) Linnaeus var. *Kwanso* Regel ヤブランソウ
132. *Hosta lancifolia* (Thunberg) Engler コバキボウシ
133. *Lilium auratum* Lindley ヤマユリ
134. *Liriope minor* (Maximowicz) Makino ヒメヤブラン
135. *L. spicata* Loureiro コヤゾラン(逸出、野化)
136. *Ophiopogon japonicus* (Linnaeus L.) Ker-Gawler ジャノヒゲ
137. *O. planiscapus* Nakai オオバジヤノヒゲ
138. *Polygonatum lasianthum* Maximowicz ミヤマナルコユリ
139. *Reineckia carnea* (Andrews) Kunth キチジウソウ(逸出、野化)
140. *Rohdea japonica* (Thunberg) Roth オモト(逸出、野化)
141. *Smilax China* Linnaeus サルトリイバラ
142. *S. nipponica* Miquel タチシオデ
143. *Tricyrtis affinis* Makino ヤツシノホトトギス
144. *Trillium apetalon* Makino エンレイソウ

DIOSCOREACEAE ヤマノイモ科

145. *Dioscorea japonica* Thunberg ヤマノイモ
146. *D. Tokoro* Makino オエドコロ

IRIDACEAE アヤメ科

147. *Iris gracilipes* A. Gray ヒメシャガ
148. *I. japonica* Thunberg シャガ(野化)

ZINGIBERACEAE ショウガ科

149. *Zingiber Mioga* (Thunberg) Roscoe ミヅカラガ(逸出、野化)

ORCHIDACEAE ラン科

150. *Cymbidium Goeringii* (Reichenbach f.) Reichenbach f. シュンラン
151. *Sarcochilus japonicus* (Reichenbach f.) Miquel カヤラン

DICOTYLEDONEAE 双子葉類

CHORIPETALAE 蕊介花類

SAURURACEAE ドクグミ科

152. *Houttuynia cordata* Thunberg ドクグミ

CHLORANTHACEAE センリョウ科

191. *Tricerandra japonica* (Siebold) Nakai ヒドリシズカ

SALICACEAE ヤナギ科

192. *Salix integra* Thunberg イヌコリヤナギ

193. *S. vulpina* Andersson キツネヤナギ

JUGLANDACEAE クルミ科

194. *Juglans ailanthifolia* Carrière オニグルミ

BETULACEAE カバノキ科

195. *Alnus hirsuta* Turczaninow var. *sibirica* (Fischer) C. K. Schneider サマハシノキ

196. *Carpinus laxiflora* (Siebold et Zuccarini) Blume アカシデ

197. *C. Tschonoskii* Maximowicz イヌシデ

198. *Corylus Sieboldiana* Blume ツノハシバモ

199. *Ostrya japonica* Sargent アサガ

FAGACEAE ブナ科

200. *Castanea crenata* Siebold et Zuccarini クリ

201. *Cyclobalanopsis acuta* (Thunberg) Oersted アカガシ

202. *C. glauca* (Thunberg) Oersted アラカシ

203. *C. myrsinæfolia* (Blume) Oersted シガカシ

204. *Quercus mongolica* Fischer var. *grosseserrata* (Blume) Rehder et Wilson ミズナラ

205. *Q. serrata* Thunberg コナラ

ULMACEAE ニレ科

206. *Celtis sinensis* Persoon var. *japonica* (Planchon) Nakai エノキ

207. *Zelkova serrata* (Thunberg) Makino ケヤキ

MORACEAE クワ科

208. *Broussonetia Kazinoki* Siebold コウゾ

209. *Fatoua villosa* (Thunberg) Nakai クワタケ

210. *Ficus Carica* Linnaeus var. *Johannis* Boissier イチヂク(栽培)

211. *Humulus japonicus* Siebold et Zuccarini カイムグラ

212. *H. Lupulus* Linnaeus var. *cordifolius* (Miquel) Maximowicz カウハナソウ

213. *Morus bombycina* Koidzumi ヤマクワ

URTICACEAE イラクサ科

214. *Boehmeria grandifolia* Weddell ヤブマオ

215. *B. nivea* (Linnaeus) Gaudichaud subsp. *nippononivea* (Koidzumi) Kitamura クサマオ

216. *B. Sieboldiana* Blume ナガバヤブマオ

217. *B. spicata* (Thunberg) Thunberg コアカソ

218. *B. tricuspis* (Blance) Makino アカソ

219. *Elatostema involucratum* Franchet et Savatier ウツバミソウ

220. *Laportea bulbifera* (Siebold et Zuccarini) Weddell ムカゴイラクサ

III. *Pilea* Hamacai Makino ミズス

III. *P. mongolica* Weddell アオミズ

SANTALACEAE ピヤクダン科

III. *Buckleya lanceolata* (Siebold et Zuccarini) Miquel ツクバネ

POLYGONACEAE タデ科

III. *Antennaria filiforme* (Thunberg) Robert et Vauvillier ミズヒキ

III. *Persicaria longiseta* (Do Bruyn) Kiagawa イヌタデ

III. *P. nodosa* (Persoon) Opiz オオイヌタデ

III. *P. Possumbui* (D. Don) H. Gross var. *laxiflora* (Meissner) Hara ハナタデ

III. *P. pubescens* (Blume) Hara var. *acuminata* (Franchet et Savatier) Hara ポントクタデ

III. *P. sagittata* (Linnaeus) IL Gross var. *Sieboldii* (Meissner) Nakai アキノウチギツカミ

III. *P. Thunbergii* (Siebold et Zuccarini) IL Gross ミゾソバ

III. *Polygonum arenastrum* Bureau ハイミチヤナギ (帰化)

III. *Reynoutria japonica* Houttuyn イクドリ

III. var. *uzenensis* Honda ケイクトドリ

III. *R. sachalinensis* (Fr. Schmidt) Nakai オオイクトドリ

III. *Rumex japonicus* Houttuyn ギンギシ

III. *R. obtusifolius* Linnaeus エゾノギンギシ (帰化)

CHENOPodiaceae アカザ科

III. *Chenopodium album* Linnaeus シロサ

AMARANTHACEAE ヒユ科

III. *Achyranthes bidentata* Blume var. *japonica* (Miquel) Miyama イノコヅチ

III. var. *tomentosa* (Honda) Hara ヒナタイノコヅチ

PHYTOLACCACEAE ヤマゴボウ科

III. *Phytolacca americana* Linnaeus ヨウシュヤマゴボウ (帰化)

CARYOPHYLLACEAE ナデシコ科

III. *Cerastium fontanum* Baumgarten subsp. *triviale* (Link) Tulas

var. *angustifolium* (Franchet) Hara ミミナグサ

III. *C. viscosum* Linnaeus オランダミミナグサ (帰化)

III. *Sagina japonica* (Swartz) Ohwi ツメクサ

III. *Stellaria Alsine* Griseb var. *undulata* (Thunberg) Ohwi ノミノフスマ

III. *S. aquatica* (Linnaeus) Scopoli ウレハコベ

III. *S. media* (Linnaeus) Villars コハコベ

III. *S. neglecta* Weihe ハコベ

III. *S. sessiliflora* Yabe ミヤツハコベ

RANUNCULACEAE キンポウゲ科

III. *Anemone flaccida* Fr. Schmidt ニリンソウ

III. *Clematis apilifolia* A. P. de Candolle ボタンヅル

28. *C. tosaensis* Makino トリガタハンショウヅル
 29. *C. temiflora* A. P. de Candolle センニンソウ
 30. *Ranunculus japonicus* Thunberg ウマノアシガタ
 31. *R. quelpaertensis* (Léveillé) Nakai キツネノホタン

LARDIZABALACEAE アケビ科

32. *Akebia quinata* (Thunberg) Decaisne アケビ
 33. *A. trifoliata* (Thunberg) Koidzumi ミツバアケビ

BERBERIDACEAE メギ科

34. *Mahonia japonica* (Thunberg) A. P. de Candolle ヒノクギサンナン(逸出)
MENISPERMACEAE ツヅラフジ科

35. *Cocculus trilobus* (Thunberg) A. P. de Candolle アオツヅラフジ

MAGNOLIACEAE モクレン科

36. *Ilicium anisatum* Linnaeus シキミ(既植)
 37. *Magnolia obovata* Thunberg ホオノキ

LAURACEAE クスノキ科

38. *Lindera umbellata* Thunberg var. *membranacea* (Maximowicz) Momiyama オオバクバ
 39. *Neolitsea sericea* (Blume) Koidzumi シロダモ

PAPAVERACEAE ケシ科

40. *Chelidonium majus* Linnæus subsp. *asiaticum* Hara クサノオウ
 41. *Corydalis incisa* (Thunberg) Persson ムラサキケマン

CRUCIFERAE アブラナ科

42. *Arabis nipponica* H. Boissieu ヤマハタザオ
 43. *Capsella Bursa-pastoris* (Linnæus) Medicus ナズナ
 44. *Cardamine leucantha* (Tausch) O. E. Schulz コンロウソウ
 45. *C. scutata* Thunberg タネツケバナ
 46. subsp. *Regelianae* (Miquel) Hara ヤマタネツケバナ
 47. *Lepidium virginicum* Linnæus マメゲンバナ(ナズナ)(既植)
 48. *Rorippa indica* (Linnæus) Hiern イヌガラシ

CRASSULACEAE ベンケイソウ科

49. *Sedum bulbiferum* Makino コモチマンネングサ
 50. *S. lineare* Thunberg オノマンネングサ(既植、逸出)

SAXIFRAGACEAE ユキノシタ科

51. *Astilbe Thunbergii* (Siebold et Zuccarini) Miquel var. *congesta* H. Boissieu トリアシショウマ
 52. *Chrysosplenium Grayanum* Maximowicz ネコノメソウ
 53. *C. japonicum* (Maximowicz) Makino ヤツネコノメソウ
 54. *C. macrostemon* Maximowicz var. *shioharensis* (Franchet) Hara ニッコウネコノメ

10. *Deutzia crenata* Siebold et Zuccarini ウツギ
 11. *Hydrangea macrophylla* (Thunberg) Serice subsp. *macrophylla* var. *macrophylla* アジサイ(萩原)
 12. subsp. *serrata* (Thunberg) Makino var. *megacarpa* Ohwi エゾアジサイ(萩原?)
 13. *H. paniculata* Siebold ノリウツギ
 14. *Saxifraga stolonifera* Moerburg コキノシタ(逸出)

HAMAMELIDACEAE マンサク科

15. *Hamamelis japonica* Siebold et Zuccarini マンサク

ROSACEAE バラ科

16. *Agrimonia pilosa* Lodebour subsp. *japonica* (Miquel) Hara キンミズヒキ
 17. *Amelanchier asiatica* (Siebold et Zuccarini) Radlacher ザイフリボク
 18. *Anuncus dioicus* (Walter) Fornald var. *tenuifolius* (Nakai) Hara ヤマブキショウマ
 19. *Duchesnea chrysanthia* (Zollinger et Moritzi) Miquel ヘビイチゴ
 20. *D. indica* (Andrews) Focke ヤブヘビイチゴ
 21. *Geum japonicum* Thunberg ダイコンソウ
 22. *Kerria japonica* (Thunberg) A. P. de Candolle ヤマブキ
 23. *Potentilla centigrana* Maximowicz forma *patens* Hiymans ヒメヘビイチゴ
 24. *Pourthaea villosa* (Thunberg) Decaisne var. *Zollingeri* (Decaisne) Nakai カマツカ
 25. *Prunus apetala* (Siebold et Zuccarini) Franchet et Savatier チカラヅカグラ
 26. *P. Grayana* Maximowicz ウツミズサクラ
 27. *P. Lannesiana* (Carrière) Wilson var. *Lannesiana* サトザクラ(萩原)
 28. *P. Mume* Siebold et Zuccarini クメ(萩原)
 29. *P. pendula* Maximowicz シグレザクラ(萩原)
 30. forma *ascendens* (Makino) Ohwi エドヒガン
 31. *P. salicina* Lindley スモモ(萩原、逸出)
 32. *P. x yedoensis* Matsumura ソメイヨシノ(萩原)
 33. *Rosa multiflora* Thunberg ノイバラ
 34. *Rubus crataegifolius* Bunge クマイチゴ
 35. *R. hirsutus* Thunberg クサイチゴ
 36. *R. microphyllus* Linnaeus L. ニガイチゴ
 37. *R. palmatus* Thunberg var. *coptophyllum* (A. Gray) O. Kuntze モジジイチゴ
 38. *R. parvifolius* Linnaeus ナワシロイチゴ
 39. *Sorbus japonica* (Decaisne) Höglund ウラジロノキ
 40. *Stephanandra incisa* (Thunberg) Zabel コゴメウツギ

LEGUMINOSAE マメ科

41. *Amphicarpaea Edgeworthii* Bentham var. *trisperma* (Miquel) Ohwi ウスバヤブツメ
 42. *Apios Fortunei* Maximowicz ホド
 43. *Cassia Nomame* (Siebold) Honda カワラケツメイ
 44. *Desmodium oxyphyllum* A. P. de Candolle ヌスビハギ
 45. var. *mandshuricum* (Maximowicz) Ohashi ヤブハギ
 46. *Lespedeza Buergeri* Miquel キハギ

27. *L. cuneata* (Dumont de Courset) G. Don メドハギ
 28. *L. homoloba* Nakai ツクシハギ
 29. *L. pilosa* (Thunberg) Siebold et Zuccarini ホコハギ
 30. *Pueraria lobata* (Willdenow) Ohwi クズ
 31. *Robinia pseudoacacia* Linnaeus ニセアカシア (異称)
 32. *Trifolium pratense* Linnaeus アカツメクサ (帰化)
 33. *T. repens* Linnaeus シロツメクサ (帰化)
 34. *Wisteria floribunda* (Willdenow) A. P. de Candolle フジ

GERANIACEAE フウロソウ科

25. *Geranium nepalense* Sweet var. *Thunbergii* (Siebold et Zuccarini) Kudo ゲンノシヨウコ

OXALIDACEAE カタバミ科

26. *Oxalis corniculata* Linnaeus カタバミ
 27. *forma tropaeoloides* (Schlachter) R. Knuth ウスアカカタバミ

RUTACEAE ミカン科

28. *Fagara ailanthoides* (Siebold et Zuccarini) Engler カラスサンショウ
 29. *Orixa japonica* Thunberg コクサギ
 30. *Zanthoxylum piperitum* (Linnaeus) A. P. de Candolle サンショウ

EUPHORBIACEAE トウダイグサ科

28. *Acalypha australis* Linnaeus エノキグサ
 29. *Daphniphyllum macropodum* Miquel ユズリハ (逸出、野化)
 30. *Mallotus japonicus* (Thunberg) Mueller Arg. アカメガシワ
 31. *Shirakia japonica* (Siebold et Zuccarini) Hurusawa シラキ

ANACARDIACEAE ウルシ科

26. *Rhus ambigua* Lavallée ツタウルシ
 27. *R. javanica* Linnaeus ダルデ
 28. *R. trichocarpa* Miquel ヤマウルシ

AQUIFOLIACEAE モチノキ科

29. *Ilex crenata* Thunberg イヌツゲ
 30. *I. macropoda* Miquel アオハダ
 31. *I. serrata* Thunberg ウメモドキ

CELASTRACEAE ニシキギ科

32. *Celastrus orbiculatus* Thunberg var. *strigillosus* (Nakai) Makino オニヅルウメモドキ
 33. *Euonymus alatus* (Thunberg) Siebold ニシキギ
 34. *E. Fortunei* (Turczaninow) Handel-Mazzetti var. *radicans* (Siebold) Reichenb. ツルマサキ
 35. *E. japonicus* Thunberg マサキ (栽培)
 36. *E. oxyphyllus* Miquel ツリバナ

ACERACEAE カエデ科

36. *Acer japonicum* Thunberg ハウチワカエデ

301. *A. Mono* Maximowicz var. *ambiguum* (Pax) Rehdor オニイタヤ
 302. " var. *marmoratum* (Nicholson) Hara forma *heterophyllum* Nakai イクヤカエテ
 303. *A. palmatum* Thunberg イロハモミジ (栽培)
 304. " subsp. *amoenum* (Carrière) Hara オオモミジ
 305. " subsp. *Matsumurae* Koidzumi ヤマモミジ
 306. *A. rufinerve* Siebold et Zuccarini クリハダカエテ
 307. *A. Sieboldianum* Miquel イタヤメイゲツ

SABIACEAE アワブキ科

308. *Meliosma myriantha* Siebold et Zuccarini アワブキ

BALSAMINACEAE ツリフネソウ科

309. *Impatiens noli-tangere* Linnaeus キツリフネ
 310. *I. Textori* Miquel ツリフネソウ

RHAMNACEAE クロウメモドキ科

311. *Hovenia dulcis* Thunberg var. *tomentella* Makino ケケンボナシ
 312. *Rhamnus japonica* Maximowicz var. *decipiens* Maximowicz クロウメモドキ

VITACEAE ブドウ科

313. *Ampelopsis glandulosa* (Wallich) Momiyama var. *heterophylla* (Thunberg) Momiyama ノブドウ
 314. *Cayratia japonica* (Thunberg) Gagnepain ヤブガラシ
 315. *Parthenocissus tricuspidata* (Siebold et Zuccarini) Planchon ツタ
 316. *Vitis Coignetiae* Pulliat ヤマブドウ
 317. *V. flexuosa* Thunberg サンカクヅル

ACTINIDIACEAE マタタビ科

318. *Actinidia polygama* (Siebold et Zuccarini) Planchon マタタビ

THEACEAE ツバキ科

319. *Camellia japonica* Linnaeus ヤブツバキ
 320. *Eurya japonica* Thunberg ヒサカキ (栽培、野化)
 321. *Thea sinensis* Linnaeus チャノキ (栽培、野化)

HYPERICACEAE オトギリソウ科

322. *Hypericum erectum* Thunberg オトギリソウ
 323. *H. pseudopeltatum* R. Keller サワオトギリ

VIOLACEAE スミレ科

324. *Viola eizanensis* (Makino) Makino エイザンスミレ
 325. *V. grypoceras* A. Gray タチツボスミレ
 326. *V. hondoensis* W. Becker et H. Boissieu アオイスミレ
 327. *V. Keiskei* Miquel forma *Okuboi* (Makino) F. Maekawa ケマルバスミン
 328. *V. Kusanoana* Makino オオタチツボスミレ
 329. *V. mandshurica* W. Becker スミレ
 330. *V. obtusa* (Makino) Makino ニオイタチツボスミレ

- III. *V. rostrata* Pursh ナガハシスミレ
 III. *V. verecunda* A. Gray ツバツミレ
 III. *V. violacea* Makino var. *Makinoi* (Boissieu) Hiyama マキノスミレ

FLACOURTIACEAE イイギリ科

- III. *Iodesia polycarpa* Maximowicz イイギリ

STACHYURACEAE ギブシ科

- III. *Stachyurus praecox* Siebold et Zuccarini キブシ

BEGONIACEAE シュウカイドウ科

- III. *Begonia grandis* Dryandor シュウカイドウ(栽培)

ONAGRACEAE アカバナ科

- III. *Circasea mollis* Siebold et Zuccarini ミズマタソウ

HALORAGACEAE アリノトウグサ科

- III. *Haloragis micrantha* (Thunberg) R. Brown アリノトウグサ

ARALIACEAE ウコギ科

- III. *Acanthopanax invenans* (Siebold et Zuccarini) Franchet et Savatier タカノツメ

- III. *A. sciadophylloides* Franchet et Savatier コシアブラ

- III. *A. Sieboldianus* Makino ヒメウコギ(栽培、逸出)

- III. *Aralia cordata* Thunberg ウド

- III. *A. elata* (Miquel) Scemann タラノキ

- III. *Dendropanax trifidus* (Thunberg) Makino カクレミノ(逸出、野化)

- III. *Fatsia japonica* (Thunberg) Decaisne et Planchon ヤツデ(逸出、野化)

- III. *Hedera rhombae* (Miquel) Bean キヅタ

- III. *Kalopanax pictus* (Thunberg) Nakai ハリギリ

UMBELLIFERAE セリ科

- III. *Angelica decursiva* (Miquel) Franchet et Savatier ノダケ

- III. *Anthriscus sylvestris* (Linnaeus) Hoffmann subsp. *aemula* (Woronichin) Kitamura シャク

- III. *Chamaele decumbens* (Thunberg) Makino セントウソウ

- III. *Cryptotaenia japonica* Hasskarl ミツバ

- III. *Hydrocotyle raniflora* Maximowicz オオチドメ

- III. *H. sibthorpioides* Lamarck チドメグサ

- III. *Oenanthe javanica* (Blanco) A. P. de Candolle セリ

- III. *Sanicula chinensis* Bunge ウマノミツバ

CORNACEAE ミズキ科

- III. *Aucuba japonica* Thunberg アオキ

- III. forma *longifolia* (T. Moore) Schelle ホソバアオキ

- III. *Cornus controversa* Hemslay ミズキ

- III. *Helwingia japonica* (Thunberg) F. G. Dietrich ハナイカダ

SYMPETALAE 合弁花類

CLETHRACEAE リョウブ科

- . *Clethra barbinervis* Siebold et Zuccarini リョウブ

PYROLACEAE イチヤクソウ科

- . *Chimaphila japonica* Miquel ウメガサソウ

- . *Pyrola japonica* Klenze イチヤクソウ

ERICACEAE ツツジ科

- . *Enkianthus perulatus* (Miquel) Schneider ドウダンツツジ (栽培)

- . *Lyonia ovalifolia* (Waltlich) Drude var. *elliptica* (Siebold et Zuccarini) Handel-Mazzetti ネジキ

- . *Rhododendron Kaempferi* Planchon ヤマツツジ

- . *R. semibarbatum* Maximowicz バイカツツジ

- . *R. Weddum* Makino トウゴクミツバツツジ

- . *Tripetala paniculata* Siebold et Zuccarini ホツツジ

- . *Tritomodon campanulatus* (Miquel) F. Maekawa サラサドウダン (栽培)

- . *Vaccinium hirtum* Thunberg ウスノキ

- . *V. Oldhami* Miquel ナツハゼ

MYRSINACEAE ヤブコウジ科

- . *Bladhia japonica* Thunberg ヤブコウジ

PRIMULACEAE サクラソウ科

- . *Lysimachia clethroides* Daby オカトラノオ

- . *L. japonica* Thunberg var. *subsessilis* F. Maekawa コナスビ

EBENACEAE カキノキ科

- . *Diospyros Kaki* Thunberg カキ (选出)

SYMPLOCACEAE ハイノキ科

- . *Palura chinensis* (Lourouze) Koidzumi var. *leucocarpa* (Nakai) Hara forma *pilosus* (Nakai) Hara
サワワタギ

STYRACACEAE エゴノキ科

- . *Styrax japonicus* Siebold et Zuccarini エゴノキ

OLEACEAE モクセイ科

- . *Fraxinus Sieboldiana* Blume ホノバアオダモ

- . *Ligustrum japonicum* Thunberg ネズミモチ (栽培、野化)

- . *L. obtusifolium* Siebold et Zuccarini イボタノキ

- . *Osmanthus heterophyllus* (G. Don) P. S. Green ヒイラギ (栽培)

ASCLEPIADACEAE ガガイモ科

- . *Metaplexis japonica* (Thunberg) Makino ガガイモ

BORAGINACEAE ムラサキ科

33. *Bothriospermum tenellum* (Homemann) Fischer et Moyer ハナイバナ
34. *Trigonotis peduncularis* (Treviranus) Benth. タビラコ

VERBENACEAE クマツヅラ科

35. *Callicarpa japonica* Thunberg ムラサキシキブ
36. *C. mollis* Siebold et Zuccarini ヤブムラサキ
37. *Clerodendron trichotomum* Thunberg クサギ

LABIATAE シソ科

38. *Ajuga decumbens* Thunberg キランソウ
39. *Clinopodium chinense* (Hemsl.) O. Kuntze subsp. *grandiflorum* (Maximowicz) Hara
var. *Shibetichense* (Léveillé) Koidzumi ヤマクルマバナ
40. *C. micranthum* (Regel) Hara イヌトウバナ
41. *Elsholtzia ciliata* (Thunberg) Hylandor ナガナタコウジ
42. *Glechoma hederacea* Linnæus subsp. *grandis* (A. Gray) Hara カキドオシ
43. *Lamium purpureum* Linnæus ヒメドリコソウ (帰化)
44. *Leucosceptrum japonicum* (Miquel) Kitamura et Murata テンニンソウ
45. *Mosia diantire* (Hamilton) Maximowicz ヒメゾ
46. *Perilla frutescens* (Linnæus) Britton var. *crispata* (Thunberg) Deane シソ (逸出)
47. *Prunella vulgaris* Linnæus subsp. *asiatica* (Nakai) Hara ウツボグサ
48. *Rabdosia inflexa* (Thunberg) Hara ヤツハッカ
49. *Salvia lutescens* (Koidzumi) Kokizumi var. *crenata* (Makino) Murata ケナツノタムラソウ
50. *S. nipponica* Miquel キバナアキギリ
51. *Teucrium viscidum* Blume var. *Miquelianum* (Maximowicz) Hara ツルニガクサ

SOLANACEAE ナス科

52. *Datura Stramonium* Linnæus var. *Tatula* (Linnæus) Torrey ヨウシュチョウセンアサガオ (帰化)
53. *Solanum lycratum* Thunberg ヒヨドリジヨウゴ
54. *S. nigrum* Linnæus イヌホオズキ (帰化)

SCROPHULARIACEAE ゴマノハグサ科

55. *Mazus japonicus* (Thunberg) O. Kuntze トキワハゼ
56. *M. Miquelianii* Makino ムラサキサギゴケ
57. *Paulownia tomentosa* (Thunberg) Steudel キリ (逸出)
58. *Veronica arvensis* Linnæus タチイヌノフグリ (帰化)
59. *V. persica* Poiret オオイヌノフグリ (帰化)

PHRYMACEAE ハエドクソウ科

60. *Phryma Leptostachya* Linnæus var. *oblongifolia* (Koidzumi) Honda ナガバハエドクソウ

PLANTAGINACEAE オオバコ科

61. *Plantago asiatica* Linnæus オオバコ

RUBIACEAE アカネ科

43. *Gallium paradoxum* Maximowicz ミヤツムグラ
44. *G. pseudo-asprellum* Makino オオバノヤエムグラ
45. *G. spuriun* Linnaeus var. *echinospermon* (Wallroth) Hayek ヤエムグラ
46. *Hedycotis Lindleyana* Hooker var. *hirsuta* (Linnaeus f.) Hara ハシカグサ
47. *Paeonia scandens* (Lourteig) Merrill var. *Mairei* (Leveillé) Hara ヘクソカズラ
48. *Rubia Akane* Nakai アカネ

CAPRIFOLIACEAE スイカズラ科

49. *Abelia spathulata* Siebold et Zuccarini var. *stenophylla* Honda ウゴツクバネウツギ
50. *Lonicera gracilipes* Miquel ヤマウグイスカグラ
51. *L. japonica* Thunberg スイカズラ
52. *Sambucus racemosa* Linnaeus subsp. *Sieboldiana* (Blume) Hara ニワトコ
53. *Viburnum dilatatum* Thunberg ガマズミ
54. *V. phlebotrichum* Siebold et Zuccarini オトコヨウゾメ
55. *V. Wrightii* Miquel ミヤマガマズミ
56. *Weinelia hortensis* (Siebold et Zuccarini) K. Koch タニウツギ

CUCURBITACEAE ウリ科

57. *Gynostemma pentaphyllum* (Thunberg) Makino アマチャヅル
58. *Melothria japonica* (Thunberg) Maximowicz スズメウリ
59. *Trichosanthes Kirilowii* Maximowicz var. *japonica* (Miquel) Kitamura キカラスウリ

CAMpanulaceae キキョウ科

60. *Adenophora triphylla* (Thunberg) A. de Candolle var. *japonica* (Regel) Hara プリガネニンジン
61. *Codonopsis lanceolata* (Siebold et Zuccarini) Trautvetter ツルエンジン
62. *Peracarpa camosa* (Wallich) Hooker f. et Thomson
var. *circaeoides* (Fr. Schmidt) Makino タニギキョウ

COMpositae キク科

63. *Adenocaulon himalaicum* Edgworth ノアキ
64. *Ainsliaea acerifolia* Schultz-Bipontinus var. *subapoda* Nakai オクモミジハグマ
65. *A. apiculata* Schultz-Bipontinus キッコウハグマ
66. *Artemisia princeps* Pampanini フモギ
67. *Aster ageratoides* Turczaninow subsp. *leiophyllum* (Franchet et Savatier) Kitamura シロヨメナ
68. *subsp. ovalus* (Franchet et Savatier) Kitamura ノコンギク
69. *A. scaber* Thunberg レラヤマギク
70. *Atractylodes japonica* Koidzumi オケラ
71. *Bidens frondosa* Linnaeus アメリカセンダングサ(希化)
72. *Cacalia farfaraefolia* Siebold et Zuccarini var. *bilibifera* (Maximowicz) Kitamura タマブキ
73. *Carpesium abrotanoides* Linnaeus ヤブタバコ
74. *C. divaricatum* Siebold et Zuccarini ガンクビソウ
75. *var. abrotanoides* (Koidzumi) Kitamura ホソバガンクビソウ

42. *C. glossophyllum* Maximowicz サシガンクビソウ
 43. *Cirsium japonicum* A. P. de Candolle ノアザミ
 44. *C. nipponicum* (Maximowicz) Makino ナンブアザミ
 45. *C. yezoense* (Maximowicz) Makino サワアザミ
 46. *Erechtites hieracifolia* (Linnaeus) Rafinesque タンドボロギク (帰化)
 47. *Erigeron annuus* (Linnaeus) Persoon ヒメジョオン
 48. *E. bonariensis* Linnaeus アンチメギク (帰化)
 49. *E. canadensis* Linnaeus ヒメムカシヨモギ
 50. *E. philadelphicus* Linnaeus ハルシオン (帰化)
 51. *Eupatorium chinense* Linnaeus var. *simplicifolium* (Makino) Kitamura ヒヨドリバナ
 52. *E.* forma *tripartitum* (Makino) Hara ミツバヒヨドリバナ
 53. *Gnaphalium affine* D. Don ハハコグサ
 54. *G. japonicum* Thunberg チチコグサ
 55. *Gymnaster koraiensis* (Nakai) Kitamura チョウセンシオン (逸出、帰化)
 56. *G. Savatieri* (Makino) Kitamura ミヤマヨメナ
 57. *Ixeris dentata* (Thunberg) Nakai ニガナ
 58. *I.* var. *albiflora* (Makino) Nakai forma *amplifolia* (Kitamura) Hiyama ハナニガナ
 59. *I.* var. *stolonifera* (Kitamura) Nemoto ハイニガナ
 60. *I. stolonifera* A. Gray イワニガナ
 61. *Lactuca indica* Linnaeus forma *runcinata* (Maximowicz) Kitamura アキノノゲシ
 62. *L. Raddeana* Maximowicz var. *elata* (Hemsley) Kitamura ヤマニガナ
 63. *Lapsana humilis* (Thunberg) Makino ヤブタピラコ
 64. *Leibnitzia Anandria* (Linnaeus) Turczaninow センパンヤリ
 65. *Ligularia dentata* (A. Gray) Hara マルバダケブキ
 66. *Pertya glabrescens* Schultz-Bipontinus ナガバノコウセボウキ
 67. *P. triloba* (Makino) Makino オヤリハグマ
 68. *Petasites japonicus* (Siebold et Zuccarini) Maximowicz フキ
 69. *Picris hieracoides* Linnaeus subsp. *japonica* (Thunberg) Krylov コウゾリナ
 70. *Prenanthes acerifolia* (Maximowicz) Matsumura フクオウソウ
 71. *Senecio vulgaris* Linnaeus ノボロギク (帰化)
 72. *Siegesbeckia glabrescens* (Makino) Makino コメナモミ
 73. *Solidago Virgaurea* Linnaeus subsp. *asiatica* (Nakai) Kitamura アキノキリンソウ
 74. *Sonchus asper* (Linnaeus) Hill オニノゲシ (帰化)
 75. *S. oleraceus* Linnaeus ノゲシ (帰化)
 76. *Taraxacum hondoense* Nakai エゾタンポポ
 77. *T. officinale* Weber セイヨウタンポポ (帰化)
 78. *Youngia denticulata* (Houttuyn) Kitamura ヤクシソウ
 79. *Y. japonica* (Linnaeus) A. P. de Candolle オニタビラコ



写真1 ベニシダ



写真2 リョウメンシダ



写真4 仙台最大のコウヤマキ



写真3 経ヶ峯最大のスギ



写真5 クマザサ



写真6 チゴユリ



写真7 カタクリ



写真8 ショウジョウバカマ



写真9 ヒメシャガ



写真10 カヤラン



写真11 ウワバミソウ



写真12 エゾアシサイ



写真13 散策路ぞいのユズリハ



写真14 アオハダ



写真15 イイギリ



写真16 カクレミソ



写真17 ミズキ



写真18 オヤリハグマ

写 真 の 説 明

写真1 ベニシダ（ウラボシ科）

葉は束生し、葉身は普通長卵円形から卵状長橢円形で、長さ30~70cm、幅20~30cm。2回羽状に分裂し、光沢があり特に各の葉先の葉枕色。さらに葉裏の若い苞葉の紅色の美しさが人をひきつける。本州、四国、九州、琉球半島、中国等に分布する。分布の北限は今の所、岩手県並石崎の東北の外洋に面した所にある三日月島である。

写真2 リョウメンシダ（ウラボシ科）

葉のやや畳たたいた所に、よく群生する常緑多年生のシダで、葉は束生し、葉身は長橢円形で、長さ40~70cm、幅20~30cm。3~4回羽状に分裂する。表面とも鮮緑色で、子囊群のない時は裏も表も同様に見える。このシダの葉の緑色の清新さと、その堅強な筋のからむらしたす装飾的な美しさは全く特徴である。分布は広く本州、四国、九州、更に平島におよぶ。

写真3 経ヶ峯最大のスギ（スギ科）

西参道右岸の登り口、向って右角の北向きの急斜面に立つ。本文に記した樹幹の地際の周囲5.07mは、筆者ではよくわからないが、新葉上部の池跡のこと。立ちに見える斜面下部の地際より約2.5m高い。樹高は見難く凡そ6m、物語代りの人の身長1.65m。

写真4 仙大最大のコウヤマキ（スギ科）

コウヤマキは我が特産で、一属一種といふ植物学上の興味の深い貴重木である。樹幹は直立するが中段附近でよく枝分かれすることがある。わが縣ヶ峯のものは、又株は下から全長の凡そ二分の一、西株は約三分の一の所で二大支幹に分かれている。せまい円錐形の樹冠と倒伏状に立てる特徴の株生木の美しさのため昔からよく栽培されてきた。木質を中心とする中部地方から紀伊半島、四国にかけて分布し、また中国地方の一部や九州の一部にも廣く分布する。北は中部地方から南へ福島、新潟両県境の南部に限局分布する。それより北には木生を見ない。

写真5 クマザサ（イネ科）

高さ40~150cmになる常緑のササで、昔から広く庭園に栽培され、また野生物化しているが、九州方面には眞の野生があるといわれている。葉は茎の先に4~7枚ほど掌状につき、輪状の葉序長橢円形で、長さは18~24cm、幅4~7cmで、先が急に細くなつて尖る。葉が兩面とも完全に無毛、葉軸に美しい長毛が密生密生するという二つの特徴のため、分類の面倒なササ類中ではむしろ見分けやすい。現地から冬にかけて葉縁に鮮かな白い霜ができる。その美しさのため昔から人々に愛されてきた。和名は熊の意で熊糞ではない。

写真6 チゴユリ（ユリ科）

丘陵地の林中に生える多年生の草本で、高さ10~30cm。4~5月頃茎の先端に白色の可憐な花が1~2個うつむいて咲く。花茎凡そ2cm。花後丸い小さな実を結び、のち熟する。分布は北海道、南北島、本州、四国、九州。

写真7 カタクリ（ユリ科）

カタクリの古名で方言にも出でる有名な多年生草本、花茎長さ13~30cmの花茎の頂にただ一つ紫褐色の径4~5mmの可憐な花がうつむいて咲く。6枚の花被片はせまい長楕円形で開花時には後方に強く反りかえる特徴がある。葉は2枚で葉面は長い。葉身は質厚くやわらかく、狭い卵形または橢円形、両邊に多くの波曲があり、表面は淡緑色で葉色の斑紋があつてまことに美しい。地下の鱗茎から質の根が、即ち球根がとれる。日本の特産植物で、

分布は広く、北海道、本州に普通。四国と九州の海岸にも見られる。東北地方や北海道にはここに多く、しばしば群生する。

写真8 ショウジョウバカマ（ユリ科）

山中の少しうつた草地などに生える常緑の多年生草本で、根茎は細かく茎である。葉は根生から多数ロゼット状に地に張り出している。楕円形で長さ5~18cm、裏面無毛。花序は次第に狭くなり、裏面無毛、上面にはやや光沢がある。花、長さ10~17cmの花茎が1本茎から立ち上がり、上部に広漏斗形で普通は紫紫色の花が3~10個集まっている。花被片は線状倒卵形で長さ約1cm。花舌ではごく普通、分布は北海道、本州、四国。

写真9 ヒメシャガ（アヤメ科）

ヒメアヤメと共に世界で一番小さく愛らしいアヤメの一種で、高さは大きいものでせいぜい30cm。葉は單葉で、長さは花茎とはほぼ同長。花は淡紫色で2~3個花茎の上部につき、延長4~5cm。分布は北海道南部から東北地方を経て笠置、四国に達し、主に山地の林中に生えるが、山地ではごく普通で、五片葉群生して咲く時はまさに美しい。昭和38年5月10日、東北大學理學部附屬植物園にて写真附。時にヒメシャガ開花。翌39年元旦より剥製「成あととの森のこかげにひめしやがはうす葉にいま咲きまさる」が見表された。

写真10 カヤラン（ラン科）

主に山中常緑林内、多くは樹皮に寄生する常緑多年生草本。葉は細く多数の葉緒で包まれ、長さ5~10cm位で各所から多数の灰褐色の少し平らな葉りくなった気泡を出す。葉は倒卵形または倒卵形円形で長さ2~3cm。質が厚く暗緑色で光沢なく3列互生し横に水平に並ぶ。成長した葉の裏、葉の中はどちら側も縦の筋を出し、先端に4~5個の淡黄色の長7mm内外の小さな花をまばらにつける。果実は褐色で、細長い円錐形で下垂し、長さ3.5~5cmに達する。写真的果実は未熟の状態。分布は本州（東北地方南部以外）、四国、九州。

写真11 ウワバミソウ（イラクサ科）

普通山中の温帯の陰地の斜面や崖などに群生するやわらかい多年生草本。根茎は細かく多肉で紫紅色。葉は単葉し太く平行で長さ約30~40cm。葉は無柄で2列に互生し、裂片形または倒卵形円形で長い鋸歯があり、長さ5~10cm、先端は深くにとがる。葉脈異様。鱗片も葉先も小さく、4~6月頃集まって小さな花序となって葉腋につく。繁殖地では重要な山菜の一つで、ミズ、ミズナ、アラミなどの俗称で知られている。分布は北海道、本州、四国、九州。

写真12 エゾアシサイ（ユキノシタ科）

山中のやや温帯の林の中などに生える高さ1~1.5mの落葉低木で、草は寄生分枝する。葉は対生し、近似のヤマアシサイより大きく、長さ10~17cm、幅6~10cm、広卵形または倒卵形円形で鋸歯がある。花序はヤマアシサイより大きくて10~17cm、葉の脇に互生し、裂片形または倒卵形円形で長さ2.5~4cmあり、萼片は3~5枚で倒卵形または広卵形。蒴果はヤマアシサイよりも大きい。分布は北海道の西海岸から本州（東北地方、北陸地方以西の日本海側）。宮城県では英勝山、男鹿川等に見れるが、青島山やその附近に野生が見つからない。絶滅の危機はおそらく終息であろう。毎年7月その青紫色の美花が参拝人を楽しませる。

写真13 散策路ぞいのユズリハ（トウダイグサ科）

根元から見事に空で伐られたユズリハである。やなことに切口附近から不定芽がのびだし数本の新條ができる。見下新條のうち一番長いものは35cmもある。今後の成長発達を期待している。ユズリハは暖地の常緑林内に生える單葉異様の高さ4~10mの常緑高木。葉は長卵形で両面無毛。質が厚く滑らかで、上面は緑色、下面は白緑色。長さ15~20cm。枝の先に葉って互生する。分布は本州の宮城県から西の太平洋岸、四国、九州、朝鮮南部。和名は説く葉を意味し、日出度い木とし昔から新年の飾りとする。

写真14 アオハダ (モチノキ科)

山地に生ずる落葉高木で、高さ10m内外。樹幹の外皮はうすくやや灰色で、こぶ状の小突起が散在する。内皮は緑色。枝に長枝と短枝がある。葉は互生1-2回の葉柄を具え、短枝の端に束生し、葉身は膜質、葉軸で先が尖り、長さ4-7cm、幅2.5-4cm。下面は淡緑色で光沢がある。花は5-6月頃開き、雌雄異株、小さくて短枝の上部附近に集ってつく。緑白色であまり目立たない。果実は小さく球形で直径7mm。秋になると紅く熟して美しい。分布は北海道、本州、四国、九州の山地に普通で、特に東北地方には多い。和名青葉は内皮の色からきたものである。園子植物園の下のアオハダは本文中に記したが、珍らしい大木で、樹幹の直径1.8m、ほとんど基部から西北および東と西の3方に分れるが、西北幹は近くで地上1.5mの幹間は28cmある。東西幹は太く、基部より高さ96cmまで密着する。東幹は地上1.5mの所で直径90cm、西幹は80cmある。和名は果実をつけた枝で、上記とは別物のものである。

写真15 イイギリ (イイギリ科)

成長の早い落葉高木で各地の山林中に散発的に生える。幹は直立してそびえ、高さ10-18mに達し、枝は幹に段状に輪生し水平にひろがる。葉は互生し、葉軸は長く上端、時に下端近くにも腋を見える。葉身は上面深緑色、下面は白緑色。葉肉で尖り、底部はやや心形、縫合部がある。葉長10-20cm、幅6-20cm。5-6月頃葉端に円錐花序が垂れ下り、多數の帶緑色の花が開く。雌雄異株。果実は丸く径8-10mm、熟して赤くなる。熟した果実は落葉後もながく樹上にとどまって下垂すること美しい。分布は北は太平洋岸は宮城県、日本海側は青森県に連するが、主に岐阜地方に多く、特に本州は近畿以西、四国、九州に普通。なお琉球、台湾、朝鮮半島、中国にも分布する。和名は葉が大きいので、葉面を盛る葉として利用したからという。紅葉には老木を見ない。青島山には樹高約18m、地上1.5mの幹幅1.57mのものがある。仙台では高麗方間に最も多く見られるが、それより北では稀である。宮古は秋季落葉斑や赤茶色の果実が下垂している所。

写真16 カクレミノ (ウコギ科)

常緑の小高木で高さ9m内外。宮瀬坂庭園の林中に生える。幹は直立して分枝する。葉は枝の先の方に互生し、三全裂があり、無毛で質が厚い。上面は深緑色で光沢があり、下面は淡緑色。若木の葉は人形でしばしば五つに深く裂け、木が大きくなると3裂の葉が多くなるが、老木では全形で倒卵形や卵形の葉が多い。花は8月開き、果実は指円形で秋に熟して黒紫色になる。分布は本州（福島、石川県以南）、伊豆諸島、四国、九州、琉球（沖縄島以北）。わが種々類のカクレミノは高さ約6.5m、樹幹の直径は36cm、地上1mで28cm、地上1.5mの所で二大枝に分れる。写真是果実をつけた小枝。

写真17 ミズキ (ミズキ科)

ある所の山地に見られる高さ10mほどの落葉高木。幹は直立し、枝は幹上に段になって輪状にてて枝にひろがる。小枝は冬になると美しい紅色になる。葉は互生し葉柄長く、葉身は全縁で広卵形または広橢圓形で先が尖る。表面は緑色、裏面は帶緑色、葉長5-12cm、幅3-8cm。開閉は数多く上方に向かって曲る。5-6月頃小枝の端に白い小さな花が複数に密着して咲き目をひく。果実は丸く径6-7mm、熟すると紫紅色から紫黒色になる。分布は南千島、北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島、台湾、中國。和名東方ではダンゴキの名でよく知られている。

写真18 オヤリハグマ (キク科)

山丘丘陵などの林中に生える高さ30-80cmの多年生草本で、茎は直立する。葉は散生し、葉葉は大形で葉柄が長く、葉身は長さ10-15cm、幅7-14cmで三回複葉。上部の葉は次第に小形となり、葉柄は短く、切れ込みも浅にはなくなり無刺となる。初秋葉の上部が枝分かれして円錐状の頭花をつける。頭花はただ一個の管状花からなり、花冠は純白色で径1.5-2cm。五つの細長い裂片の裂片にわかれて開出する。分布はせまく、実業の山地から東北地方の中部まで。仙台ではごく普通に見られ、その果実は氣臭あり、花もまた氣臭にも注意そのものである。昭和3年9月仙台古事記館にて、筆者は満樹のオヤリハグマを前にし、直接農林省牧野富太郎博士から、先生が昭治23年(1890)8月16日、

後日ソツツの標虫発見で名をあげられた池野成一郎先生と同行、懇親の酒宴と中間でこの植物をはじめて見る。同25年命名発表されたとの話を伺った。その時江邊にも和名の由来を尋ねるのを忘れてしまった。和名オヤリハグマは「底くて立派的な根花を柏の樹にみたてたもの」と説く本もあるが、筆者の意見では、これはむしろ三中製の葉形を山形後の樹、あるいはそれに柏をかぶせた形に擬したものと思う。カシウバハグマ、クルマバハグマ、葉は異なるがトッコウハグマ、モミジハグマ等葉の形や配列による命名の多いことに留意したい。

通　記

本文でも述べ、目録にも掲げたヒイラギイシテンは、菅谷・石川両氏も確認していたが、昭和55年9月11日に筆者が調査に行った時には姿を消していた。「散策路」からは数メートル離れた所に生えていたが、何人かが持ち去ったものと見られる。しかし本種の野生化はよほど珍らしいので、参考のため収めて日暮中に残した。

経ヶ峯の地盤・地質

奥津 春生

まえがき

今回までに各種の調査を行なった瑞鳳殿は、伊達政宗の時代に、この峯の虚空蔵尊に經典を奉じたところから、経ヶ峯と呼ばれているが、ここには伊達家三代の政宗・忠宗・樹宗の三公の靈が祭られている。また、ここは空襲によって建物が焼失している。

さらに、この付近一帯は良質な亜炭の分布地であり、明治時代から開発されている。この亜炭は“うわひ”（大年寺層下部），“ほんび”（八木山層上部）の2層であって、両層共に開発の対象となった。ただし、鉱業法によって、墓地周辺の採炭は禁止されていたが、伊達15代日の興宗氏によって、第二次世界大戦後の燃料事情解決の一助として、一帯の亜炭採掘が許可されたものである。その後、エネルギー状況の変化により、採掘が次第に中止され、坑道がそのまま放置されたために、風化作用によって、坑道の支柱や残された炭柱が老化し、支持力を失なって、天井が陥没し、全般に地表の局地的なたわみの現象が現われた。これらの現象は、石段・石躰・石垣・記念碑など、特に長大な建築物に認められ、さらに重量の大きな箇所では地盤沈下が発生したものである。

これらの現象は次第に範囲と程度を大きくするものと予想され、亜炭坑関係資料の収集、ボーリング、試掘などによる地質調査、地表踏査、さらに岩の工学的性質を知るための現位置試験（平板載荷）、標準貫入試験、岩の σ -軸圧縮試験なども実施している。

この結果、昭和44年にはフライアッシュ工を使用して孔内の空洞を充填する工事が行なわれた。ただし、この工法は主として靈廟の土木・建築構造物の直下の坑道のみを対象としているために、周辺の杉林などの一部では転倒や衰退する樹林も観察されている。また斜面の一部には小規模なすべりの発生がみられ、斜面下の瑞鳳守や、民家についての防災的な見地からの本格的な調査対策が望まれるところである。

特に、昭和53年6月12日の宮城県沖地震によって、本殿東側の地山に再びクラックが発生し、この発生位置から総合的に判断して、長さ100m、幅50m程の地すべりである可能性が強い。

以上、今までの経過を簡単に説明したが、これまでの調査結果の概要を総括してみよう。

第1章 地形と地質のあらまし

この経ヶ峯は地形的に青葉山丘陵と呼ばれる丘陵の東端にあたっており、仙台の市街地に突出した形となっている。この峯の西側は旧竜ノ口峡谷が通っていたところであり、あん部となっている。これはかって仙台上町段丘面形成期に向山～越路を経て、広瀬川に注いでいた支流が、広瀬川の曲流発達によって側面から浸食を受けて、現在の位置で広瀬川に流入するようになったもので、比高（約60m）が急変したために滝が形成され、沢底の浸食量が大となって峡谷となり、現在の竜ノ口峡谷が形成されたものである（図2）。

細分すると、この経ヶ峯は、中峯・西峯・東峯よりなっており、前述したあん部は2代・3代の墓所となっており、中峯と西峯の間に相当する。東峯には端鳳殿が建てられていた。

北西側は相対的に急斜面、南東側は緩傾斜面である。山頂の分水嶺は北西によっている。これらは風化の受け方の差によるものと考えられる。東側は広瀬川の浸食によって急崖となっている。なお、木戸北と東斜面には小規模な崩壊一地すべり地形が認められる。（図4）。

次に地質についてであるが、図2に示すように、下部から上部に新第三系鮮新統の八木山層、花崗岩（広瀬川凝灰岩・北山層）、および第四系の段丘レキ層などが分布している。これらは図1に地質柱状図として示すものとする。

このうち、八木山層は陸成で泥岩・砂岩・亜炭などからなり、この層の上部には“ほんび”と呼ばれる亜炭層が発達している。この上には、砂岩・泥岩・亜炭からなる人年寺層が分布し、下部の亜炭層は“うわひ”と呼ばれている。この層は一応海成とされ、部分的に貝化石を含んでいる。この上の第四系は青葉山層と呼ばれるレキおよびロームからなっている。

このほかに、ここには古い盛土が分布している。

第2章 端鳳殿鉱害対策の経過

1. 昭和20年頃

- 亜炭採掘許可 第二次世界大戦後、伊達典宗氏（第15代）によって、戦後の燃料事情解決の一助に墓地周辺の採取が許可。

2. 昭和26年10月

- 鉱害の発生 伊達家より、通産局鉱山部長に亜炭採掘中止の要請。

3. 昭和28年3月

- 現地調査 東北大（奥津春生）、通産局鉱山部、仙台市土木部の地表部、抗道口踏査。

4. 昭和41年8月

- 第- -次調査

目的：壇鳳殿再建

調査：①鉱害微地形踏査

②ボーリング、オーガーボーリング

結果：①抗道分布（抗口が東と南にあり、本殿木櫓内には到達していない）。

②那炭層の位置（主として地表下25~30mの八木山層のはんび、一部北東隅は大年寺層のうわひ）。

③石室の位置（深さ1.3mで石蓋が、周辺は1mでレキ層）

④N値（1.5~2.5m風化凝灰岩N>7、2.5m~凝灰岩N=22）

⑤その他、北東木櫓外に陥没、小すべり分布

5. 昭和44年3月

- 第二次調査

目的：壇鳳殿再建のための地盤強化対策工検討資料。

調査：抗道に達する三ヶ所の堅抗

結果：S3抗は炭柱にあたる。S2抗には空洞があり、末端より上は二次崩落が発生、4mまで影響していた。地表の変状（かぶりの浅い部分の陥没、すべりは抗道の存在によることを確認）(図4・5) 対策工法（フライアッシュ圧入工法と決定）。

6. 昭和45~48年

- 対策工事

工事主体：鉱害復旧事業団（設計・施工）。

工費：約1億円

工事：①フライアッシュ注入工

②変状構造物修復

目的：抗道の閉塞、地盤強化。

方法：φ75~100mmのボーリング孔よりフライアッシュを水で流動化させ注入し、

坑口にはフィルターをセットして脱水させる（排水はなかった）。

7. 昭和49年11月

○第三次調査

目的：本殿建設予定個所の支持地盤の再確認、注入効果の判定。

調査：①ボーリング2ヶ所

②地耐力試験

結果：①地表面亀裂の増加

②ボーリング水の浅層（-3.5m）での漏水あり。

③相対的に浅い部分の亀裂には注入されていなかった。

8. 昭和50年

○本殿・拝殿建設工事

①設計耐力、本殿15(t/m²)、有効11(t/m²)、拝殿4(t/m²)

②本殿 5.42m×5.42m

拝殿 3.6m×14.4m

9. 昭和53年7月

○第四次調査

目的：資料館建設基礎地盤調査

調査：①ボーリング2ヶ所

②標準貫入試験

結果：B53-1孔地表より凝灰岩N>50

B53-2孔5~6m盛上層分布？N=8~20

10. 昭和54年

○第五次調査

目的：総合調査の中での地盤調査、ボーリング、堅坑

第3章 地表に見られた変状

図4に示したように、点線は坑道の位置であるが、坑道は連絡、運搬用であって、坑道以外の所は資料によると、炭柱を残して掘削した跡と考えてよい。凡例には、陥没と表層の沈下の2つあるが、これは相対的なもので、被害の規模の差と考えることが出来る。同様に、石垣や石壁なども、陥没や沈下個所にたまたま存在したためと、記念碑などのように、そのものの重量が、陥没・沈下現象に一役かっている場合もある。また、竈屋造成の際には、切り取った

土砂を一部で盛土に転用しており（B-53-2孔）坑道上の岩盤の厚さも地表面の形では判断出来ない要素がある。

さらに、大年寺層下部の“うわひ”と、八木山層上部の“ほんび”的採取が所によって異なっているので、見かけ上、地表の変状に規則性はないようである。

一般的な傾向として、4m以下のかぶりでは、地質にかかわらず確実に影響が現われておらず、7m以下のやや深い坑道では局部的に、また20m以上では直接的な影響は現われていない。しかし、このような所でも、後に述べるボーリングや試掘の結果では、坑道天蓋の崩落が4~5mまで及んでいる所も観察されている。また崩落しないまでも、クラックの発生がさらに上方に及んでいることが認められている。

地盤沈下は、政宗の墓の東側と北側に、また忠宗・綱宗の墓の東側・北側・西側などに認められる。記念碑や石垣では構造物を中心に円~だ円形のたわみ状の沈下が認められ、数十cmの沈下量と推定される。範囲は肉眼的に5~15m位である。

さらに坑道沿いに開口したクラックが認められる個所、風孔跡で擂鉢状に沈下した所もある。また、前途した瑞鳳寺裏は地震前にも小規模なすべりを起して、裏の池が埋っている。杉の巨木では3本ほどが傾斜している。

第4章 地表構造物の変状

主要な地表構造物の変状としては、厨子（墓標）台座の不等沈下、および台座南側を通るクラックで、これは北西~南東方向に連続している。

これらは次のようにになっている。

- ①前列の石は礎石の一部（来迎柱）に乗った形で、この礎石はほぼ地山の岩に達している。
- ②中・後列の石は粘土とレキの互層を基礎としている。
- ③前列の石は本来、沈下が原因なら後屈するはずが前押みとなっている。
- ④南側はたわみが発生し、中段がふくれている。
- ⑤台座南側にはクラックが存在している。

これらの原因としては、永年の雨水による粘土層粒子のバイピングが原因のようで、後述する石室下の盲暗渠様の排水溝から、粒子が流出したために沈下したものと考えられる。前列の石の前屈の原因は、礎石の部分が石室側への粒子のバイピングによる不等沈下で倒れたか、岩の風化が石室側では上と横から進行したために石室外の支持が不足で倒れたか、あるいは地震時の水平力で、バイピングによってルーズになった石室外に滑動し、その結果上部の石が前屈

したかのいずれかであろう。

南側面のたわみは、前述した南東～北西のクラックの存在が、あるいはこれが地すべりによる沈降帯に相当しているためか、あるいは四隅より中央がより多く沈下したために石室の存在とも関連して、隅角を中心に倒れ、その結果、南側側面がふくれたものであろう。

右座南側のクラックは開口していることから、引張りクラックと考えられ、しかもシンプルな形から、陥没や沈下とは考えられず、すべりによる滑落崖と考えた方がよい。さらに岩盤中の層理面、または断層あるいは節理などに沿った変位と考えられる。これはその後の掘削の結果、2.5～3.0mまでも認められる。

第5章 地質調査結果

図4に示すB54-1～B54-3を結ぶ線で横断面を作成した。その結果、最下位に2層の亜炭および凝灰質泥岩が分布し、北から南にごくゆるく傾斜している。この上には空洞があるが、これは“うわひ”的探査跡と考えられる。従って大年寺層に相当しよう。これらは凝灰質砂岩を主体とし、同質泥岩が不規則に夾在し、一部に貝殻が混入している。この上にはB54-1孔では広瀬川凝灰岩と呼ばれる凝灰岩が発達し、その上に青葉山層のローム、レキ混りのロームが分布している。

B53-1～B53-2孔では段丘崖の端に近いためか、あるいは切土したためか、上の青葉山層が認められず、すぐ岩盤が発達している。またB53-2孔では古い盛土が分布している。

試掘の結果では図5に模式的に示すような第一次崩落、第二次崩落が観察され、地表にもクラックが発生している。

昭和53年7月の資料館予定箇所（押殿北側）のB53-1孔では表面から軟岩が分布し、N値も50以上となっている。B53-2孔側は盛土が分布し、N=8～22となっており、これが5～6mまで連続している。以下は亜炭層と岩となる。この亜炭層は“うわひ”に相当する。

第6章 地盤の強度と支持力

6-1 標準貫入試験結果

標準貫入試験結果から岩の許容支持力を推定してみよう。これらは亜炭層上部と下部に分けるものとし、盛土やレキ混りローム層は圧分して求める。計算用値としては、平均値 \bar{N} （ $\frac{1}{2}N$ ）不偏分散の根値を用いるものとする。

a. 硬岩質砂質（亜炭層下位）

$$N = 31 \cdot 38 \cdot 49 \cdot 46 \cdot 34 \cdot 47 \cdot 21 \cdot 27 \cdot 41$$

$$\bar{N} = 37.1$$

$$[N] = \bar{N} - \left(\frac{1}{2}\right)\sigma = 37.1 - 0.5 \times 9.64 = 32.3$$

$$\phi = [(\sqrt{12(N)} + 25) + (0.3[N] + 27)] \times 0.5 = 40.7$$

$$F = 1000 \tan \phi = 859.8 (\text{t/m}^2) \text{ プロトジャコノフ}$$

$$qa = \left(\frac{1}{2}\right) F = 71.7 (\text{t/m}^2) \quad \text{田中治雄}$$

b. 硬岩質泥岩（亜炭層上位） 0~5 m風化部

$$N = 5 \cdot 12 \cdot 17 \cdot 23 \cdot 27 \cdot 6 \cdot 5 \cdot 26 \cdot 24$$

$$\bar{N} = 11.5$$

$$[N] = 11.5$$

$$\phi = 33.60$$

$$F = 664.4 (\text{t/m}^2)$$

$$qa = 55.4 (\text{t/m}^2)$$

c. 硬岩質泥岩（亜炭層上位） 健岩

$$N = 30 \cdot 36 \cdot 39 \cdot 48 \cdot 42 \cdot 47 \cdot 35 \cdot 37 \cdot 38 \cdot 45 \cdot 51 \cdot 39 \cdot 30 \cdot 44 \cdot 32 \cdot 35 \quad (100\text{以上除く})$$

$$\bar{N} = 38.7$$

$$[N] = 35.6$$

$$\phi = 41.7$$

$$F = 890.2 (\text{t/m}^2)$$

$$qa = 74.2 (\text{t/m}^2)$$

d. レキ混りローム層

$$N = 31$$

$$\phi = 40.3$$

e. 盛土層(粘性土)

$$N = 8 \cdot 14 \cdot 16 \cdot 20 \cdot 23 \cdot 32$$

$$\bar{N} = 18.8$$

$$[N] = 14.7$$

$$C = 9.18(\text{t}/\text{m}^2)$$

6-2 岩石試験結果

昭和49年11月の報告書によると、B49-1、B49-2の試料によって、一軸試験を実施している。

B49-1孔 7.5m 砂質凝灰岩

$$r_t = 1.953$$

$$F = 235.0(\text{t}/\text{m}^2)$$

B49-2孔 8.65m 砂質凝灰岩

$$r_t = 2.131$$

$$F = 213.0(\text{t}/\text{m}^2)$$

今、安全率を $\frac{1}{2}$ %とすると

$$q_a = 71 \sim 78(\text{t}/\text{m}^2)$$

となる。

第7章 発掘の結果

7-1 石室発掘の結果

本殿建築に際して、石室を発掘した結果、次のような点が判明した。

- ①南壁の中段が5cmほど内側にたわんでいる。
 - ②蓋石の沈下によってか、たわみが発生し、その結果へアクラックが生じている。
 - ③東壁の中段の右1ヶ所が内側に脱落している。
 - ④石室は33個の石からなっている。
 - ⑤石室の基礎は盲崎果らしいレキ層があり、排水効果が高い。
- 東壁の脱落は地表のクラックの位置と関連して発生したようである。南壁のたわみを厨子座の変状の項で述べたような原因の一つあるいはいくつかが複合して発生したものである。

7-2 石室の地形上の位置

発掘の結果、石室と地表の距離が4'ほどずれているが、このことは次の点と関係があろう。

- ①未風化岩の分布
- ②南側本殿建設用地の確保
- ③排水方法
- ④宗教的な方位観

7-3 本殿基礎発掘

本殿の礎石下を発掘した結果、次のような点が判明している。

- ①礎石は地山の岩に支持させている。
- ②岩盤は300年間に約1.5m（年間5mm）ほど風化しているようである。

第8章 当時の敷地造成の方法

造成前の地形の推定から、2mほど切り取って造成したもののように、盛土の分布や切り取り個所の面積から推定して、概量150m³と考えられる。

- ①盛土位置 → 南西側
- ②切り取り高 約2m
- ③盛土量 150m³
- ④盛土個所の表土は前もって除去してある。
- ⑤拝殿付近の急斜面は4段に段切りして盛土している。
- ⑥本殿・拝殿の一部は2段に段切りしている。

第9章 2代・3代墓所付近の調査

本殿北西の2代忠宗・3代綱宗公の墓所周辺も陥没が甚しく、昭和53年12月～昭和54年1月に4ヶ所でボーリングを実施している。

この結果、南端のB54-1孔では炭柱にでもあたったためか、亜炭坑道らしい痕跡は認められなかつたが、その他の3孔では

B54-2孔 20.0~21.3m (G. H. = 28.04~26.74)

B54-3孔 18.0~19.3m (G. H. = 31.65~30.35)

B54-4孔 18.5~19.6m (G. H. = 30.45~29.35)

の位置に坑道が認められた。

これらの位置と高さから、亜炭層(ほんび)の走向・傾斜を推定すると

走向 北37° 東

傾斜 4.83° 南東落

となる。つまり、相対的に北西側ほど上被りが薄くなることになる。

また、4孔の結果では“うわひ”に相当する大年寺層下部の亜炭層は認められていない。

従って、この周辺の陥没は主として“ほんび”(八木山層)の掘削によって発生したものと考えてよい。

ここで、2代・3代墓所周辺の変状を見ると、ほとんど北西(墓所背面)であり、地表面が長円形に陥没している。さらに敷地にはほとんど接した形となっている。

このほか、墓所の北東端にもかなりの大きな陥没個所が存在する。相対的な傾向として、

①陥没個所は亜炭採取個所の炭柱の分布する所よりも坑道の上に多い。

②坑道でも分岐点の所が直上に多い。

となる。

ただし、上の関係と全く合わない所もあり、坑道の規模や、支保工と関連しているようである。いずれにせよ、次第に風化部が拡大していくようであり、早急な調査・対策が必要である。

第10章 調査結果の総括

以上の結果を個条書にまとめると次のようになる。

① 数次にわたる調査を通して、地盤変状の原因を推定すると、坑道の落盤が直接地表に抜ける場合は、かぶり深度が4~5m以内の場合で、その他は坑道の坑木の老化、腐朽による地盤のたわみが原因しているものとみてよい。

局部的に陥没様の地表沈下は、たわみ部のうち、地盤の支持力の弱い深層風化のはげしい部分にあらわれたものと思われる(豊原・ボーリング調査結果)。

② 石造構造物の変状も同様の理由であろう。

③ 北側の瑞鳳寺側の斜面は地すべりを起している可能性または今後地すべりする可能性が強い。

- ④ 建造物の基礎地盤はフライアッシュ工法によって充填されているので心配はないが、これらの工法は建物直下だけなので、広範囲な対策が必要である。
- ⑤ 2代・3代の墓所は“うわひ”が分布している可能性はなく、陥没はほとんど“ほんび”の坑道個所となっていることなどから、被害の増大は確実で、その結果すべりでも発生すれば金剛沢地すべりの例のような被害も発生する可能性がある。
- ⑥ 今後の建物はすべりの発生を予想してプレボーリングや深廻りが望ましい。また最低基礎の直下だけでもグラウト工事を実施すべきであろう。

おわりに

本文をまとめるにあたって、資料を提供された宮城県教育委員会、執筆に協力された光洋技建株式会社の佐藤恒氏、資料整理・原図作成に協力された菅並茂樹氏に感謝の意を捧げたい。

〈参考文献〉

- 1) 男津春生：瑞鳳殿池貯水池 昭和41年 東北経済開発センター
- 2) 宮城県免許会社：福島県喜多方市調査報告書 昭和44年
- 3) 国際鉱業株式会社：福島県喜多方市に伴う地質調査報告書 昭和49年
- 4) 四摩軒業株式会社：福島県喜多方市調査報告書 昭和53年
- 5) 宮城県免許会社：仙台市経ヶ原地区ボーリング調査報告書・ボーリング工程報告 昭和54年
- 6) 男津春生：福島県喜多方市地盤と地盤変動調査、免振底支抗系から考える（伊東信雄編、地盤設・伊達政宗の墓とその進歩、19-30頁、昭和51年、瑞鳳殿再建期成会）
- 7) 男津春生：大仙台地の地震・地下水 昭和49年 立文堂

地質時代	地層名	厚さm	岩 石	固結度	堆積環境化石	開発地質
第四紀 洪積世	段丘レキ層	1~3	表土・盛上 4~7 混・砂・レキ	未 a1	河成	
	久保田山層	2~5	火山灰(ローム)浮石	a1	火山成 植物	火 山灰 水 素 ベリ ヤ
	古葉山層	10~20	レキ・泥	河成		湖 水
第三紀 新世	大年寺層	20~40	砂岩・泥岩・頁岩	半 固 結 b2	海成 貝(多) 植物	水 素 ベリ ヤ
	八木山層	10~30	泥岩・砂岩・頁岩	陸成 植物	埋 木 亞炭	
	花壇層*	10~20	浮石質凝灰岩・ 砂岩・頁岩	火山性 陸成 植物	カオリ ン土	
	竜ノ口層	40~60	泥岩・砂岩	海成 植物	貝(多) 深 地 下 水	

*花壇層：広瀬川凝灰岩・北山層

図 1

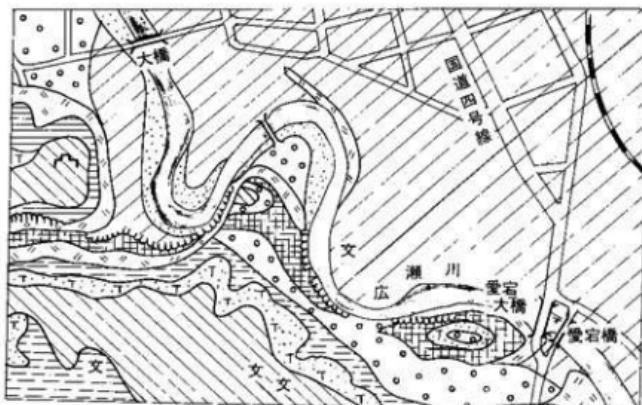


図 2

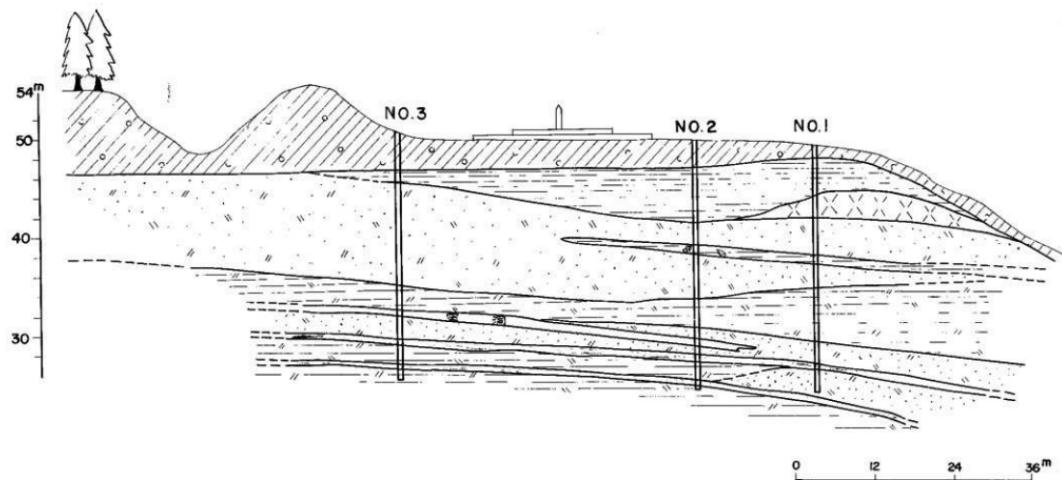


図3 調査用ボーリング及び壁坑の位置図

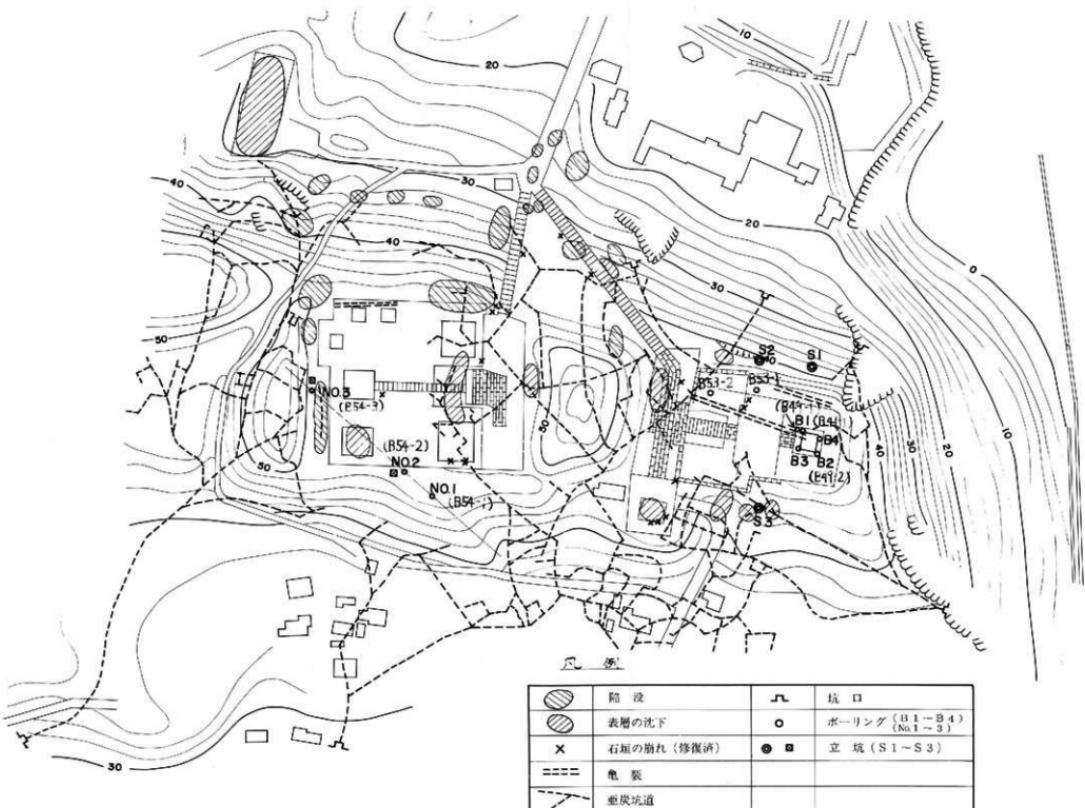


図4 緒ヶ峯一帯の亜炭坑道の分布と鉱害発生状況
付・地質調査用ボーリング及び豊坑位置図

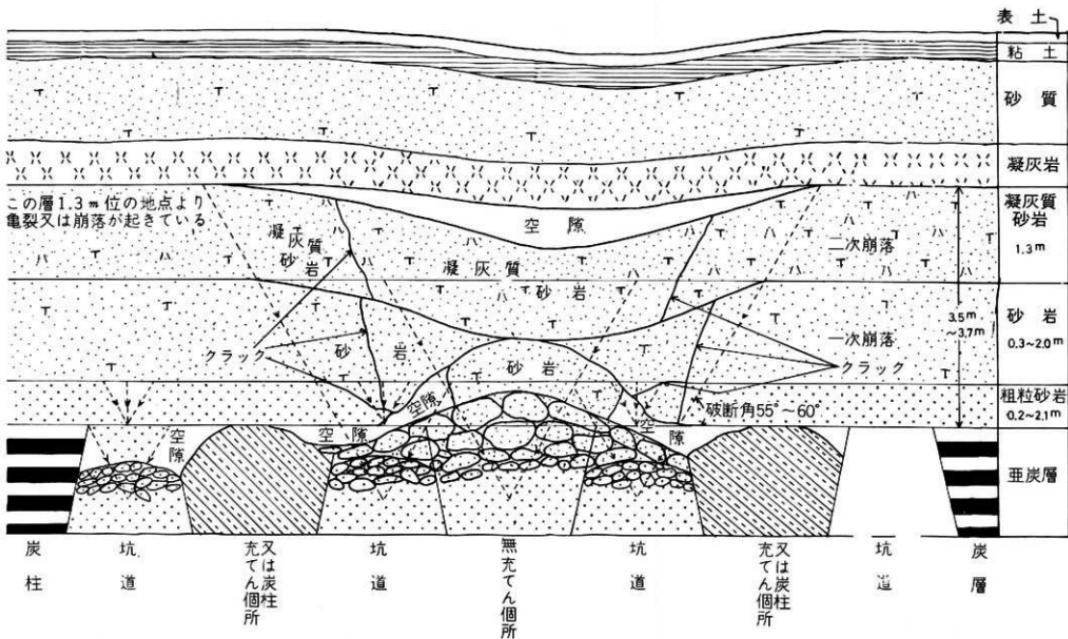


図5 亜炭採掘跡地に起る地盤沈下の進行過程

経ヶ峯の御靈屋建築

佐藤巧

まえがき

経ヶ峯には仙台藩祖伊達政宗、2代藩主忠宗、3代藩主綱宗の御靈廟、そして9代藩主周宗、11代藩主齊義、同夫人芝庭の御廟、および歴代藩主の公子、公女の御墓所、即ち御子様御廟がある。政宗公御靈廟を瑞鳳殿、忠宗公御靈廟を感仙殿、綱宗公御靈廟を善応殿と称し、9代、11代、その夫人の廟所を妙雲界と称している。

御子様御廟は、それぞれ埋葬の墓所に石碑、石塔を建て、簡単な覆屋で囲ったものもあった。妙雲界の三廟はいずれもその形式を同じくし、墓碑を建て、覆屋（雨屋）で囲うたものである。これに比し、瑞鳳殿、感仙殿、善応殿は墓所に石組の壇を築き、その上に宮殿形の厨子を置き、中に尊像を安置し、これに覆屋を設けて本殿（御靈廟）となし、さらに拝殿以下の諸施設を配した見事な建築群であった。

明治初期、瑞鳳殿の一剖のみ旧態を遺し、感仙殿、善応殿は整理され、本殿以外は總て破却された。瑞鳳殿、感仙殿の建築は特に意匠的に優れ、江戸初期の貴重な崩壊として昭和6年、国宝に指定された。しかし昭和20年、不幸にも戦災によって悉く灰燼に帰し、三殿ともに厨子を安置した石組壇・四半壁の石床・柱礎・地覆石・石段・石垣等を遺すのみとなった（写真1～8 参照）。

建造物は焼失したが、廟墓としての姿はなおよく保持されている。またこれらから昔日の建築形態をもう窺うことが出来るので、遺跡としての資料的価値もなお高いと言える。この中において、瑞鳳殿は最近、不燃材によって、旧姿に近い形で復興された。

以上の如く、現在では創建期からの建築遺構は皆無であり、また、利用出来る古絵図、古写真、資料も殆んど瑞鳳殿に限られているのは遺憾である。感仙殿、善応殿はともに瑞鳳殿に倣って建築されているところが多いので、感仙殿、善応殿については概略に留め、瑞鳳殿につき、やや詳細に述べることにする。

瑞鳳殿の門前から石階が通じており、この石階を登りつめたところに、もと経ヶ峯廟墓群の、いわば総門に当る瓦葺の坂下門があった。この門を潜ると道は三方に分岐する。右道は御子様御廟に通じ、中央道は石階により感仙殿・善応殿・妙雲界に通じ、左道は同じく石階によって瑞鳳殿に通じている。瑞鳳殿は経ヶ峯の東側に位置して西面し、感仙殿・善応殿は西側に位置

して東面する。即ち方位的には向い合う関係となる（挿図3）。

第一章 瑞鳳殿

1) - 1 造修営の概要

経ヶ峯の地は古くは根岸村黒沼の萩ヶ崎と称されていたが、満海上人が萩ヶ崎の東峯に万部經を納めたので「満海上人経ヶ峯」と呼ばれるようになったとの伝承がある。さらに政宗が虚空藏をこの地の西峯に移してから虚空藏山とも称されていた。この虚空藏は感仙殿の経常に際し、再び移転されたので、やがて「経ヶ峯」⁽²⁾が一般的呼称として定着したようである。

伊達政宗は寛永13年（1636年）4月18日、経ヶ峯に登り、同20日に病を押して参勤のため若林を発駕し、同28日江戸桜田の上屋敷に入り、5月24日に同邸で歿した。遺骸はその夜のうちに江戸を発し、6月3日に仙台に到着、ひとまず北山の覚範寺に安置し、翌4日にその遺言に基づき、経ヶ峯の東峯の地に、石櫃に納めて埋葬された。

瑞鳳殿の建設事情については『義山公（忠宗君）治家記録』中に詳しい記述はなく、

此秋貞山公ノ御廟并ニ寺ヲ名取邑経峯ニ御建立卯出サレ、奥山大学常良ヲ其奉行ニ命セラル。月日不知

とあり、翌14年10月24日の頃に

己未経峯貞山公ノ御廟落成ス。廟ヲ瑞鳳殿ト名シ、寺ヲ正宗山瑞鳳寺ト号セラル、今日御供養とあって、この時に竣工したことが知られる程度である。竣工時における建物種別、工事の組織、進捗状況、経費、また正確な工期についても不詳である。

創建当初の棟札、銘によれば、本殿、拝殿、鐘撞堂が寛永14年の秋日に落成しているので、他の唐門、橋廊下、御供所、涅槃門等もほぼこの時までに完成したものとみられよう。

造営総奉行は奥山大学常良であったことが棟札からも確められるが、彼は政宗晩年から忠宗代に引き続いて奉行職（家老職）の要職にありながら、他方に瑞鳳殿造営の最高責任者として活躍したのである。

監造として郡山次左衛門重裕、石田権七辰久の名が棟札に見えるが、總奉行の下にあって、工事の監督・経費・人事等全てにわたっての事実上の最高役人であろう。当然のことながら、奥山、郡山、石田氏はともに本殿、拝殿にその名を連ねているが、大工、小工は本殿と拝殿での分担を眞にしている。

仙台藩における作事奉行以下の、いわゆる作事方職制が定った時期については明らかでない

が、この後に引き続いて行なわれた仙台城二丸造営（寛永15年～16年）において、總奉行奥山大学の下に、定作事奉行である横山惣之助、油井善助が作事奉行に任命され、本門として片寄理右衛門、黒沢善左衛門の名が見えるが、ここにいう「定作事奉行」とあるのは作事方職制としての作事奉行のことと思われるが、寛永13～14年の瑞鳳殿造営に際しての監造とは、造営責任者としてこの工事に限って任命されたものようである。

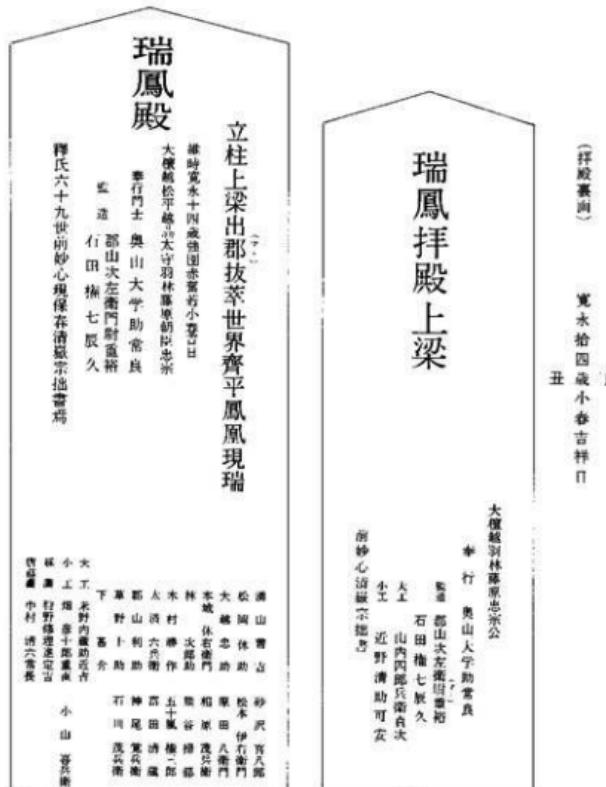


插圖 I 瑞鳳殿本殿・拝殿棟札

技術系として、本殿では大工に米野内藏助近吉、小工に畠彦十郎重直、小山喜兵衛の名が、拝殿では大工に山内四郎兵衛貞次、小工に近野清助可安の名が見える。そして本殿の縁画には狩野修理定吉、唐時則には中村清六常長が当っている（挿図1）。

発掘調査の結果、工事の順序として、まず敷地を掘り下げて石樋を造り、次にこの石樋の位置や方向を勘案して本殿の柱の基礎石、地覆石が据えられたことが明らかになった。従って本殿工事は石樋造営の時期を遡ることが出来ない。埋葬後直ちに本殿が着工されたとしても、その工期は1年4ヶ月余ということになる。正規の造営開始期を『治家記録』にある、忠宗初入部直後、奥山大学に造営奉行を命じた時以後とすれば、工期はさらに短く、1年前後に過ぎない。

将軍家の例を見ると、日光東照宮の寛永期の造営工事は約1年3ヶ月、日光大嘗院廟の工期は1年2ヶ月である。元和の日光東照宮はさらに短くて約6ヶ月と考えられており、芝増上寺の台徳院廟も6ヶ月足らずであり、ともにその工期の短いのに注目しだい。一つには幕府の造営組織力の強さを物語るものであろう。将軍家とは勿論事情も異り、直ちに比較は出来ないが、瑞鳳殿造営の背後にも技術陣の充実に加えて強力な工事組織の存在を考えなければなるまい。

本殿棟札には、奉行・監造・大工・小工・縁画・唐時則の他に19人の姓名が列挙されている。慶長時代に成る松島五大堂、同瑞鳳寺、塙釜神社、圓分寺薬師堂、大崎八幡神社等の棟札には未だそうした多数の姓名の併記されたものはない。このあと正保4年（1647年）に松島に要山公（光宗）廟が建造されたとき、奉行、廻使、大工棟梁、脇棟梁、鐵冶、畫工の他に群吏17人の姓名が挙げられている。

寛永15～16年（1638～1637年）二丸殿舎が造営されたとき、焼火之間以下御算用部屋に至る13棟の建造に関して35人の小役人の姓名が見え、また若林城御家の掾方として14人の小役人名が見える。さらに二丸の御小広間、人告院等6棟の上棟の際には小役人として27人の姓名が、また材木受取方、占材木受取渡方として4人の名が見える。

これら小役人と称された人々の中に、瑞鳳殿棟札に記された太舟六兵衛、草野十助、林次郎助、松岡休（久）助等の名が見出されるから、瑞鳳殿棟札に列挙された19人は「群吏」、「小役人」と称される類の人々であることが分る。こうした組織された下級実務型役人の存在こそ、これらの工事をよく短期間に完遂し得た原動力であったと思われ、翻って、この時点での仙台藩作事方職制の成立をば窺わせるものもある。

寛永の創建期から昭和20年の戦災に至る間に、瑞鳳殿の殿舎構成の上で大きな変化はなかつたものと見られる。このことは寛文～天和頃の図と、昭和6年時の実測平面図とを較べても首肯される（挿図2）。しかし長い間には個々の建物に何度かの修復が加えられて来ていることも疑いがない。

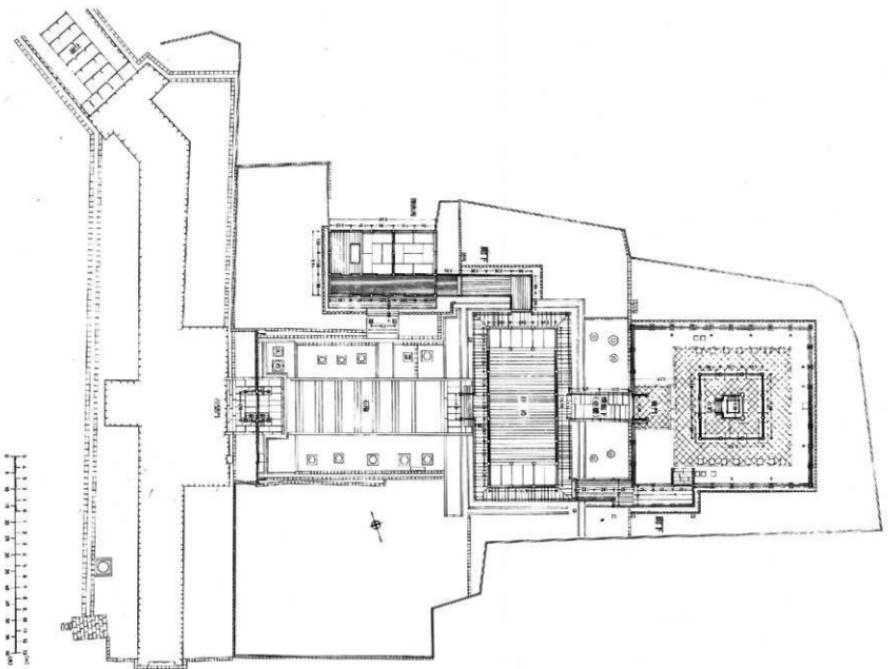


图 2 瑶基殿实测平面图

例えば寛文6年（1666年）、没後31年にしてすでに破損し、これを修復したことが「柴田朝意父子事蹟覚書」に見え、その時の献上水盤銘に

英十辛今治三十一年御廟已破損幸使予修復其事、因具此盤於廟前輪徵志者也

と記してある。特に屋根の如きは『御修復帳』の書き込みからも、しばしば葺き替えが行なわれ、材質を異にして來ているものがあることが知られる。

寛文～貞享頃の絵図にあって、元禄以降の絵図にない建物がある。拝殿の前方、向って右手に位置して、古圖に「暫届」と記された建物がそれで（付図1）

長五間横三間屋形待庵

とある。寛文4年（1664年）製作になる仙台城下絵図（写真9）および延宝6年～8年（1678～80年）製作になる同絵図、元禄4年～5年（1691～92年）製作の同絵図に、拝殿の前面に「御供所」と對稱的位置にこの建物が描かれ、それ以後の諸図にはこの建物が消失しているから、ある時期まで存在していたことは明らかである。その他に御厨もほぼ同時期に消失している（付図2）。

以上が長い間における、構成面での若干の変化とも言えるものである。

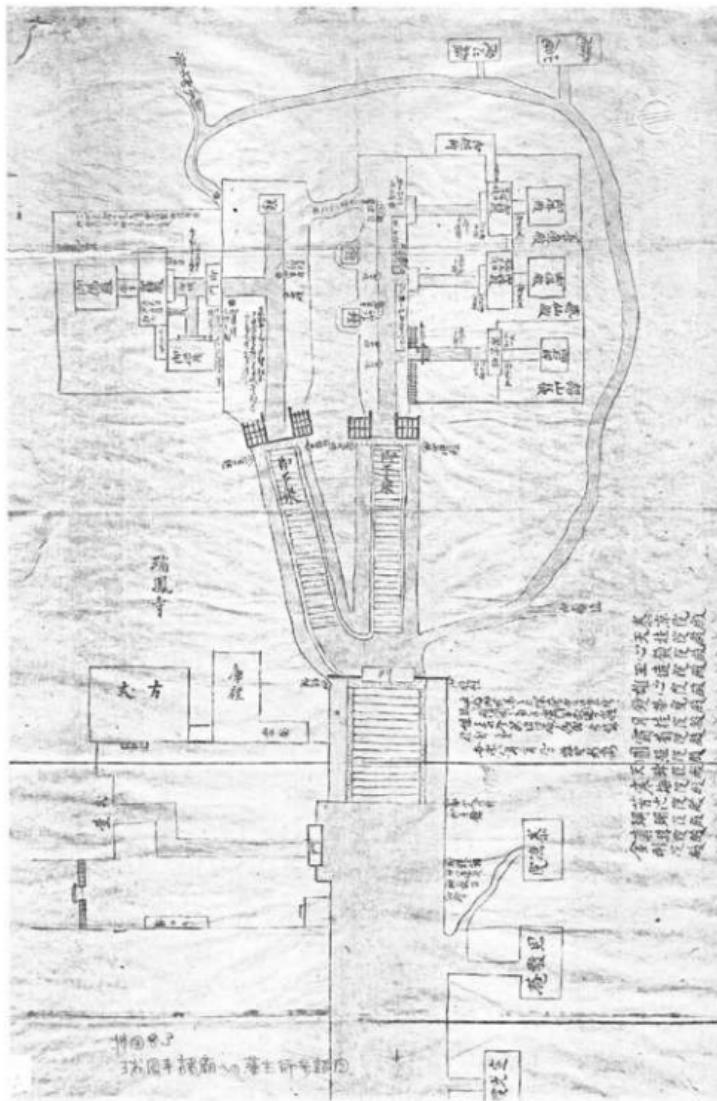
I)-2 配置・構成

坂下から石階を登り切ると、瑞鳳殿前の広場側面に出る。階段を登りつめたところに「一丈一尺五寸、角柱2本の櫻門が建つ。幕末図によれば、門の左右には木柵が続き、門の前が「下乗」となっていた（挿図3参照）。

広場の南奥に「宍丈二宍丈一尺」の鐘撞堂、そして広場の東北隅、広場に面して古くは御厨があった（付図1）。

瑞鳳殿の正面門は四脚門で、涅槃門と称された。本殿・拝殿・涅槃門は東西の軸線上に並び西面して建つ。涅槃門前の位置から、石階で22級、正面の高い位置に拝殿、拝殿より一段下った左手に御供所が南面して建つのが望まれる。御供所の南東隅から巾1間の廊下が東上、南折して拝殿の側面に接続する。拝殿前面に、御供所と對称的位置に平地が造っていて、これが先述の「暫届」と称する建物のあったところを示す。涅槃門から拝殿に至る石階の左右に獻上の石灯籠が並ぶ。

拝殿は正面中央1間分に向拝が付く。拝殿の奥、唐門を隔てて本殿が拝される。唐門は1間1戸の向唐門で、屋根は銅瓦葺。唐門の左右から玉垣が出て、本殿の四隅を巡る。本殿は方3間、正方形の平面で、屋根は宝形造り、銅瓦葺。床は上間式で、石の四半敷きで、朱迎柱2本を建て、その前面に石組塀を築き、その上に宮殿形の厨子を置き、中に政宗の木造座像を安置していた。



挿図3 瑞鳳寺諸廟への藩主御参詣圖

拝殿と唐門との間に橋状の廊下があって、両者を連結する。実測図（挿図2）に見るようにこの廊下は唐門の位置で止り、唐門を超えて本殿まで達してはいない。寛文～貞享の御修復帳古図（付図1）には本殿と唐門との間には建物は記載されていないが、より新しい御修復帳ではこの部分に、橋廊下（絵図ではこの部分を塗橋と呼んでいる）とは別に「廊下」と記されているので、ある時期には廊下状の建物が設けられていた模様である（付図2）。

橋廊下は細長い吹放しの透波式で、巾は1間、長さ3間（但し柱間は2間）で、古図に
此間地橋三間

とあるのに相当する。屋根は切妻造りで柿葺、床は板敷で、拝殿の床と同高であり、両面に勾欄を設ける。おそらくこの勾欄など漆塗りで、塗橋なる呼称も出来たものであろう。

本殿と拝殿はこの橋廊下、唐門によって連結するほかに、拝殿の背面、東南隅から別に渡り廊下が出て東進し、小さく曲折して本殿脇に通じている（挿図2）。

本殿の敷地面は拝殿敷地面より一段高く（約1mの差がある）、その境に石垣を積む。板敷の拝殿床面、橋廊下床面と、土間式（石敷）の本殿床面、唐門床面とはほぼ同高となる。この橋廊下の左右の坪にも戸上の石灯籠が配されている。この拝殿と唐門との間にある橋廊下（塗橋）は、寛文～延宝頃の図に明示され、また2代慈仙殿においても当初からこの橋廊下に相当するものが見られるから（付図3）、瑞鳳殿においても創建当初、ないしそれに近い時期に設けられたと見做される。

以上の瑞鳳殿の構成、建物配置の形式は、2代忠宗廟（慈仙殿）、3代綱宗廟（善応殿）にも大様踏襲され、江戸初期から中期に至る、伊達家靈廟建築の基準となったと考える。

廟（靈廟）は、「おたまや」、「みたまや」とも言い、先祖の尊像・木主等を安置して拝するところである。従って廟建築は、先祖を祀るために祠堂、建築施設ということが出来る。先祖の範囲は拡大されて、実在した故人をも含める。孔子廟、菅公廟等はその例であろう。中國ではかなり古い伝統をもつようであるが、わが国では特に桃山時代頃から諸大名層に盛んとなり、単にその蓋を祀るのみならず、墳墓をも併せた施設になっている。

伊達家では御廟といい、また御靈屋と称している。「治家記録」では全て「廟」に統一しているが、御修復帳類では区別して用いているようである。例えば、瑞鳳殿・慈仙殿・善応殿についてはそれぞれ貞山様靈屋、義山様御靈屋、雄山様御靈屋と称し、他に陽徳院殿御靈屋、孝勝寺殿御靈屋、淨眼院御靈屋、万寿院御靈屋と称しているのに対し、背山・獅山・忠山・倣山・桂山・紹山等、藩主の例でも皆何々様「御廟」と記されており、また保春院殿・得生院殿・長松院様・雲松院様・性善院様・觀心院様・信誠院様等歴代藩主の夫人、母公の場合にも同じく「御廟」と記されている。

両者の内容を比較すると、前者では地下に遺骸が埋葬され、かつその上部に本殿、仏殿に相

当する建造物があり、中に厨子を置いて尊像、木主を安置して棗を祀るのに対し、後者の例では石塔、石碑のみであるか、それを覆う附屋がある程度であって、両者間には建築施設的差が見られる。肯山公・獨山公・長松院様御廟では板石塔（石碑）のところに

御廟屋式間四方瀬戸瓦舟

と記されている。

しかし見方によれば、瑞鳳殿本殿も肯山公廟の附屋も、規模や質的な差こそあれ、なかを護る点ではともに附屋であることに変りはない。とすれば、前者は当初より附屋（殿、堂）として計画し、建築されたもの、後者は墓碑の上に後に附屋をもって保護した形で、両者の差は、祭祀用建築施設の有無ということに帰着するであろう²⁵。

瑞鳳殿に先行する廟建築の例に初期の徳川将軍家廟がある。元和3年（1617年）完成の久能山東照宮、同じく元和3年になる日光東照宮、さらに改修なった寛永13年（1636年）の同東照宮、これより先、寛永9年（1632年）竣工の芝増上寺の台徳院靈廟（秀忠廟）である。承応元年（1652年）完成の日光大猷院靈廟（家光廟）以下は時代的に瑞鳳殿より新しく、また元和、寛永期に各地方で建てられた東照宮建築は、家康廟としては性格の異なる三次的な廟であるから、直接には関連がない。

元和の創建当初の日光東照宮については、元和3年3月に御廟社・本地堂・迴廊・御供所・御殿等の造営となり、同年4月には尊骸を奥の院の廟塔に納めている。廟社殿と廟塔のある地は位置的に離れ、廟塔は廟社の背後の一級高い所にある。この時の廟社の具体的な形状については不明であるが、「東照宮縁起」の図によると、かなり整理されたものになっている。即ち本殿と拝殿とが石の間にあって一体化された、いわゆる権現造りと呼ばれる形をとっており、拝殿の前面に唐門形式の中門があって迴廊をまわし、さらにその前面に楼門が構かれ、屋根はともに桧皮葺様に見える。本殿の棟には千木、堅魚木を戴せている。僅か6ヶ月足らずで完成された社殿としては余り整い過ぎてことから、この図の内容を疑うものもある。しかし、遠く背後に描かれた奥の院多宝塔が、木造、桧皮葺に表現されている点から推して、元和期の内容を伝えるものと見てよい。

奥の院の中心は家康の遺骸を久能山より移し納めた墓室の上に建つ宝塔であるが、元和期に造られた当初の木造の多宝塔は寛永19年（1642年）に石造宝塔に改められ、さらに寛永3年（1683年）大地震後、現在の銅製のものに替えられた。宝塔の周囲を石造玉垣が囲み、その正面中央に銅製の奥社唐門が建つが、これも寛永時代のものは石造であった。唐門（中門）の前に桁行3間、梁間3間、銅瓦葺の拝殿が配されている。

奥の院宝塔も、廟社本殿とともに南面し、宝塔にも社殿にも前面に拝殿があり、前者では宝塔と離れており、後者では本殿と一体となっている。

家康の遺骸は始め久能山に納められ、引き続き社殿造営が進められた。その内容につき幕府

の大工頭中井大和守正清から意見を求める、僧梵舜が

本殿 大門御地下八尺魚木アルヘ、拝殿、巫女屋、神供所、萬般、御廻アツカ、神籠、櫻門⁶⁶

と答えている。この建物名から、久能山廟社は仏寺的であるより神社的色彩が強い。

今度御廟地神像を以て造営せらるるにより神電院梵舜そのことをとる
とあるのに符合する。元和3年（1617年）完成された久能山東照宮の神殿は、本殿と拝殿と、それを「石ノ間」で連結して一体化した、いわゆる権現造りと称される形態をとっている。

『東照宮縁起』に描かれた元和期の日光廟社殿の屋根形状が檜皮葺で、その本殿棟上に同様に千木、堅魚木を載せていることに着目すれば、本殿の外観的特徴として（あるいはさらに平面的特徴をも含めて）、当時「大明神造」なる形式が考えられていて、その形式を踏むことが久能山廟社殿（本殿）に、また日光廟本社殿（本殿）にも求められたものではなかろうか。

寛永13年（1636年）造替の日光東照宮社殿も本殿の平面形においては久能山のそれと異なっているが、千木、堅魚木を有する点では同じである。本殿の平面形については、久能山の例では三間社流れ造り、寛永の日光の例では間口3間、奥行2間の内陣の前面と左右に廟を巡らした形である。元和の日光廟本社殿の平面形については不詳である。これを豊國廟のように桁行3間、梁間2間の内陣四周に廟の付く形に復元する考え方もあるが、なお疑問である。日光東照宮櫻殿は建築としては当時のものではないが、本殿と拝殿を「石ノ間」で結ぶ、占式を伝えるものと考えられるが、本殿の平面形は三間社流れ造りで、棟には千木、堅魚木を有し、元和3年の久能山東照宮と全く同様である（挿図4参照）。推測の域を出ないが、元和3年の日光廟本殿の平面形式は、むしろ元和3年の久能山廟のそれに近いものではなかったかとも思われる。

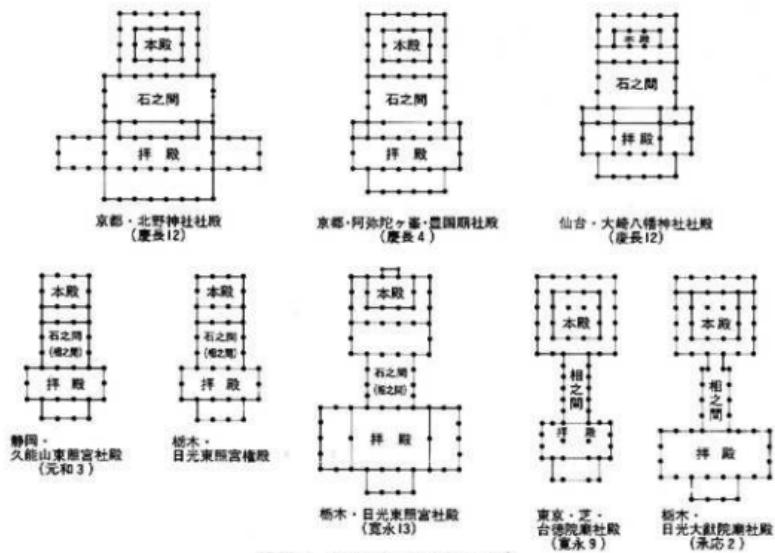
寛永期の日光東照宮の「石ノ間」は、本殿、拝殿の間口より狭く、「石ノ間」の屋根は本殿、拝殿のそれより一段低い。屋根の棟高を、本殿、石ノ間、拝殿の三者揃えた、いわゆる「権現造り」、「八棟造り」と呼ばれるにふさわしい社殿形式とは異なり、本殿と拝殿としての一体感においてはむしろ後退している。これらの兆候は先行の久能山東照宮の屋根の棟高などにもすでに現われている。

久能山東照宮において、廟社殿とは別に、遺骸を納めた地に廟塔が建つが、廟塔は家康の遺骨に従って西面し、社殿の南面向きとは方向が一致しない。また廟塔の前面には拝殿を設けていない。

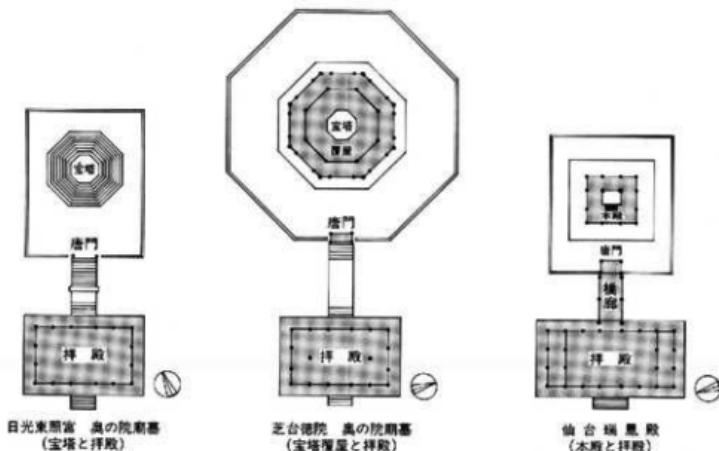
秀吉を祀った豊國廟については、慶長4年（1599年）閏3月

是春秀吉崩成、改修安慶之、自去年秋諸侯承神君仰、間阿弥陀峯延之、其制微北野菅原⁶⁷

とあって、北野天満宮社殿に模したことが知られる。現在の北野神社はその後慶長12年（1607年）秀頼によって再興されたものである。旧時の豊國廟は現存しないが、その平面図は「瓦引」の中に例示され、本殿と拝殿間に「石ノ間」の記入のあることは周知のことである。この本殿



挿図4 精廟社殿平面模式図



挿図5 墓廟施設平面模式図

内陣部をやや縮小したものが仙台の大崎八幡神社の社殿である（挿図4参照）。

石の間造りの形式は、京都北野神社では平安朝時代から見られるものである。当時、北野神社は菅公の廟として、その体裁は宇佐八幡宮、石清水八幡宮にみられる如き、本殿が内殿と外殿2棟より成り、その間を馬道でつないだ廟の形式、即ち「八幡作り」を具現しているものと見られるから、豊國廟はその八幡作り廟形式を採用したものというべきであろう。^四

北野神社、豊國廟、仙台大崎八幡神社はともに石の間の床が低くドリ、本殿、石の間、拝殿の棟高が等しく、また本殿の棟に千木、堅魚木を有していない点でも共通しており、同じく石の間造り（権現造り）と呼称されていても、さきの東照宮の社殿とは平面的、外観的に違いが見られ、このことから両者はむしろ別型として区別されるべきものと思う。この点でも、久能山東照宮社殿形式が豊國廟のそれを模したものとは認め難い。^五

豊國廟では阿弥陀ヶ峯の頂上に、別に秀吉の遺骸を納めた廟墓があったが、その形態や方位については現在不詳である。

芝増上寺内の2代将軍秀忠白徳院廟は寛永9年（1632年）、僅か6ヶ月の工期で完成されたが、それは廟社の都と廟塔部と2区に別れている。廟社は本殿、拝殿、それを結ぶ相の間（石の間）より成るが、相の間は豊國廟、東照宮の石の間に較べてかなり細長い形となり、床も高く、また、本殿の平面形も方3間の内陣の四周に外陣を巡らした正方形になっている。本殿は重層、銅瓦葺で、屋根には千木、堅魚木を付さない。^六 拝殿、相の間に比して、本殿の規模が優位し、二者が一体化した印象は一層薄れ、相の間は單に2建築を繋ぐ廊下形式になっている。その正方形平面に拘らず、本殿が入母屋造り、床敷である点は東照宮社殿と異ならない。この白徳院廟の社殿形態は次の3代家光の日光大猷院廟にもそのまま承け継がれている（挿図4参照）。

瑞鳳殿との関係から、むしろ注目すべきはこの白徳院廟の奥の院の形式であろう。奥の院廟塔は、石造台座上に安置された木造の宝塔で、これを被うための八角形木造の覆屋がある。奥の院廟塔の中心は、遺骸を埋葬した墓室上に建てられた廟塔であり、これは東照宮廟墓、さらに大猷院廟墓以後の歴代将軍家廟においても同様である。しかしいずれも石造ないし金属製の宝塔で、特に覆屋を設けていないから、白徳院廟塔の如く覆屋を設ける例は珍らしいといえる（挿図5・6）。

白徳院廟塔においてはこの覆屋を圍んで八角形の土壇があり、その正面中央に中門（向店門）^七 が配され、中門の前面、中門から離れた位置に桁行5間、梁間3間、床敷、廻縁付きの拝殿が建つ。拝殿と中門との間に屋根を持った雑築施設はない（挿図5・6）。覆屋、唐門、拝殿とともに銅瓦葺である。

豊國廟や徳川將軍家初期の廟では、ともに靈廟社殿の建つ地域と、廟墓関係施設の建つ地域とは離れており、靈廟社殿の中心建築は本殿、拝殿、それを結ぶ「石ノ間」、「相ノ間」からな



挿図6 芝台徳院靈廟奥院宝塔覆屋及び中門（唐門）

る複合的社殿形式で、豪奢、壯麗な建築であるが、これに比して、奥の院廟墓は、宝塔の前に僅かに拝殿を配する程度で、施設的に簡素であるのが特徴である。

伊達家の瑞鳳殿をこれら將軍家廟に比較した時、靈廟社殿形式よりはむしろ奥の院の廟墓の制に近く、特に台徳院廟墓のそれに近いものがある。台徳院廟の奥の院八角覆堂を瑞鳳殿本殿に比定すれば、本殿、唐門、拝殿の位置関係は一致する（挿図5）。

台徳院覆屋、瑞鳳殿本屋において、前者は正八角形の建物であり、後者は正方形であるが、ともに正多角形である点で一致し、さらに土間式（床は石の四半敷）、屋根宝形造り、銅瓦葺、屋根の下り棟、稚子棟に竜首を飾るなど、建築形態、建築意匠面での類似点が見られる。また

前者（中に宝塔を安置）、後者（中に宮殿形厨子を安置）はともに拝殿を備えた牌所であり、御影堂であり、下に遺骸を治めた墓所でもある。

古德院廟では宝塔の真下、瑞鳳殿では石組台座（厨子）の位置をやや逸れて石檻があり、前者では遺骸は拝殿の方向を向き、後者では拝殿と逆の方向を向いていることが発掘調査で明らかになったが、ともに東向きである。

廟墓の例はさらに遡って求めることが出来る。例えば永保寺開山堂、東大寺開山堂等、禪宗建築に見られる開山堂の類である。永保寺開山堂では、方3間の祠堂と、その前面に置かれた方3間の礼堂、さらにそれを繋ぐ相の間がともに土間式で、三者が一体となった複合式建築である。開山堂は元来墓所であり、床は瓦敷もしくは石敷とし、墓碑を設け、厨子を置いて尊像を安置する。そして建物の平面は方形を常套とし、屋根は宝形造りとなるのが一般である。

さらに古くは平安朝時代における、比叡山延暦寺の最澄廟や高野山金剛峯寺の空海廟等にその先例が見られる。最澄廟については『山門堂舍記』の浄土院の項に

真繪皮方丈廟堂^{一宇} ^御
とあり、屋根は檜皮葺であるが、方形の建物であるから、宝形造りであろう。高野山の空海廟については『高野山奥院興廢記』にやや詳しい記述がある。これによれば、承和2年（835年）3月21日、入定直後、空海の遺骸は石室に納められ、その上に五輪塔都婆を置き、さらに宝塔を建てて仏舎利を安置したもので、廟塔形式のものであった。その後村上天皇の時代に奥院が焼失し、天德年中、この廟塔は宝形造りの堂建築に造り替えられた。即ち廟塔の形式から廟堂の形式に替っている。

小野僧正行海記云有大師入定處御堂^也及^也禮堂^也……入定處者皆廟塔也又御堂者阿彌陀堂等也^也此古拝殿也
とあるのでも明らかなように、礼堂は御堂（廟堂）に対するもので、この2棟は組になっていたことが窺われる。

この『興廢記』の中に、しばしば拝殿の改築、修理のことが見える。『奥院拝殿第二度建事』とある、治安3年（1023年）10月17日の記事に

初造官三間三面御拝殿并橋殿等畢
とあり、他書に同日の記事について、
造替拝殿及御廟堂
といっているから、御廟殿と橋殿とは同じものを指しているようで、この廟に附隨して、拝殿との間もしくは附近に橋状の渡廊の如きものが設けられていた。いずれにしても徳川將軍家に見られた家廟、覆堂と拝殿よりなる廟堂の制は、開山堂建築や最澄、空海廟等にその先例を見い出すことが出来る。

伊達家瑞鳳殿は、その本殿の性格、形状等から見れば、上述のことからも知られるように、

豊国廟以来の靈廟社殿の形式を踏んだものではなく、むしろ古くからの廟墓建築の系譜に属する見えた方が良いであろう。従って当初より靈廟社殿域を廟墓域と分離して設けた、豊国廟や徳川將軍家廟の形式こそ廟建築史上では珍らしいというべきである。もっともその相型が過去に全く無かったわけではなく、例えば墳墓の地に別に彫像を安置してこれを信仰することから出発したと考えられる談山神社や四国の白峯神社のような信仰形態はさらに遡って存在していたとも見られる。しかし徳川將軍家初期の廟のように、当初から計画的に廟墓と区別し、靈廟社殿を中心には造営されたものではなかった。

豊國廟を始め、久能山東照宮、日光東照宮、大猷院廟の如きは、天下者としての權威が名実ともに確立した時期を待つて始めて採用され得た廟形式、建築形式と言い得よう。

瑞鳳殿の配置形式、建築形式は、先例に比較した時、廟社よりもむしろ廟墓の形式に携ったものと見られ、特に將軍家における台徳院廟墓に近いものを感じさせる。台徳院奥の院廟墓は寛永9年（1632年）、瑞鳳殿は同14年の完成である。その先例としての影響が一応考えられてよいと思う。

しかし、瑞鳳殿には台徳院その他の廟墓と較べ、またいくつかの相違点が指摘出来る。即ち

1. 押殿と本殿前の唐門との間に緩状の渡り廊下がある。
2. 押殿前面に対称的に御供所（竹格）と「暫屈」と称する建物が向き合って配される。そして御供所から押殿に、押殿から本殿前廊に廊下が通じている。
3. 主要な建物の方向が西向きである。

等である。

本殿と押殿との間に設けられた橋廊は特異なもので、他の廟建築には見られないものである。平面的には、一見して台徳院靈廟社殿、大猷院靈廟社殿における相の間を更に細長くした形のように見えるが、吹放しの渡殿式であり、また押殿には連続するが本殿には直結せず、一応店門のところで終わっている。

石の間、相の間を有する複合社殿形式においてはその途中に門を設けることは勿論無いし、また敷地的に本殿と押殿とを高さによって分離したり、両者を垣によって区切ることもない。両者はあくまで一体であって、一つのまとまった社殿域として取り扱われている。この複合社殿を玉垣で囲い、中央に門（一般には唐門）を開くのである。これに比し、廟墓的配置では本殿（廟塔）と押殿は敷地の高さを異にし、両者の間隔は比較的遠く離れ、本殿（廟塔）を玉垣、築地等で囲って押殿と分離するのを達成とする。

瑞鳳殿橋廊下（空橋）はそうした廟墓的配置計画の中で考えられた工夫であって、石の間造り（檻規造り）社殿の延長上に考えられた変形とは見られない。また機能的にも、石の間、相の間に見られる常殿的性格を受け継いでいる。故えて先例を求めるに、先述の高野山空海

廟にみられた「廟殿」、「橋殿」の如きがこれに類しよう。

御供所は本来、神饌を調整するための施設であって、祭祀を遂行するための重要な建築で、久能山東照宮、日光東照宮、同大猷院廟及び芝の台徳院廟においても神供所、御供所、御供所廊と呼ばれ、必ず靈廟社殿域に設けられ、廊によって本殿に通じているのが特徴で、廟墓域には設けられていない。

御供所、廊下、御厩等を有する瑞鳳殿は、廟墓的性格の他に廟社的、御影堂的性格をも兼ねていたことになる。本殿の呼称においてもそれは現われており、古図の中においても御仏殿、御靈尾とも記され、また同形式の二代忠宗感仙殿について、御本社、御本堂とも記されている。

瑞鳳殿の御供所はまた「竹樓」とも呼ばれ、もと政宗の若林城の建築で、櫻閣風の書院であったものをこの地に移して半家建てに直したものとも言い伝えられる。「竹樓」の蘭額の故にこの呼称がある。中国の故事に、宋の王禹偁が建てた楼の名で、竹を以て瓦なし、竹楼と称したとある。

御供所と伴殿とを廊下を以て結ぶが、この関係は感仙殿、尊応殿にも継承された。

御供所と対称的位置に向き合って「脇殿」と称する建物があったが、古図によれば、間口5間、奥行3間、柿葺で、御供所と同一規模であった。この建物の用途については不明であるが、その「脇殿」という名称も、おそらく中国の故事に根柢があると思われる。「竹樓」と同様に「脇殿」なる蘭額が懸けられていたものと想像される。この建物には渡り廊下は接続せず、完全に独立していて、竹樓に劣らず蘆酒な建物であったことを窺わせる。この「脇殿」に相当する建物は感仙殿、尊応殿には見られず、瑞鳳殿特有の建物である。元禄以降に失なわれ、その後再建されていない。

瑞鳳殿は西を正面とする（正確にはやや北に傾き、西・西北向き）。比叡山最澄廟、高野山空海廟は南面し、永保寺開仙堂は南向き、東大寺開山堂は東面する。久能山東照宮廟墓は西面し（これは特に家康の遺言によるとされる）、日光東照宮廟墓は南面し、台徳院廟墓は東面し、弘前津軽為信廟墓は東面する。また瑞鳳殿よりやや時代は遡るが、日光大猷院廟墓は東南向き、また尾州家藤敬公廟墓は南を向く。伊達2代・3代廟墓は東向きである。これから見ると特に方位に一定性はない。南面、東面が比較的多く、西向きは少ない。南面は在来の仏寺建築の方位であり、東面は浄土教関係の阿弥陀堂等に多い方位である。遺言に基づいて埋葬された位置は東高西低の傾斜地であり、最奥の高所に石樋を東西向きに設け、遺骸を東向きに安置し、それに合せて本殿を建てた関係上、勢い西向きに配置されたものと思われる。即ち地形の条件によるところが大きいのではなかろうか。

戦国期から近世初頭にかけては、大名の廟所と位牌所とが別所に設けられることは、当時の社会情勢からも、むしろ当然のことと思われる。寛永期頃になると、戦国の遺制に倣いつつも、

すでにある基準が生じて、格式上からも将军家を凌ぐ規模のものは大大名家と云えども許されなくなる。

秀吉、家康は神として祀られ、これを承け継いだ将军家初期靈廟が、廟社、廟堂と廟墓とを同一地域内にそれぞれ分離して配する形式を採用し、規模の雄大、建築の壯麗を誇ったのに対し、伊達家の瑞鳳殿では、古くからの廟墓の制を基とし、これに廟堂、廟社的一尊像、木主を安置して祭祀する一性格を加え、小規模ながらここに見る如き独自の様式を生み出したものと考えられる。

I)-3 建築・装飾

涅槃門

瑞鳳殿正面入口の門で、切妻造り、銅板葺の四脚門。古圖に「屋根七瓦」とあるが、さらに古くは榜葺ではなかったかと思われる。開口9尺(2.73m)、奥行7尺(2.12m)、唐柱で統一されている。支柱は角柱で、正方形の唐柱礎盤の上に載る。正面棟唐戸の横樋は吹き寄せになり、広間の綿板に16弁の菊花の装飾が付き、棧には辻金物、その中間にも飾金具を付す。他の綿板部分には透し彫の瓶を施さず、この扉の装飾は簡潔である。

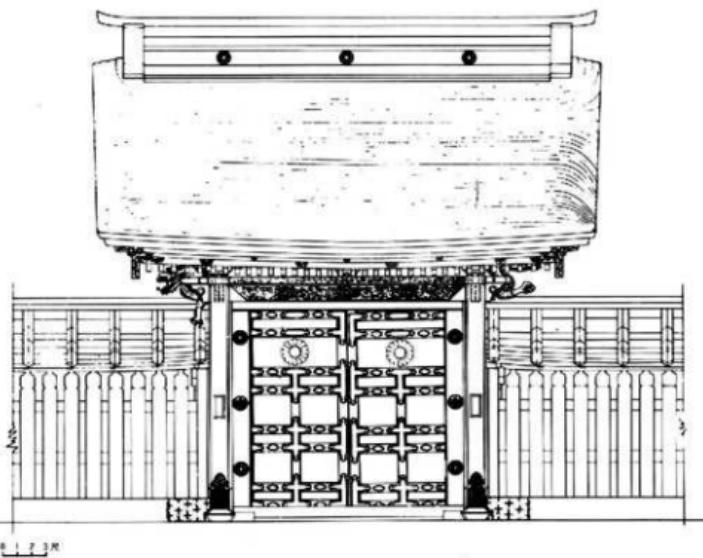
本柱、支柱を連結する台輪、長押、頭貫の類及び桁、檼木等の水平材には精緻な菊唐草の透し彫を貼付けている。

正面扉上の幕板は松皮花菱の地文の上に、桐、菊の円文を施し、中に雲鳳麒麟と雲の透し彫が挿入されている。正面の意匠は下部においては扮飾を避け、上部の軒廻りに重点を置き、華美に流れず、端麗な装飾効果を意図している。

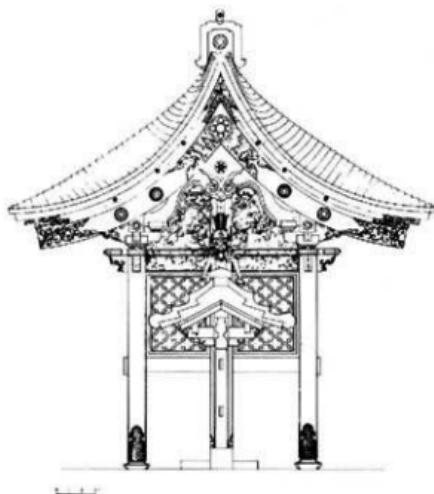
妻側の装飾は活力に溢れ、曲率の大きい海老虹梁を前後に用い、台輪との空き間に、極彩色の牡丹に唐獅子の透し彫を充填している。本柱の頭貫木幕は、珠を纏む振珠竜の頭となる。懸魚六葉に牡丹の開花を、懸魚の鱗には流麗な菊の花葉を施し、破風板、桁の木口を九曜文、菊花文の金具で装飾する。妻部では立体的な厚肉彫、透彫を多用し、力強い躍動感に富んでいる。頭貫と腰貫との間に松川菱文に組んだ格子が付く(写真10、11、12及び挿図7、8)。

拝殿

涅槃門を入り22段の石段を昇って拝殿に至る。開口7間(14.58m)、奥行3間(6.14m)、屋根は入母屋造り、銅板葺であるが、もとは柿葺(さらに古くは榜葺)であった(写真13)。軒は二軒繋檻、平三つ半棚で、中間に幕板を配する。正面1間に向拝が付く。板床敷の建築で勾欄付き迴廊を巡らす。破風のおがみには三花懸魚、桁隠しに亥の日懸魚が付く。妻の部分は板壁



挿図7 涅槃門正面図



挿図8 涅槃門側面図

である。

正面向拝の虹梁は花菱七宝文を地文としてその上に若葉文および幕文を重ね、下面に鶴杖彫がある。その木鼻は猿とも象とも見える獣頭の彫刻となる。手狛は菊花の透し彫。向拝の軒桁には華麗な鉄線唐草文が画かれている。扁額「瑞鳳殿」の書体は特色があり、佐々木文山の手になる（写真14）。

正面中央間、背面中央間にはともに両折、両開きの棊唐戸が用いられ、唐戸の広間には花挿問を挿入している。内法長押と頭貫との間に花挿問の欄間が組み入れてある。幕股と平柱つ斗の組物の間の琵琶板は黒漆塗り。

正面、背面中央の間および向拝の装飾を除けば、他は軒廻り等の建物上部に装飾を限定し、壁や半障等の下部は黒漆塗で仕上げている。

内部においては壁、天井、柱は黒漆塗り。台輪、長押、貫、札枠、養束等は極彩色。頭貫は幾何学的四弁花の連続模様帶の途中に隅入角内に鳳凰を文様化した図柄を挿む。内法長押では花菱の間に内に唐獅子の文様を挿入して変化を与えている。肘木、斗、養束等に九曜、葉文様の円文が載せてあるが、小さく鮮やかで珠文状を呈する。天井の格縁には辻金具を打つ（写真15）。左右の「貴の間」境に建つ円柱も黒漆塗りで、柱頭は櫛になっている。

内部装飾も外部と同様に壁や柱の黒色を背景に、台輪、貫、長押等の上部水平材と、札枠、養束等とに装飾を制限することにより、その効果を擧げるようにつとめている。

唐門・橋廊下（塗橋）

唐門は本殿の前面に、本殿より約3間（5.77m）離れた位置に建つ。本柱は丸柱、控柱は角柱で、向唐門の形式であり、唐門に拝殿からの渡殿式建物が連結する。この橋廊下（塗橋）は天井がなく、化粧屋根裏となる。拝殿向拝の位置から橋廊下、唐門を通して本殿内部の厨子、尊像を拝することが出来る。橋廊下の巾は2.33mで、勾欄以外は全く彫刻装飾の見られない板葺の簡素な建物である（写真16）。

唐門は柿葺で、間口2.30m、奥行1.34m、中央に棊唐戸を吊る。この唐門の扉も、御榮門のものと同様に、広間に菊花の装飾を付け、襖の辻やその中間に辻金具を備える以外は縮板にも透し彫の類を一切用いていない。玉垣との境に幕股状の崩板を設ける。

正面の虹梁の上、下の空間に透し彫が挿入されているが、右手に雲と龍、左手に竹と虎を配する。即ち龍虎柏撃つの構図で、両面彫となっている。虹梁上の大瓶束の左右は中国二十四孝の中の楊香、郭巨の説話図で、右は楊香が父と共に山中において虎に遭遇し、父の身代りに虎の前に身を投じたところ、その孝心に感じ虎が逃げたという話、左は郭巨の家が貧しく、母の食料の減るのを憂い、我が手を擧めようとした孝心に天が感じて地中から金の糸が出現したとい

う説話である。

茨桟には飾金具を打ち、天井には金泊を貼り付け、「金唐門」と称された。兎毛通しには花菱文の飾金具、菊花文金具を施す。虹梁には花菱の地文の上に九曜文を載せている。また茨桟の下面や貫等に九曜文を置く。火瓶束は唐草文で装飾され、下部に結縁を付ける(写真17)。

唐門背面の意匠は前面と殆んど異ならない。支柱を繋ぐ虹梁は菱格子の中に菊花文をあしらい、その下面には同じく菱格子を書きその中に九曜文、剣かたばみ文を置き、その木鼻はやや抽象化された象もしくはマカラ様の獣頭となる。棟木および軒桁には円文が帯状に配されるが、九曜、三つ巴が主で、他に宝珠、透幕、桐、剣かたばみも混在する。土垣との間にある柄板の意匠は流動感があり、その脚端は鎧状に巻きあがり、中に流麗な牡丹唐草文様が画かれている(写真18)。

本殿

本殿は三間四方(間口5.88m、奥行5.86m)、中央の間がやや広く7尺(2.12m)、脇間6尺(1.88m)。正面中央の間に棊戸戸、その左右の間に花頭窓を設ける。側面では中央の間に花頭窓を配する。他は板壁となる。床は叩きで四半石敷。軒下の基壇も四半石敷であるが、内部の床面よりやや低くなっている。(写真19)。

屋根は宝形造り、銅瓦葺、軒の出は大きく約2.60m位。屋上には露盤、宝珠を設せる。露盤の格狭間のなかに九曜の家紋を入れる。上に伏鉢を置き、さらに二重の請花を重ね、最上に宝珠をいただく。各降り棟、垂先棟に2頭ずつ阿吽の龍頭を付ける。屋根の意匠は、先述の如く徳川秀忠廟奥の院の宝塔覆屋のそれとよく似ている(写真20、挿図6)。

伊達家においてはこのあと正保4年(1647年)の円通院御靈屋、万治3年(1660年)の陽徳院御靈屋、寛文4年(1664年)の感仙殿御靈屋と、御靈屋本殿の銅瓦葺例が続く。瑞鳳殿の本殿屋根は寛文時代すでに銅瓦葺であったことは古図によって確められるし、正保4年の円通院御靈屋銅瓦葺の先例として、当初からすでに銅瓦葺であった可能性が強い。

瑞鳳殿の銅瓦葺が創建当初(寛永14年)のものとすれば、新建築における銅瓦葺例としては古徳院覆屋(この覆屋の銅瓦葺が当初からのものとすれば寛永9年前後)に次ぐ古いものとなる。

本殿の軒は二軒筋檼、三手先斗模。総体に唐様で、軸部は台輪、頭貫、内法貫(飛貫)、腰貫、地檼より成り、柱は木製の出柱礎盤の上に建ち、棕がある。頭貫の木鼻は獅子頭となって隅柱上で2頭が交差し、阿吽の形相をとる(写真21)。斗や肘木、尾樋はともに枝縁をふちどりし、大斗、方斗、卷斗の四面及び斗縁には蓮華唐草文を施し、肘木、尾樋は中に九曜、三つ巴、蓮華、菊、桐等の円文を施す。斗模中央には瑞鳥を彫った棗股が配される。棗股には亀甲文が、

また梁股内外の空間には牡丹、菊、桔梗等の植物がが彫まれる。

中央の間の棊店戸は横桟を吹き寄せにし、辻とその中間に飾金具を打つ。画廊上部の広間に「竹に雀」の家紋を一对、中央錦板に九曜の家紋を二封挿入する。下部の錦板には水に蓮華の彫刻。吹き寄せ間には、一番上部が牡丹唐草、次も牡丹唐草、三番目が水に菊花、最下部が水に水粟と「おもだか」を配する。柱、柱寄せ（方立）、棊店戸の錦板等は黒漆塗で、挿入された彫刻がよく映えて効果的である。柱寄せには桐文が付く（写真19）。

頭貫と内法貫との間には雲上を飛翔する天女の彫刻が1間に1体ずつ、計12体が充填されている。正面の中央間は蓮華を持ち、向って右の間は琴を弾じ、左の間は横笛を吹く図柄となる（写真19）。

正面左右の間に設けられた花頭窓は、窓枠とその中の連子は黒漆塗りで、枠の尖頭、肩、梢にも毛彫り唐草の飾金具をうち、その中間に16花弁の菊花文の金具を打つ。そして黒漆地には葡萄唐草の跡紋を画く。連子には菊花の表、裏を紙状に散らして付ける。

花頭窓枠と内法貫との間には極彩色の雌雄2頭の鳳凰を配し、瑞鳳殿の主要モチーフを表現している。その周囲は桐の彫刻で充たす。鳳凰の構図は左右の間で異なる。鳳凰に限らず、全て彫刻の構成は敢て左右対称形を崩しているが、それがかえって躍動感を助長している。桃山的装飾手法が踏襲されていると見られる（写真22・23）。

花頭窓の腰壁には2本の吹き寄せ棊を対角線状に配するが、この棊状の棊は本殿の腰壁及び周囲の玉垣の腰壁部に統一して用いられ、全て黒漆塗り仕上げである。

軒桁の装飾には円と隅切角とを交互に連続させ、うちに4弁花文および菊文を配する。その他、通し駒木、名輪、頭貫、内法貫等の水平材にはいずれも亀甲文、牡丹唐草文、蓮華唐草文、立派文、向い蝶文などの連続文様が画かれている。頭貫に施された向い蝶文は左・右・一对と上・下・一对とが交互に配置されている（写真19・22・23）。

本殿内部の床は土間式で石の四半板き。2本の来迎柱が建ち、米迎壁がある。この米迎柱から壁柱に対しても海老虹梁を懸け渡しているが、この海老虹梁に隅切角花文の連続模様が描かれている。台輪、貫、斗拱の装飾文様は外部装飾の連続で全く同じである（図版24）。

内壁は金地に仏画を描いた張り付け。米迎壁の背面には二十五菩薩来迎図が画かれ、天井には飛雲に飛翔する瑞鳥、さらにところどころに法具の三銅杵や、それを十字に組んだ掲拂が画かれているが、これら仏画はともに力強く、本殿棟札に「絵画狩野修理定吉」とあるように、狩野派の手法を窺わせる（写真25）。

米迎壁の前に石燈を組み、その上に官殿形の厨子を置き、中に衣冠束帶の政宗公の木造座像を安置する。厨子は柿蒂で、切妻屋根の前面に軒齊破風をつけ、二軒腰持、三手先の斗拱で、全体が唐様手法で統一されている。縁を巡らし、逆唐柱を持つ、唐様の勾欄を付ける。正面の

棟唐戸は、上の広間と下の正方形の間に菊文を二対、中央の正方形の間に九曜文を二対、吹き寄せの間は菱飾しない。

正面台輪上に瑞鳥（孔雀か）の幕股を置き、その左右の空間にも瑞鳥を配する。唐破風板の中央に菊唐草、その左右に菊花、桐花の飾金具、兎毛通しには雲と宝珠の透し彫を付ける。虹梁は菱格子の地文の上に、左右に一对の四角の花文を載せる。虹梁上にも幕股が載り、中と外に瑞鳥を配する。

幕股、肘木、斗、尾柱はそれぞれ地文を画き、その上にさらに九曜、三つ巴、菊花、刺かたばみ等の円文が載る（写真26）。

厨子側面の軒廻り手法は正面と同様であるが、頭貫より下の壁面は無装飾であり、台輪上の琵琶板部分も無装飾である。通し肘木、貫等の水平材及び斗拱には菱文、円文等の文様を施しめまぐるしいまでの装飾が施されている。最上部の軒桁は大柄な唐草様地文の上に、もっこく（窠文）、さがり藤の円文を置く。頭貫は七宝繪ぎ文、その木鼻は獅子頭となる（写真27）。

厨子は平面1.20m四方の小品ながら、手の頗る混んだもので、軒廻りの架構や装飾など、本殿のそれと一脈通ずるものがある。

玉垣・廻廊

玉垣は唐門の左右から出て本殿を巡り、また御供所と拝殿の間を連結し、他方拝殿から南上して本殿前に至る廻廊式渡り廊下がある。

玉垣の屋根は古図に「屋根猿頭」とある。玉垣は上部は欄間、次は連子、最下部は腰板壁となり、腰壁には擣状に吹き寄せの棊を付ける。同じく古図に

上乱脚中角れんしドハメクスキ

となるに相当する（写真28）。

拝殿から出て東西に走る廻廊があるが、途中で一寸折れ曲って本殿脇に達する。この一部は本殿の玉垣と平行し、その外側は吹き放しで勾欄がある。この廻廊の終端部は本殿脇で曲折し、ここに棟唐戸を開く。棟唐戸の上に板幕股、玉垣との間に納板版があるが、ともに簡潔な意匠である。（写真29・30）。

御供所（竹櫓）

間口5間（9.90m）、奥行3間（5.94m）、屋根入母屋造り、銅板葺（もと柿葺）、板床敷きで上の間は疊敷き8帖、次の間は2間に3間で、半分疊を敷き、半分は板の間となり、「いろり」を切る。前面1間分は通して拭縁を設け、さらに外側に3尺（1.02m）の落縁を付ける。中央1間分に向拝が付き木階を設ける。向拝の虹梁上に幕股が載る。正面5間のうち両外側2間は羽

日板壁で内側3間分が取り障子になっているが、古図には「重戸引込」とある（写真31）。

軒は樋を吹き寄せにし、正面中央に「竹櫻」の額を載せる。角柱上に半三つ斗を組み、軒桁を支える。梁の木鼻が柱上の斗から出でていて、折置式とみられる。頭貫と良押との間に欄間があるが、これも2本、3本、4本の吹き寄せとなる（写真32）。

御供所の妻は、破風のおがみに菊花の金具を付し、その下に三つ花懸魚を下げる。また虹梁上に葵股を置く等、拝殿の妻と類似した意匠であるが、一段と簡素になっている。

渡り廊下が御供所の東南角より出て拝殿に接続する。渡り廊は、上は連子窓、下は腰板壁である。

以上装飾を中心に戦災前の瑞鳳殿の各建築を見て来たが、これらに用いられた装飾文様の主なモチーフを挙げてみると、

彫刻の類

1. 天女、二十四孝説話人物

2. 鳥 獣

イ) 鳥獸を中心とするもの

雲に瓢鷲、牡丹に唐獅子、桐に鳳凰、竹に雀、龍虎、瑞鳥

ロ) 木鼻に用いられるもの

象、猿、マカラ、抓珠龍、唐獅子等の頭頭

ハ) 瓦に用いられるもの

龍頭（銅製）

3. 植 物

菊、桐、牡丹、蓮華、水菱、おもだか、桔梗、松、竹、等

4. 俎 子

松川菱

絵画及び飾り金具の類

1. 桐、菊、唐花、九曜、三つ巴、等

2. 菊唐草、牡丹唐草、鉄線唐草、葡萄唐草、蓮華唐草、等

3. 円文として

九曜、三つ巴、劍かたばみ、菊花、桐花、蓮華、宝珠、もっこう、等

4. 帯状連續文として

蔓文、亀甲文、七宝織ぎ、立涌、向い織文、等

5. 法具文として

三筋枠、十字に組んだ扇形

これらの諸文様は古くから建築装飾、工芸品装飾および衣服文として愛用されて来たものが多い。九曜文（家紋でもある）、三つ巴文、菊花文の多用が見につく。

二十四孝説話を主題にしたもの、また向い蝶文の如きも、すでに他處でも、慶長～寛永頃の建築装飾に用いられている。瑞鳳殿装飾の基調となる鳳凰の図柄において、2羽の鳳凰が1羽は口を開け、1羽は口を閉じた構図も、西本願寺浪の間玄間破風に見られる。

従って特に奇抜な、新奇なモチーフはないと言える。桃山建築装飾に見られるような、氣力の横溢した躍動感はやや乏しいと言えるが、かえって落着いた洗練されたものに変って来ている。しかも装飾量は本殿の内外に集中し、唐門、涙門がこれに次ぎ、拝殿は極く部分的に限り、つとめて抑制している。そして、御供所、哲嗣、廻廊、輪廊下、玉垣等は極力簡潔な意匠に止められている。それらの建物を調和を以て配置することにより、装飾量に抑揚を与え、全体に諧調をもたらし、本殿への示向性を意図している。

一般には時代が進むと桃山装飾も形骸化し、硬化して来るのであるが、ここでは過剰に陥ることなく、未だ格調と生氣を失っていない。

瑞鳳殿建築は比較的小規模の建築であるが、寛永時代の逸品で、特にその装飾意匠面において見るべきものがあった。

第2章 感仙殿・善応殿

2) - I 造営の概要

二代忠宗は万治元年（1658年）7月12日、仙台城において卒去した。年60才。「治家記録」では、遺體は直ちに束帶を着して棺に入れ、糸、臍灰を詰め、乗物に納めて瑞鳳寺へ移し、7月24日、乗輿のまま石櫃に盛して埋葬し、次いで8月6日、東山寺において出殯、葬礼を行ったと述べている。この間、経ヶ峯の大万寺を移転させ、その跡地に廟を建立することが相談された。

万治2年5月、綱宗初入部し、義山公廟造営の事が命ぜられ、原田甲斐宗輔、三分一所典膳元景が總奉行に、その下にあって早川八左衛門義泰、橋本善右衛門重高、小間権右衛門高儀、

篠田六兵衛景明が普請奉行に命ぜられた。棟札が現存しないので、技術者、絵師の名も不明である。同年中に感仙殿造営役人の手によって、虚空蔵堂、別当大方寺が経ヶ峯から愛宕山の西邊に移された。

大方寺跡地に廟を建てたとすれば、7月24日に遺骸が埋葬された地点が、即、本殿の建つ位置に当るかどうか今一つ確かでない。

その後の工事の進捗状況は不詳であるが、翌万治3年（1660年）7月、故あって綱宗は退寒の身となり、品川屋敷に隠退し、同年8月、龟千代僅か2才で襲封することになった。これらの事情のためか、感仙殿造営工事は一時頓挫したようだ。その後綱村の寛文四年（1664年）間5月17日までにはおそらく完成したもうである。忠宗没後、竣工まで実に6年を経過している。

次の三代綱宗は隠居のまま、正徳元年（1711年）6月4日、江戸品川の下屋敷において卒した（年71才）。同18日に品川屋敷を出棺、同28日瑞鳳寺に到着し、7月1日に

遺骸ヲ石櫃ニ葬メ、仙台城御正宗山瑞鳳寺ニ葬リ奉ル
此後御廟宇ヲ正宗山瑞鳳寺ノ西、感仙殿ノ並ニ建立セラル

となる。これによると、遺骸を埋葬したところと、善應殿本殿の建つ地とは異なるように見られるが、これは『治家記録』特有の文章上の癖であって、石櫃の位置と本殿位置とは一致するとしてよからう。

造営総奉行は始め伊木志摩であったが、正徳5年（1715年）2月10日、志摩に代って革名刑部が新たに造営総奉行に任せられてからは工事は急速に進行した模様である。まず3月10日には、

雄山公廟修造ニ就テ假廟拝殿取扱

があった。ついで3月16日、靈廟の安鎮祈禱が千手院によって執行され、革名刑部を始め、伊東宮内、野村親負、作事奉行および小吏等が、また3月20日には總奉行の革名刑部、出入司の岡元監物、當構奉行の柳生権右衛門、佐賀莊太夫、以下作事方役人が出席したことが『治家記録』に見える。

同年4月26日、靈廟の本殿が上棟した。そして麻布隱公（綱村）献納の鐘が鍛成した。ついで6月3日に拝殿柱立、6月9日には拝殿上棟、そして享保元年（1716年）3月20日に至り、靈廟落成して安神供養が瑞巖寺夢菴和尚により執行された。工期は丁度1ヶ月であった。

2) - 2 配置・構成

感仙殿、善應殿はともに明治10年から12年にかけて大整理され、現在見るような敷地形状になつた。本殿以外の建造物は全て取り壊され、敷地形状も一変した。そのため、藩政期における

る建物の配置状況や構成については古図の類を援用せざるを得ない。

感仙殿は経ヶ峯の西峯東斜面、大万寺の跡地を利用して建てられ、本殿はその敷地の西奥に東西面し、拝殿、門が東西の軸線上に並んでいた。宝永以前、未だ善應殿が建築されない時期、即ち創建当初に近い内容をもつ古図によると（付図3）、御供所はもと拝殿の前方向って右側（北側）に南面して建てられていた。本殿の周囲に瑞鳳（玉垣）を廻らし、拝殿と本殿とを廊下で繋ぎ、また御供所と拝殿を廊下で結ぶ。

正面の四脚門から左右に3間ずつ玉垣が出て、その先は切笠塀となり、西に曲折して櫛貫となつて本殿以下の諸建築を囲う。東北隅の切り込みに切笠塀を建て、塀外の空地に2間四方の鐘撞堂と、2間半に3間半の御神馬用の厩を配し、門前の広場の南隅に5間半に2間半の番所（屋根柿葺）がある。

本殿は柱間3間の正方形で、2本の米迎柱を有する。拝殿は間口7間、奥行3間で、四隅に縁柱を付し、前面の中央1間分に向拝が付く。屋根は「とち葺」で、瑞鳳殿の拝殿と規模、平面形状等、全く一致している。

御供所は間口5間に奥行3間、前方に3尺の「くれえん」が設けられ、中央に向拝（玄関と記入がある）が付き、屋根は同じく「とち葺」であった。この御供所の形状、規模も瑞鳳殿のそれに全く等しい。瑞鳳殿では、当初御供所と対称的位置に「脇窟」と称する建物が配されていたが、感仙殿にはそれに相当するものは見られない。

瑞鳳殿においては本殿の前に唐門があり、唐門と拝殿との間に橋状の廊下（塀橋）があつて、瑞鳳殿建築の一つの構成上の特色ともなっていたところであるが、この感仙殿（付図3）には特に唐門の記入が無く、

御供所下五間ニ横也間柿葺

とあって、本殿に至る（本殿の壁体にまでは達していないが）、長さ5間分の一様の廊下が描かれ、その途中における唐門の存在が明らかでない。本殿前面に唐門が無かったとは考え難いのであるが、その後の図（付図4・5）によればこの廊下に相当するところが「唐門」と「廊下」とに別記され、この廊下（横廊下）は絵図上で実長3間に描かれ、唐門と本殿との間には施設らしいものが無いのにも拘らず、「廊下 唐門」などと記されている。拝殿と唐門までの柱間3間（実長も3間）、唐門奥行1間、唐門と本殿との廊下分が1間として併せて計5間となるから付図3ではこれを長さ5間と記したのに対し、付図4・5では数字をそのまま転写したことによる誤記とみられる。この図（付図4・5）では、感仙殿も善應殿も唐門の本柱だけあってその支柱の位置が示されず、従って奥行が表現されていない。唐門の形式については不明であるが、瑞鳳殿と比較してみても向唐門であることは間違いあるまい。向唐門とすれば瑞鳳殿の如く、角柱の支柱が存在していたと見られる。支柱の部を省略して描いたのであろう。

感仙殿の本殿前面の唐門については『獨山公（吉村君）治家記録』、享保9年（1724年）5月3日、

寅刻瑞鳳寺、義山公宿廬唐門災アリ、幸名別部速ニ赴キ直ニ登城於休息所拝謁唐門焼失靈廟無恙…
とあって、享保9年以前に感仙殿に唐門が存在していたことが明らかである。

本殿、拝殿、御供所の平面形状、規模が全く先例の瑞鳳殿を模したものであることからも、この唐門は感仙殿創建当初からあったと見られること、唐門と拝殿を結ぶ橋廊下（塗橋）もまた当初からのもので、この橋廊下の長さを瑞鳳殿と同じく実長3間とするのが妥当であろう。

善應殿の配置形式も古岡に見る通り感仙殿と全く同じと言ってよく、ひいては瑞鳳殿の踏襲に他ならない。平面形においては同一形式のものを並置したことになる。従来感仙殿の北東にあった御供所が善應殿の南東に移動して両殿の併用施設となり、両拝殿が廊下によって連結した。⁵⁶ 御供所はその位置と向きを変えたがその形状は不变である。

感仙殿の正面門はかつて四脚門であった。しかしに善應殿が並置されてからは、感仙殿門は冠木門に替った。他方善應殿門は四脚門となっている。この関係は幕末まで変わらない。後述の如く経ヶ峯廟門を移動したと言われる慈壽守の山門は、様式的に見て江戸初期の建築と見られ、享保期のものとは見られないで、もと感仙殿の四脚門であると考えられる。従って後に善應殿正門として移動したことになる。その時期や理由については不詳であるが、憶測すれば前記の感仙殿唐門焼失事故が一応その契機として考えられるであろう。

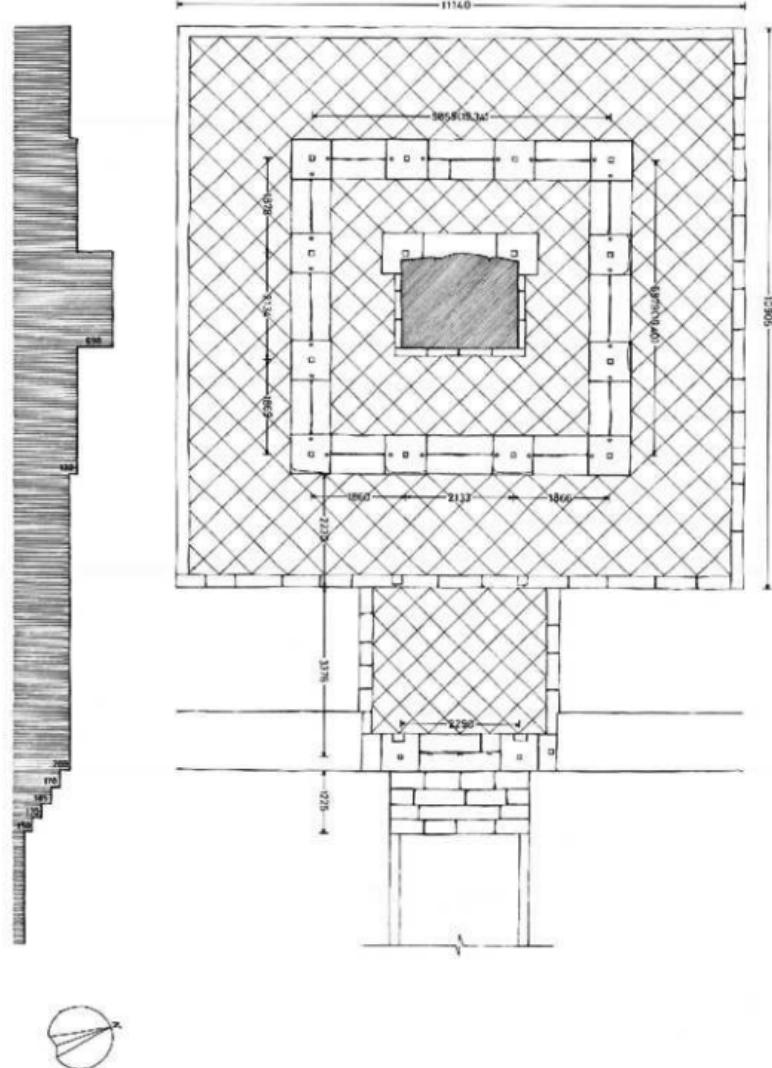
感仙殿のみの頃に見られた厩や番所が、善應殿が建てられた頃には消失し、また鍾撞堂の位置も、広場の東側、両殿の中央に移動した。この稀代の鐘撞堂はやがて2棟になった。なお経ヶ峯廟の総門に当たる坂下門が、正徳5年の10月に瓦葺に改められた。

2) - 3 建 樹

本 殿

その焼失後の遺跡から見ると（挿図9・10）、感仙殿、善應殿とともに本殿は方三間で、中央の間が広くて約7尺、脇の間は約6尺である。柱礎石と地覆石には礎盤および地覆材との緊結のための太納穴が規則的に穿たれている（但し善應殿には地覆用の穴はない）。中央に崩子台座となる石組み壇が遺っている。その背後に米迎柱の礎石と礎盤を固定するための大納穴がある。米迎柱の位置は両殿とも壁柱の位置と前後左右揃っている。

堂内の床はともに石の四半敷で、軒下の一段低い基壇面も同じく四半敷である。従って



插図9 感仙殿本殿遺跡実測図

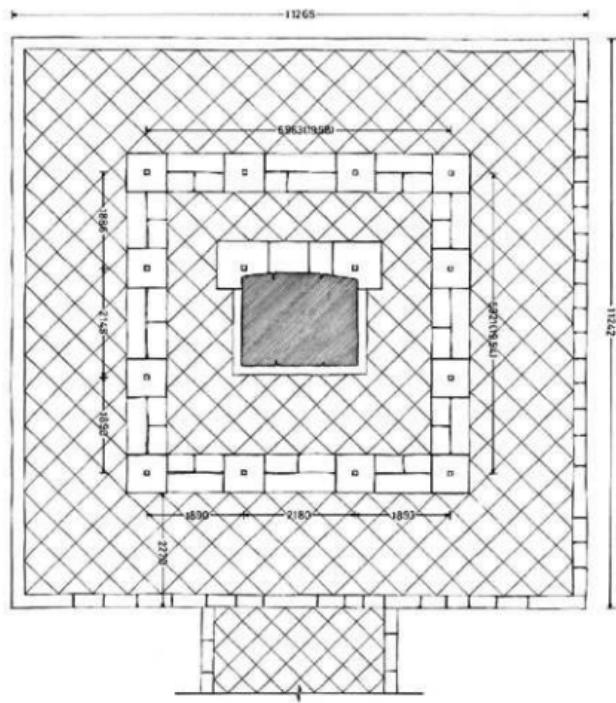


图 国 10 善 店 殿 本 殿 遺 蹤 実 测 図

堂内の床面は室外の床面よりやや高くなっている。本殿中央の間の両柱礎石の前面延長上に、礎石があり、それに柄穴がある。本殿礎石前面の外縁より約5.6m離れた位置にある。瑞鳳殿・尖頭岡と照合して、これが唐門礎盤の太柄穴であることは明らかである。普応殿では現在唐門柱礎の位置に後補の石垣が載っている。瑞鳳殿古図、感仙殿古図の中に、唐門と本殿との間に廊下状の建物が挿入されているものがあるから、時には假設的な、屋根だけの建物が介在することもあったと見られる。しかし、それは本殿の壁まで達するものでなく、本殿軒先までで止っている。恒久的施設ではない。

感仙殿本殿の屋根は宝形造りで、当初から銅瓦葺きであった。屋上には露盤、宝珠を載せ、降り棟、稚見棟は瑞鳳殿同様に龍頭で装飾した。軒の出もかなり深くて安定感がある。正面中央の間に棲唐戸を吊り、その左右の間に花頭窓を配する。側面では中央の間に花頭窓を用い、他はすべて板壁となる。

軒は二軒繋棟、斗拱は三手先、軒部は柱上に台輪を載せ、頭貫、内法貫(飛貫)、腰貫、地覆を用い、柱は粽(まろこ)があって、木製の唐様礎盤の上に建つ。頭貫の木鼻が獅子頭となり、阿吽の2頭が隅柱のところで交差する手法や、正面の棲唐戸に竹に雀、九曜紋を、そして花頭窓と内法貫との間に鳳凰の岡柄を、また腰壁に2本の吹き寄せ棟を摩状に配する意匠において、なおまた頭貫と飛貫の間に飛翔する天女を1本ずつ各間に配し、中備えの幕殿内には鳥と植物を配するなどの主要モチーフの取り扱いにおいて、いずれも瑞鳳殿を踏襲していると見られる(写真33・34・35・36・37)。

しかし仔細に見ると、個々の彫刻の構図など、かなりの相違も指摘出来るし、花頭窓の窓枠曲線などもややなで肩になって来ているし、また台輪、貫等の装飾文様などは殆んど違ったものになっている。

本殿内部、石組の台座の上に厨子を置いて忠宗の木造座像を安置する。厨子は千鳥破風の前面に軒唐破風を付け、屋根は柿葺、軒は二軒の繋棟で三手先斗棟となる。尾樋、台輪、棲唐戸、勾欄等、唐様意匠で統一され、華麗な絵画で装飾され、これまた瑞鳳殿厨子に匹敵する手の込んだ作品である(写真38)。

感仙殿本殿は軒の出の深い安定感といい、構成面における堅実さといい、装飾面における豊饒さと併せ、瑞鳳殿に比して殆んど遜色は見られず、江戸初期の充実した技術を窺うに足りる秀作である。

普応殿の本殿も方3間で床は四半敷。中央間が7尺間で脇間は6尺間である。宝形造りの屋根はもと漬戸瓦葺であった(写真39・40)。

木製の唐様礎盤、粽のある丸柱、また台輪、頭貫、内法貫、腰貫、地覆から成る軒部の構成、また棲唐戸、腰壁の意匠など感仙殿本殿と軒を一にしている。

しかし、瑞鳳殿、感仙殿では軒を支えるのに複雑な三手先斗栱によっており、そこを彫刻、絵画で充満しているのに対し、ここでは簡単な出組で支え、軒支輪を巡らし、中備えに妻股を置き、琵琶板部分には彫刻を用いず、また軒桁、台輪、貫等に絵画を施さず、壁にも彫刻、絵画を用いない。化頭窓もその輪郭だけを羽目板にして上から張付けただけの真窓になっている。瑞鳳殿、感仙殿に較べ、装飾面での省略が著しく、見劣りは否めない。しかし軒の山も深く、安定感もあり、総体に優美さを失っていない。

殿内の厨子は、軒唐破風を設けない、入母屋妻入りで、斗栱には三手先を用いているが、軒廻りに彫刻の類を付けず、その点、本殿の意匠と軸を一にしているところがある。江戸中期の堅実な作風が感じられる（写真41）。

唐門・橋廊下（塗橋）

感仙殿唐門は享保9年5月3日に焼失したが、その後再興されたと思われる。その形式は不明であるが、向う唐戸で、瑞鳳殿の如く、本柱2本の他に支柱2本があった可能性が強い。本殿の建つ敷地と、拝殿の建つ敷地とは、これまた瑞鳳殿と同様、敷地に高低の差があり、拝殿敷地に較べて本殿敷地は約1m程高い。従って床板敷の拝殿と上間式本殿とを連結するすれば、橋状の廊下を設けることになる。（遺跡実測図において、感仙殿前面の、唐門礎石の直前にある石階は明治期における後補である）。古図で「塗橋」と言われ、「橋廊下」と註のあるところからも、瑞鳳殿廊下に見る如き吹き放しの廊下で、左右に勾欄を付け、切妻屋根を懸けたものと見られる。

屋根柿葺に伏見土瓦棟瓦葺に被成吉飯事、寛政三年御下知

とあるから、本来は柿葺であったが、後に棟瓦葺になったことが知られる。唐門と拝殿との距離は実長3間あったと思われ、柱を1間おきに建て、従って柱間は3間となる。この点、実長3間、柱間2間の瑞鳳殿廊下とやや異っている。

音応殿の唐門、橋廊下の平面形は感仙殿のそれと全く同一であり、本殿と拝殿との高低差も感仙殿と同じであったと見られるから、その形式も同じく瑞鳳殿のそれと異らないと思われる。橋廊下の屋根は本殿と同じく漸戸瓦葺であったが、寛政3年（1791年）に棟瓦葺に改造される。

拝殿

感仙殿の拝殿は間口が7間、奥行3間、板敷の建築で、廻りに縁を巡らす。正面中央1間分に向拝を付け、階段を設ける。間口7間のうち、左右の端の間は疊を敷いている。屋根は入母屋造りで、初め柿葺、やがて柿葺に替る。「組天井」とあるから、これも瑞鳳殿拝殿の如く格天井であったことがわかる。

正面中央間は折棟唐戸、内側に腰障子をたてる。また背面中央間にも折棟唐戸を付け、その内側に腰障子を配する。中央間左右2間ずつ4間分、背面も同じく4間分はしげ戸を用い、その内側に明り障子を使用し、他は全てはめ板張りの壁である。瑞鳳殿ではしげ戸に当るところを「上巻」即ち半蔀形式としていて、やや古風であるといえる。他は全く規模、形状ともに瑞鳳殿と同様である。

善応殿拝殿は規模、形状、建具等の点で感仙殿拝殿に全く同じであると言えるが、屋根が瀬戸瓦葺で、この点、栢葺、柿葺の瑞鳳殿、感仙殿の拝殿と外観的にやや異なる。

廟門

古図によれば、感仙殿の廟門は初めは四脚門であったが、後に冠木門に替った。この状態は幕末まで続いている。

前述の如く、感仙殿、善応殿は明治10年から12年にかけて修理され、とともに本殿以外の建物は取り壊しの運命にあった。その時、ここに門を譲り受けたのが現在宮城県多賀城市南宮の慈雲寺山門であるといわれる。慈雲寺山門は四脚門であるから、明治初年において、実はこの門は善応殿の廟門であった訳である。この四脚門は、その細部の装飾様式の面から見て、善応殿建立期の享保元年（1716年）時のものではなく、さらに遡った江戸初期のものと見られる。従ってこの門は寛文期の感仙殿の廟門とすることが出来る。即ち当初の感仙殿門が、後に善応殿が建立されてから、善応殿門へ転用され、自らは冠木門形式へ変ったことになる。単に便宜的に転用されたとは考えられず、何か特殊な理由がなければならない。

前述の如く、享保9年5月3日に感仙殿廟の唐門が失火によって焼失し、管理不行届のかどで瑞鳳寺ならびに塔頭の酬恩施が謹慎を命じられたが、このことと無縁ではないように思われる。

慈雲寺の山門は切妻で、現在は複瓦葺で棟に鰐を載せている（写真42・43）。もとは感仙殿古図に「とち葺」とあるから板葺であった。本柱から前後に出了4本の支柱は、唐様の四角の繩盤上に建つ。筋は棟唐戸で、吹き寄せの横棟が付き、棟にはもと社金物があったが現在は失われている。吹き寄せの間には唐草彫刻が挿入されているが、上部の広間に繩細なまん字崩しの組井桁を地文とし、その上に九曜の紋章を付している（写真44）。中央の広間にも組井桁の連続文が施されているが、下部の広間は損傷していてその文様は不明である。扉の裏側も、九曜の部が立引両の家紋に替っただけで、あとは表側と同一である。

本柱の台輪上から支柱上の軒桁にかけて、奇曲度の強い海老虹梁が渡され、その下部に、雲上を飛翔して樂を奏す天女像が前後に両妻で計4体光犠されている。

本柱の頭貫本界に抓珠龍の頭が付けられ、左、右が阿吽の形をとる（写真45・46・47）。

妻の拵みに付く薫感魚の左右の轍は、牡丹の花葉を彫刻している（写真46）。

これら各所に見られる彫刻は力強く、流麗で、江戸初期の安定した技術が認められる。正面の扉上の幕板の輪郭は瑞鳳殿涅槃門のものに酷似しているが、中には彫刻を入れていない。また古輪、長押、頭貫等の水平材には縦面の類が見られないようで、装飾量においては瑞鳳殿の涅槃門に及ばないが、却って一種の落ち着きが与えられている（写真48）。

抓珠龍の意匠、松川菱の格子など、瑞鳳殿のそれと共通している。現在、伊達家における藩主廟門の形式を知り得る唯一の遺構となつた。

以七、瑞鳳殿、感仙殿、善光殿三御靈屋の主要殿舎構成を模式的に示せば挿図12のようになる。寛永時代に瑞鳳殿において創案された廟形式が寛文期の感仙殿、享保期の善光殿に踏襲されて來たことが分る。

なお、この三院廟の建築施設につき、「神社仏閣諸寺院定御修復所」の中に次の如く記されている。

瑞鳳殿

一、瑞鳳殿

- | | |
|-----------------|----------------------|
| 一、御唐門并御廊下半柱共 | 一、御拝殿 |
| 一、御供所御廊下共 | 一、玉垣并同延り檼共 |
| | 御拝殿右御供所後追櫓共 |
| 一、御坂石垣所々土留石垣共 | 一、深榮門同萬葉瓦垣 |
| 一、接接盒并同所折檼櫓共 | 一、櫻門并御門接接盒御右垣同所御手水所共 |
| 一、御供石塔 | |
| 一、感仙殿 | |
| 一、御唐門并御廊下半柱 | 一、御拝殿善光殿御行駕江之庭下共 |
| 一、玉垣并同延り檼共 | 一、御坂石垣并所々土留石垣共 |
| 一、冠木御門并向蔭櫓共 | 一、接接盒 |
| 一、同堅櫓共 | 一、櫻門并御坂石垣并御門生垣共 |
| 一、三御靈屋江之入口御門巣ヶ所 | 一、御供石塔 |
| 一、善光殿 | |
| 一、御唐門并御廊下半柱共 | 一、御拝殿 |
| 一、御供所御廊下共 | 一、涅槃門御脇櫓共 |
| 一、玉垣并同延り檼共 | 一、御坂石垣并所々土留石垣共 |
| 一、接接盒 | |

感仙殿では冠木御門、善光殿では涅槃門とあり、古図の内容と一致し、またこの四脚門は瑞鳳殿と同様涅槃門と称されていた。

第3章 妙雲界

—周宗(紹山)、齊義(正山)、同夫人廟—

9代藩主周宗(文化9年; 1812年4月卒)、11代藩主齊義(文政10年; 1827年11月卒)、同夫人芝姫(安政5年; 1858年4月卒)廟所は、ともに感仙殿の北隣、妙雲界と称する区域内にある。廟所の敷地は感仙殿、善応殿の本殿と同一の高さにある。善応殿、感仙殿廟門と並んだ位置に冠木門ないし楊門があり、ここを通り、感仙殿の石階に並行して設けられた石段を昇ると、三間一戸、八脚門で、屋根が瀬戸瓦葺の門があって、これに妙雲界の扁額が懸かっていた(挿図3・付図5)。

廟の形式は三者全く同一で、現在は墓碑のみが建っているが、もとはいずれも雨屋がこれを覆っていた。門の正面の位置に周宗(紹山)の墓碑が東面し、その右手、即ち北側斜め前方に齊義(正山)とその夫人(真明院)の墓碑が南面して並んで建つ(写真6・7・8)。

正山公廟を例にとってみれば(挿図11)、四半散の床の上に二重の台石を据え、その上に正面88cm、奥行72cm、高さ約2m30cmの花崗岩の碑を建てる。墓碑の床面からの總高は約3m位になる。雨屋は太納穴の位置から見て、長さ2間四方の建物で、中央前面に廟が付いていた。なお隅の礎石を除いて、礎石の据え方が不規則なところもあり、修補の際に礎石の入れ替えが一部行なわれているようである。

この雨屋の規模については古図に

正山様御廟、紫闇四面瓦御屋根

とあるのに一致し、廟の出を8尺としているのにもほんは相当している。

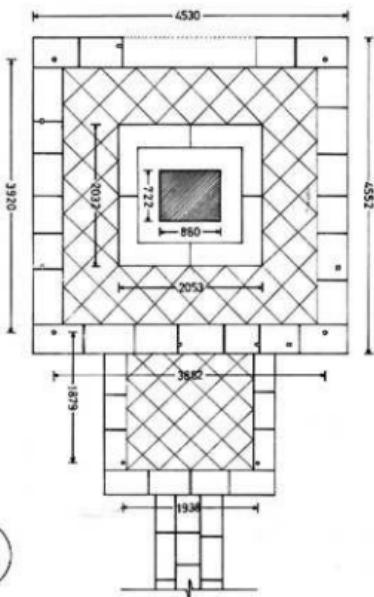
この廟の形式は大年寺の無盡灯、法華林における歴代藩主、同夫人のものと全く同一で、その中で最も古い時期のものは無盡灯の綱村(肯山)廟である。この廟についても古図に

御雨屋式間四方瀬戸瓦葺

とあり、正面に廟が付いている。以後代々の藩主および夫人の廟はこの方式に従っている。

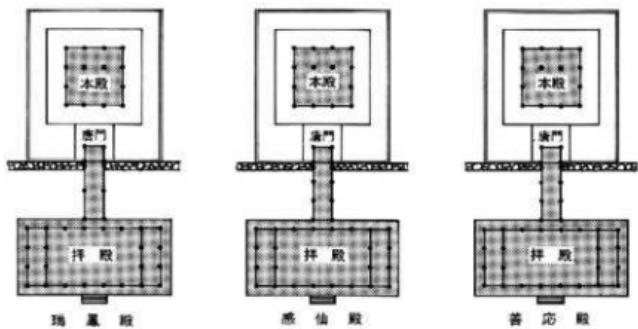
瑞鳳殿、感仙殿、善応殿が御靈屋と称されているのに、肯山廟以降のものは全て御廟と称し、呼称の上でも区別されている。肯山(宝暦元年; 1751年卒)以降のものは紫闇が中心であるのに対し、瑞鳳殿、感仙殿、善応殿は墓所であると同時に靈像、靈牌を安置して祀るという機能をも担うところに特色があり、そのためには改めて靈廟、御靈屋と称したものと思われる。

宝暦以前における孝勝院(2代忠宗夫人、万治2年; 1652年卒)、淨願院(3代綱宗夫人、貞享3年; 1686年卒)、萬壽院(4代綱村夫人、宝永3年; 1706年卒)の廟がいずれも御靈屋と称

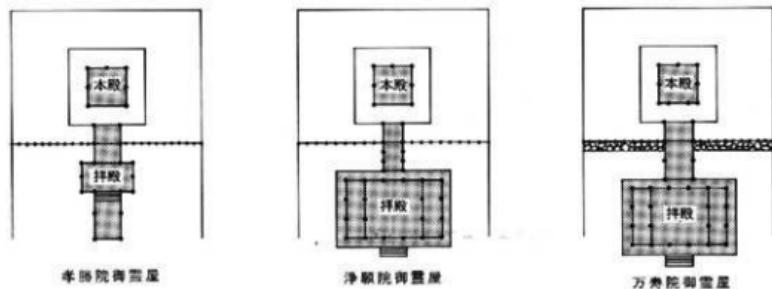


挿図 II 正山廟遺跡実測図

されており、その廟所の形式がともに本殿と拝殿から成っていること、本殿と拝殿との間には玉垣ないし櫓があって両者を区別していること、本殿と拝殿とを廊下で結ぶが、その境を唐門もしくは扉等をもって仕切ること、またこの廊下は本殿の壁体まで到着しておらず、即ち三者（本殿、廊下、拝殿）が一体化したものでないということ、こうした廟社殿の形式は、瑞鳳殿以来の御靈屋施設に共通して見られるところである（挿図13）。従って伊達家の御靈屋建築の祖形は實に寛永時代の瑞鳳殿建築において定まったと言えよう。



挿図12 瑞鳳殿・感仙殿・善応殿の構成模式図



挿図13 孝勝院・浄願院・萬寿院御靈屋の構成模式図（御修復帳を基に作成）

註

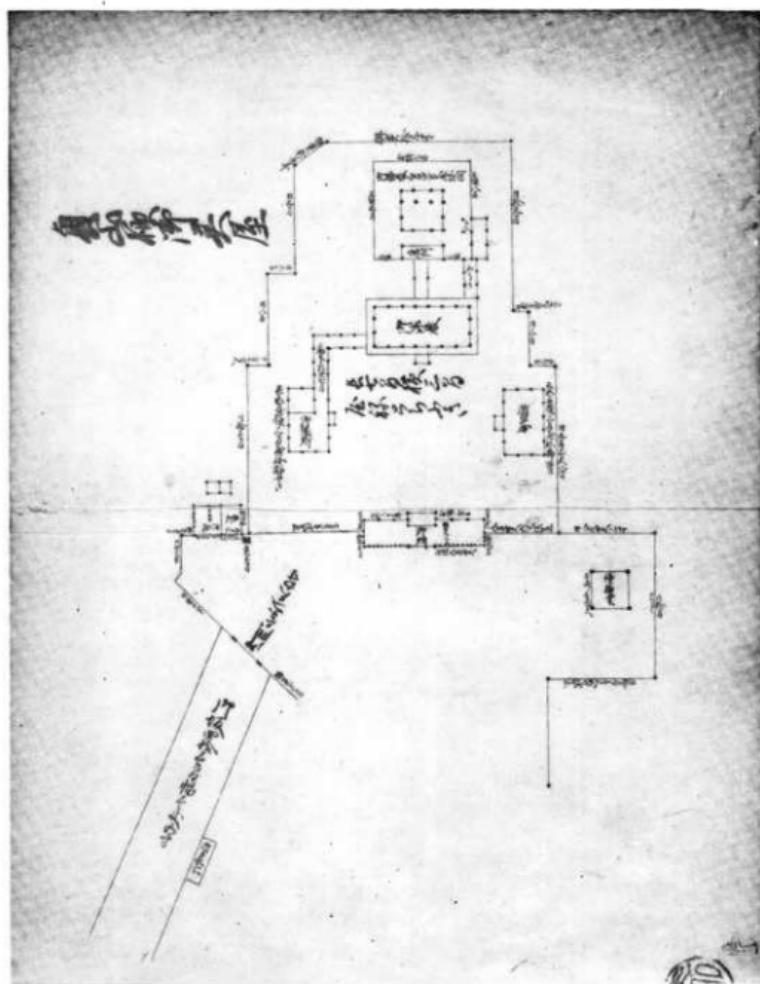
1. 墓蓋板については伊東信雄編『瑞應院—伊達政宗の墓とその遺品』の中の佐藤「埴原殿の施事」に熱り、大様二九を要約したものであるが、部分的にはそのまま再録したところもある。
2. 「大日本古文書」伊達家文書之十、「真山故正兵衛就書一枚」
3. 案内1
4. 「鹿山公（忠宗君）治家記録」寛永14・10・24
5. 「忠宗君治家記録引記」寛永15年、同16年冬
6. 田辺泰著「日光廟建築」（昭和19年）
7. 田辺泰著「東京府史跡保有物調査報告書」第11回（昭和9年）
8. 「鹿山公治家記録」正保4・5
9. 「忠宗君治家記録引記」寛永15年、同16年冬
10. 宮城県立書籍所蔵「仙台藩御内神社仏閣等作事方役修繕ニ属スル場所調、寛文延宝直享定書共」と前書のある、伊達家御修置帳類では最も古い時期の内容を保持しているものに指摘されている紹介。
11. 昭和6年仙台高等工業学校建築科実験室とともに一部修正。
12. 「大日本古文書」伊達家文書之五、柴田朝意父子事蹟覚書等「万治三年より延宝五年迄奥田外記留之写」
13. 西園小倉徳昭と6年調査時に單写したもの。この水盤はその後松島博物館に保存されている。
14. 言10参照
15. 阿刀田舎者著「仙台城下経図の研究」所載
16. 「青山公（綱村君）治家記録」延宝7・6・29「千葉、堀川殿へ御用^{馬鹿}御取上、使者望月庄太夫重相」とあるから、この頃までは御取が存在していたと見られる。
17. このことは他町寺草家において皇室を御所と称し、御殿（仮設、御堂）と区別しているのに類似する。御修置帳において安藤様（御者）の場合、古くは御殿と称され、後に御取と称されているのが例外である。この場合、御物は変化していないのに御取の替えた理由を明らかにしないが、あるいは成る時期から御者なるが故に馬公や夫人と区別した取り扱いを意識的に行なったものであろうか。床板敷で解子を安置しており、その点、陽徳院御室屋と異なるのに御用と称されるようになった。
18. 従て坪殿の有無とも関係しているようで、湯治院御室屋のみを例外として、御室屋と称されているものは皆坪殿を備えていて、丸柱形式が堅っていることに注目したい。また湯治院の例は坪殿を別に持たないが、本殿に内柱を付して、一応丸柱の形式を通して見ることも出来る。とすれば天麿院の場合に御室屋と称し（坪殿施さぬ）、安藤公の例ではやがて御室屋と呼称を変じた（坪殿施なし）理由も一応うなずけるであろう。
19. 「殿居儀」日光山宿坊日記
20. 稲木站、大沢三之助著「日光廟建築論」（東京帝国大学紀第1卷2号）、及び田辺泰著「日光廟建築」所載、日光宿坊日記
21. 宮地直一監修、神社古跡所蔵「東照宮御室」（日光東照宮蔵）
22. 城戸久著「日光東照宮はなぜつくられたか—史実と伝説の各面—（昭和47年、淡官記念講演）」また後に伊藤家東照宮本殿、石之間・坪殿修復報告書（日光二社一守文化財保護委員会）でもこの間の元和社殿であることを述べている。後者によればこの間の製作年代を寛永13~16年頃と見、この時光秀造宮の社殿は存在しないので、寛永造替の社殿とすれば現実の建物と相違することを以て、この間の信頼性を疑うのである。
23. 西園「日光廟建築」
24. 犬舟日記
25. 同上
26. 「後承造り」なる形式を「大明神造」の具体的表現と見做し、ついで、これに參照した犬舟が、かつて豊臣家の計画にも関係した、また当時大明神と言えば豊臣大明神がその代表的存在であったとの理由から、大明神造とは豊臣家の如き石の造り仕様形式のことと見ることによって、久能山東照宮石の造り仕様を豊臣家仕様形式の説得であろうとする考えがある（大河直躬著「極盡東照宮」昭和44年、講談社）。
27. 西園「東照宮」所載復元図及び「東宝東照宮本殿、石の間、坪殿修理報告書」、「夜御明記抄」所載本社脂圖を参考

- げ、これをもとに本庭5間×4間、坪数を7坪×3間もしくは9坪×3間と推定しているが既に信頼い。坪数に関するところを5間×3間と見ることも出来る。なお別の観点から段階も提出されている。越戸久著「日光東照宮五花創建社歴について」(昭和18年「建築学会大会下巻論述発表集」)
29. 畠根昌は当時の松坂界から別直意に召えられているが、程前の開闢には大きな変化がないものとみられる。元和3年の日光東照宮区《東照宮跡記》にもこの傾向を指摘出来る。
30. 「紀事の源流」
31. 伊藤要太郎著「延喜」の中で「光明」而義の豊岡廟社は、洛中洛外郡區に立かれたものと比較し、石ノ門の山が依然より広く表現されているらしいとの指摘がある。
32. 弘治山城主著「石の樹」 建築史第2巻1号(昭和15年)
33. 伊藤要太郎著「石清水八幡社源・下」 建築史第1巻2号・3号(昭和14年)及び飯田重典著「大坂八幡から瑞應寺まで」(昭和14年、近刊北嶽論著要旨)
34. 関根小声著「日光東照宮はなぜつくられたか」の中で別の見地から豊岡廟形式御手を否定している。「祭神を亡ぼした家業であり、吉永の櫻を踏まないよう懼心の意をもった人を立つのに、秀吉廟にならえというようなことは、當初的には到底考えられないことである。久能山東照宮は教説論法で、豊岡廟と同様であることは、そうした現象を経て、当時のこの種の社殿形式として、まだ吟誦に合致するばかりか、そのようにした方が坪数に都合がよかつたから、それを採用したに外ならないのである。……」
35. 関根「東京府知縣在官府調査報告書」及び栗谷良之進、御園勝解説「日光東照宮、古應院廟」(昭和9年)、なお享応3年の社地によれば、もと横度庭であったものをこのとき御庭真にした。
36. この後里は古跡から御庭真であったか何うか不詳であるが、吉徳町のものとすれば御庭御の御丸舟としては最古の例となる。
37. 關根小声著「阿須野御手」
38. 宝形造り組屋と虎頭との関係については井上充大著「虎頭と宝形造り」、日本建築学会論文集第61号(昭和34年)に詳説されている。その中で比叡山延暦寺、萬葉山空海廟の形式についても触れている。
39. 同上。この牛で引用の、高野山伏見御手跡4、治安3、10、23の条「冬十月廿二日、御堂殿上意御、是所請欲為蒙已來造作御手及御御帳……」
40. 萩山春樹著「比叡山の東照宮」(神道史研究第32巻6号)
41. 「豐山公治家記録」寶元14、11、26「瑞風殿奉請。庭上に於テ御手六番アリ。」ここで庭上とは、本殿と唐門との間をいうのであろう。唐門と本殿との間距は約3尺あり、本殿前面の四手石板との上間床、唐門や正面、側廊等の施設は、そのまま能舞台脇、後座、裏屋、縁の間、側廊として利用され得る。また「百山公治家記録」昭和4、1、24「瑞風殿御手跡供奉……第一門許ニ本印平、市之助、土計、備前、太閤を御門御先ニ知候シ、唐門跡ノ御手ス、御手舉テ御手跡ヘ入セラレ……」、著生はこの便面を柱て本殿に至り歩行したことが知られる。なお承永院になる博43「瑞風寺御手跡への藩主御參詣圖」(仙台市立)に記された書き込みによれば「己御靈廟御先立御御手御御手御手御手下ニ西原ノ取可申事」また「御堂内より御近習手申所上申事」とあり、御殿内の向って左側は御太刀、御刀役の御所となり、御殿軒下で、正面階段の左右に並んで御番役と御内役が控えている。明らかに著生は直接御殿から昇り、廊下(御廊)、唐門を経て御佛間に参拝している。
42. 例えは「橋本伊達史実錄」によれば「……七樓ハ露門内ノ左殿ニアリ。今ハ法会ノ際、參拜者ノ相所ト為ス。故ニ御手折ト称シ居レリ。間口五間、奥行參間アリ。竹格ト云フハ、此ニ竹格ノニテヲ題セル疑頗リ。其ノニアルリ以テナリ、之れ例ノノ學ナルヲ詳ニセズ。同古袖付半身乳白ノ曰ク、葛依利尚、布衣三重ス。右島傳也ノ筆ナラムト云ヘリ。此ノ建物ハ、元ト貞山公ノ御御手迹ハルク。古編ニアリタル公ノ御御手迹ハ、其ノノシテ、二階端テノ物ナリケト。平家ハ御御手ヘトナシ。切ツツメテ、再幕シ。瑞風殿ノ所属舎トセラルモノナリ。宮城殿(通鑑)枝拂山添古三郎ニ附ク。竹格ノ材木ハ梵内氣体也「御止メ山」ヨリ曳り出サヌカルモノナルガ如シ。又其ノ前柱ハ檜木ナリト……」
43. 御殿の向きも御殿の方向。明らかに、建築面が方位と一致している。前掛「増上寺、徳川將軍墓とその遺品」
44. 「萬山公治家記録」方略1、7、12、同7、24、同8、6
45. 同方略1、7、17
46. 同方略2

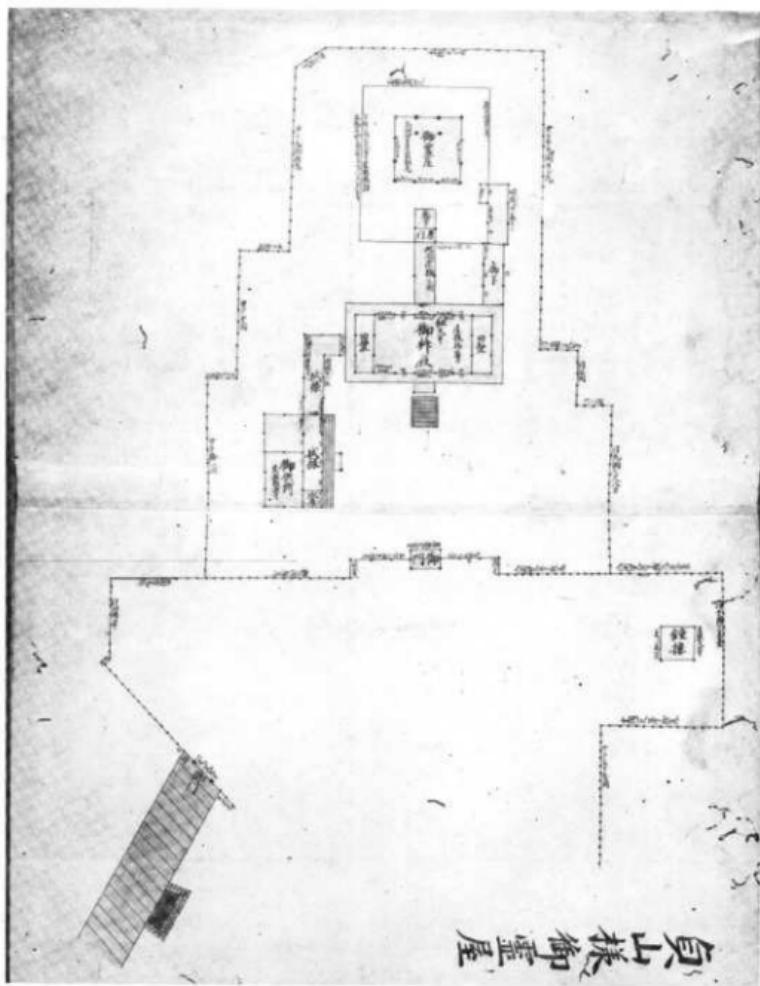
47. 同寛文4、同5、17「永江市計元景ニ御物ヲ賜フ。義山公ノ廟落成。普請奉行ノ賞ナリ」
48. 「雄山公治家記録」正徳1・6・4～同1・7・1
49. 同、正徳1・7・1
50. 「御山公治家記録」正徳5・2・10
51. 同正徳5・3・3
52. 同享保1・3・10
53. 宮城県図書館蔵及び東北大学建築学科蔵「御移置帳」の転写
54. 宮城県河井架蔵は2枚あり、1つは修繕者の『仙台藩内神社仏閣等作小方役所修繕ニ備スル勘定帳』寛文延宝貞定書共とあり、1つは『神社仮開闢寺院遷移所済御歳共達甚頃頃付被承御御移置本帳』と高書があり、寛文、延宝、貞享、元禄の定書が付く。前者を振りに御修復工数、後者を既新替と呼ぶ。東北大字本は宮城県本新替と書きは同じ。但し寛文、延宝、貞享の定書の後に元禄定書が別に付されられている。書き込みの内容から見て、東北大字本が宮城県本の新替より古い。東北大字本も宮城県本新替とともに後世の書き加えが著しい。
55. 「雄山公治家記録」正徳5・10・10
56. 善應振思会藏
57. 摂國3では冠木門となっているが、大谷寺無衝灯ではこれに鳥居門は鳥門らしくも見える。
58. 付図4

付 記

資料収集の面では瑞應院成会及び仙台市文化財関係諸氏の御高配をうけました。また図面作成、測量実測には東北大学建築学科の田中正二君の援助をうけました。付記して感謝します。



付図1 瑞鳳殿御靈屋繪図(寛文～貞享)



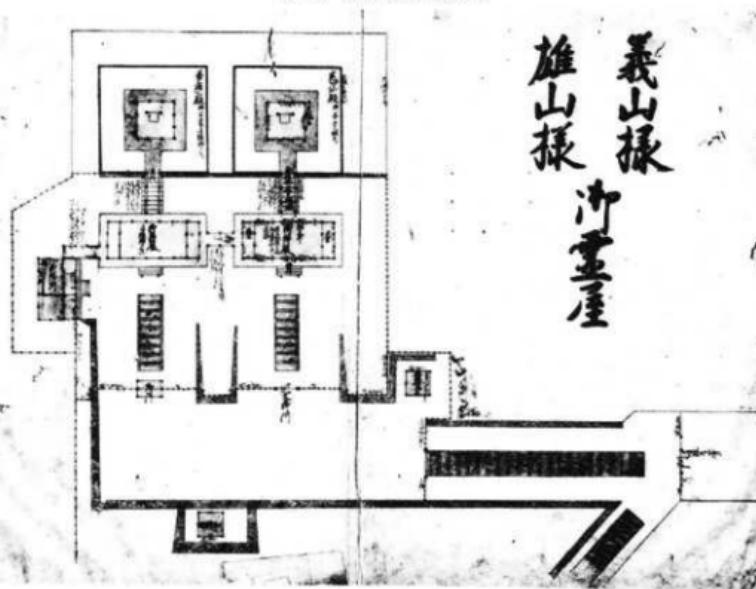
付図2 瑞鳳殿御靈屋繪図（元禄以降）

義山根御靈屋



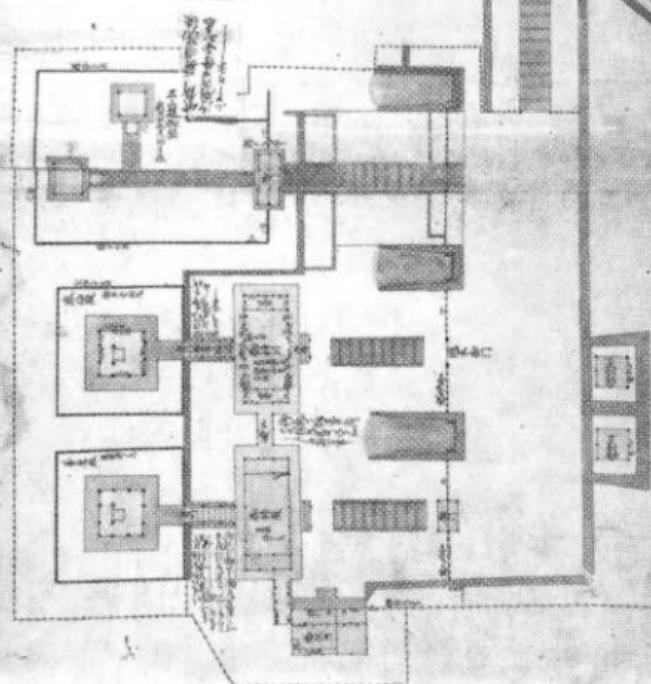
付図3 感仙殿御靈屋絵図

義山根
根御靈屋



付図4 感仙殿、善応殿御靈屋絵図

義山様御靈屋
雄山様御靈屋
紹山様御廟



付図5 感仙殿、善応殿御靈屋及び紹山、正山廟繪図



写真1 瑞鳳殿跡全景



写真2 感仙殿跡



写真3 同 上



写真4 善 庙 残 蹤



写真5 同 上



写真6 妙雲界 越山廟



写真7 妙雲界 正山廟



写真8 妙雲界 真明院廟

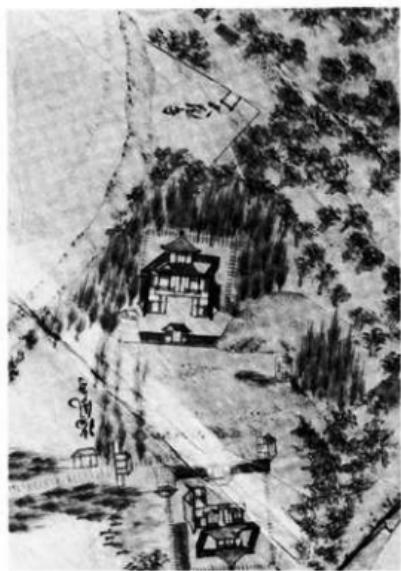


写真9 宽文4年「仙台御城下絵図」中の
瑞鳳殿と惑仙殿

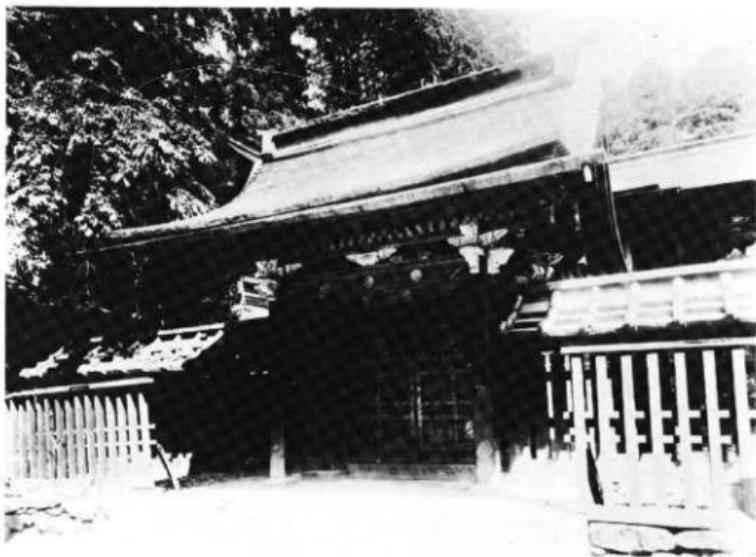


写真10 涅槃門全景

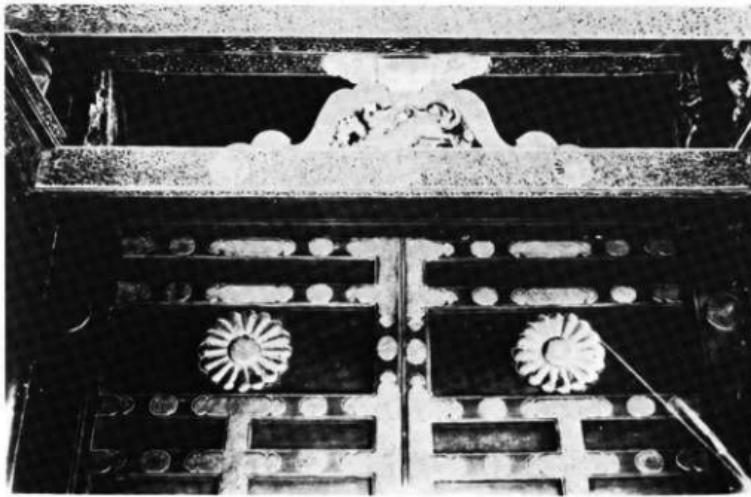


写真11 涅槃門正面臺板



写真12 涅槃門妻の装飾



写真13 涅槃門と押殿



写真14 拝殿正面

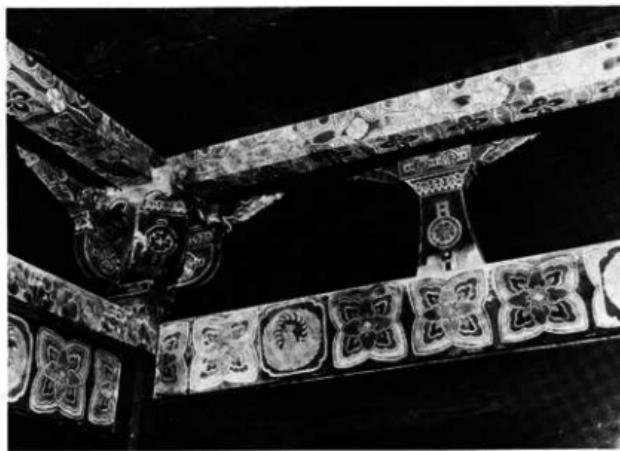


写真15 拜殿内部



写真16 橋廊下



写真17 唐門正面の装飾



写真18 唐門背面の装飾



写真20 本殿屋根



写真19 本殿正面中央間



写真21 本殿隅柱と斗拱



写真22 本殿中央北間装飾



写真23 本殿中央西間装飾



写真24 本殿内部 来迎柱・海老紅梁



写真25 本殿来迎柱・来迎壁



写真26 本殿厨子正面



写真27 本殿厨子南側軒廻り

写真28 本殿北側
殉死者墓碑と玉垣



写真29 本殿南側
廻廊と玉垣



写真30 廻廊と棊戸・
柄掻板・幕紋





写真31 御供所（竹樓）全景



写真32 御供所向拝



写真33 感仙殿全景



写真34 感仙殿正面

写真35 感仙殿軒廻り



写真36 感仙殿正面



写真37 感仙殿軒廻り詳細

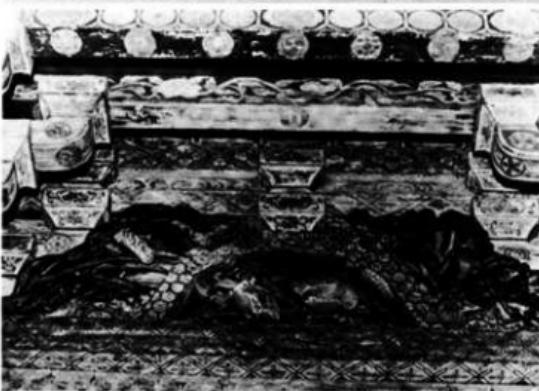




写真38 感仙殿厨子



写真39 善応殿全景



写真40 善應殿正面



写真41 同正面と厨子



写真42 慈雲寺山門正面



写真43 同側面

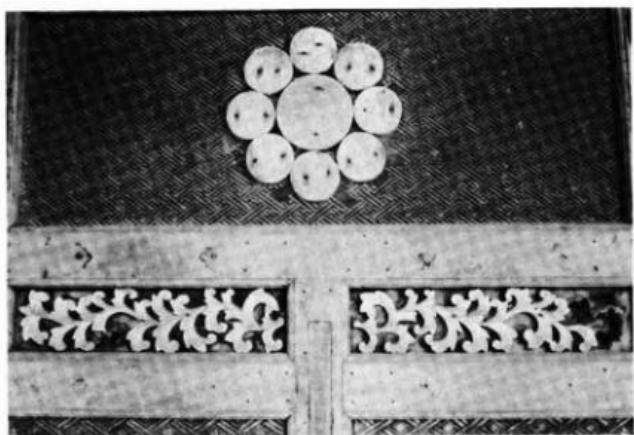


写真44 慈雲寺山門正面棟唐戸



写真45 同 向って左妻の装飾



写真46 同 向って右妻の装飾



写真47 慶雲寺山門向って右妻の装飾



写真48 同 正面基壇

経ヶ峯靈屋の遺構・遺物

—金工・石工物を中心として—

佐 藤 明

第1章 経ヶ峯の金工

小倉徳先生が昭和50年8月27日河北新報に発表され、昭和54年8月10日発行の『増補一人静』に再録された文章に、「瑞鳳殿の遺物」という文章がある。昭和50年8月といえば、既に昭和48年8月に発足した瑞鳳殿再建事業が着々と進行し、墓室発掘調査も完了し、小倉先生の設計によるコンクリート工法による新瑞鳳殿も既に上棟式を済ませていた。その時に、先生は昭和20年7月の戦災に罹災しなかった瑞鳳殿の遺物を4点数え上げておられる。即ち、

- (1) 瑞鳳殿の鐘
- (2) 瑞鳳殿の手水盤一箇
- (3) 瑞鳳殿本殿屋根隅棟の青銅亀首4個
- (4) 瑞鳳殿・感仙殿焼け跡から収集された銅瓦・金具類多数

がそれである。そのうち(1)と(2)は昭和6年7月、仙台高工建築科の主任教授であられた頃、学生を率いて瑞鳳殿を実測調査された時（これら実測図は後に「仙台地方古建築実測図」として発表され、今回の瑞鳳殿再建にも大いに役立った）には、涅槃門に入った左側に、右の台に据えられて、青銅製の鐘と手水盤が並んでいたそうである。（写真3）

1-1 瑞鳳殿の鐘

(1)の鐘は、もと経ヶ峯の上に鐘堂があり、この鐘はそこに吊り下げられていて、越路六軒丁居住の者が交替でこれを撞いていたのだが、明治以後はその制も廃され、鐘楼も壊されて、昭和の初期には上述のような状態であった。戦後も、木造の門その他の施設は戦災で焼失したもの、金属製品の鐘はそのままの状態で残っていた。これを見た当時の仙台市長岡崎栄松氏は、参道下の瑞鳳寺の本堂前に鐘堂を建ててここに移した。この鐘は当時はまだ伊達家の所有であったが、昭和35年に伊達家から瑞鳳寺に寄付され、今日に至っている。

この鐘は寛永14年（1637年）忠宗公が奥山大学常良ほか2名を奉行に任じて鋳造させ、父公の廟に捧げられたものとして、古来有名なものであり、昭和26年刊行の『仙台市史』別編三において、「仙台の金石文」を執筆した菊地武一氏が、その銘文を記録している。しかし、

菊地氏は法量（寸法）は挙げておらず、これについては小倉先生の実測記録によると、総長158.6cm、竜頭高さ31.1cm、直径91.1cmとなっている。この由緒ある鐘は、昭和37年に宮城県の有形文化財の指定を受けて現在に至っている（写真1）。銘文は小倉先生が拓本にとっておられるということであるが、資料1に引用しておく（資料1）。この鐘の音がどんな音であるのか、いつか政宗公の忌日にでも撞いて聞かせてほしいものである。⁽²⁾

菊地氏の調査、並びに本書の佐藤巧氏の崩築論述によれば、2代忠宗公の感仙殿には、寛文4年（1664年）忠宗公の七周忌に当り龜千代（後の4代綱村公）が祖父公の廟に捧げた鐘があったし、3代綱宗公の善応殿にも、5代吉村公が正徳6年（1716年）に鋤造、奉獻された鐘があったのであるが、共に失われてしまい、瑞鳳殿の鐘だけが、ほど近い瑞鳳寺に保存されていることは、せめてもの幸せと申すべきであろう。⁽³⁾

瑞鳳殿の鐘楼をはじめ、感仙・善応の両廟の鐘楼も解体され、後者の場合には鐘そのものまで失なれてしまったのは、明治維新直後から排仏毀釈の傾向が起ったこと、伊達家も明治政府の意向に従わないわけに行かなかったからであって、その経過は2代廟感仙殿前に、明治12年12月に山路謙隆が国分草の撰と書を得て建てた「新修先廟記」に詳しく記されている。⁽⁴⁾（資料III）その全文を今回の調査により引用すると、明治2年から同12年までの間に、瑞鳳殿を除く両廟は、涅槃門、拝殿が除去されて本殿だけが残されたのであり、その残された本殿も、昭和20年7月の戦災により、瑞鳳殿を含め、三殿が悉く焼きつくされてしまったわけである。しかしながら、ここに明治初年の伊達家祭祀の神道への改宗、即ち感仙殿等の巣屋の一部撤去に際して、遙か多賀城市南宮（山王）の慈雲寺に譲られ、戦災当時経ヶ峯に残っていなかったことにより幸いに戦火を免がれ、今日も慈雲寺本堂前に立っているのが、佐藤巧氏の詳述しておられる旧感仙殿の涅槃門（四脚門）である。⁽⁵⁾かくして、明治の排仏毀釈を免がれ、更に昭和の戦火を免がれ得たものは僅かに一門の感仙殿の門を除けば金属製品と石造製品だけであったことになろう。瑞鳳殿の鐘（現瑞鳳寺の鐘）もその一つである。

1-2 瑞鳳殿の手水盤

手水盤もその鐘と同様に青銅製（不燃性）であった故を以て今に残ったのであり、そもそもこれは、寛文6年（1666年）5月24日、柴田外記朝意が瑞鳳殿前に供えたもので（写真2）、子少年の頃英主政宗卿に仕へ、抜群の恩を受けた。卿歿して今ほとんど三十一年になるが、祠廟既に破損す。子幸いに修復の監督を命ぜられた。よってこの手水盤を廟前に供え、徹意を表する旨が刻まれている（資料II）。瑞鳳殿竣工後31年の寛文6年（1666年）5月に大修理が行なわれ

たことを傍証するこの銘文も貴重であるが、青銅水盤それ自身が高さ98cm（九曜文の入った八角台座共）、直径が最大のところで92cmの低いラッキョウ形の、かなり大きい堂々たる作品で、仙台金工の実力を示すものであった。その水盤は、伊達家から松島町立博物館に譲られて、観瀬亭前に据えられていることが判明し、小倉先生は「喜びに堪えない」と書いておられる。戦争中、軍に供出されたものの、砲弾に鉛直されてしまわなかったのは幸運であった。

I-3 瑞鳳殿本殿屋根隅棟の青銅竜首

(3)の瑞鳳殿本殿屋根宝形造り銅瓦舟隅棟先端の青銅製の竜首も、戦火を浴びても焼け残り、灰の中に転っていた4個が辛うじて救い出された。そのうち2個は水盤と同じく松島博物館に、他の2個は鐘と同じく瑞鳳寺に保存されている(写真4)。容貌魁炎な叫云(口を開くものと閉じているもの)の竜首である。火が迫るや水を吐いて火を消し止める等の竜首も、米軍の爆撃には効き目がなかったのであろう。今回の小倉先生設計の瑞鳳殿本殿には、竜首の青銅製の彫刻瓦は採用されていない。

I-4 瑞鳳殿・感仙殿の金具類

最後に(4)の瑞鳳殿・感仙殿の焼土中から収集された金具類は、古物収集に熱心だった仙台市河原町の梅津孝次郎氏が、戦災直後に早速岡廟の焼け跡に赴かれ、灰の中から拾い集めて保存していた125点を、瑞鳳殿再建事業の始まった昭和50年1月16日に、再建期成会に寄附されたものである(写真5)。梅津氏の熱心さには驚嘆の外はないが、三廟のどこで発見されたか、その廟のどこのあたりの金具か、もとより考古学的方法で収集されたものではなく、また小さく薄い金具自体が戦火の省めるところとなっていて、渡金が剥げている上に火をかぶってから30年の年月を経ているので、あまり再建工事の金具の製造の参考にはならなかったようであった。しかし、ともかく瑞鳳殿その他の廟の金具が少なくとも125点は残っていることは事実であるから、今後瑞鳳殿資料館にでも陳列され、多くの人々に見てもらううちには其の専門家の眼に留まり、何か新しい発見がなされる機会もあるかも知れない。小倉先生は氏の好意に感謝の意を表する、と結んでおられる。

以上が小倉先生が列挙された「瑞鳳殿の遺物」と感仙殿の門の紹介である。

第2章 経ヶ峯の石工

金属と共に不燃性を持つものに石がある。石の工作物としては、経ヶ峯靈廟へ登っていく石段があり、廟の土地を区切る石垣、更には建物の礎石があり、廟前に供えられた数十基にも及ぶ石灯籠がある。経ヶ峯靈廟の調査に当って、これら石造物も見逃すわけには行かない。たとえ木造の建物は一切焼けつくしても、その建築の立つ地盤が焼け落ち、崩れ去ることはない。石段・石垣・植林といったいわゆる靈屋一帯の土木工事並びにそこに生きる一本一草といえども悉く歴史の証人である筈であるから、再建に当っても、従来の造構は務めて保存し、利用し、いたずらに変更しないようにとの要望は、仙台市文化財保護委員会の公式の要望として期成会に申し入れてあったが、期成会は忠実にその要望に添い、戦火を浴びて脆くなつた石段、本巣石垣正面の石材の取り換えにも、その都度同文化財保護委員会の諒承を求められた程であった。その尊重すべき石段・石垣・石骨のの石工の上本事業は極めて優秀なものであったことは、その一例として、瑞鳳殿への参道の石階を佐藤巧氏が仙台市文化財保護委員会編纂の『仙台市の文化財』(続編)の中で解説されている通りである。

2-1 石 段

瑞鳳殿の階段

佐藤巧氏は次の如く記述し解説している。

……とくに瑞鳳殿に至る石段は寛永(時)代の技巧が美事に結実され、階段の一つ一つにそれが表わされている。瑞鳳殿寺前の急坂を上りつめると、ほぼ約560m、踏面75cm前後、蹴上げが約15cm位の階段を15段のほどと広い踏り場に出で、そこから感仙殿、善応殿の階段と別れて左折し、ほぼ約30段、踏面120cm前後、64段でのまゝ、(瑞鳳殿御門前に達し)更に向って、(御門を潜り)瑞鳳殿靈廟前の最後の階段をのぼる。この階段は(かなり急な石段だが)一、二段目が踏面が狭く、三段目が歩幅2歩分と広くなり、これが七回繰り返えされて(御殿前の)最上階(の平面)に達するよう工夫されている。⁽⁷⁾階段の踏面のとり方等に示された細心の配慮は心懐いばかりである。

と。以上巧氏の記述・解説を引用させていただいたが、括弧内は本文筆者が一層具体的に、との老婆心から補わせていただいたものである。失礼の段は御寛容をお願いしたい。なお、瑞鳳殿再建期成会発行の『瑞鳳殿』の新瑞鳳殿配図は縮尺凡そ1/300の信頼すべき製図のように見受けられる。その図の前の頁は瑞鳳殿寺前から瑞鳳殿前に至る石段道を上から見おろした写真で、その石段の左右の老杉の並木や、2代廟、3代廟側の石垣の様子も美しく撮影・印刷されている。更に、瑞鳳殿焼失跡の写真は(写真7)御門内の石段を裸にして見せてくれている。

感仙殿・善応殿の階段

前述の中の踏り場で瑞鳳殿前広場に達する緩かな(写真6)石段と別れて、一段と急な傾斜度を以ってやや右へ直ぐ登って行くのがこの石段で、凡そ42段を数える。この石段は、2代廟の建築に伴って築造されたものであろうから、瑞鳳殿のそれよりも後のものであろうが、直線的でなかなかに美事な石段である。

さてこのような美事な石段が、この伊達家の三廟のためにのみ開発された石工技術ではなく、既に所有されていた石工技術の靈屋への応用であろうことは容易に推察されるであろう。つまり、伊達藩の戦国時代以来の山城、半山城の築城の石工技術が極めて高度に発達していたことは容易に推量される。なるほど仙台城には、さして長距離の石段は築造されてはいないが、仙台城の築城と同時に着手された北山一帯の寺院群(西から輪上寺、資福寺、覺範寺、東昌寺、光明寺、東端の鹿島神社も含む)はいずれも相当な高丘の頂上に建築されており、山麓の北山通りから、いずれも一直線に急角度の石段が築かれている。これらの寺院はいずれも米沢一岩出山一仙台という順序で、伊達家に随伴して来た寺院で、いざという時には仙台城の出城に用い得るように丘陵の高地に配されていた。かくして、その寺院群のそれぞれの急坂は、これまた寺院のためにのみ開発されたものではなく、いわば築城技術の寺院への応用であったと考えるべきであろう。寺院に応用され、練磨されていた石工技術が、藩公の廟の築造に応用されることを極めて自然なことであったろう。瑞鳳殿の廟墓建築が僅か1ヶ月の短期間で一応完成を見たことのためには、これら石工技術の土木工事が極めて短時間のうちに実行なわれることが必要であったであろう。

2-2 石　　壇

以上の如く、絹ヶ峯の石段は美事な出来ばえを示しているが、その中途の踏り場、並びに瑞鳳殿御門前の石壇、それから感仙・善応廟の前の平地の石壇も、しっかりした技術で泥塗を防ぎ、歩きよく、見た目にも美しい、不整形の石の板を、隙間なく敷きつめ、踏んで快い石壇を造り出した技術もまた、美事なものであるといわなければなるまい。(写真9)。

2-3 廟周囲の石垣

瑞鳳殿の地形は勿論、感仙・善応廟の地形も自然のままのものではない。地山を削りとった土を低い上地に盛って、いくつかの平面を造り、建築物をその平面上に配列したものである

から、その用地全体をしっかりと落ち着け、土砂の崩壊を防ぐためには、石垣の築造も必要不可欠であったろう。奥津春生氏は『仙台城』(仙台市文化財保護委員会編纂、昭和42年3月31日発行)の中で、「仙台城の地形・地質」を担当し、仙台城の石垣工事に周到な考察を加えている。同氏によれば、石垣の石組み方法に、「野づら」、「打込はぎ」として一番進歩した「切込はぎ」の3種がある。仙台城本丸の美しい石垣は、切込はぎで、角面のみを使って互に密着するように組み合わせたものであるが、「野づら」は最も原始的なもので、自然石(大玉石)を適当に組み合せて積み上げただけのもので、玉石相互の摩擦力が弱いから低い石垣にのみ使用されている。打込はぎは両者の中間的な方法で、石の角をたたいて平にして互いにはまるように組合せるものである。^(註10)

瑞鳳殿正面、それに南北両面の石垣は、勿論1m以下のものであるから、最も素朴な「野づら」が用いられている。感仙・普応両廟の周囲も同様である。(写真10)

このことは、もっと進んだ石垣の築造が出来なかったことを意味するものでは決してない。今回の調査によって、政宗公の石室が極めて堅固に組み立てられ、338年の星霜によく堪えた事実を見ただけでも当時の伊達藩の石工技術の水準が極めて高かったことを知ることが出来よう。

このように考えると、両廟地の石垣が「野づら」であることは、それで充分だと考えられたからであり、見方によれば、石垣の表面に凹凸の変化があって、一層自然に近く、老杉に囲まれた廟の四周を固めるのには、一層適当であるようにも考えられる。

以上、経ヶ峯靈廟の石工技術を、石段・石壁・石垣に亘って考察して見た。多年の築城技術の鍛錬から来る優秀な石工の技術によって三廟の整地、環境整備が行なわれ、その上に廟墓が建築されたのであった。なお、この石工技術は、大崎八幡神社の石段や、塙蓋神社表坂200段の急坂の石段、東照宮の緩やかな石段、大年寺の石段、そして城西の大梅寺の門内の石段などにも生かされていることを想記して置きたい。

2-4 磐 石

ここで瑞鳳殿旧本殿の礎石群にも簡単に触れておこう。その上に立っていた木造の廟建築は焼け落ちても、礎石は不燃性の故にそのまま残っていた。凡そ1辺6m四方の基礎は一辺七個ずつの石材で構築され、その開いの中のやや後方に来迎社の基礎が四個の石材で組み立てられていた。今回の再建は、コンクリート建築となったから、これらの礎石は取り除かれねばならなかった。期成会では、この礎石群をむげに捨て去ることをせず、永く何らかの参考にと保存することにしたが、その場所は、僅かに御供所とは対称の、同水位の土地、曾ては「暫居」と

称する建物があったと伝えられている平面しか考えられなかった。礎石はそこに正確に元通りの配列で置かれている。僅か数十個の石の群に過ぎないが、創建時の瑞鳳殿本殿を偲ぶにふさわしい遺物であり、遺構である。(写真11)

2-5 石 灯 篓

瑞鳳殿・感仙殿・善應殿・妙雲界廟、そして御子様御廟に掉げられた石灯籠も、材料が石であるから、不燃性のおかげで焼け残った。ただし、石灯籠は数個の石の組工品を上へ上へと積み重ねるものであるから、地盤などの際には倒壊しやすく、その場合に火を入れる部分、即ち火袋は中空で薄手に出来ていることから壊れやすい。しかも、火袋は火を入れる部分をくり抜いて中空に作らなければならず、それだけ手間がかかるので、手頃の大きさのものは盗まれることが多いようである。御子様御廟の献灯は小さいものが多く、手頃だったのだろうか、火袋の残っている灯籠は唯一基もない現状である。

さて、この経ヶ峯の灯籠については、「伊達家史叢談」巻14にあるように、瑞鳳殿前の献灯だけは、かつて経ヶ峯の伊達家廟の廟守を務めていた石川常直氏が調査した配置図(資料IV)があるが、その他については、過去に調査はあったものと思われるが、資料として刊行されたものは見えないことから、今回、仙台市教育委員会社会教育課の渡辺洋一・山口宏尚君等により、経ヶ峯の伊達家廟にある石灯籠を中心とした金石文の調査が行なわれた。それによると、以前石田氏により調査された瑞鳳殿前の献灯についても随分変動があるようであるし、一部破損のものも少なくない。

以下、今回の調査の結果を紹介したい。

付) 経ヶ峯伊達家廟の石灯籠

(1) 瑞鳳殿前の石灯籠

現在、瑞鳳殿と向って参道石段の左側上から白石刑部太輔宗貞(No.1)奥山大学常良(No.2)佐々木候守元綱(No.3)片倉小十郎(No.4)献灯の1基が、また右側上から石母田大膳亮宗綱(No.5)白河伯耆守宗根(No.6)茂庭屋防守良綱(No.7)津田近江和康(No.8)古内土佐正重廣(No.9)献灯の5基の計9基の石灯籠が並んでいる(写真12・13)。

このうち、No.9の古内土佐正重の献灯したものの日付銘に「寛永十四年正月廿四日」とあるものを除く8基は、日付銘が「寛永十(拾)四年(年)正月廿(二十)四日」とあることから、伊達政宗の一廻忌法要の際設置されたことがわかる。ではNo.9の「九月廿四日」というのは何にあたるのかというと、今となってはどういう意味か不明である。また献灯銘についても、まず「奉寄進(No.1・7)」^④「承制進

(No.2・3・4・5・8) 「奉寄附」(No.6・9)の三通りで始まり、「瑞鳳殿」(No.1・7・9)もしくは「瑞鳳殿前」(No.5・6・8)と廟名を記したもの、「瑞鳳寺殿・御廟前」(No.2・3・4)と政宗の法命を記したものがあり、二代廟以下に獻灯されたものとは異なり全てが同型のものではない。

ところで、『伊達家史叢談』卷14の「經筆諸廟」に、大正7年3月、当時の瑞鳳山の廟守石田常貞氏が調査したものをもとにして製作した瑞鳳殿前の石灯籠の配置図が記載されているが、(資料四) それによると当時は都合15基並んでいたことがわかり、すでに現在に至るまでに6基が失していることになる。その上現存の9基についてもその配置が替っていることもわかる。これは昭和20年7月10日夜半の仙台空襲で燈籠が焼失した際に破壊されたものがあり、復元のきかないものを取り除き、復元出来るものも、吟味せずに積み直されたものであろうかと考えられる。

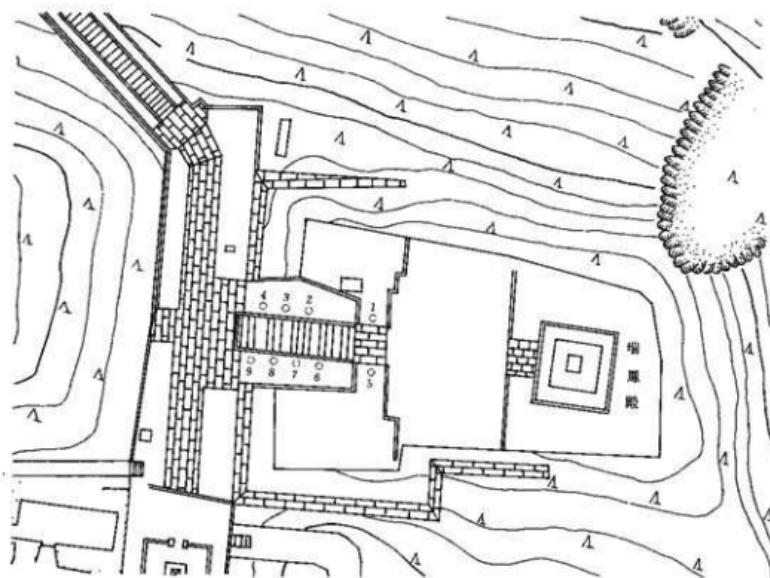
註 A. 整理上、供養を防ぐため便宜的に全ての灯籠に整理番号を付した。挿図1・2・3参照。

B. 現在消失したものの中にはこのほかに「七月二十四日」の日付銘のものもある。資料参照。

C. 全て同意を見てよいと思われる。

D. 正式には瑞鳳寺殿・良山神社大塔上。

E. 伊達武藏守昌平定利、伊達安房守昌平定、伊達安藤守昌原定、伊達昌昌太輔源定、伊達左衛門太輔昌原定、小島弘物定成の六基。



挿図1 瑞鳳殿前石灯籠配置図（現在）

表 I 瑞鳳殿前石灯籠銘文

1. 本進 (壽) 白石 布部 太輔 宗貞	寛永拾四年五月貳四日	6. 奉寄附 丹波國前 日理伯苦子 守根	寛永十四年五月二十四日
2. 本行進 石燈籠 墓靈寺殿 御前	寛永十四年五月貳四日 奥山大	7. 奉寄進 墓靈松 茂庭周防守	寛永十四年五月二十四日
3. 奉持進 石燈籠 墓靈寺殿 御前	寛永十四年五月貳四日 佐佐木秋守元綱	8. 奉持進 瑞鳳殿前 津田近江	寛永十四年五月二十四日
4. 本持進 石燈籠 墓靈寺殿 御前	寛永十四年五月貳四日 片倉小十郎	9. 奉寄附 瑞鳳殿 吉内土佐正	寛永十四年九月二十四日
5. 奉持進 瑞鳳殿前	(右) 寛永十四年五月二十四日	(左)	(右)

(2) 2代・3代および妙雲界廟の石灯籠

ここには計65基の石灯籠が現存し、その内訳は2代廟への献灯が18基、3代廟が24基、妙雲界廟が25基となる。(写真14・15・16)

ところでこの廟域ははじめから現形に計画されたのではなく、繼ぎ足しにより次第に現在の形になつていったと考えられること、即ち3代廟及び妙雲界廟造営時に若干の移動が考えられようし、また廟前にある「新修先廟記」を見ててもわかるように(資料III)明治初年に伊達家で當廟の祭祀を仏式から神式へ改めたおり、廟域の大改修が行なわれ、その時にも相当な移動があったと考えられる。

それは、2代・3代廟側参道等に妙雲界廟献納の石灯籠が7基ほど混っていることからもわかる。

(イ) 2代廟の石灯籠

ここに現存する18基のうち日付銘に「寛文四年七月十二日」あるものが16基、「延寶二年七月十二日」が1基(No.13)。そして半の表面が削られ無銘となっているものが1基(No.12)ある(写真19)。このうち寛文4年の銘のあるものは忠宗の七回忌の法要のおりに献灯されたもの、延寶2年のは17日忌に献灯されたものであることがわかる。また無銘のものについては寛文事件がからんでいるものと考えられるが、はっきりしてことは不明である。

(ロ) 3代廟の石灯籠

3代廟献納の石灯籠の現存数は22基であるが、大正7年の調査当時には25基あったことが記されていて、その時より1基消失していることがわかる。また、「鷹山公治家記録」卷50、正徳六年三月二十日条

……伊達境川守坂松藤綱御方、田村下郷守殿ヨリ各石燈籠二基……(10字略)……若葉姫御方、三橋御方ヨリ各石燈籠一基……(18字略)……石川駿河源氏、伊達安房殿^村、伊達六郎殿^村、伊達宏興殿^村、伊達近江殿^村、伊達左兵衛門殿^村、伊達左衛門殿^村、白川上野殿^村、三澤新母殿^村、伊達久之助殿^村、柴田外記、中村口向、片倉小十郎、草名別頭、大町将弘、西原良門家臣、達麻文七郎、津田氏部、田木御四郎各石燈籠、(10)

とあり、これと現存のものの数を对照すると5基足りないことになり、前のと合せて6基は紛失したことがわかる。

ところで、この3代廟の石灯籠の名で注目される点は、「伊達安藤幕藤原村元庵」(No.42)、本多下總守宗(No.26・29)そして「智慧」(No.33)というように、女性からの献灯が見られることである。これは瑞鳳殿・二代廟には見られなかったことである。また石灯籠の「達」の字についても、二基の獻灯者は「達」を、一基の獻灯者は「達」を用いていることもおもしろい。(写真18・19)

(ハ) 妙雲界廟の石灯籠

妙雲界三廟貢納の石灯籠については次のような点が目につく。

まず、三廟とも連名のものが多数を占めているということ、女性(夫人、側室、埋葬者の女など)のものが目立つこと、そしてそれまでのものが「達」。もしくは「達」の字を用いていたのに対し、ここのは全て「榮」とある。

また、石灯籠の配置についても、獻灯者と違う墓標の前にあったり、二基獻灯されてものは本来左右一対にあるべきものが片方に並んでいたり、全く違ったところにあったりして、相当の移動があったことを示している。(写真21・22・23)

(渡辺)

註

F. 2代廟は慈信殿、3代廟は善光殿のことであるが、2基は戦災にて焼失し現在は墓碑のみが残存していることから、ここでは慈信殿・善光殿跡とは呼ばず、2代・3代廟とした。

G. 9代尾家(齊柏院編)、11代齊義(吉通院編)、14代入芝庭(真柏院編)の靈廟の軸承。

H. うち1基は割られており(No.42)2代廟への献灯とは確定出来ないか、他の灯籠と同型なので一部この中に入れておく。

I. このうち吉通院殿への献灯が5基、吉通院殿が11基、真柏院殿が9基ある。

J. 石灯籠の形は2代・3代・妙雲界廟それぞれ異なる。

K. 「新修先廟記」による。

L. 先帝内洞御室御作石燈籠者斐利各得基性安設祭典置之以太萬子崇敬之誠布表明治1年九月訖十二年十一月用木石 二三之力七千六百五十八人費用三千金金公々
とあることからも大改修であったことがわかる。

M. 俗にいう伊達騎馬のこと。

N. 古来より伊達八郎原のものとも、原田半蔵宗裕のものともいわれるが説得はない。

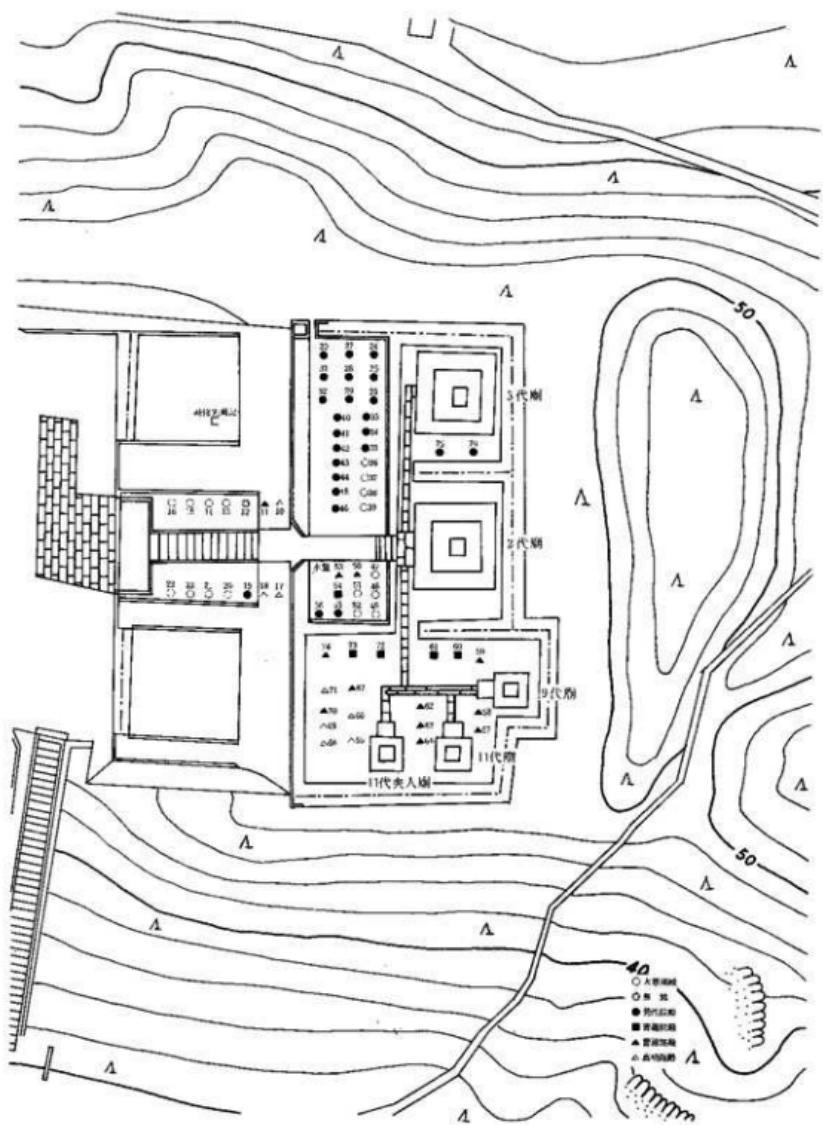
O. うち1基は既に譲渡して不明のものがある。

P. 「伊達家史譜鏡」卷14「將ヶ峯御廟」による。

Q. 前掲書によると浅井部藤原家、伊達六郎藤原村景の二人の孫が無いが、このうち一人は廢城した灯籠の獻灯者と考えられるため、一基紛失となる。

R. 三廟、伊達久之助、柴田外記、津田氏部、生田物三郎の獻灯の五基。

S. 以上を記録の記述を削除して記した。



挿図2 2代、3代および妙雲界廟石灯籠配置図

表2 2代・3代および妙雲界崩石灯籠銘文

10. 奉 石燈[基] 壬基
眞明院殿(印) 御廟前
片倉小十郎藤原宗景
小栗川出家藤原源之
高泉筑後源(基)井
大町因幡藤原(印)
但木七佐橘成行
後藤(印) 兵衛藤原(印)
芝多對馬藤原常則
人峰河内藤原(印)
佐々豈前源元則
速藤文七郎藤原(印)
安政五年戊午九月晦日(印)
11. 奉 石燈紫 壬基
曾源院殿(印) 御廟前
片倉小十郎藤原(印)
松前采女源廣文
高泉木工源景規
福原純貢藤原(印)
速藤人藏藤原元生
芝多佐渡藤原常(印)
但木山城橋直行
後藤兵馬藤原(印)康
文政十一年戊子 九月廿七日
12. 無 銘
13. 奉寄贈
大慈院殿之靈廟 感仙殿下
延寶貳甲年 七月十二日
小栗川修理 宗敬
14. 奉寄進
大慈院殿之靈廟 感仙殿下
寛文四甲年 七月十二日
柴田外記 朝(印)
15. 奉寄進 石燈籠二基
大慈院殿之靈廟 感仙殿下
寛文甲辰年 七月十二日
坂上道裕田村右京亮
宗良
16. 同 15
17. 奉 石燈紫 壬基
眞明院殿 御廟前
源孝子(印)
安政五年戊午九月晦日(印)
18. 奉 石燈紫 壬基
眞明院殿 御廟前
勁松院徹(印)
安政五年戊午九月晦日
19. 奉寄納 石燈燈一基
見性院殿之靈廟(印)
喜應殿下
正徳第六丙申歲 三月念廿(印)
伊達安藤藤原(印)元
20. 奉寄進
大慈院殿之靈廟 感仙殿下
寛文四甲年 七月十二日
茂庭周防定元
21. 奉寄進
大慈院殿之靈廟 感仙殿下
寛文四甲年 七月十二日
大経監物宗(印)
(快)
22. 奉寄進
大慈院殿之靈廟 感仙殿下
寛文四甲年 七月十二日
高(印)坂内内蔵重信
23. 奉寄進
大慈院殿之靈廟 感仙殿下
寛文四甲年 七月十二日
遂(印)柴文七郎俊信
24. 石燈籠 二基
見性院殿之靈廟
喜應殿下
正徳第六丙申歲 三月念日
從四位下行邊江守藤原宗(印)
25. 同 27

26. 奉寄進 石燈籠 一基
見性院殿之靈廟
善應殿下
正徳 [第六年] 成三月念日
本 [身] 下總守 [誠道]
27. 石燈籠 二基
見性院殿御廟前
正徳 [第六年] 成三月念日
出村下總守 [誠道]
28. 同 24
29. 同 26
30. 奉獻納 石燈籠 一基
見性院殿之靈廟
善應殿下
正徳 [第六年] 成三月念日
造營奉行
兼名刑部平盛遠
31. 奉獻 納石燈籠 一基
見性院殿之靈廟
善應殿下
正徳 [第六年] 成三月念日
達藤文七郎 [後信]
32. 奉獻納 石燈籠 一基
見性院殿之靈廟
善應殿下
正徳 [第六年] 成三月
高 [坂長門藤原重標]
33. 奉寄進石燈籠 一基
見性院殿之靈廟
善應殿下
正徳 [第六年] 成三月念日
智 [慈] ◎
34. 奉獻納 石燈籠 一基
見性院殿之靈廟
正徳第六 [年] 成三月念日
片倉小十郎藤原村 [元]
(癸)
35. 奉獻納 石燈籠 一基
見性院殿之靈廟
善應殿下
正徳第六 [年] 成三月念日
中村口向游成義
36. 奉寄進
大慈院殿之靈廟 感仙殿下
寛文四 [年] 七月十二日
伊達安藝宗重
37. 奉寄進
大慈院殿之靈廟 感仙殿下
寛文四 [年] 七月十二日
伊達安房宗實
38. 奉寄進
大慈院殿之靈廟 感仙殿下
寛文四 [年] 七月十二日
伊達上野宗景
39. 奉寄進
大慈院殿之靈廟 感仙殿下
寛文四 [年] 七月十二日
石川民部宗弘
40. 奉獻納 石燈籠 一基
見性院殿之靈廟
善應殿下
正徳第六 [年] 成三月念日
大町 [時監藤原]
(續)
41. 奉獻納 [石燈] 章一基
見性院殿之靈廟
善應殿下
正徳 [第六年] 成三月念日
石川 民部 藤原 [元]
42. 奉獻納石燈籠 一基
見性院殿之靈廟
善應殿下
正徳 [第六年] 成三月念日
伊達安藝藤原村 [元]
妻 [巳]
43. 奉獻納石燈籠 一基
見性院殿之靈廟
善應殿下
正徳第六 [年] 成三月念日
三澤頬母源村 [元]
為

44. 奉獻納石燈籠一基
見性院殿之靈廟
普應殿下
正德第六年三月念日
伊達柳正藤原村泰
- 45 奉獻納石燈籠一基
見性院殿之靈廟
普應殿下
正德第六年三月念日
伊達肥前藤原村興
46. 奉獻納石燈籠一基
見性院殿之靈廟
普應殿下
正德第六年三月念日
(浅井氏記)
47. 奉寄進
大慈院殿之靈廟 感仙殿下
寛文四年正月 八月十六日
片倉小十郎景(氏)
48. 奉寄進
人慈院殿之靈廟 感仙殿下
寛文四年正月 七月十二日
伊達式部宗徳
49. 奉寄進
人慈院殿之靈廟 感仙殿下
寛文四年正月 七月十二日
伊達柳正次教
50. 奉 獻 石燈榮開基
曹源院殿御廟前
石川人和源宗光
伊達五郎藤原宗(氏)
伊達下總藤原宗衡
伊達安藤平村基
伊達長門藤原宗光
伊達右近平義隆
伊達六郎藤原宗隆
伊達柳正藤原宗(氏)
伊達上野藤原宗利
白川七郎藤原宗秀
- 三澤信濃源宗為
文政十一年戊子九月廿四日
51. 奉寄進
大慈院殿之靈廟 感仙殿下
寛文四年正月 七月十二日
伊達左兵衛宗親(左)
52. 奉寄進
大慈院殿之靈廟 感仙殿下
寛文四年正月 七月十二日
伊達肥前宗房
53. 同 50
54. 獻 石燈榮開基
青龍院殿御廟前 ③
石川人和源宗光
伊達柳五郎藤原宗貞
伊達將監藤原村福
伊達安藤平村清
伊達式部藤原宗光
伊達右近平宗陳
伊達隼人藤原宗(氏)
伊達内藏藤原宗(氏)
伊達上野藤原宗和
泉(氏) 門藤原村兼
上澤信濃源宗為
文化十年正月六日
55. 奉獻納石燈籠一基
見性院殿之靈廟
普應殿下
正德第六年三月念日
伊達安藤平村成
56. 奉獻納石燈籠一基
見性院殿之靈廟
普應殿下
正德第六年三月念日
伊達近江藤原村(氏)
57. 奉 獻 石燈榮開基
曹源院殿御廟前
綱(氏)
文政十一年戊子九月廿七日

58. 奉 石燈榮西墓
曹源院殿御廟前
藤原惠子 ◎
文政十一年戊子九月廿七日
59. 同 57
60. 奉 石燈榮二基
青龍院殿御廟前
文化十年 [癸酉] 四月六日
守真院 ◎
藤原助子 ◎
壽相院 ◎
61. 同 60
62. 奉 石燈榮西墓
曹源院殿御廟前
守真院藤原達子
壽相院藤原早子
文政十一年戊子九月廿七日
63. 同 62
64. 奉 石燈榮老墓
曹源院殿御廟前
藤三郎 ◎
依 ◎
佐 ◎
65. 奉 石燈榮西墓
眞明院殿御廟前
頼 [松元] 雅子
安政五年 [壬午] 九月晦日
66. 同 17
67. 同 58
68. 奉 石燈榮西墓
眞明院殿御廟前
本光院 [癸酉] 千合
安政五年 [壬午] 九月晦日
69. 奉 石燈榮左墓
眞明院殿御廟前
藤原和子 ◎
安政五年 [壬午] 九月晦日
70. 奉 石燈榮老墓
曹源院殿御廟前
田村深義 及上地 □
文政十一年戊子 九月廿七日
71. 奉 石燈榮老墓
眞明院殿御廟前
延吉院潤子 ◎
安政十五年 [癸酉] 九月晦日
72. 奉 石燈榮一基
青龍院殿御廟前
文化十年 [癸酉] 四月 [六日]
正操院清薰 ◎
厚孝院 □ 真 ◎
73. 奉 石燈榮一基
青龍院殿御廟前
文化 [十年] [癸酉] 四月 [六日]
田村右大夫叔上 [示謙]
74. 同 68
75. 奉獻納 石燈篠一基
見性院殿御之靈廟
善德院下
正德第六 内中歲三月念日
[] 上野藤原村義
(右向)
76. 奉獻納 石燈篠一基
見性院殿御之靈廟
清應院下
正德第六 内中歲三月念日
[] 村満
(右向)

(右向)

表2の註

- ① 真相院御心月底某人跡のこと。1代吉義夫人芝姫の法命。
 ② 月日は全て差詔、昨日は30日のこと。
 ③ 貴源院殿正山榮次大房十のこと、十一代吉義の法命。
 ④ 大源院殿義山榮次大房十のこと、二代吉宗の法命。
 ⑤ 麻那後夫人、水戸小納言吉義の女。
 ⑥ 吉義の長女、十二代吉邦夫人。
 ⑦ 見性院殿義山金成大房十のこと、三代義宗の法命。
 ⑧ 念日は20日のこと。
 ⑨ 御宗六女、絹経姫のこと。
 ⑩ 順家五女、立花守正に嫁し、後守得。
 ⑪ 繁宗二女、烈姫のこと。
 ⑫ 浅井氏郷・伊達六郎のどちらかと思われる。
 ⑬ 吉義院殿正山榮次大房十のこと、九代周崇の法命。
 ⑭ 勤松院道子の別名。
 ⑮ 吉義夫人芝姫のこと、1代吉宗の長女。
 ⑯ 七代系材の三女、井伊重丈夫人。
 ⑰ 七代重村の二女、伊達大輔大夫村刀夫人。
 ⑱ 七代重村の五女、十河保馬守夫人。
 ⑲ 十三代慶邦の法名。
 ⑳ 吉義の二女。
 ㉑ 吉義の三女保子のこと、伊達義五郎夫人。
 ㉒ 吉宗御室、芝姫母。
 ㉓ 吉義の三女。
 ㉔ 吉義御室、要姫母。
 ㉕ 吉宗御室、吉村母。
 ㉖ 不詳。

商名	番号	献納者	備考
瑞鳳殿	1	白石刑部太輔宗貞	梵以下のみ残存
	2	奥山大学常良	
	3	佐々木伏元利	
	4	片倉小十郎	
	6	口理伯老守宗根	
	7	浅庭岡防守良綱	
	8	津田近江朝康	
	9	古内上佐正重廣	寛永十四年五月二十四日の銘
	5	(石田田大輔兼宗頼)	
			以上九基現存
(以下前失)		中島松物豊成	
		伊達武藏守藤原宗利	寛永十四年九月二十四日の銘
		伊達安房守藤原成質	
		伊達安泰守藤原宗定	
		石川民部太輔源宗昭	七月二十四日の銘
		伊達左衛門太輔藤原宗實	
			以上計十五基
慈仙殿	13	小笠川修理宗敬	
	14	柴田外記 朝喜	
	15	坂上治郎田村右京亮宗良	延寶1年七月廿二日の銘
	16	同上	

○印は二基統合分

廟名	番号	奉納者	備考
	20	茂庭固助定元	
	22	富原内藏嘉重信	
	21	大蔵監物宗 ^口	
	23	達羅文七郎俊信	
	36	伊達安義宗重	
	37	伊達安房宗實	
	38	伊達上野宗景	
	39	石川民部宗弘	
	47	片倉小十郎兼長	
	48	伊達式部宗倫	
	49	伊達彈正宗教	
	52	伊達肥前守房	
	51	伊達左兵衛宗親	
	12	無銘	
以上 現存 附十八基			
尊應院前	19	伊達安泰藤原村允	
○	24	從四位下守遠江守藤原宗貞	
	28	同 上	
○	27	田村下總守誠則	正治六年三月念日
	25	同 上	
	30	造世奉行作名刑部平盛達	
	31	達羅文七郎[俊 ^口]	
○	26	本多下總守宣(綱雄)	
	29	同 上	
	32	富原長門藤原重標	
	33	知慧	
	34	片倉小十郎藤原村 ^(元) ^口	
	35	中村日向源成義	
	41	石川民部藤原 ^口	
	42	伊達安泰藤原村元妻(頼姫)	
	43	三沢賴母源村 ^口	
	44	伊達彈正藤原村泰	
	45	伊達肥前守藤原村鴻	
	46	不明	浅井民部か?
	55	伊達安房藤原村成	
	56	伊達近江藤原村 ^口	
	40	大町將監藤原賴其	
	75	上野藤原村親	

○印は二基卒絶分

廟名	番号	獻納者	備考
(以下紛失)	76	有川駿河源村満	以上 現存 二十四基
		浅井民部源原□ 伊達六郎藤原村景	(うち一基銘不明のもの有り) 伊達家史叢書卷十四による
		三 級 伊達久之助 柴田外記 津田長部 伍木忠四郎	(中村日向守) 鷹山公治家記録卷五十による
			以上 計 二十基
吉龍院殿	54	石川大和源光亮以下十一名連名	一基不明
○	60	守真院以下三名連名	
	61	同 上	
	72	正操院清兼以下二名連名	
	73	田村右京大失坂上宗顯	以上 現存 五基
豊原院殿	70	田村廉義坂上健□	
	64	楳三郎以下三名連名	
○	62	守真院藤原詮子以下三名連名	
	63	同 上	
	11	片倉小十郎以下八名連名	
○	57	暖	
	59	同 上	
○	50	石川大和源宗光以下十一名連名	
	53	同 上	
	58	森原泰子	
	67	同 上	
			以上 現存 十一基
貞明院殿	15	片倉小十郎藤原宗信以下十名連名	
○	17	源 孝子	
	66	同 上	
○	65	勤松院政子	
	18	同 上	
○	68	本光院廣子	
	74	同 上	
	71	延慈院恒子	
	69	藤原和子	
			以上 現存 九基

○前述二基奉納分

(3) 御子様御廟前の石灯籠

御子様御廟は正徳3年（1713年）以後、5代吉村以下の宗村（6代）重村（7代）齊義（11代）慶邦（13代）の歴史藩主公子公女の廟所で、俗に公子女廟と称しており、瑞鳳殿・2代・3代および妙雲界廟とは別の所、瑞鳳殿表参道石段登口を右折して100mばかりの所にある。古くから、子供が死亡したときはに、大人とは別の所にコバカ（子供の埋葬地）を設ける風があったといわれており、これもその一例かとも思われる（写真24・25・26・27）。

御子様御廟の入口通路両側等には齊義無室にして一門伊達邦実夫人佐助生母砂沢氏常照院をはじめとして老女の墓が7基ある。廟所は長方形をめし、北側南面して11基、南側北面して7基、西側東面して1基、入口通路東側西面にて1基、その西側東面して1基（この墓は網村公二女伯頃の墓で、大正15年7月20日弘福寺より移葬された）、あわせて21基の笠塔婆の墓が並び、总数82基の石灯籠（基礎のみ残存するものもある）が現存する。しかし火袋のあるものは一基も残っていない。

御子様御廟に石灯籠を奉納した者の名を見ると、大部摩耗がめだら、不明のものも多いが、一門のもの奉納が多く見られ、御家来が奉納した場合には連名のものが多くみられる。

（山　口）



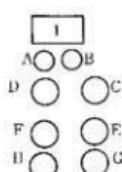
図3 御子様御廟石配置図

表4 御子様御廟埋葬者一覧表

番号	廟名			備考
1	泰涼院殿陽山智惠大童子	總三郎	草村公長男	8 基
2	珊瑚院殿月山智円大童女	珀姫	宗村公十二女	2 基
3	芳池院殿清荷智涼大童女	房姫	宗村公十一女	2 基
4	寒梅院殿櫻智香大童子	藤七郎	宗村公六男	4 基
5	天球院殿円山融公大肩上	村風	吉村公三男	8 基
6	霜菊院殿造英智白大童女	才鑑	宗村公「女」	3 基
7	玉蓮院殿涼珠清大童子	武三郎	吉村公二男	2 基
8	月桂院殿造栄智芳大童女	從姫	宗村公七女	4 基
9	雄心院殿俊山英公大肩上	村國	吉村公長男	5 基
10	魏華大童子	某	吉村公十五男	
11	天桂院殿澄山月公大童子	久米之姫	宗村公長男	6 基
12	香雲院殿南吉智薰大童子	定九	重村公四男	2 基
13	心鏡院殿水照淨月人師	孝鑑	重村公養女・伊達村胤家	6 基
14	美良院殿薰山惟伸大童子	祺丸	齊義公長男	4 基
15	薰心院殿芳祇慈性大童女	依姫	齊義公二女	4 基
16	香心院殿宝池雄馨大童女	斐姫	慶邦公長女	4 基
17	円照院殿心貞性尼大師	阿今	伊達村風宅	3 基
18	持心院殿真慈姫恵大童女	姫	慶邦公二女	4 基
19	不明		慶邦公三女?	地蔵石仏
20	真珠院殿椿香智薰大童女	筈姫	重村公九女	4 基
21	金剛院殿古樹慈薰大童子	仙三郎	重村公三男	6 基
22	曾溪院殿玄秀大童子	桔丸	慶邦公長男	4 基
23	當照院殿珠妙栄尼大姑	砂沢氏安子	齊義公側室	
24	寂照院本庵慧心禪尼			
25	長亨院華林殿栄禅尼	岸氏藍子	真明院老女	
26	玉樹樹院殿幼栄淨薰大童女	伯姫	樋村公二女	
27	竜華院分流智禪尼			
28	真音妙珠法厄			

表5 御子様廟の銘文

1. 泰涼院殿陽山智惠大童子之墓



A. 市販 御茶生平謹男治

昭和八年九月

B. 同上

C. 明和八年九月廿二日

奉納石燈籠一級

泰涼院殿之供物

D. 同上

- E. 明和八年九月廿二日
泰源院殿栢前 西川氏
奉獻石燈籠一基 敦子
- F. 明和八年九月廿三日
泰源院殿栢前
奉獻石燈籠一基
- G. 明和八年九月廿二日
泰源院殿栢前
奉獻石燈籠一基
- H. 明和八年九月廿二日
泰源院殿栢前
奉獻石燈籠一基

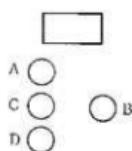
2. 瑞瑞院殿月心智開大童女之墓



3. 芳治院殿清荷智源大童女之墓



4. 寒梅院殿供奉智香六童子之墓



- A. 瑞瑞院點之栢前 奉納一燈籠 从
寶曆十二年十月十六日
伊達 淡路
認
伊達藤六郎
伊達藤八郎

B. 同上

- A. 奉納芳治院殿栢前 石燈籠二基
寶曆九年七月十八日
伊達 淡路
認
伊達 []
(藤六郎)
伊達 []
(藤八郎)

B. 同上

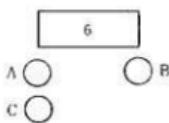
- A. 石燈籠二基
[] 年 [] 月 []
奉納寒梅院殿栢前
[]
[]
[]
[]
- B. 不明
C. 不明
D. 不明

3. 天球院殿丹山麻公大居士之墓

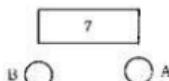
- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 5 | |
| A <input type="radio"/> | <input type="radio"/> B |
| C <input type="radio"/> | <input type="radio"/> D |
| E <input type="radio"/> | <input type="radio"/> F |
| G <input type="radio"/> | <input type="radio"/> H |

- A. 奉獻石燈籠一基
天球院殿之笠前 享保二十乙卯年 八月二十日
- B. 奉納石燈籠一基
天球院殿之笠前 (享保二十乙卯年) (八月二十日)
- C. 奉獻石燈籠一基
天球院殿之笠前 享保二十乙卯年 八月
- D. 奉獻石燈籠一基
天球院殿之笠前 中村 享保二十乙卯年 八月
- E. 奉獻 石燈籠一基 七宮齊兵衛
天球院殿之笠場 背原 [] 享保二十午乙卯八月二十日中沢 []
太政 畠之 小林 大吉
- F. 奉獻 石燈籠一基
天球院殿之笠前 石田源右門 [] 享保二十乙卯年 八月二十日
- G. 奉獻石燈籠一基 今野 [] 左衛門 [] 定
天球院殿之笠場 大 [] 左衛門長 [] 享保二十午乙卯八月二十日 鈴木十左衛門 []
石衛門 []
- H. 奉獻石燈籠一基
天球院殿之笠前 中村 [] 享保二十乙卯年 八月二十日

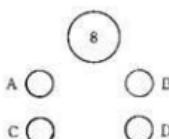
6. 紫宸院殿英智白童女之墓



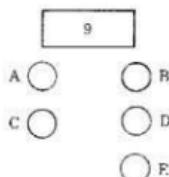
7. 正應院藏普賢大童子之墓



8. 月桂院殿優柔智芳大童女之墓



9. 雄心院殿俊山英公大居士之墓



10. 誓華大童子之墓

A. 奉獻石燈籠二基

紫宸院殿英智

寶曆三冬己卯十二月七日

B. 同上

C. 不明

A. 奉納石燈籠一从

正應院藏普賢

亨保 [] 三月念日

伊達益之助

B. 同上

A. 奉納石燈籠二基

月桂院殿之達前

侍子

寶曆三冬癸十一月廿日

B. 同上

C. 石燈籠一从

奉納月桂院尊前

伊達益之助

D. 同上

A. 奉納石燈籠一双

雄心院殿之益所

亨保八癸卯三月念六日

伊達益之助

B. 同上

C. 奉獻石燈籠一基

雄心院殿之益場

亨保癸卯歲三月廿六日 上田 []

芳賀 []

D. 奉獻石燈籠一基

石川 梶 次郎信 []

雄心院殿之益場

鹿股喜太夫 []

亨保八年 六月三日高橋 [太郎]

石川 [] 三郎 次

E. 奉獻石燈籠一基

[] 内 []

雄心院殿之益場

[] 田 []

亨保八年 六月三日高橋 []

[]

11. 天柱院殿巖山月台大童子之墓

- | | | |
|---|-----------------------|---|
| A | <input type="radio"/> | B |
| C | <input type="radio"/> | D |
| E | <input type="radio"/> | F |

11

A. 奉納石燈籠一對
天柱院之墓前
延享二年十月六日
伊達義八郎

B. 同上

C. 奉獻石燈籠一基 天柱院殿之墓場	<input type="text"/>	
D. 奉獻石燈籠一基 天柱院殿之墓場	<input type="text"/>	
E. 奉獻石燈籠一基 天柱院殿之墓場	<input type="text"/>	
F. 奉獻石燈籠一基 天柱院殿之墓場	<input type="text"/>	
延享二年十月廿三日	<input type="text"/>	
岩崎	<input type="text"/>	
若野	<input type="text"/>	
F. 奉獻石燈籠一基 天柱院殿之墓場	佐藤兵衛信	<input type="text"/>
延享二年十月廿三日	土田文太夫	<input type="text"/>
茂庭 車記	<input type="text"/>	
村 <input type="text"/> 五郎利	<input type="text"/>	
木村新之助	宇人	<input type="text"/>

12. 香雲院殿南金慈墓大童子之墓

- | | | |
|---|-----------------------|---|
| A | <input type="radio"/> | B |
|---|-----------------------|---|

12

A. 香雲院殿南金慈
石燈籠一對
文化十三年四月
七月廿三日

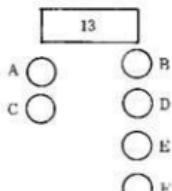
B. 同上

13. 心鏡院殿永照淨月大師墓誌銘

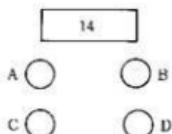
〈裏面銘〉

心鏡院永照淨月大師墓誌銘

大師姓源氏通子法諱永照淨月 我權中納已通名卿之女乃 長夫人
之妹也 夫人年輸二十惟 女子從人耳是以順歸女某于仙臺以有現 於村
內焉詳之 獨山公不韋而大公乃養大師以為女早保丁未之秋嫁伊達村胤
時年十六村胤宮床室村胤之男乃公之甥也村胤早死無嗣斷髮自繼心鏡院
院 三十餘年如一日矣以正德癸巳七月廿八日生以明和己丑五月十一日歿焉年五
十七卒 悲諸葬之瑞鳳寺在先公子某之獨裔其墓也為人清順克配
女俄脣養村亂弟之女以為女許嫁伊達村富云 銘曰
如月之淨混晴曉識 心鏡



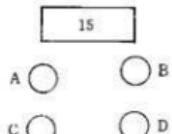
14. 英良院殿忠山惟冲大童子之墓



- A. 奉納
心鏡院殿 石燈籠 一基
明和六年五月
伊達肥前村
- B. 同上
- C. 奉納
心鏡院殿 石燈籠 一基
明和六年五月晴日
- D. 同上
- E. 奉獻石燈籠一基
心鏡院殿之墓場
明和六年 五月
- F. 奉獻石燈籠一基
心鏡院殿之墓場 高
明和六年

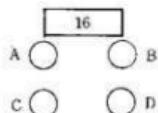
- A. 文政九年八月廿五日
英良院殿坐前
奉納石燈籠二基
継
伊達種三郎
- B. 同上
- C. 奉獻石燈籠壹基
英良院殿坐前
文政九年八月二十五日
青羽
保田
坂野
美屋
嘉代
崎
- D. 奉獻石燈籠壹基
英良院殿坐前 砂澤氏
文政九年八月二十五日 美等

15. 意心院殿芳徳慈性大童女之墓



- A. 奉納石燈籠一基
意心院殿坐前
伊達種三郎
佑
文政十二年十二月廿七日
- B. 奉納石燈籠一基
意心院殿坐前
文政十二年十二月廿七日

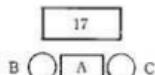
16. 萬心院殿算池相傳大童女子之墓



之

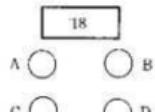
- C. 奉獻 石燈籠一基
萬心院殿坐前
文政十二年十二月廿七日
- D. 奉獻 石燈籠一基
延壽院
萬心院殿坐前
文政十二年十一月廿八日
- A. 萬心院殿坐前
石燈籠 両基
天保十五年八月十三日
- B. 同上
- C. 奉獻石燈籠一基 梅元
萬心院殿坐前 坂野
天保十五年八月十三日 加
- D. 奉獻石燈籠一基 久
萬心院殿坐前 天保十五年八月十三日

17. 萬心院殿月貞惟尼大師之墓



- A. 獻納
御水鉢
明和二年
八月十五日
- B. 獻納明和三年八月十五日
西照院殿之坐前
小村日向
- C. 獻納明和三年八月十五日
萬心院殿坐前
經松院
(桜)

18. 萬心院殿萬郎慈深大童女之墓



- A. 萬心院殿坐前
石燈籠 両基
弘化三年七月十六日
- B. 同上
- C. 奉獻 石燈籠 梅角
萬心院殿坐前 坂野
弘化三年七月十六日 尾上

D. 奉獻 石燈籠
淨心院殿坐前 , 布施
弘化三年七月十六日

19. 不明

20. 菩珠院被拂香智院大東寺之集

- A B
 C D

A. 奉納真珠院被
B. 宽政元年五月四日

C. 奉獻石燈籠一基
真珠院被之坐前 小川
寛政元年己丑月四日 新開
阿部
D. 寛政元年五月四日
奉納真珠院被

21. 金剛院被坐拂慈院大東寺之集

- A B
 C D
 E F

A. (基礎のみ残存)
B. 不明
C. 奉獻石燈籠一隻 安 氏
金剛院被之坐前 級子
天明四年十一月廿三日
D. 天明四年十一月廿三日 佐野
金剛院被之坐前 若野
奉獻石燈籠一隻
E. 奉獻石燈籠一基 石田道專信房
金剛院被之坐前 佐藤 定信
天明四年甲辰 益場治左衛門利信
十一月廿二日
F. 同C

22. 曹溪院被坐拂衣秀大東寺之集

- A B
 C D

A. 曹溪院被坐前
石燈篋 囲基
弘化四年五月十五日
B. 同上
C. 奉獻石燈篋坐基
曹溪院被坐前
弘化四年五月十五日

D. 奉獻石造榮尼墓

曹溪院皎學前

弘化四年五月十五日

23. 希照院妙珠妙榮尼大師

〈裏面銘〉

大師妙澤氏世為仙府之臣父十良左衛門定榮四女坐文化元甲子年某月日生禰安平政元戊寅年十五歲 青山大夫入奉仕企區辛辰年十八真明院大夫入勤仕企六癸未年二十歲為 正山君對誕生一男一女男繼 樂允君早夭一女嫁伊那賓家邦物故後得度師 貞妙院
正山公損範之後企丁亥年朝榮號常照院妙珠妙榮尼大師移居尼院
多年歸經念珠不忘明治二亡已年十二月中旬染病不起 葬山公及諸君聞病下屬於時璇珠味使令日々不絕恩澤如山岳時行年六十六同月晦日安然卒去乎企三庚午年正月初四日埋葬南屏山瑞鳳寺
正山君之養嗣企年二月十六日魂歸 大年現住坪惠銀徒

24. 寂照院木茶慈心碑尼

〈裏面銘〉

天保四年癸乙四月廿二日

25. 長翠院華村御榮禪尼

〈裏面銘〉

禪尼淳津山字盛子 藩組 岩十歲末久女天明七年生於江戸都長仕其伊達大夫入守真院 大夫人者我 懿公之女而嫁非伊候者也享和二年八月為右平文化四年八月為御女中文政三年五月為中老改名三千江文政六年義老於天保二年十二月為老女弘化二年紀元三月我 公有命以勤
多年號 朶雨律二口此歲守真院若薨為 吴不凡連請
棄髮為大夫入折實祖不應同年十二月有命加賜律三口弘化二年二月贈仕 芝庭為若老故名津山同三年九月為老女格臺永二年十二月為老女仕 大夫人真明院君安政五年四月 大夫人亦薨護遺骸歸仙臺鉢頭 楊號長亨院
老年家安政六年三月病卒壽七十三歲政宗山瑞鳳寺瑞尼自少至老勤勞不倦以功子供孫列士籍長慶其修善誠心不移者其然及焉訣 明夜憲以 一人尼其有焉

瑞鳳藏海誦

26. 伊達佑子墓

〈裏面銘〉

伊達湖村二女元祐二年三月十二日逝
季三法名幻榮淨榮號土樹院尊千武藏
圓牛鳴弘祐守大正十五年七月二十日
改葬千經塚

27. 鳳翠院分流智津禪尼

28. 真雲妹糸法尼

付 記

この調査は、経ヶ峯の金石文、殊に伊達家廟にある石灯籠の銘を中心に、新修先廟記銘文、瑞鳳殿の鏡の銘文、同水盤銘文および妙雲界三廟墓標裏面銘文等について行なったもので、調査に際しては東北学院大学生葉地雅彦・菅井良彦・山口君および同OG黒久美子君の協力を得た。ここに厚く御礼を申し上げます。

(渡辺・山口)

以上、詳細な調査の結果を発表したが、ここに一括して各廟前の献燈数を概算すると次のようになる。

(1) 瑞鳳殿前	9基
(2) 2代廟前	18基
(3) 3代廟前	24基
(4) 妙雲界廟前	
イ、青龍院殿前	5基
ロ、曹源院殿前	11基
ハ、真明院殿前	9基
(5) 御子様御廟	82基 (火袋のあるもの皆無)
総計	158基 (紛失したもの11基)

以上のように多数にのぼる献燈が行なわれている。

これらの灯籠の修復は難かしく、盜難の対策も容易には立て難い。しかし、灯籠の銘文は挿げるものと挿げられるものとの関係を暗示するものが多々あるから、歴史の資料としてこれ以上の破損や紛失の起らないように管理していくべきであろう。

第3章 経ヶ峯の美術

—瑞鳳殿の絵画について—

以上、経ヶ峯伊達家廟の遺物、遺構一即ち既に他に移されていた感仙殿の門、および鏡、手水盤等の金属製品、同じく不燃性の石段・石壇・石垣石燈籠等について記述したが、なお余論として、二・三のことにつれて触れなければならない。

瑞鳳殿本殿は戦災を被って、烏有に帰したが、幸いにして詳細な実測図や豊富に撮影された白黒写真が残っていた。その写真によれば、瑞鳳殿の屏子の来迎社の間の板壁に、写真が小さくて充分に確認は出来ないものの、蓮華の中を飛ぶ天女(飛天)のような図柄が認められ、そ

の背面の板壁には二十五菩薩米迎の図らしい仏画が撮影されている。そしてまた感仙殿の厨子の忠宗公の坐像の後ろの米迎壁には二羽の鳳凰の舞っているような図柄が撮影されている。但しその背面の壁に何か描かれていたか否かを明らかにする写真は残っていない。多分描かれていたのではなかろうか。(写真28・29)

一方、瑞鳳殿本殿の棟札にはその下方左端に

絵画 狩野修理進定吉

唐物絵 中村清八常長

の名が見える。そこで、瑞鳳殿厨子の来迎柱の間の壁面の仏画を描いた画家はこの狩野修理進定吉であったであろうことは一応推察出来る。感仙殿の厨子の鳳凰の壁面の画工が誰であったか、この方は棟札も残っていないとすれば、不明というほかはないが、鳳凰の図柄は孔雀の図柄と共に桃山期及至江戸初期の襖絵によく描かれるものであって、仙台城大広間の上段の間にも描かれており、後に屏風に直されたものが松島博物館に所蔵されている。だから感仙殿建築当時(寛文4年)の伊達家の装飾画工の容易に描ける画題であったと思われる。そう考えるとそれに先立つこと27年の寛永14年建築の瑞鳳殿の仏画を描いた狩野修理進定吉という画工も、やはり同様に当時伊達家に仕えていた画工の一人と見るべきであろう。正面の犬女の図は、政宗公の衣冠のかげで明確でないが、その裏面の二十五菩薩米迎(聖衆來迎)の画面は全体図と部分図二枚計三枚の写真が残っているので、いくらかよく観察することが出来る。その空間を来迎する聖衆の描き方は、仏画と列王図の違いはあっても、どこか松島瑞巌寺文王間の群衆の描き方を思い起させるような点がある。そして、仙台城本殿大広間の襖絵や、政宗公の告懺寺瑞巌寺の障壁画に主任画家の一人として記録に名を留めている画家に、政宗公が伏見城滞在中に取り立てた佐久間修理(又は左京)吉次という画工がいる。そしてこの佐久間左京はしばしば狩野左京と称したこともあったという。修理と修理進は似通っている。吉次と定吉も近い。そう考えると、この二人は同一人かそうでないにしても密接な関係がある画工たちであったと思われるを得ない。佐久間左京は明暦3年(1657年)77才で歿しているから、主君政宗公の厨子の建設された寛永14年には57才の働き盛りであったことになる。この働き盛りの佐久間修理が主君の厨子の仏画に奉仕しない筈がないようにも思える。こういう考え方はしかしこまでも推測であって、その頃にはもう既に正式に狩野派に学んだ別の画家がいたのかも知れない。今は小さな写真だけが手懸りで、精密な様式査定も難しい現状であるから、ただ以上のこと記して、狩野修理進定吉の記事或は作品の発見に務めるほかない。

以上、瑞鳳殿のいわゆる絵画について考察したが、当時の政宗公周辺の美術工芸品ということになると、仙台市博物館その他に収蔵されている多数の遺愛品に加えて、今回338年ぶりに出土した副装品は極めて貴重な、疑う余地のない資料の数々を加えたことになる。殊に当時

最も斬新であった泰西渡来品がその中に数点も入っていたことは、今更ながら伊達政宗の人物像の複雑さを感じさせ、当時の伊達藩の美術の再検討の必要を感じさせずにはおかしいものがある。

付) 経ヶ峯周辺の社寺

経ヶ峯の伊達家墓廟の周囲に一・二の社寺がある。そのうち山道中途東側に正宗山瑞鳳寺がある。この寺は瑞鳳殿の額の銘を書いたり、上述の棟札を書いたりした保春院清岳宗源を開山をして、二代忠宗公が父公政宗公の靈廟瑞鳳殿の番華所として寛永13年（瑞鳳殿上棟の前年）に建築した臨濟宗妙心寺派の寺院である。勿論政宗公の菩提寺はその法命瑞鳳寺般貞山禪利大居士の文字が示す通り、生前に純築完成していた松島の瑞巖寺であるが、瑞鳳殿の仏事番華のことを担当する寺院が付近に必要であったのであろう。寺領では、寺の境内に伊達家の墓廟が建てられたと考えていたようである。忠宗・綱村・吉村時代には一門格の待遇を受け、実に傍院一区八合の落頭を獲る大寺院となつたが、幕末の安政5年、(1859年)の大火で宝宇悉く焼失したが、杉木立の中の壽廟三殿は災害を免れた。明治以後は神仏分離の断行で、靈廟の敷地は伊達家の所有となり、瑞鳳寺は替りの面影はなくなった。しかも明治29年(1896)に再び火災にかかり、仮本堂その他一切焼失し、辛うじて歴代藩主の位牌のみを持ち出しただけの状態であったという。大正によよんで本山妙心寺貢主は山崎ある同寺の額座を歎き、鎌田智勝和尚を特派して再興に当らしめた。智勝住職の後は現住鎌田正紀氏が嗣ぎ、親尼復興の姿をあげた。大本堂・佛殿・政宗公三百忌記念館・茶室瑞新軒・幼稚園・山門等次々に備わり、最近は昔日の偉容を取り戻した。鎌田氏二代の如きは正に中興の住職といふべきであろう。³⁹ところが皮肉なことに、昭和20年7月10日の空襲で、今度は瑞鳳寺は焼け残ったが、国宝瑞鳳殿、慈仙殿、そして善應殿は全て焼失し、今回瑞鳳殿の再建が成るまで実に34年の風霜を必要としたのであった。なお歴代の住職の中で中興と称されていた15代南山古梁昭顕（天保10年、1839年寂、81才）は詩書面にも秀で、南画家菅井梅闇や儒者大根平泉などとも交遊し、著書を多数遺している文人であったことを追記しておきたい。南山和尚は遷化するに臨んで、遺骸を名取川の川口にて水中に投じ魚腹に葬れの遺命したと三原良吉氏は述べておられる。⁴⁰

なお、御子様御廟の下方、広瀬川断崖上に穴藏（倉）神社（別称穴合縁荷大明神）があるが、詳述は略す。

註

1. 小倉強著『増補一入幕』P200以下
2. 斎城武^一著「仙台の金石文」P401~402(『仙台市史』卷5別編3)
3. 同 上 P404~406
4. 同 上 P421
5. 本著 佐藤功「経ヶ峯の建築」
6. 瑞鳳殿再建期成金「瑞鳳殿再建の経済」P54
7. 「仙台市の文化財」(複数) P25
8. 「瑞鳳殿 舊・寶鏡及び西設写真
9. 「仙台城」P123~125
10. 同 上 P146~147 の図解参照
11. 本著 佐藤功「経ヶ峯の建築」
12. 浜田立嗣「瑞巣寺の總壁画」(『国宝』995)
13. 山本昇著「仙台の社寺と教会」P387 以下(『仙台市史』卷7 別編5)
14. 伊東信雄著「伊達政宗の名とその遺品」P14

資料

- I 瑞鳳殿梵鐘銘文
- II 瑞鳳殿手水盤銘文
- III 新修光明院銘拓本及び白文
- IV 瑞鳳殿石灯籠の石田氏調在(大正七年)

写真 I-29

資料 I

瑞鳳殿梵鐘銘文

大日本國奧州列島宮城
都仙古屋住
松平越萬大守利林慈
原朝臣忠宗公修光
考前黃門吉山利公大
臣上白桑卜地於嘉城
之東一里營建靈廟號
之曰瑞鳳殿也矮座玉
金銀佛龕聖丹漆綠畫
嚴飾輪美者非口
所言非心所測寔盡扶
桑中少等類之實錄也
孝心大戰加旗總成一
大德以備發番也大舜
者名林發舍資始晚華
聞破長衣聲輕韻谷響
則覺音衝疏冥昧矣
增一阿含派云著竹禪
時一切惠道諸苦並得
停止也波云若夫大定
常惠大用常寂間非有
聞覺亦覺以考以學
攝時寔永十四歲無闇赤奮若小春吉日
大相趁林慈原朝臣忠宗公
奉行門士 奥山大學助常典
焰田職河介周知
都山次左衛門尉重祐
石田権七郎人
大和田傳左衛門伊吉
湖者 道山市廳成茂

銘曰

國氏屬詳平矣

資料 II

瑞鳳殿手水盤銘文

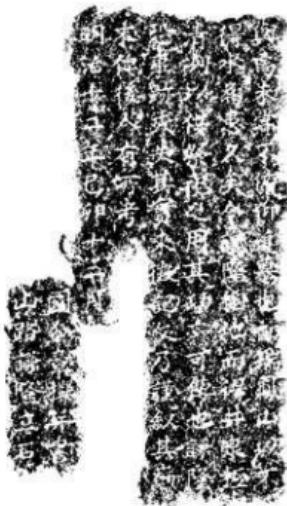
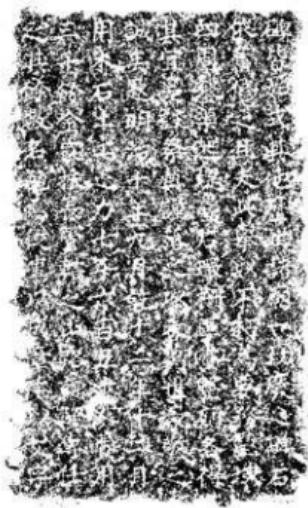
奉^{ムサシ}手水盤一箇
正宗山瑞鳳殿前
寔文六年五月二十四日
柴田外記朝章

千香^{ナフミ}年奉仕矣七

英主承^{シテ}今始^{シテ}二十一年^{ナツ}
政宗明^{タケル}且^{シテ}愛^ス拔^ク藝^{シテ}思^ス一旦

廟已^ハ破損^ス幸^シ使^ス三^ミ禁^シ告^ス其^ノ
修復^{シテ}事^{アリ}因^ム此^ノ盤^{アリ}於^ム廟^{アリ}
前^ニ繪^ス志^ス者^也。

刻



資料三 新修先廟記拓本

新修先廟記

恭惟、伊達氏先廟之地、馬場原大平西山、又爲孝勝萬壽寺^一。

自古葬祭用浮屠。而其從神式者、以明治二年爲始。其後堂門、

廟金碧輝矣。重制悉備爲^①。然而時勢變遷、今固不如昔日也。

於是舊祖神廟仍舊日。感仙、苦心一繼。存影堂如孝勝二寺。^②

奉遷其主於祠廟、新建立真樞三碑皆如式。其他歷世諸廟、

一切廢之。

碑石依舊修之。且夫此舉以不苟爲要務。豈誠

四隅盡采起塲、鑿石廣櫛區畫盛列各得其宜。爰設祭屬謹

落之、以表萬世崇敬之誠矣。越明治十九年九月、訖十二年十二月。

用木石土工之力七千六百五十人、費用三千餘金。東扶長管耕之、山路

運送專任之。其餘數名姓^③、成事以筆亦以文字與。未

嘗不暫仰追慕也。初瑞原山以不得水爲患久矣。今謀墳相

地而得井泉深清為、以供祭祀之用甚功亦可傳也。謹啓考

事跡或失其實徵來記文乃謹就其祐木傳後人有研考

明治十二年己卯十二月

國分章撰并書

山路謹謹立石

家扶長	笠原十吉
家從	酒成田長一
高橋傳治	都山直秀
佐藤市右衛門	石川道生

- 註
 ①敬意を表わすため、字分あける
 ②「孝勝萬壽寺」の「萬壽」が
 おちたものと考えられる。
 ③「事成」の誤りか?
 ④「來徵」の誤りか?

堂本御

門御店金

奉寄瑞鳳殿前
伊達 安房守
寛永十四歲正月二十日

奉寄瑞鳳殿前
伊達 安房守
藤原 成實
寛永十四歲正月二十日

御橋鹿下表通り

奉寄瑞鳳殿前
伊達 武藏守
藤原宗利
寛永十四歲正月二十日

奉寄瑞鳳殿前
伊達 安房守
藤原宗定
寛永十四歲正月二十日

奉寄瑞鳳殿前
石川 氏部太輔
源宗 四日昭
寛永十四歲正月二十日

御拜殿

奉寄瑞鳳殿前
石川 氏部太輔
源宗 四日昭
寛永十四歲正月二十日

奉寄瑞鳳殿前
白石 形部太輔
寛永十四歲正月二十日

構段昇降口

奉寄瑞鳳殿前
石母田 大膳亮
寛永十四歲正月二十日

右欄ニツク

石 檻 段

寛永十四歲正月二十日
奉寄瑞鳳殿前
中鷹監物意成
五日二十四日

奉寄瑞鳳殿前
堺 藤原宗利
寛永十四歲正月二十日
八日小郎重長之立

奉寄瑞鳳殿前
堺 藤原宗利
寛永十四歲正月二十日
九日昌江常吉之立

奉寄瑞鳳殿前
堺 藤原宗利
寛永十四歲正月二十日
佐々木 稔元綱之立

向予

寛永十四歲正月二十日
奉寄瑞鳳殿前
日理伯耆守
宗根

奉寄瑞鳳殿前
茂庭周防守
良綱
五日二十四日

奉寄瑞鳳殿前
津田近
賴江康
五日二十四日

奉寄瑞鳳殿前
古内主
重廣
九日昌江常吉之立

口入門御表

大正七年
東洋社

資料IV 瑞鳳殿石灯籠の石田氏調査（大正七年）

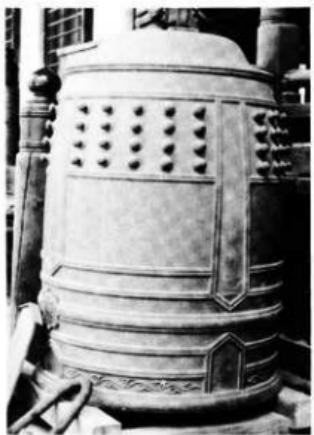


写真1 鐘



写真2 手水盤

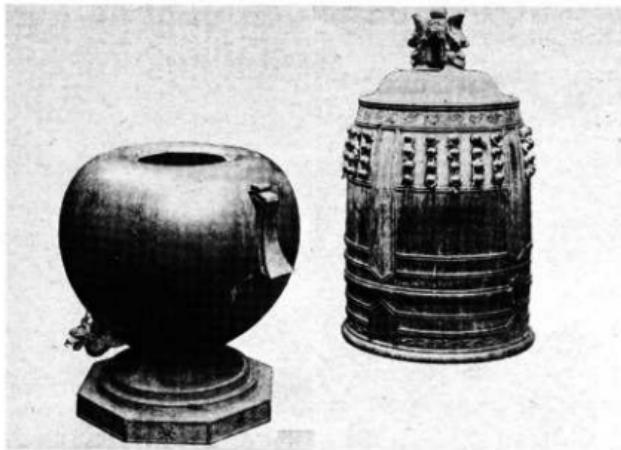


写真3 鐘・手水盤（戦災以前の状態）

写真4 龙首



写真5 同上



写真6 金具類





写真7 瑞鳳殿石段（戦災後）



写真8 瑞鳳殿石段（再建後の現状）



写真9 感仙殿石段



写真10 瑞鳳殿石垣（南面）



旧本殿の礎石(再建前)

写真12 瑞鳳殿前
石灯籠



写真13 同 上



写真14 感仙殿前
石灯籠



写真15 感仙殿前
石灯籠



写真16 善應殿前
石灯籠



写真17 同 上





写真18 感仙殿参道階段わきの妙雲界奉獻の石灯籠



写真19 錨文の削られた石灯籠



写真20 新修先廟記の碑

写真21 妙雲界期



写真22 同 上



写真23 同 上



写真24 妙雲界廟



写真25 御子様御廟



写真26 同 上





写真27 御子様御廟



写真28 瑞鳳殿厨子



写真29 感仙殿厨子

瑞鳳殿発掘調査概報

伊東信雄

まえがき

瑞鳳殿は寛永13年（1636年）旧5月24日（新6月26日）70歳で江戸で没した仙台藩祖伊達政宗の廟所である。

政宗死後、その遺骸は直ちに仙台へ送られ、同年6月6日、彼の生前の希望に従って仙台城東南900m、広瀬川の清流を隔てて仙台の街および仙台平野を太平洋まで眺め得る越路ヶ峯の地に埋葬された。2代藩主忠宗はその上に靈廟を建立し、翌寛永14年（1637年）10月に完成、瑞鳳殿と命名した。

瑞鳳殿は絢爛豪華な桃山時代の建築様式を留めた江戸初期の靈廟建築の代表的なものとして昭和6年12月14日国宝に指定されたが、惜しくも昭和20年7月10日未明の仙台空襲の際、2代忠宗廟の感仙破、3代綱宗廟の善應殿と共に焼失し、わずかに石垣・階段・礎石・厨子台石・燈籠等を遺すのみとなった。

その後、絹ヶ峯の伊達家墓域は伊達家から仙台市へ寄贈され、仙台市では跡地の周囲に木柵を廻らし、墓塚の存在すると思われる本殿跡の周囲に張芝して御影石の切石を廻らすなど、墓地の整備に努めて来た（写真1）。

しかしながら、靈廟建築の存在した昔日の豪華な面影はしのぶべくもなく、戦後の混乱が落ち付いて来ると瑞鳳殿再建を希望する県民・市民の声が高まり、ことに昭和41年の政宗誕生400年祭がこれに拍車をかけた。

そこでようやく瑞鳳殿再建が実現することになったのであるがこの付近の地下には良質の亜炭が埋蔵されていたこともあり、戦後の燃料不足の時期にその採掘が大規模に行われ、坑道が瑞鳳殿の基底まで達し、墓室もすでに破壊されたとの噂もあった。現に政宗の木像が安置されていた本殿厨子台石の前二列が後列より10cmも沈下していることが地下における異変の存在を思わせた（写真2）。

そこで、再建に先立ち東北大学教授奥津春生博士により付近の地盤調査が行われた。その結果、地盤陥落や亀裂の生じる恐れがあることが判明し、地盤強化策がとられた。⁽¹⁾

一方、再建瑞鳳殿の設計は小倉強氏の手で行われたが、元の瑞鳳殿が木造であったのに対し、今度のは耐火構造とするため鉄筋コンクリート造りとなり、その重量が316t以上と予想されたことから地下構造がこの重量に耐え得るか否かが問題となつた。

ここ地下構造については、「貞山公治家記録」や「御名語集」などに政宗の遺体が地下1丈

(約3m)余の穴を掘り、石の唐櫃に容れて葬られたと記してあるものの、具体的にその位置がどこにあるか、また現在どのような状態で遺存しているかは皆見当がつかなかった。

昭和48年7月、瑞鳳殿再建期成会が結成され、いよいよ再建工事が実施されることになった。そこで、翌49年3月28日の再建委員会で専門家による慎重な学術的調査を行うことが可決され、4月16日の関係者打合せで、伊東を中心とした考古学・地質学・建築史学・歴史学の専門家による調査を行うことが決定し、その事務は仙台市教育委員会社会教育課が担当することになった。

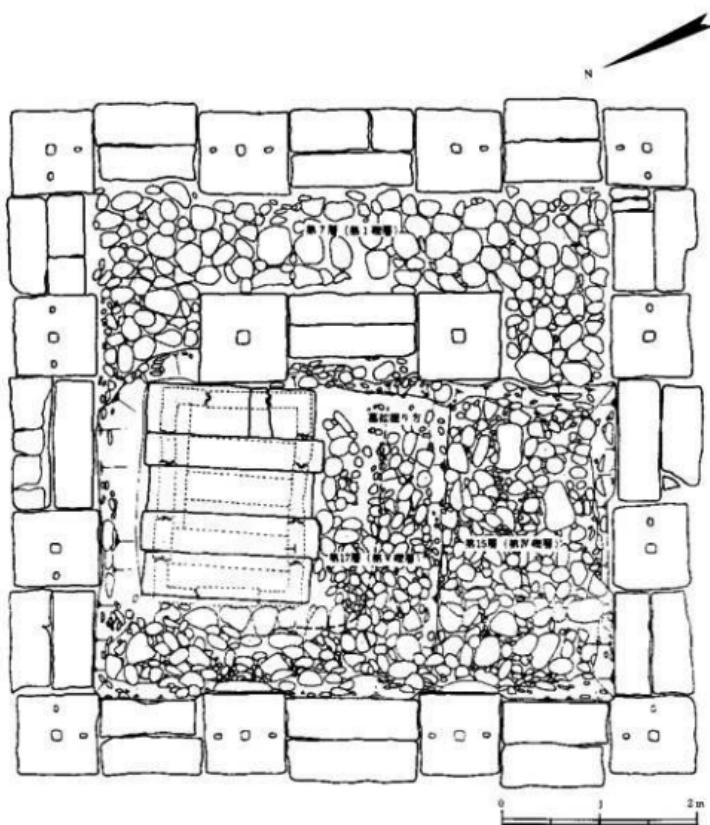
発掘調査の成果

調査以前にはすでに亜炭採掘の際に荒らされたのではないかとの懸念があったが、調査の結果、石室は一枚の側石がはずれて内部に落ち込んでいただけで、並んでいたが、比較的完全な姿で遺っていることが判明した。厨子台石の不等沈下により想像された地盤陥没も石室蓋石上に敷かれた木板の腐朽に起因するものだったらしく、石室の蓋石以下には及ばず、石室には異状はなかった。

石室内に納められたものも、埋葬後338年の星霜を経ているわりには保存がよく、ことに最もその存否の案ぜられた政宗の遺骨は棺桶内に詰められた石灰(牡蠣灰)の作用で石灰化していたので、落下した一枚の側石により砕けた脚部の骨以外はほとんど完全に遺り、普通の場合、長く遺ることのない瞬間仮までがきわめて良好な形で遺り、埋葬の状態、政宗の骨格、墓室の構造、副葬品などを明らかにすることが出来たのは幸いであった。

調査の結果によれば、まず整地が行われ、経ヶ峯の高い方を削り、その土を低い方へ盛り、建物の建つべき平面を造成した。政宗の遺骸を埋葬したのはその最上段で、ここで奥の方の地山を約2mほど削り、前面の低い方に盛上し、東西約20m、南北16mの平坦面を設け、そのほぼ中央に前10m、深さ1.2~1.7mの土壙を掘り、その土壙の内部、中央より北寄りの所に東西2.2m、南北2.5mほどの九隅方形の墓壙を設け、その中に仙台で秋保石と称する宮城郡秋保地方産の凝灰岩の切り石を組み合せて石室を設けている。

石室は外側上端で計って東西2.13m、南北1.48m、蓋を含めての高さは1.75m、内部で計って東西1.85m、南北1.19m、深さ1.47mである。側石は東壁10個、西壁9個、南壁13個、北壁13個の切石を大体三段に積み上げたもののように見えるが、隅石はそれぞれ角を直角に切り出してL字形をなし、その側面が両側にあらわれているものなので、実際の数は32個である。切石の厚さは1.3~1.7cmぐらいで、横には本実、縦には合欠きの手法で接続している。底面には凝灰岩の長い切石を列に南北方向に敷いたもので、足りない東北端、西南端の石は他の石で補



挿図1 石室の位置平面図

って合計8枚の切石によって構成されている。側壁の上縁を水平にするために床石と壁石の間に河原石を詰めて高さを調節したところがある。蓋石は長さ161~176cm、幅35~52cmの長い板石を6枚南北方向にかけ並べたものであるが、東側の列だけが2枚の切石を一列に並べたものであった。蓋石の接続は合欠きであった。

石室は元米、正しく長方体に組み立てられたものであるが、長年の土圧のために形が歪みを

生じており、ことに東側中央、上から3番目の側石は床面に落下して、その隙間には裏込めの礫石が見えていた。

石室は墓壇内で組み立てられたものであるが、その製作は墓壇外の広い場所で行われ、一度外で組み立てて見た後、それを解体して墓壇内に運び、そこで再度組み立てられたものであることが石室側石の内外面の積み石の接点に接続点を示す墨印が付けられていたことから知られた。

このようにして墓壇内で組み立てられた石室の周囲、墓壇の壁との空隙には粘土と礫石が交互に詰められ、墓壇が埋められた。

瑞鳳殿の床面から蓋石までの深さは1.2mであるから、石室の床石の下面までの深さは2.95mである。墓壇の底はもっと深いだろうから、3m以上になる。政宗の股肱の臣であった伊達成実が政宗死後7年の寛永19年（1642年）に著した『政宗記』に

かの山（筆者註絆ヶ峯）を引平らげ、一丈余尺に穴を掘り、大石共を擗合せ、四方一間半にして、其の下に納め、四尺余り疊み上げ、其上に塗灰を鋪給ふ。

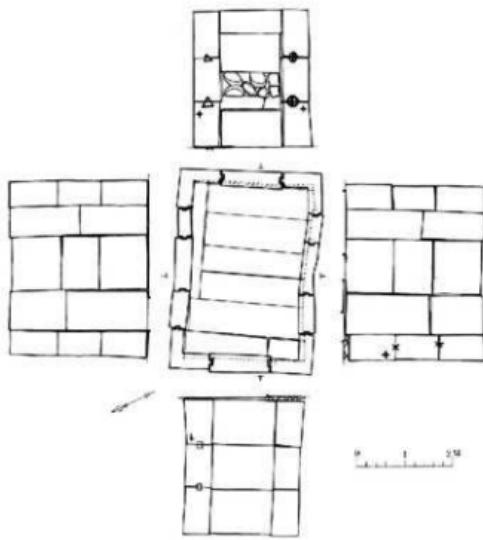
と記しているのとよく一致している。

石室の中には遺体を容れた棺桶をのせた鷲籠と太刀、脇指、薄絹絽以下の副葬品が遺存していた。鷲籠や棺桶は腐朽して原形を留めていなかったが、鷲籠は底棒が、棺桶はその中に詰められた石灰が石室の床面に遺っていたことにより、その位置および大きさを知ることが出来た。

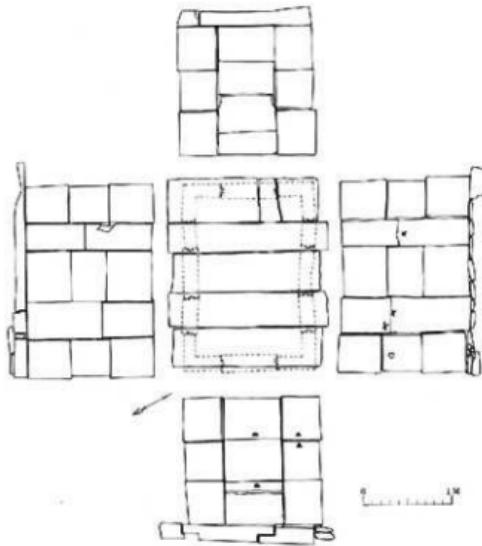
鷲籠は葬送用の素木のものらしく、木質部に漆を塗った痕跡は認められなかったが、金具には黒漆が塗ってあった。底の大きさは105×85cmで、鷲籠の高さは120～130cm程。一方に親音開きの扉があったことが金具や木質部の遺存から判明した。担ぎ棒は石室内に入れる時、邪魔にならないよう前後を切り結めてあったが、鷲籠の腐朽や解体につれて落として下の棺桶を破壊していた。担ぎ木には白絹を厚く巻いてあった。

棺は鷲籠にのせたまま石室中央部にあり、鷲籠の担ぎ棒の落下により破壊されバラバラになり、板は崩つて形を留めていない。棺の中には江戸で束帶を着せた遺体を納め、団りに石灰、水銀、塩を堅く詰めたことは『貞山公治家記録』⁽²⁾や『御名語集』⁽³⁾の記述により知られるが、石灰がかたまって塊状をなして遺っており（写真8）、落下した鷲籠の担ぎ棒により3つのブロックに割れていたが、その輪郭により棺は小判形（風呂桶状）の坐棺であったことが知られた。これはさらに石室の床面に遺った鷲籠台棒の中央に、長径75cm、短径60cmの小判形に石灰の形がはっきりと残っていたことにより裏付けられた。棺桶の高さは政宗の推定坐高より推して80cmぐらいと思われた。

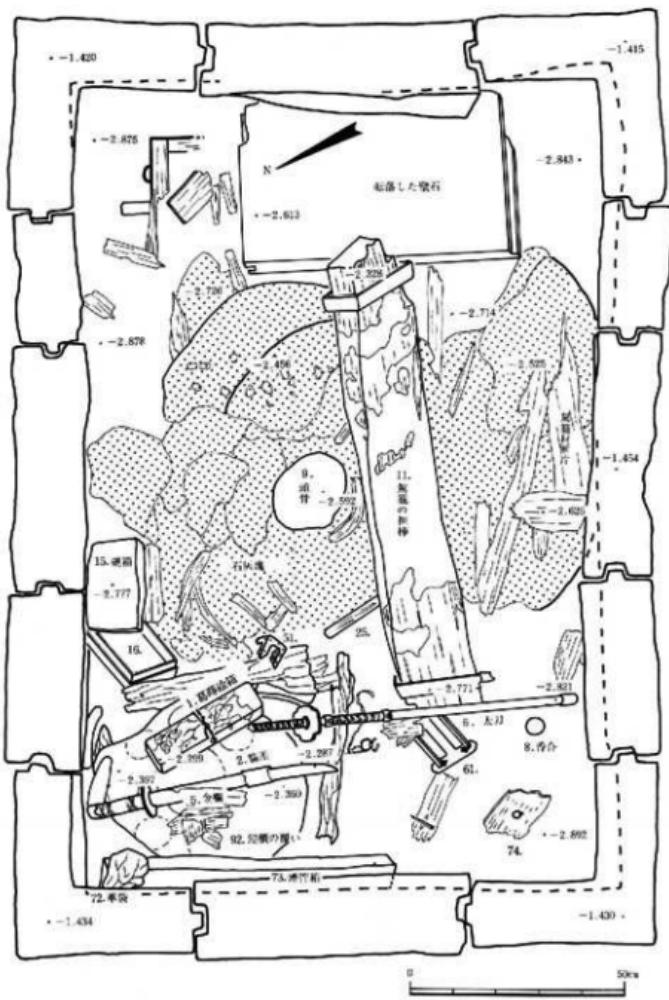
石灰には貝殻の細片が混っていて牡蠣灰であることが判明した。石灰と共に棺内に詰めたという水銀、塩、木炭のうち、木炭は石灰塊の下部から発見されたが（写真9）、水銀、塩は再度の化学分



插図2 石室内面実測図



插図3 石室外面実測図



插図4 石室内の遺物出土状況

土 壤 内 堆 積 表
(挿図 5 参照)

層No	層名	その他の	備考
1	表土(黒色土)		第2次大戦後の層
2	黄褐色土層	砂礫を含む	"
3	黒色土層	灰と腐植土の混入土	"
4	黄褐色粘土層	小礫若干含む	上層内積上第1層
5	暗褐色粘土層		第2層
6	黄褐色粘土層	小礫を含む	第3層
7	第I 線 層	径15cmほどの石	第4層
8	黄褐色粘土層		第5層
9	黄褐色粘土層	砂を含む	第6層
10	第II 線 層	径15cmほどの石	第7層
11	暗褐色粘土層	堅く叩きしめられる	第8層
12	黄褐色粘土層		第9層
13	第III 線 層	径5~8cmほどの石	第10層
14	黄褐色粘土層		第11層
15	第IV 線 層	径5~8cmほどの石	第12層
16	黄褐色粘土層		第13層
17	敷 板 層	石室よりやや広い範間に分布	
18	第V 線 層	径15~40cmほどの石	第14層
	第VI 線 層	"	第15層

析にもかかわらず検出することは出来なかった。遺存した石灰塊は高さ34cm程あり、周間に棺桶の板目および内に散かれたと思われる布目を遺していた。

棺を輿や駕籠に乗せたまま埋葬する風習は当時の上流階級の間に存在したところで、芝増上寺の徳川2代将軍秀忠の場合には輿が⁽⁴⁾、備前岡山藩2代藩主池田忠雄の場合には政宗同様駕籠⁽⁵⁾が用いられていた。仙台藩2代藩主忠宗の時にも乗輿に入れて石櫃に埋めたとある。⁽⁶⁾

棺桶を入れた駕籠を石室の中央に安置し、その手前左側に副葬品を置き終ると蓋石をしてその上に土をかけて政宗の埋葬は一応終る。⁽⁷⁾

これで政宗遺体の埋葬は一応終るが、これだけの工事がきわめて短時間のうちに行われたといふその作業力は驚くべきものがある。政宗が江戸で死んだのが5月24日朝であり、遺骸が仙台に到着したのが6月3日、翌6月4日には経ヶ峯に葬ったことが『貞山公治家記録』にある。⁽⁸⁾ 江戸から急便による報せを受け、直ちに埋葬準備に着手したとしても10日前でこれだけの埋葬施設を作ることは困難であろう。従って埋葬の日は6月4日ではなく、『貞山公治家記録』に、

石母田大膳白筆の記ニハ 6月6日御靈屋ニ御移ト有リ

との別説を記し、また『御名語集』⁽⁹⁾、『政宗記』⁽¹⁰⁾に遺骸が覺範寺に到着してから3日後、すなわち6月6日に葬ったとしているのが正しいとすべきであろう。それにしても死後13日後にすぎない。おどろくべき突貫工事である。石室の上に瑞鳳殿の本殿が建てられてのであるが、本

殿の基礎工事は土壌内堆積土層表に見られるように粘土層と礫屑とを交互に積んだもので、第Ⅳ疊層は石室の上端と平行している。石室の蓋石が露出していたわけではないだろうから、石室の蓋石を閉じたのと瑞鳳殿本殿の基礎工事の始まったとの間にはあまり時間的差がなかったと見るべきだろう。瑞鳳殿の造営は寛永13年秋から奥山大学常良が忠宗の命を受け行ったことになっているが、遺構から見る限り、埋葬に引き続いて瑞鳳殿の基礎工事が始まっていたようである。あるいは埋葬と瑞鳳殿基礎工事の開始の間に若干の間があって、その間石室蓋石の上にあげて置いたが第16層に見られた木材であったかもしれない。

石室造営に関する第二の問題は、石室の設けられた位置が瑞鳳殿本殿の中央になく、北にずれて存在したことである。瑞鳳殿が政宗の墓所であり、墓室の上に建てられるとすれば、墓室を中心位置させるのが常識であろう。ところが政宗の墓室は中央ではなく、南側を広くとり、北寄りに設けられているのは不可解なことといえよう(写真5)。それが夫人を追葬するために備えたものでないことは、遺体の埋葬後、直ちにここに瑞鳳殿が建てられ、この地への夫人の追葬を不可能にしていることによっても明らかである。これについては、調査団内にも色々な意見があるが、当時の人はあまりそのようなことに拘泥しなかったためというのが真相ではあるまいか。政宗より4年前に歿した徳川秀忠の墓廟では、墓室は宝塔の下にあったが、同じ年に死んだ岡山藩主池田忠雄の墓ではその石室は墓域の中央にある墓塔の下からは発見されず、それより2m後方の、しかも墓室と若干向きを異にして発見されている。現在近世初頭の大名の墓の学術調査された例はこの3例にすぎず、まだ統計的に処理することは出来ないが、いずれ資料の増加を待つべき問題であろう。

棺中に納められた政宗の遺体は東向き、すなわち参道のある西の方から詣でる参詣人に背を向ける姿態で発見された。これも問題になる点である。普通ならば参詣者の方に向かって西向きに埋められたのが当然である。これは棺の置き方を誤ったのではないかとの見方もあるが、まだ瑞鳳殿の建たない坪井時にはこの方が自然であったのかもしれない。政宗が寛永13年4月にこの地に立って、ここを自分の墓地にしたいと言ったのは、東に仙台の街を一望の下に眺め得るために地の眺望を愛したためであろう。現在の瑞鳳殿は杉の下に囲まれて眺望がきかないが、当時は灌木林であったから東方遙かに太平洋まで見えたはずである。東向きに遺体を安置したのは政宗の心にそったものと言うべきであろう。東向きに埋めたにも拘らず西側に参道を設けて西側を瑞鳳殿の正面としたのは、東側は急斜傾で参詣に困難であったからだろう。

遺体には束帶を着せ、冠をかぶせ太刀を佩かせて弔ったと記録はあるが、棺の中には束帶の材料である綿布の存在した痕跡はなかったから束帶を着せたのではなかったと思われる。棺中から発見されたのは麻布ばかりであった。政宗の没したのは太陽暦では6月26日で、初夏の頃であるから麻の帷子を着せたのではなかったかと推定された。

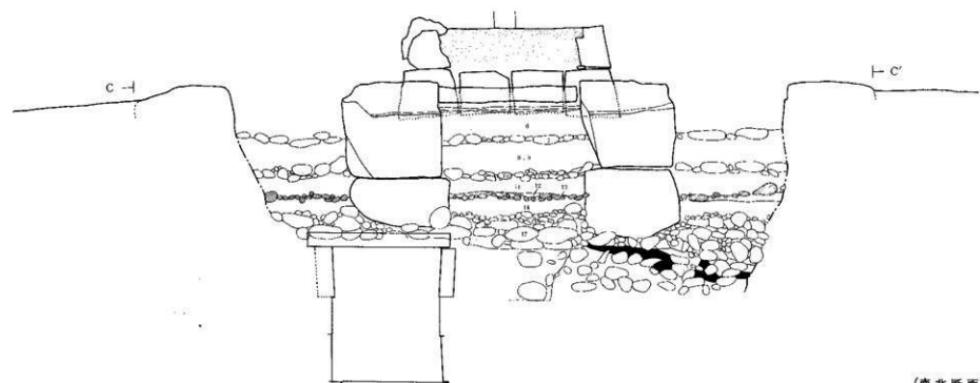
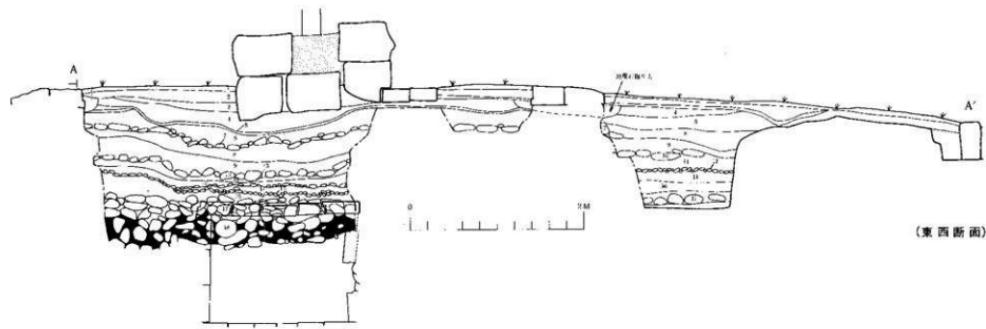


图5 石室断面见通图

冠や石帶が石室の西北隅、鏡櫃の下に置かれていた衣裳箱と思われる黒漆箱の中から発見されているところから、東帶は遺体に着せて葬ったのではなく、別に箱に入れて副葬したものらしい。しかしこの中にも東帶の材料たる絹布は残っていなかった。これは石灰中のアルカリのために石帶の丸鉤順方同様融けてしまったと見るべきだろう。

太刀は鏡櫃に寄せ懸けてあったが、その緒は『御名語集』『政宗記』に記されているような革緒ではなく平打紐であった。

遺骨の保存は棺の中に詰められた石灰のカルシウム分のために極めて良好であった。丁度、貝塚で縄文時代の人骨が貝殻のカルシウム分のため数千年を経てもよく保存されるのと同様であった。大腿骨から推定される政宗の身長は159.4cmで、現代人の平均身長よりは10cm程低いが、当時としては普通の身長であった。

頭骨は長頭（頭蓋指数74.09）、顔は面長で鼻樑が高く鼻筋が通っている。当時の一般庶民の鼻梁の低いのと比して貴族的な顔であったとさうことができる。

70歳の高齢なので、歯は多く抜けてしまい4本しか残っていない。

四肢骨、指骨は太く、流石武芸で鍛錬した痕を思わせる。左脚骨（下肢の外側の骨）に完治した骨折の痕が見られ、20代のものと推定された。記録によると天正17年（1589年）2月26日、23歳の時米沢で落馬し、足の骨を折り、小野川温泉に1ヶ月程、湯治して治癒したことがあるが、これはその時の傷であろう。

政宗は独眼竜と称せられ、片目であったことは世に知られているところである。ところが遺骨の上では政宗が片目であったとの証拠は挙げることが出来なかった。しかしこれは政宗が独眼であったということを否定するものではなく、政宗の独眼は幼時の抱瘞（天然痘）の際、片目に毒が入って失明したのであるから、骨に異状が残らないのは不思議ではない。

毛髪および骨から明らかになった血液型はB型であった。

副葬品としては、記録瓶に見えている太刀、脇差、具足等の他に漆絵箱、硯箱、筆入、印籠、香合、煙管など政宗が生前愛用していた多くの品々があり、政宗の日常生活を偲ばせた。これらの副葬品は寛永13年の埋葬品で、その年代がはっきりしている点でも我国文化史上貴重な遺品である。

副葬品は、全て石室の西北隅にまとめて置かれたものである。一番下には東帶などを入れた衣裳箱と思われる黒漆箱があり、漬れてはいたが、その中から冠、石帶を出した。しかし遣っていたのは漆を用いた部分だけで、絹布は断片以外は残っていなかった。冠も漆を塗った部分以外は残っていなかつたし、石帶も漆を塗った部分は残ってその形を明らかにすることが出来たが、丸鉤、順方は残っていなかつた。これは水牛の角、牛の角、牛の蹄などの動物性の材料であったために絹布同様石灰中のアルカリにより溶けて消失したのであろう。



図6 伊達家伝来政宗所用
鉄黒漆五枚胴具足
(仙台市博物館蔵)

鎧櫃は衣裳箱の上に重ねて置かれていたが、木質部にはほとんど朽ちて金具と漆膜を遺すのみであった。鎧櫃の中に納められた具足は現在仙台市博物館にある伊達家伝来の政宗所用と伝える鉄黒漆五枚胴具足(国指定重要文化財)とはほぼ同じであるが、手工艺品なので若干相違するところもある。鎌倉雪の下駒の流れを汲んだいわゆる仙台駒の初期のものである。「貞山公治家記録」付録には政宗が死んだ時墓に納めた具足は古雪の下彦七鍛練の具足で、政宗が天正13年(1585年)11月の人取橋の戦の時に着用したもので、立掲げの脚のあたりに彈痕が1個、胴部にかすり玉の傷が1つ、肩にかすり玉の痕が3つ残っているとあるが、注意して見たにも拘らず、このような弾痕は見当たらなかった。なお最近、仙台市博物館蔵の政宗所用の鉄五板胴具足の兜の内

面に「吉久」の銘が発見されたが、副葬の兜には鏽のためか注意して見たにも拘らず銘の発見は出来なかつた。

仙台市博物館蔵の兜に見られるような弦月形の前立てもおそらく鎧櫃の中にはあったろうが、木製のために腐朽してしまったものと思われる。采配の総より幅の広い金箔のあったのはその遺存かもしれない。

鎧櫃の上には藤席、金欄、紙入、黒漆葛蒔絵箱があり、糸巻太刀(写真19)が鎧櫃によせかけてあった。太刀の銘の有無は鏽化が強いためX線透視によても不明であるが、姿から見て鎌倉時代のものとのことである。二代忠宗墓に副葬した太刀は友成の作と伝えられているが、それに劣らぬ名刀であったろう。

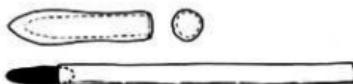
蒔絵の漆器(写真21~33)が多く残っていたことは予想外であった。蒔絵箱類は多く石室の床面上から発見された。元米鎧櫃上に積んであったものが落下して床上に散乱したものであろう。木質部はほとんど腐朽してしまったが、漆膜が辛じて残っており形姿を保っていたので、この形を知ることが出来た。何れも使用の痕がはっきりしていて政宗が生前座右に置いて愛用していたものであったことが伺える。金蒔絵にしても、徒らにけばばしくなく、使用者の洗練された趣味がしのばれた。

文房具としても墨は磨りへっており、筆先(写真30)には墨が付いており、硯面も指先でこ

すると指に墨が付く。政宗は死の前日まで近親者に手紙を書いているが、それはこの硯や筆墨を用いて書いたものであろう。墨（写真29）は方子魯等の製作した明墨を使用しているのに、硯は仙台領内雄勝産の玄昌石製のものを使っているのはおもしろい。

政宗は愛煙家で死の前日まで煙草を飲んでいるが、彼が愛用した煙管が二本副葬されていた（写真34）。それは梨地蒔絵の煙管箱に雁首、吸口、羅字が分離して収納されていたが（写真31）、これを組げば65~70cmに近い長さになり『松浦屏風』『彦根屏風』等近世初頭の風俗画に描かれているような長い煙管になる。日本に現在遺存している煙管中、使用年代のはっきりしているものとしてはこの二本が最も古いことになる。

石室の西北隅、鍾櫃の蔭から政宗の巾着と思われる革袋（写真36）が発見された。その中に慶長一分金3枚（写真38）、日時計（写真41）、黄金のブローチ（写真42）が納めてあった。日時計には磁石がついているので方向をはかるにも用いられたと思われる。日時計も磁石も使用年代がはっきりしているものとしては日本最古のある。携帯用で巾着の中に入ってしまうほどのものであるから、旅行にも戦場にも携帯して時刻を計るにも方位を測るにも用いられたものであろう。そして、それが黄金のブローチと共に巾着の中に入れて政宗の墓に副葬されたということは、この日時計兼磁石が政宗にとって並々ならぬ思い出と愛着のある品であったからにはほかならない。70歳の老齢で世を去った政宗の副葬品の中にヨーロッパからの伝来品と思われるものが4点もあったことは注目に値する。4点とは、黄金のブローチ、ペンゲントと思われる銀製服飾品（写真43）、鉛筆、筆入のガラス板（写真27）である。17世紀初頭、まだヨーロッパ人の渡来が活発に行なわれていた鎖国以前の日本においてヨーロッパの物質の入手ということは有力大名にとっては必ずしも難しいことではなかったのかもしれない。現に支倉常長の渡欧の2年前の慶長16年（1611年）にはイスパニア大使セバスチアン・ビスカイノが来仙して政宗に謁し、ロンドンの上黒糸以下300ドカド以上の贈り物を政宗にしている。⁴⁴久能山東照宮には、徳川家康所用のイスパニア製の置時計や西洋錶、鉛筆等がある。芝増上寺の二代將軍秀忠の墓には、オランダデルフト焼のカップが副葬されていた。日本各地に伝わるいわゆる南蛮



鉛筆復元図



徳川家康使用鉛筆
(久能山東照宮蔵)

挿図7

紅毛物の数は少なくない。しかし齡70歳に達して死を迎えた政宗がなおヨーロッパ文化に対して愛着を示していることは、かって家臣支倉常長をはるばるローマへ派遣しヨーロッパ文化の輸入を計った人だけに特別の感興を呼ぶのである。

近世初頭の大名の墓で学術的な発掘調査の行われたものは、二代將軍徳川秀忠墓、岡山藩二代藩主池田忠雄墓、そして、この伊達政宗墓の三例にすぎない。秀忠と忠雄は、寛永9年(1632年)に、政宗は同13年に没しているから、その墓はほぼ同時代に造られたものと言って良い。何れも石室を造り、その中に奥もしくは駕籠に入れた坐棺に入れた遺体を葬っている。

このような墓制がどのようにして発生してきたかということは、我国墓制史上、今だ解明されていない縫である。今まで中世の墳墓として知られていたのは五輪塔、あるいは宝篋印塔の中に穴を穿つて火葬骨を入れたもの、壺の中に火葬骨を入れて埋めたもの、あるいは単なる土葬墓であって、石室墓はほとんど知られていないかった。それが近世初期になると突然と秀忠墓や政宗墓に見られるような棺を奥や駕籠に入れたまま葬った石室墓が出現するのである。

伊達政宗の墓の調査はその副葬品により政宗の日常生活の様相を知ることが出来たのみならず、その構造によって近世大名の墓の母胎となった近世初期の石室墓の実体を明らかにして、中世から近世への移行期の我国墓制を考える上に一つの貴重な資料を提供したのである。

註

- (1) 黒澤春生:「経ヶ峯の原地形と地盤」(『坂原殿 伊達政宗の墓とその遺品』)
- (2) 「貞山公治家記録」寛永13年5月21日條「御遺骸ハ御車内ナリ。佐々右兵衛始メ斂メ奉ル。御柩ヲ水銀石火塗ヲ以テ詰メ塗メ、御乗物ニ入れ奉ル。」
- (3) はじめ東北大学理学部有機分析化学生組の伊東謙蔵教授を通じて日本化学会中央研究会の鈴木義氏を頼りして原子吸光分析した結果では水銀 0.1 ppm しか検出されず、その他、ナトリウム (0.33%) マグネシウム (0.09%) が微量で大体炭化カルシウムであることがわかった。この場合の資料は大きな石版ブロックの中央部から抜取した資料であったのであることは既述したと想い、念のため石版底の底面にあった木炭に附着していた汚れた石灰を二点とり、吉城警察本部鑑定課に分析を依頼した。鑑定課で発光分光分析した結果でも同資料とも主成分はカルシウムで、その他マンガン、ナトリウム、マグネシウム、珪素、鉄などの微量元素の金属元素が検出しているが、水銀は認められないということであった。
- (4) 鈴木義、矢島恭介、庄脇知行編「昭太・子徳川行幸墓とその遺品、遺体」91頁、1967年
- (5) 鈴木義昌、水内昌満、開野忠彦、岡健五郎「池田忠政墓所の考古学的調査」(岡山市教育委員会「池田忠政墓所調査報告書」所載、昭和39年。)
- (6) 「豊山公治家記録」万治元年4月24日条「廿四日巳酉刻、御遺骸先日御御物ニ入レ奉リシ儘ハテ石櫃ニ置メ、正宗山埋風袋得寺ニ葬リ奉ル。孫六兼元ノ御御物、吉光、御駿馬、友成、御太刀、御兵足一箇入ル。
- (7) 記述に同じ
- (8) 「貞山公治家記録」寛永13年6月4日条「御遺骸前來苟石櫃ニ置メ、忠良因宮城郡祐白城村経ヶ事ニ暮リホル。石櫃ニ御兵足前太刀御駿馬等ヲ一人。御法名貞山源利大博士、諱告古坂トサシ奉ル。供御清酒和尚毒膳タリ。石燈田大猪自牛ノ記ニハ6月6日御靈座へ御移ト有リ。」

(9) 始8時に同じ

08 「御名所堂」さて御死骸着かせられ三日過ぎて東帝の御法堂、御心めさせ、革縫の御太刀氣かせ平し、もとの御本物に入れ奉り、御側に御兵主公家太刀御腰の御御物を入れ、人じよりて後、御城より前、愛宕わきに御跡の地を見て御本物を石の店様に入れ、一丈余尺掘りづめ、上に御靈屋を志宗公より御建立あそばされ、御作神申も中々おろかなり。

09 「義宗記」死葬寺に入り劫い三日目に中納言立出の革縫の大刀を為恭奉らせて御大小をば既に悉置夜更人静りて後終の四日亦当塗にて破捨う忠路の山に積む。

10 「義山公治家記録」寛永13年9月条「北執貞山公御廟院ニ寺ヲ名取都極摩邑移ニ御建立出サレ、奥山大学良タ其事行ニ命セラル」

09 「伴山公治家記録」永禄10年8月3日条「施捨子恩ヒシ村(年月不知)余毒御舟ニ附テ其ヨリ右ノ方宮ヒ玉ヒシナリ。首ヒ「ヘル御目終ニ肉高クナリテ背ノ外ニ脱出クリ。蓋グ魔レトシ玉ヒテ死侍ニ暨ニ衝浦スベキ旨命ゼラル。ホン從フ者ナシ。時ニ片倉小十郎景松小刀ヲ以テ術済シ奉ル由ヒ伝フ。政宗者當ニ豐臣ヲ惟シ玉ヒテ報モスシバ元ノ御日ヲ過ノ五ツ。大常ニ慶祝ニ就タル也話ヲ申セバ御意ニ該シナリ。末代二人ノ布所モアレハ先去ノ後、尊像ヲ造ウバ尚懶シクセヨト仰アリシ故ニ、尊像ハ慶祝ニ造り奉リズ。此等リ承者マジキ義ナリ。然レドモ御安息ハ世間ニ普ク傳記シ、殊ニ不近ノ説アリ。因テ謎ニ記ス。

06 片上山次郎氏「ミスカルノ企鵠島探検漫遊」

09 小原直志「石造抗幕と矢倉」(日本の考古学史)解説42年。西森忠「抗幕」(『日本史小百科』4)昭和53年。

なお伊達政宗墓発掘調査の詳細については瑞鳳殿再建期成会刊行の伊東信雄編『瑞鳳殿伊達政宗の墓とその遺品』(昭和55年)を参照せられたい。



写真1 発掘調査前の本殿跡



写真2 石子台石侧面 (前の2列が沈下している)



写真3 肩子台石下段と第4層表面

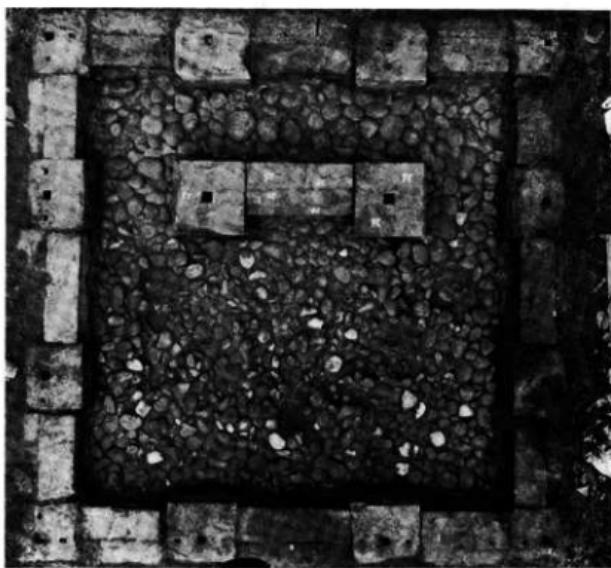


写真4 第1礫層

写真5 石室の出現

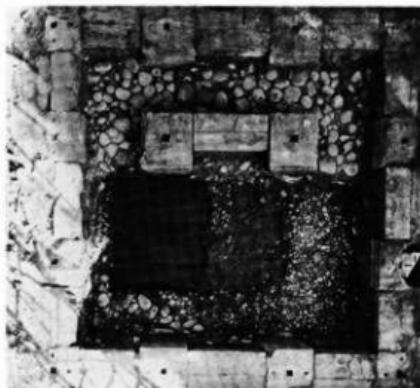


写真6
石室内副葬品遺存状態



写真7 石室内遺物遺存状態
(南から)



写真8 棺内に詰められた
石灰の塊



写真9 石灰下部に詰められた
木炭





写真10 兜



写真11 频当



写真12 足胴



写真13 右 龍 手



写真14 左 龍 手



写真15 右 腹 当

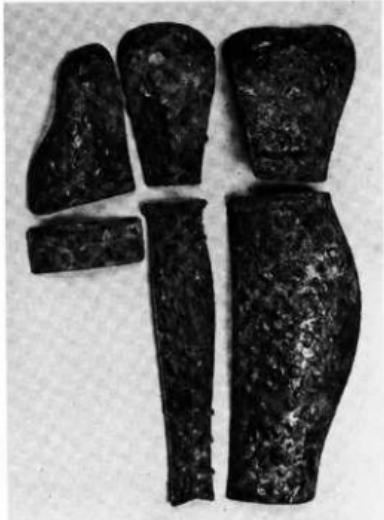


写真16 左 腹 当

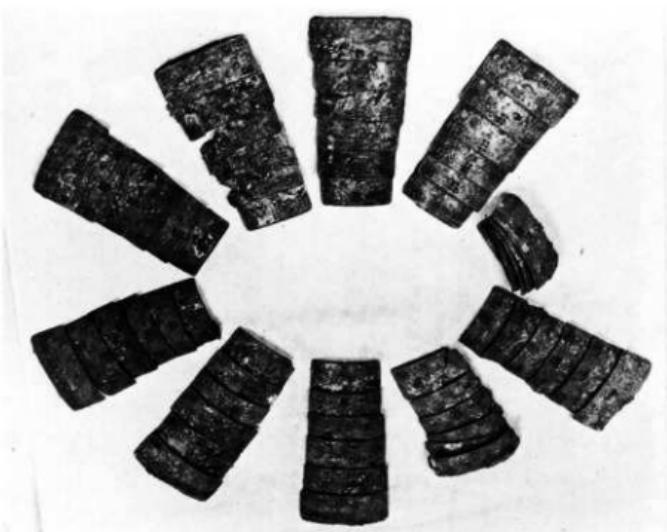


写真17 草 摄

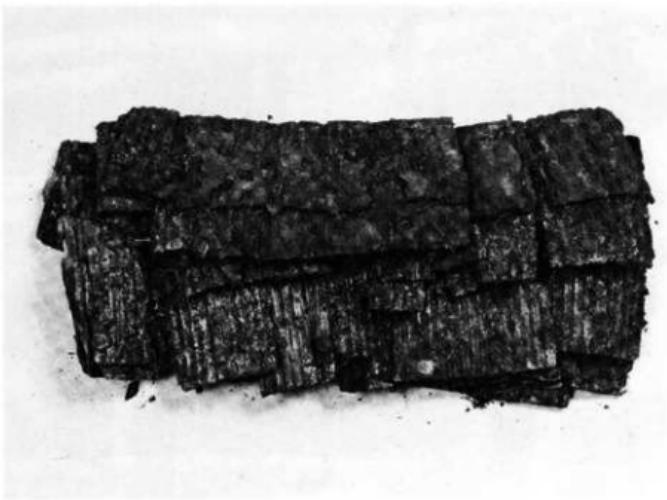


写真18 佩 摄

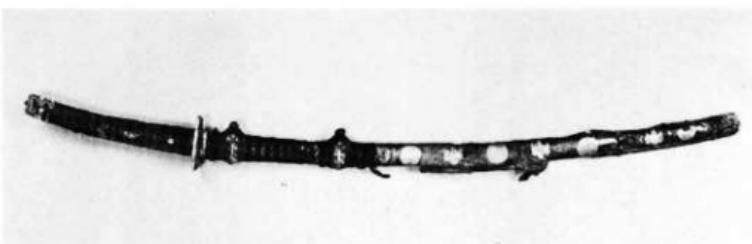


写真19 米巻太刀

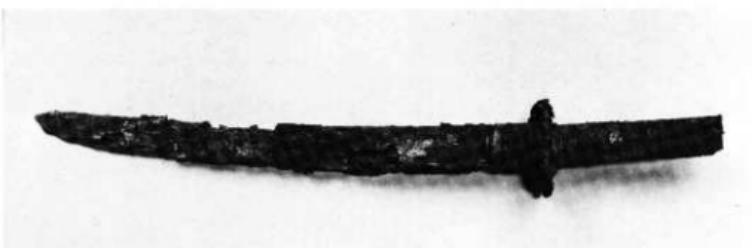


写真20 脇指



写真21 黒漆萬葉絵箱と青銅製文鏡

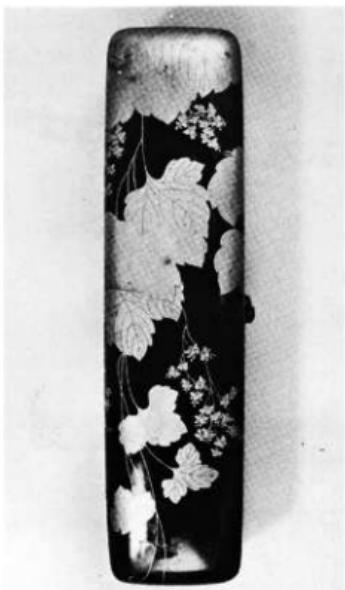


写真22 葛蒔繪箱（清掃した状態）



写真23 筆・墨・文鎮などの入っていた状態

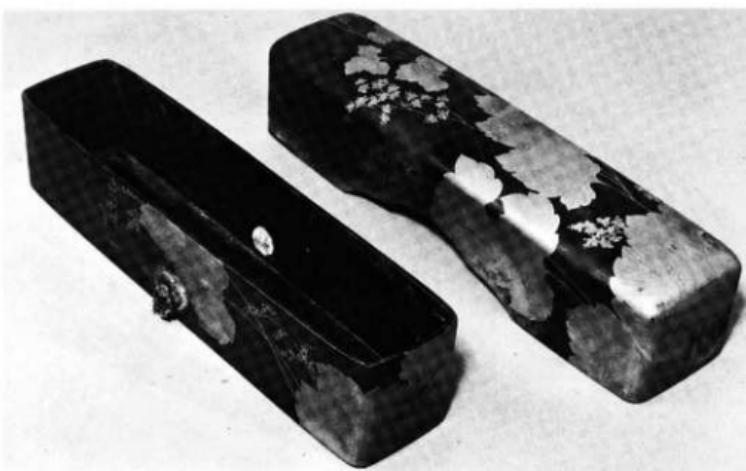


写真24 黒漆葛蒔繪箱

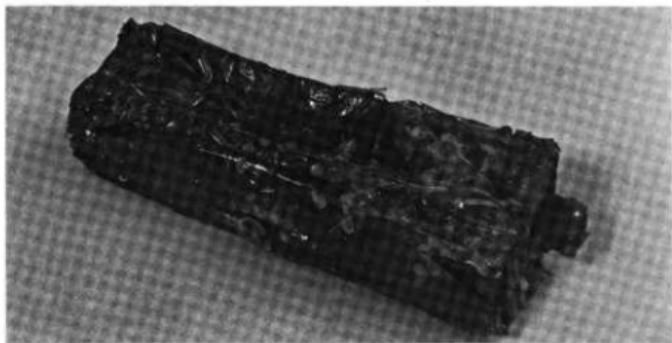


写真25 黒漆白梅蒔絵箱

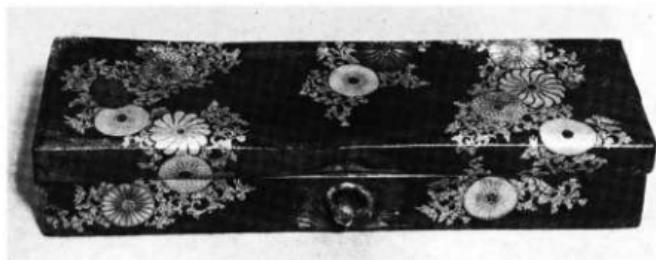


写真26 梨地菊蒔絵箱

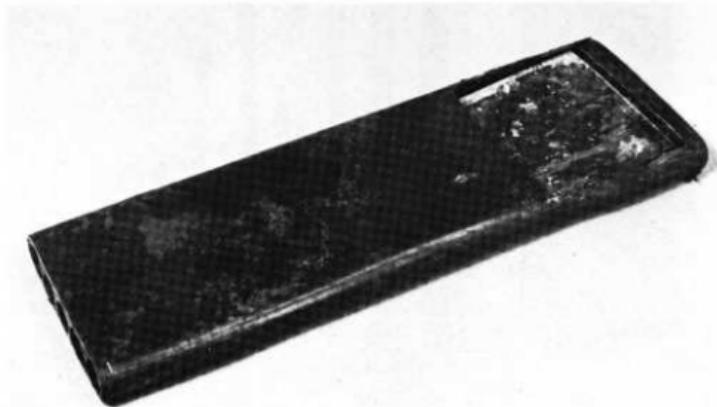


写真27 黒漆塗筆入



写真28 梨地梅笹絵硯箱（身・懸子・蓋）



写真29 墨



写真30 筆

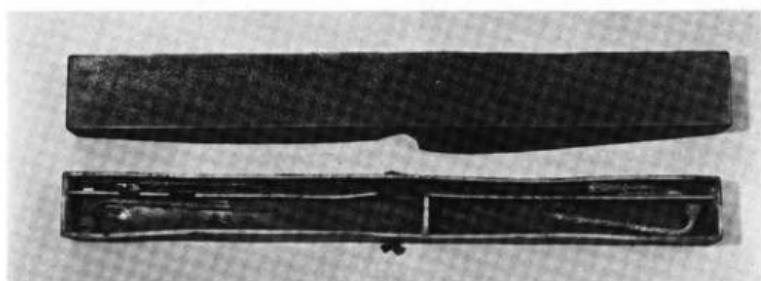


写真31 梨地煙管箱



写真32 梨地薔薇絵印籠



写真33 梨地鉄線薔薇絵香合

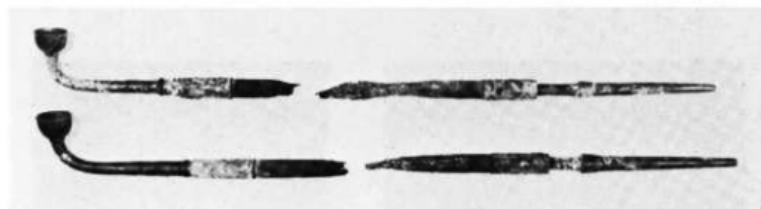


写真34 煙管 (復元状態)

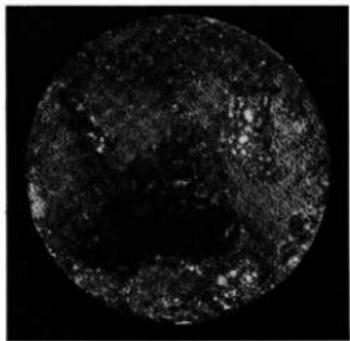


写真35 懐中鏡

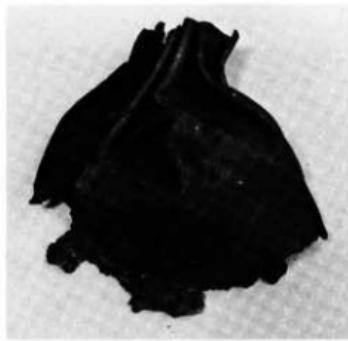


写真36 革袋

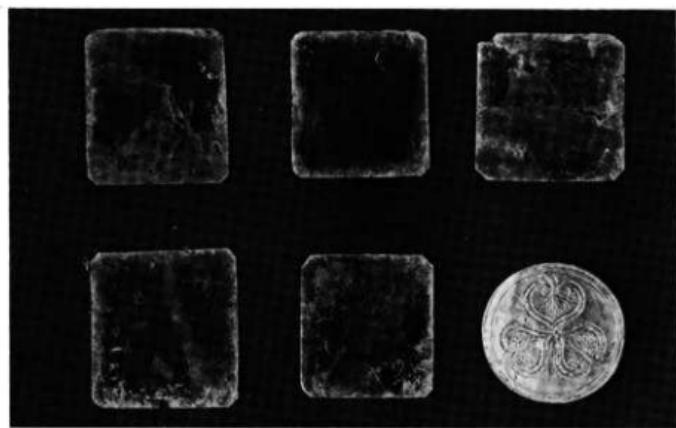


写真37 菜板・金菜



写真38 康長一分金



写真39 紫玉



写真40　革袋の中にあった綿布の包（左、ブローチ箱、右、日時計）

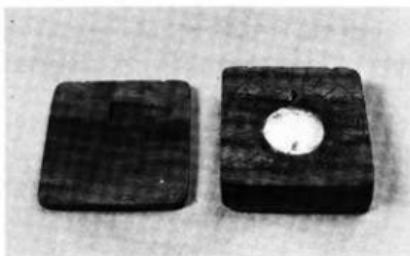


写真41　日時計兼磁石



写真42　黄金のブローチ



写真43　銀製服飾品



写真44　石　帯

再建された瑞鳳殿

昭和6年に国宝に指定された旧瑞鳳殿は2代忠宗廟慈仙殿・3代御宗廟善応殿とともに、昭和20年7月10日未明の仙台空襲により建造物は悉く焼失し、わずかに石垣・階段・礎石・研子台石・石灯籠など残すのみとなり、往時の姿をしのぶすべもない状況であった。

ところが、戦後の混乱期が鎮まり、社会も落ち着きを取りもどしてくると、瑞鳳殿の再建を望む声論が高まり、ことに昭和41年の政宗誕生400年祭がこれに拍車をかけた。

そこで、戦後伊達家よりここ経ヶ峯の伊達家廟を譲りされていた仙台市が中心となり、瑞鳳殿の再建が実現することになった。

ところで、この瑞鳳殿のある経ヶ峯は良質の原木が埋藏されていることから、戦後の燃料不足の時期に大規模な採掘が行なわれていた。そこで内建に先立ち東北大学教授奥津泰生博士による地質調査が行なわれ、その結果地盤強化策がとられた。⁽¹⁾

また一方、この再建される瑞鳳殿の基本設計を依頼された元東北大学小倉強博士の設計では、旧瑞鳳殿が木造であったのに対し、再建瑞鳳殿は耐火構造の面から建物の大部分が鉄筋コンクリート造りとなつたため、政宗墓室等の地下構造が300tを超える重量に耐え得るか否かが問題となり、その基礎工事に先立ち東北大学名誉教授伊東信雄博士を中心とした調査団により墓室の発掘調査が行なわれた。⁽²⁾

以上のような事前調査の後、いよいよ再度工事が行なわれることになった。工事は一期と二期とに分けられ、まず第一期工事として本殿・拝殿・透塀の建設が、つづく第二期工事では泥塗門・御供所(資料館)そして管理棟の建設および殉死者墓碑・政宗公木像・銅像・須弥壇等が作製された。

ところで、この瑞鳳殿の再建にあたっては、学識経験者の集まりである仙台市文化財保護委員会委員を中心とした瑞鳳殿再建の専門委員により、焼失前の旧瑞鳳殿の復元は難しいとしても、藩祖政宗公の靈廟にふさわしいものの再建が望ましいとの意見から、前述の如く鉄筋コンクリート製の耐火構造となつたとはいども、出来るだけ旧瑞鳳殿に近いものが建造されることになった。そこで、これには基本設計を依頼された小倉博士が旧瑞鳳殿焼失前の昭和6年に行った実測精査の折の尖削圓柱および片倉信光氏所蔵の旧瑞鳳殿の写真がこのうえない資料となり、以下のようないずれも再建瑞鳳殿に匹敵し得る再建瑞鳳殿の施設が完成した。

本殿

内建された本殿は、彫刻の部分を除くと柱・斗拱に至るまで全てが鉄筋コンクリート製で、本丸形式鋼板床・宝形造りの屋根を有する平家建の建築で、材質こそ山本殿とは異なるとはいえ、内部装飾の一郎(旧本殿内部壁の壁画がないことなど)および鋼板葺屋根の冬降り様・権現様の船頭が無いことなどに若干の違いがあることを除けば、規模・様式・外部装飾等総体については旧本殿に近いものであり、旧本殿の復元といつてもよいであろう。

本殿門および透塀

旧本殿においては、本殿前の門は多くの見事な彫刻と華麗な極彩色で飾られた唐門であり、それから

候廊下により拝殿と連絡されており、また本殿は透塀により囲まれていた。しかし内縁にあたっては、山唐門の様式は難観されず、間口2.12m、高さ2.73mの唐門の門を本殿前面におき、その周囲を高さ1.65m、延長62.28mの透塀がめぐらされていて、山唐門とは大分異なる趣を呈している。

拝殿

山拝殿は間口7間、奥行3間で正面中央に「瑞鳳殿」の匾額を有する向拝を付し、勾欄付きの選様がめぐらされ、正面中央の間に棧唐戸、その左右に掲戸戸が設けられたものであり、漆塗や彩色のほどこされたものであった。しかし、再建の拝殿は、規模・構造・様式とも山拝殿とは異なり、小規模で単純化された割拝殿の様式を取り入れられており、この点に設計者小曾博士の理念が生かされている。鉄筋コンクリート製平屋建りで、屋根は銅板平作の切妻造りで正面中央に向唐破風が付く。

涅槃門・玉垣

再建の涅槃門はこれら施設中唯一の木造建築である。銅板段葺切妻造りの屋根を有する平家造りの四脚門で、風格・構造・装飾などについても先代のものとほとんど異なるところがなく、旧涅槃門の復元といつてもよからう。

正垣についても同様で、屋根に七・五・三段葺といわれる上から七寸勾配、五寸勾配、三寸勾配三段葺を有することなど、山正垣の様式を踏襲したものである。

御供所（資料館）

山御供所は元来神蹟を調査するための施設であり、後に控所の性格も兼ねるようになったものである。それに対し再建のはこうした性格のものとは異なり、発掘調査により出土した副葬品その他の展示を考慮して資料館的な性格の強いものである。しかしながら瑞鳳殿一連の建造物としての調和を考え、軸体は鉄筋コンクリート製とはいうものの、木造銅板葺入母屋造りの屋根を有し、外部は柱・樋・土台等に木部をはどころとして、外觀は木造の趣を充分表現しており、往時の中御供所の一端をしのぶことが出来よう。

その他の施設

その他の施設としては手水舎、死死者墓碑安置印塔、本殿内の政治公木像及び須弥壇厨子および管理棟が造られている。

管理棟は以前にはなかったものであるが、今後の瑞鳳殿を中心としたここ経ヶ原の庭園一帯の管理運営上不可欠なものとして建てられたものである。

（後述詳）

註

1. 奥津友生著「経ヶ原庭園と地盤」参照「瑞鳳殿・伊達政宗の歴史とその庭」
2. 以下、再建瑞鳳殿と呼ぶ。
3. 伊東信雄著「瑞鳳殿・伊達政宗の歴史とその遺跡」参照

写真1 本殿



写真2 拝殿



写真3 涅槃門と玉垣



写真4 御供所



写真5 殉死者墓碑



写真6 管理棟



編 築 後 記

昭和52年度より3ヶ年にわたり、仙台市教育委員会・仙台市文化財保護委員会によって行なわれてきました経ヶ峯の総合調査が完結し、その成果を報告書にまとめて刊行することになりました。

報告書の執筆にあたっては、仙台市文化財保護委員の各専門の諸先生方にお願いし、当教育委員会の方で編纂し、仙台市文化財保護委員会委員長佐藤明先生に監修していただきました。

内容は、人文科学系にかたよっていたこれまでのものとは異なり、自然科学系も含めた文字どおりの総合報告書とすることが出来ました。

色々とお忙しい中をこの報告書のために原稿をおよせいただいた諸先生方の勞に感謝申し上げるとともに、この調査及び報告書編纂刊行にあたり御協力をいただいた各方面の方々に心から御礼を申し上げ、また今後の文化財保護行政への御協力を賜りますようお願い申し上げます。

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物豊原下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集 仙古城（昭和42年3月）
第3集 仙台市燕沢寺跡古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集 史跡除害工事尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集 仙台市南小泉法領蒙古境調査報告書（昭和47年8月）
第6集 仙台市荒巻丘本松庭跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集 仙台市宮沢長町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集 仙台市根岸町宗福寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集 南小泉跡—範囲確認調査報告書（昭和53年3月）
第14集 栗原跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集 北原遺跡（昭和54年3月）
第18集 片江道路発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集 仙台市開発関係道路調査報告1（昭和55年3月）
第22集 船ヶ峯（昭和55年3月）

仙台市文化財調査報告書第22集

経　　ヶ　　峯

昭和55年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 63-1166



東洋電機シンボルマーク